

福岡市西区

# 藤崎遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集

1982

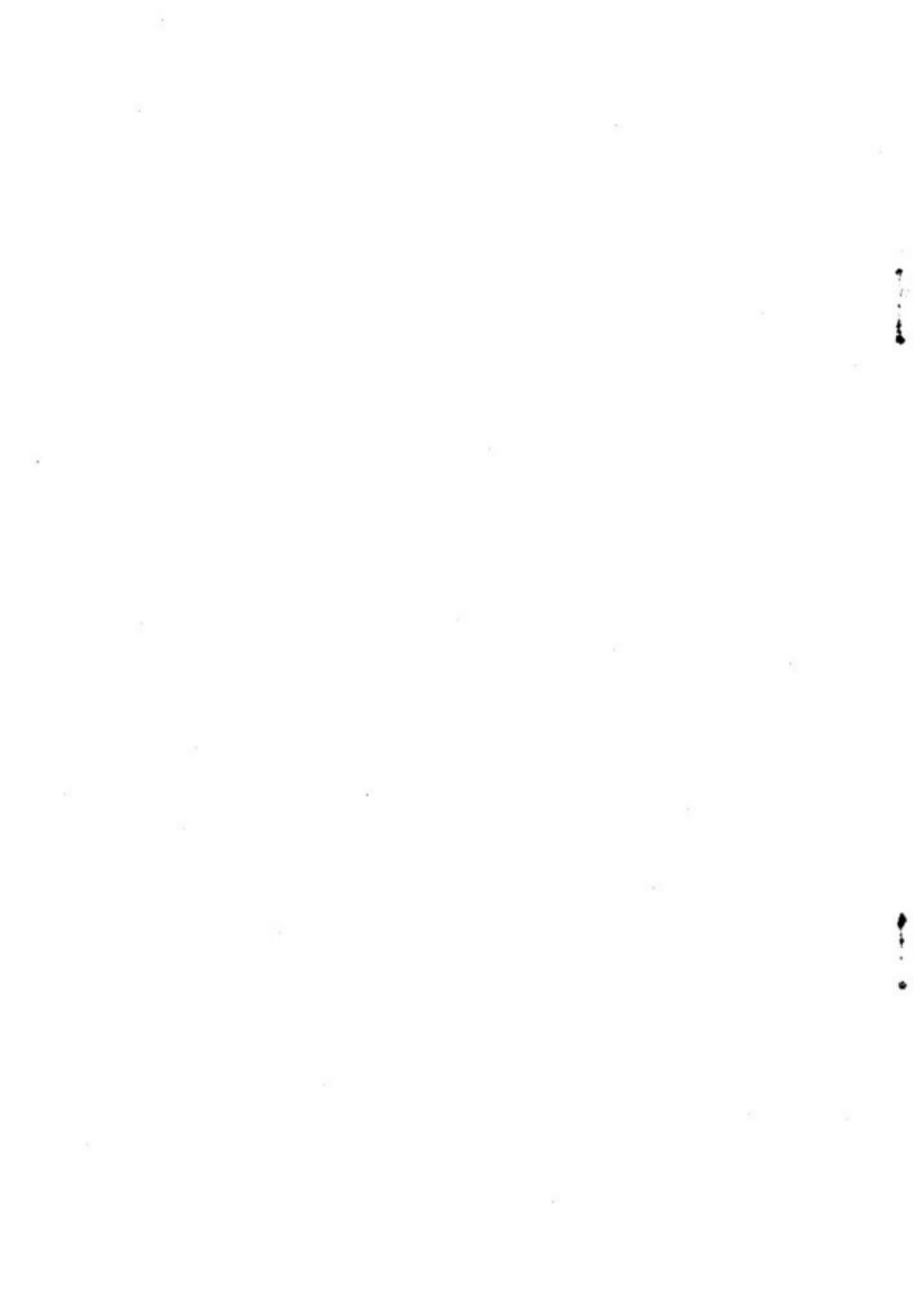
福岡市教育委員会

# 藤崎遺跡

福岡市西区百道所在遺跡の調査報告

1982

福岡市教育委員会



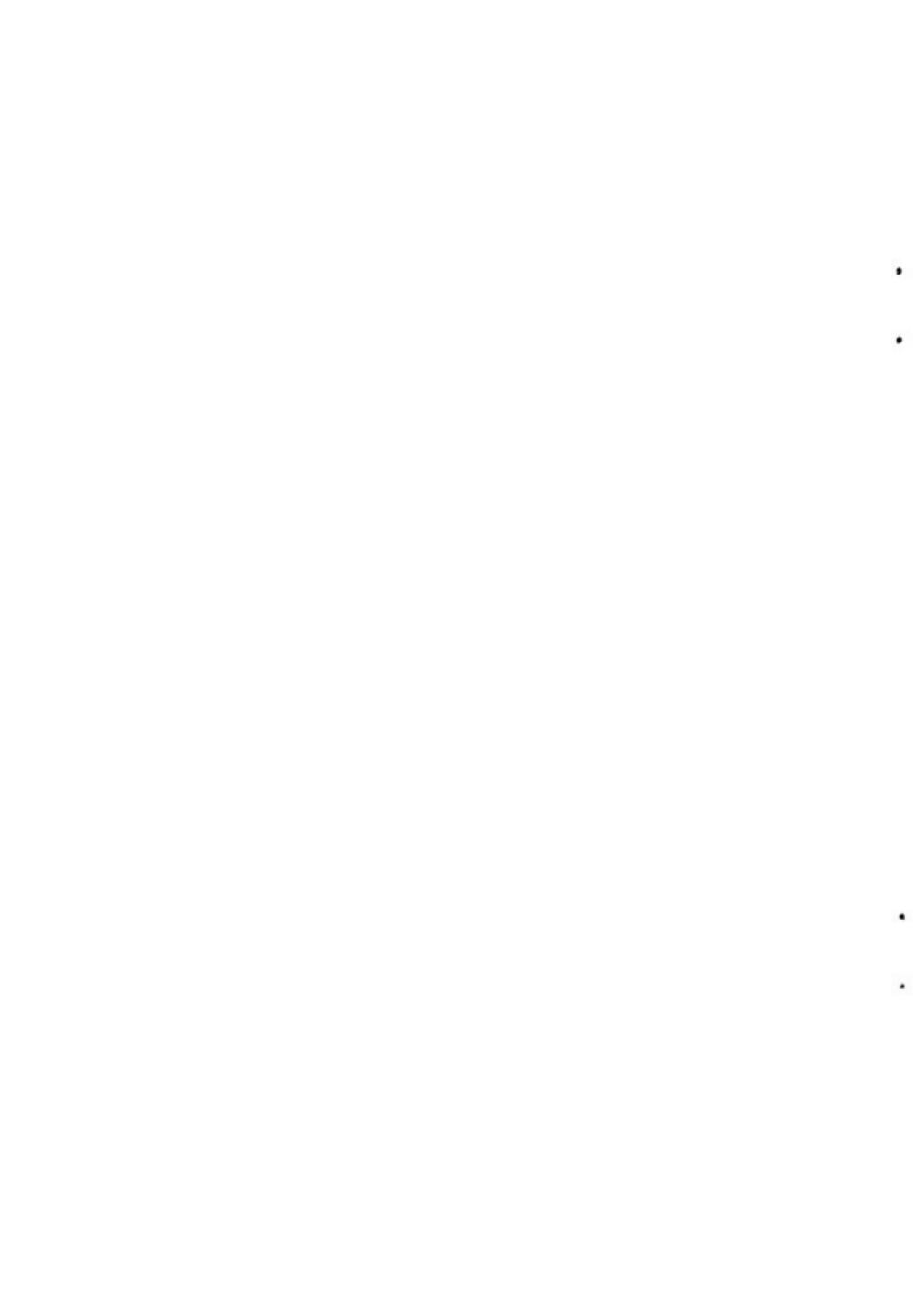


第6号方形周溝墓出土三角縁二神二車馬鏡





第6号方形周溝塞主体部



## 序 文

西区役所の隣接地に地下鉄と接続する藤崎バス中継ターミナルと西市民センターが建設されることとなり、福岡市教育委員会では、地下鉄一号線の部分開通を間近にひかえた昭和55年3月から建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

調査によって福岡市では類例の少ない方形周溝墓が検出され、その一つに三角縁神獣鏡が出土するといった学術上貴重な成果をもたらすことができました。

本書は、こうした調査の成果を記録したものですが、本書が広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまで、指導員の先生方をはじめ多くの関係者からいただいた助言・指導・御協力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

昭和57年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例　　言

1. 本書は1980年4月～7月に発掘調査を行なった福岡市西区に所在する藤崎遺跡の報告である。藤崎遺跡の報告としては1981年に刊行した『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書1 藤崎遺跡』に次ぐ2冊目のものである。
2. 本書に使用した写真のうち巻頭図版および遺構に関しては白石公高、遺物に関しては松道博（文化課）が行なった。
3. 遺構の実測は浜石哲也・池崎謙二・原俊一・田中克子が中心に行ない、福岡大学・久留米大学の学生の援助を受けた。遺物実測は浜石・池崎・原・赤司善彦・大橋隆司・岩切幹嘉・岡部裕俊が行なった。製図は浜石・池崎・赤司・大橋・岡部が行なった。
4. 付論として、久野雄一郎・内田俊秀・馬淵久雄・鳴倉巳三郎・角山幸洋の各先生からの玉稿を掲載することができた。また出土人骨は九州大学医学部永井昌文教授に鑑定していただき、本文中にその結果をのべることができた。
5. 掲図・図版の1部に以下のような遺構の略号を用いた。例）第1号方形周溝墓→1方、第1号住居跡→1住、第1号土壙→1上。また副葬品→副。周溝出土遺物→周と略し、遺構の略号の後につけた。例）1方副→第1号方形周溝墓副葬品、1方間→第1号方形周溝墓周溝出土遺物。
6. 本書の執筆は浜石と池崎が行ない、浜石が編集した。

## 本文目次

序	
I はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の記録	7
1 調査地点の概要	7
2 第6地点の調査	8
(1) 調査の概要と経過	8
(2) 方形周溝墓	10
i ) 第1号方形周溝墓	10
ii ) 第2号方形周溝墓	17
iii ) 第3号方形周溝墓	21
iv ) 第4号方形周溝墓	29
v ) 第5号方形周溝墓	32
vi ) 第6号方形周溝墓	34
vii ) 第7号方形周溝墓	44
viii ) 第8号方形周溝墓	58
ix ) 第9号方形周溝墓	61
(3) 住居跡	66
(4) 土塙・土溝墓	77
(5) その他の遺構・遺物	92
3 第7地点の調査	97
(1) 調査の概要と経過	97
(2) 第10号方形周溝墓	98
(3) 瓦棺墓	101
4 第8地点の調査	102
IV おわりに	105

## 付論

1 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の金属学的調査報告 久野雄一郎	115
2 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の保存科学的立場からの観察 内田 俊秀	137
3 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の鉛同位体比 馬淵 久夫	141
4 福岡市藤崎遺跡出土棺材の樹種 鳴倉巳三郎	143
5 福岡市藤崎遺跡出土の紺帛 角山 幸洋	145

## 図 版 目 次

本文対照表

図 版 1	藤崎遺跡周辺航空写真(昭和55年11月)	3
図 版 2	藤崎第6地点全景 1.東より 2.西北より	8
図 版 3	第1号方形周溝墓全景	10
図 版 4	1 第2号周溝 2 第2号周溝内土器出土状況	11
図 版 5	1 埋葬主体部全景 2 第2・3・4号主体部	12
図 版 6	1.2 第4号主体部 3.4 第5号主体部	13
図 版 7	1 第2号方形周溝墓全景 2 第1号主体部	17
図 版 8	1.2 第2号主体部 3.4 周溝外石棺墓	18
図 版 9	第3号方形周溝墓全景	21
図 版 10	第3号方形周溝墓 1.2号周溝発掘時 2.光掘時	21
図 版 11	1 周溝土層断面 2 周溝内土器出土状況	23
図 版 12	1 3号周溝と第1号主体部 2 第1号主体部	22
図 版 13	1.2 第1号主体部副葬遺物 3 第2号主体部	24
図 版 14	1 第4号方形周溝墓全景 2 周溝土層断面	29

図 版 15	埋葬主体部 1. 埋葬部 2. 掘り方.....	30
図 版 16	第5号方形周溝墓全景.....	32
図 版 17	埋葬主体部 1. 草塙 2. 埋葬部 3. 掘り方.....	34
図 版 18	第6号方形周溝墓全景.....	35
図 版 19	1 第6号方形周溝墓遠景..... 2 埋葬主体部と北辺周溝.....	35
図 版 20	1.2 周溝土層断面..... 3.4 周溝内上器出土状況.....	35
図 版 21	埋葬主体部(1)1. 草塙上面 2. 埋葬部発掘時.....	36
図 版 22	埋葬主体部(2)1. 埋葬部 2. 埋葬部発掘時.....	37
図 版 23	副葬品出土状況 1. 南より 2. 西南より.....	38
図 版 24	副葬品出土状況近景.....	38
図 版 25	第7号方形周溝墓全景.....	44
図 版 26	1 第7号方形周溝墓遠景..... 2 埋葬主体部付近近景.....	44
図 版 27	周溝土層断面.....	45
図 版 28	周溝内遺物出土状況.....	45
図 版 29	周溝内遺物出土状況近景.....	47
図 版 30	埋葬主体部 1. 全景 2. 近景 .....	47
図 版 31	第8・9号方形周溝墓 1. 遠景 2. 近景.....	58
図 版 32	1 第8・9号方形周溝墓周溝土層断面..... 2 第9号方形周溝墓土層断面.....	58
図 版 33	1 第8号方形周溝墓埋葬主体部..... 2 第9号方形周溝墓周溝内土器出土状況.....	59
図 版 34	第2号住居跡 1. 束より 2. 発掘時西より.....	66
図 版 35	1 第4号住居跡..... 2 第5号住居跡.....	71
図 版 36	1 第6号住居跡と第30号土壙..... 2 第6号住居跡土器出土状況.....	72
図 版 37	1 第1号土壙..... 2 第6号土壙..... 3 第3号土壙..... 4 第13号土壙.....	77
		83

図 版 38	1 第9号土壤と第10号土壤.....	79
	2 第10号土壤.....	80
	3 第10号土壤副葬品出土状況.....	80
図 版 39	1 第34号上塙.....	89
	2 集石遺構.....	92
図 版 40	第1号方形周溝墓 出土遺物.....	15
図 版 41	1.2 第2号方形周溝墓第2号主体部櫛棺.....	18
	3 櫛棺下腰脇部線刻文様.....	19
	4.5 第3号方形周溝墓第2号主体部櫛棺.....	25
	6.7 第3号方形周溝墓第1号主体部副葬品.....	26
図 版 42	第3号方形周溝墓周溝出土土器.....	27
図 版 43	第4・5・6号方形周溝墓出土遺物.....	31
図 版 44	第6号方形周溝墓副葬品 1.三角縁二神二車馬銃 2.素環頭大刀.....	40
図 版 45	第6号方形周溝墓副葬品.....	40
図 版 46	第7号方形周溝墓周溝出土上器(1).....	49
図 版 47	第7号方形周溝墓周溝出土土器(2).....	49
図 版 48	第7・8・9号方形周溝墓出土遺物.....	49
図 版 49	第2・6号住居跡出土土器.....	66
図 版 50	第7号住居跡・第34号上塙出土土器.....	73
図 版 51	1 第10号土壤出土遺物 .....	80
	2 第32号上塙出土鉄器 .....	89
図 版 52	第7号方形周溝墓上土器溢り出土土器・段落ち出土遺物.....	94
図 版 53	1 藤崎第7地点全景.....	97
	2 第10号方形周溝墓全景.....	98
図 版 54	1 周溝土層断面.....	98
図 版 54	2 埋葬主体部上面.....	100
図 版 55	埋葬主体部 1.北より 2.西より.....	100
図 版 56	副葬変形文鏡出土状況.....	100
図 版 57	1 第99号櫛棺墓.....	101
	2 第100号櫛棺墓 .....	101
図 版 58	1-2 第10号方形周溝墓副葬品.....	100
	3-4 第99号櫛棺.....	101
	5 第100号櫛棺 .....	101

図 版 59	藤崎第8地点 1.遠景 2.発掘区	102
図 版 60	1 第101号槨棺墓	103
	2 第101号襄棺	103
	3 第102号襄棺	103

## 挿 図 目 次

		本文頁
第 1 図	早良平野の弥生時代終末～古墳時代前期遺跡分布図	2
第 2 図	藤崎遺跡周辺地形図(昭和初期頃)	4
第 3 図	藤崎遺跡周辺地形図(昭和54年)	5
第 4 図	藤崎遺跡全体図	6
第 5 図	藤崎遺跡第6地点全体図	折り込み
第 6 図	調査風景	9
第 7 図	第1号方形周溝墓全体図	11
第 8 図	周溝土層実測図	11
第 9 図	第1・2・3号埋葬主体部実測図	12
第 10 図	第4号埋葬主体部実測図	13
第 11 図	第5号埋葬主体部実測図	14
第 12 図	副葬品実測図	15
第 13 図	周溝出土土器実測図	16
第 14 図	第2号方形周溝墓全体図	17
第 15 図	周溝土層実測図	17
第 16 図	第1・2号埋葬主体部実測図	18
第 17 図	第2号埋葬主体部襄棺実測図	19
第 18 図	襄棺上細文拓影	19
第 19 図	周溝外石棺墓実測図	20
第 20 図	第3号方形周溝墓全体図－1号周溝発掘前	22
第 21 図	第3号方形周溝墓全体図－完掘時	23
第 22 図	周溝土層実測図	23
第 23 図	第1号埋葬主体部実測図	24
第 24 図	第2号埋葬主体部実測図	24
第 25 図	第2号埋葬主体部襄棺実測図	25
第 26 図	副葬品実測図	26

第 27 図	周溝出土土器実測図	27
第 28 図	第 4 号方形周溝墓全体図	29
第 29 図	周溝土層実測図	29
第 30 図	埋葬主体部実測図	30
第 31 図	副葬刀子実測図	30
第 32 図	周溝出土土器実測図	31
第 33 図	第 5 号方形周溝墓全体図	32
第 34 図	周溝上層実測図	32
第 35 図	埋葬主体部実測図	33
第 36 図	副葬刀子実測図	34
第 37 図	周溝出土土器実測図	34
第 38 図	第 6 号方形周溝墓全体図	折り込み
第 39 図	周溝上層実測図	35
第 40 図	埋葬主体部実測図	36
第 41 図	埋葬主体木棺実測図	37
第 42 図	副葬品出土状況実測図	39
第 43 図	副葬品実測図	41
第 44 図	周溝出土土器実測図	42
第 45 図	第 7 号方形周溝墓全体図	折り込み
第 46 図	周溝土層実測図	45
第 47 図	埋葬主体部実測図	46
第 48 図	副葬刀子実測図	47
第 49 図	東辺周溝遺物出土状況図	48
第 50 図	遺物出土位置図	折り込み
第 51 図	周溝出土珠文鏡実測図	49
第 52 図	周溝出土土器実測図 I	50
第 53 図	周溝出土土器実測図 II	51
第 54 図	周溝出土土器実測図 III	52
第 55 図	周溝出土土器実測図 IV	54
第 56 図	周溝出土土器実測図 V	56
第 57 図	第 8・9 号方形周溝墓周溝上層実測図	58
第 58 図	第 8・9 号方形周溝墓全体図	折り込み
第 59 図	第 8 号方形周溝墓埋葬主体部実測図	59

第 60 図	第 8 号方形周溝墓周溝出土土器実測図	60
第 61 図	第 9 号方形周溝墓土層実測図	62
第 62 図	周溝出土土器実測図 I	63
第 63 図	周溝出土土器実測図 II	64
第 64 図	第 1・2 号住居跡実測図	67
第 65 図	第 1・2 号住居跡出土遺物実測図	68
第 66 図	第 3 号住居跡実測図	69
第 67 図	第 3 号住居跡出土土器実測図	69
第 68 図	第 4・5 号住居跡実測図	70
第 69 図	第 5 号住居跡出土土器実測図	70
第 70 図	第 6 号住居跡・第 30 号土壤実測図	72
第 71 図	第 6 号住居跡出土土器実測図	73
第 72 図	第 7 号住居跡実測図	74
第 73 図	第 7 号住居跡出土土器実測図 I	75
第 74 図	第 7 号住居跡出土土器実測図 II	76
第 75 図	第 1・2・3・4・5 号土壤実測図	78
第 76 図	第 6・7・8 号土壤・第 6 号土壤出土土器実測図	79
第 77 図	第 9・10・11・12・13 号土壤実測図	81
第 78 図	第 10 号土壤出土遺物実測図	82
第 79 図	第 14・15・16・21・25 号土壤・第 15 号土壤出土上器実測図	84
第 80 図	第 17・18・19・22・26 号土壤・第 19 号土壤出土土器実測図	85
第 81 図	第 23・28・29・31・33・35 号土壤実測図	87
第 82 図	第 24・36 号土壤実測図	88
第 83 図	第 32・34 号土壤実測図	89
第 84 図	第 32 号土壤出土鉄器実測図	89
第 85 図	第 34 号土壤出土土器実測図	90
第 86 図	集石遺構実測図	93
第 87 図	集石遺構出土土器実測図	93
第 88 図	第 7 号方形周溝墓南辺周溝上土器削り出土遺物 I	94
第 89 図	第 7 号方形周溝墓南辺周溝上土器削り出土遺物 II	95
第 90 図	発掘区南側段落ち出土古錢拓影	96
第 91 図	発掘区南側段落ち出土土器実測図	96
第 92 図	蘿崎遺跡第 7 地点全体図	97

第 93 図 第10号方形周溝墓全体図	98
第 94 図 周溝土層実測図	98
第 95 図 埋葬主体部実測図	99
第 96 図 副葬変形文鏡実測図	100
第 97 図 副葬管玉実測図	100
第 98 図 第99・100号腰棺墓実測図	101
第 99 図 第99・100号腰棺実測図	101
第 100 図 藤崎遺跡第8地点全体図	102
第 101 図 第8地点東側土層実測図	103
第 102 図 第101号腰棺実測図	103
第 103 図 第102号腰棺実測図	104

## 表 目 次

第 1 表 玉類計測値	15
第 2 表 捜索計測値	15
第 3 表 方形周溝墓一覧表	106

## 付 図

藤崎遺跡調査区全体図

# I はじめに

## 1 調査にいたる経過

1980（昭和55）年、福岡市都市計画局・交通局・教育委員会社会教育課より、西区百道二丁目807番地にバスタークニナル、区民センターを建設するにあたって、当該地の埋蔵文化財の有無について文化課に対し事前の確認がなされた。当地は1912（明治45）年、三角縁二神龍虎鏡と素面頭大刀を嗣承した箱式石棺が発見されて以来、広く知られている藤崎遺跡の範囲に含まれ、隣接した国道202号線内における地下鉄工事に伴う1977～78（昭和52～53）年の発掘調査でも豪棺を中心とした弥生時代の大墳墓群が検出されている。こうしたことから当該地における埋蔵文化財の存在は疑いのない所であった。そこで3月に建設予定地3000m<sup>2</sup>中の遺構の性格およびその範囲を確認するためトレンチによる試掘調査を行なった。その結果、箱式石棺や溝状遺構などが対象地のほぼ全域に広がっていることが判明した。文化課は原因3者との協議のもと、3ヶ月の予定で当該地の全掘調査を行なうこととし、4月14日の機械（ユンボ）による表土剥ぎより発掘調査を開始した。また、地下鉄藤崎駅の出入口2ヶ所の調査も同期間中に併行して行うこととした。

## 2 調査の組織

**調査委託** 福岡市都市計画局・交通局・教育委員会社会教育課

**調査主体** 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

**事務担当** 古藤国生

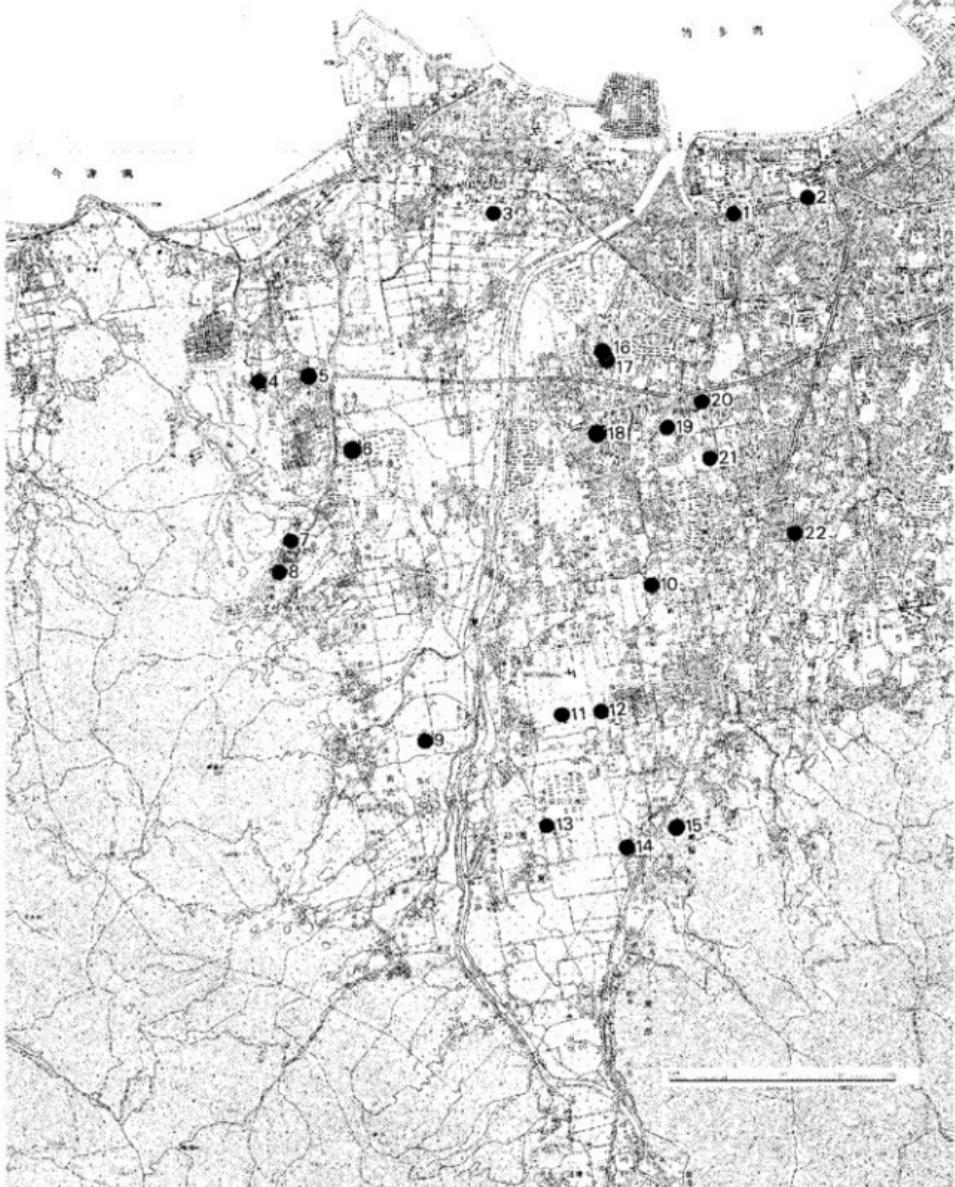
**調査担当** 折尾学・浜石哲也・池崎謙二

**調査補助** 原俊一（現宗像市教育委員会）・田中克子・井上（旧姓瀬戸）加代子・信行千尋・白石公高（写真撮影）

**整理補助** 大橋隆司・赤司善彦・岩切幹嘉・岡部裕俊（同志社大学）

**調査・整理作業** 海津静江・真鍋秀子・清水百枝・清水文代・緒方チヨエ・高宮ノブエ・海津和子・米島ハツネ・杉村文子・森永史子・藤タケ・高田ヒサノ・能美須賀子・西原年枝・斎藤小春・横溝恵美子・森和代・田代昌子・赤司善彦・大橋隆司・田中章二・柴田嘉瑞・日野光嗣・岩切幹嘉・小崎勝利・高木洋二・島恭一・緒方荒爾・井上勝・高倉隆・阿部穂高・緒方寿・吉野清藏・尾崎順子・神井満千枝・青柳忠子・林紀子・奥田洋美・井手口孝子・手島香代子・釜掘耐美・村上かおり

なお、発掘調査にあたっては九州産業大学教授森貞次郎氏をはじめとする多くの方々の御教示・御指導を得た。厚くお礼申しあげたい。



第1図 幸良平野の弥生時代終末～古墳時代前期遺跡分布図(1/50,000)

- |           |             |            |            |            |              |
|-----------|-------------|------------|------------|------------|--------------|
| 1. 藤崎遺跡   | 2. 西新町遺跡    | 3. 五島山古墳   | 4. 畠の前遺跡   | 5. 堀納遺跡    | 6. 半多山遺跡     |
| 7. 野方中原遺跡 | 8. 対方塚原遺跡   | 9. 極端古墳    | 10. 鶴町遺跡   | 11. 川村遺跡   | 12. 高柳遺跡     |
| 13. 四箇遺跡  | 14. 井塚古墳    | 15. 重積箱式石棺 | 16. 松浦殿塚古墳 | 17. 琉球殿塚古墳 | 18. 有田・小田部遺跡 |
| 19. 原浜貝塚  | 20. 塚6・1甘遺跡 | 21. 原深町古跡  | 22. 干瀬古墳   |            |              |

## II 遺跡の位置と環境

藤崎遺跡は福岡市西区（西区分区後は早良区）藤崎・百道・高取の一帯に亘り、その範囲は現西区役所を中心にして東西約370m、南北310mにおよぶ。立地的にみると本遺跡は早良平野の西北端近くにあたり、博多湾の左舷海流によって形成された古砂丘上に営まれている。遺跡の東南側には栄山から龜原山といった第三紀層の独立丘陵が控えている。西側は室見川の旧河口となり、西南にまわりこむようにして標高の低い所が続き、古くは入江的な様相を呈していたことがうかがわれる。古砂丘は東側に延び、また北側では約470mで現在の海岸線に至る。

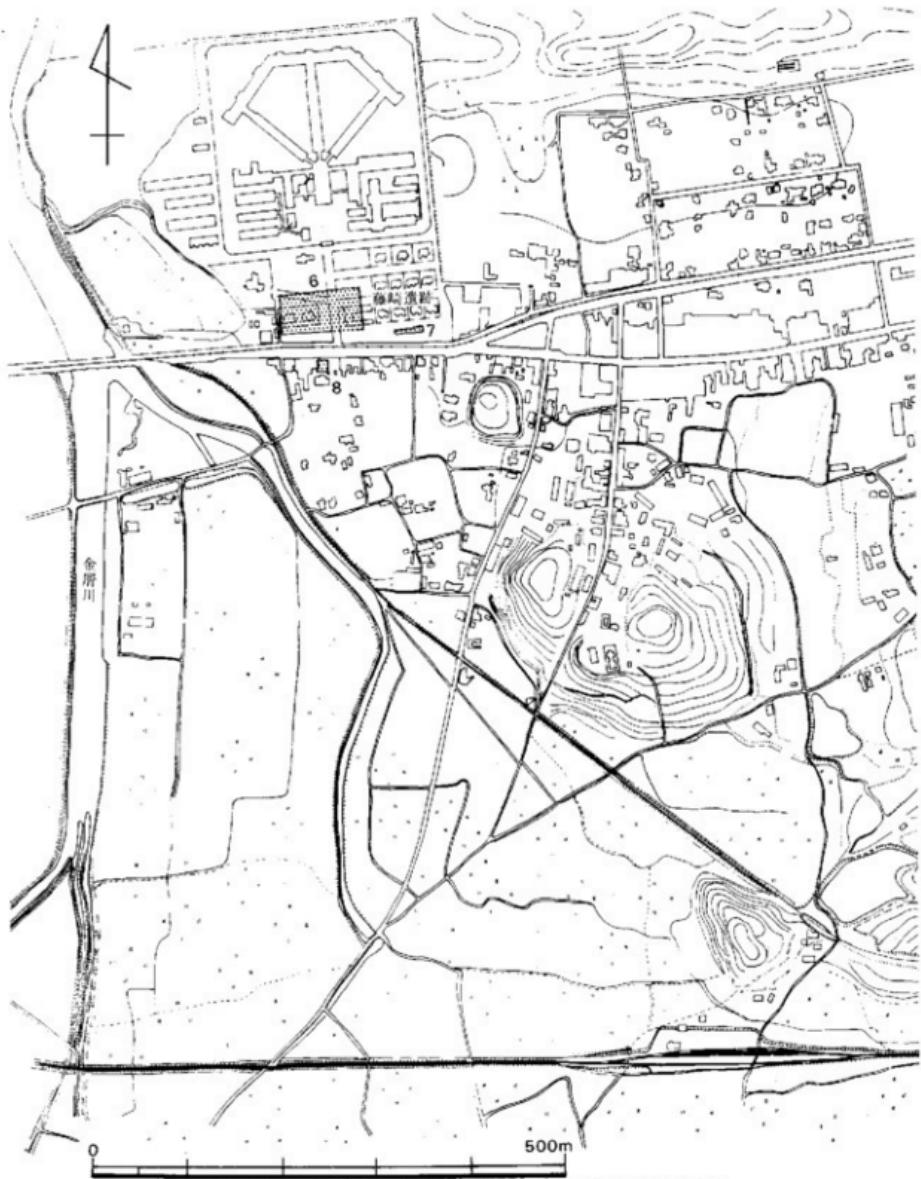
今回の調査と深く関り合いをもつ弥生時代終末から古墳時代前期の遺跡は、本遺跡の属する早良平野にも多くみられ、その研究も比較的進んでいる。古くから知られている西新町遺跡は、近年末の発掘調査により、この時期の竪穴住居跡60軒余と豪棺が検出されており、それは四時期に細分されるという。この遺跡は藤崎遺跡と同一砂丘上に営まれており、深い関係をもつものと考えられる。

藤崎遺跡の西南の洪積台地上に立地する有田・小田部遺跡にも数地点古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されており、また松浦殿塚古墳と筑紫殿塚古墳の2基の円墳も竪穴式石室をもつと考えられ、この時期内に造営されたものと想定されている。この有田・小田部の西側では金屑川をはさんで原談儀、原深町、原6丁目遺跡が調査されており、前2遺跡は水利施設・水田址、後1遺跡では竪穴住居跡11軒が検出されている。これは沖積地にあっても微高地を中心に果敢に農業が営まれ、また住居区が作られたことを物語っている。この種の傾向は南の鶴町遺跡、さらに南の高柳、田村、四箇遺跡にも共通してみられる所である。

目を東に転じれば、藤崎遺跡の東室見川をはさんで五島山古墳がある。第三紀層の独立丘陵に営なされた円墳群で、最も高所に位置する1基の箱式石棺中から舶載の二神二獣鏡2面、銅鏡9本、鉄劍、玉類が出土している。

早良平野の西縁をなす拾六町から野方にかけては、昭和40年代後半を中心に調査が進み、宮の前、湯納、牟多田、野方中原、野方塚原などの遺跡が知られ、また研究・分析も進んでいる。うち湯納遺跡と牟多田遺跡は主として水利施設、野方中原が大集落と墳墓、宮の前と野方塚原遺跡が墳墓を形成している。宮の前遺跡における墳墓の構成は、藤崎遺跡の方形周溝墓と対比する恰好の資料といえる。この地区の南側の扇状台地上にある樋渡古墳も、竪穴式石室をもち、古墳時代前期に属すると考えられる。

早良平野の東縁では鳥文鏡と管玉を出土した重棺箱式石棺と、その西に位置する竪穴式石室を有すると考えられる円墳の坪塚が知られている。近年調査されたものとしては千隈古墳がある。径約20mの円墳で、内部主体には箱式石棺を用いており、4世紀後半に北定されている。



第2図 蘇時遺跡周辺地形図(昭和初期頃)(1/6,000)



第3図 藤崎遺跡周辺地形図(昭和54年)(1/6,000)



- 1 第1地点（明治45年箱式石棺出土地）
- 2 第2地点（大正6年・昭和5年箱式石棺、腰棺出土地）
- 3 第3地点（昭和33年腰棺出土地・旧刑務所内遺跡）
- 4 第4地点（昭和52・53年発掘調査）
- 5 第5地点（昭和53年発掘調査）
- 6 第6地点（昭和55年発掘調査本報告）
- 7 第7地点（昭和55年発掘調査本報告）
- 8 第8地点（昭和55年発掘調査本報告）
- 9 元庭防壁

第4図 跡跡遺跡全体図(1/4000)

### III 調査の記録

#### 1 調査地点の概要

藤崎遺跡の発掘調査はこれまでに3回福岡市教育委員会によって行なわれてきた。これに加え明治以来記録に残された発見地点が数ヶ所ある。これらを整理するために、発見・調査年代を追って便宜的に以下のように地点名を付ける。

**第1地点** 1912(明治45)年箱式石棺から三角縁二神龍虎鏡(径24.5cm)・素環頭大刀を出土(註1)。從来、藤崎古墳などと呼称されていた。

**第2地点** 1917(大正6)年箱式石棺より方格溝文鏡(径9.1cm)出土(註2)。さらに1930(昭和5)年弥生前期の甕棺・副葬小壺、それに箱式石棺が出土(註3)。村上研究所出土といったものがこれにあたる。また石棺は藤崎石棺群と呼ばれた。

**第3地点** 昭和30年代、工事中に弥生中期の甕棺墓群が出土(註4)。また弥生終末期の西新町式の様式とされる土器もこの辺りからの出土である。藤崎刑務所内遺跡などと呼ばれた。

**第4地点** 1977~78(昭和52~53)年、福岡市高速鉄道(地下鉄)の工事に伴って福岡市教育委員会が発掘調査(註5)。

**第5地点** 1977(昭和52)年銀行建設に伴って福岡市教育委員会が発掘調査。高取2丁目に所在し、弥生時代の甕棺墓60基などを検出した。

以上が今回の調査以前に発見・発掘された地点である。この他にも国道202号線内から甕棺、住居跡が出土しているが(註6)、これはすべて第4地点の中に含まれる。今回の調査は以下の3地点である。

**第6地点** 地下鉄と連絡するバスターミナル、西区民センター建設に伴う発掘調査地点である。西区役所のすぐ西にあたり、第4地点と南側で接する。発掘調査面積2700m<sup>2</sup>。第4地点の遺構のあり方からして、試掘調査前は弥生時代の甕棺墓の存在を想定していたが、調査結果は古墳時代前期の方形周溝墓9基、古墳時代~奈良時代の住居跡7軒、古墳時代~中世の土壙34基などで、弥生時代甕棺墓は1基も認められなかった。また包含層・攢乱層からの弥生時代遺物も極めて少量かつ細片であった。方形周溝墓周溝からは供獻の土師器とともに珠文鏡が、また主部から刀子・鏡・素環頭大刀・三角縁二神二車馬鏡などの副葬品が出土した。

**第7地点** 地下鉄藤崎駅の山入口建設に伴う発掘調査である。調査時には藤崎出入口Aと称していた。西区役所のすぐ南、第4地点とにはさまれた東西に長い地点である。発掘調査面積143m<sup>2</sup>。古墳時代前期方形周溝墓1基、弥生時代甕棺2基などを検出した。方形周溝墓は第4地点に繋がり、主部に小型仿製鏡を副葬していた。

**第8地点** 第7地点と同じ地下鉄藤崎駅出入口建設に伴うもので、調査時には藤崎出入口B

と称した。ここは第2地点と南側を接するため、石棺、槨棺などの出土が予想されたが、削平が著しく、遺構はひとつも存在しなかった。その後東に隣接する猿田彦神社の参道側面を工事していた際、槨棺底2基と石蓋土壙墓らしき遺構が出土した。

以下、第6・7・8地点の発掘調査記録を詳述する。

- 註(1) 島田寅次郎「藤崎の石棺」『福岡県史鼠名勝天然記念物調査報告書』 第一編 1925  
(2) 中山平次郎「古支那鏡鑑沿革」『考古学雑誌』第9卷第3号 1918  
(3) 永倉松男・鏡山猛「筑前国藤崎に於ける弥生式遺跡」『考古学』第2卷第1号 1931  
森本六爾「筑前藤崎の弥生式土器」『考古学』第5卷第1号 1934  
(4) 森寅次郎教授の御教示による。  
(5) 浜石哲也(編)『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書 I 藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981  
(6) 鏡山猛「槨棺累考」『史淵』第55編 1953

## 2 第6地点の調査

### (1) 調査の概要と経過

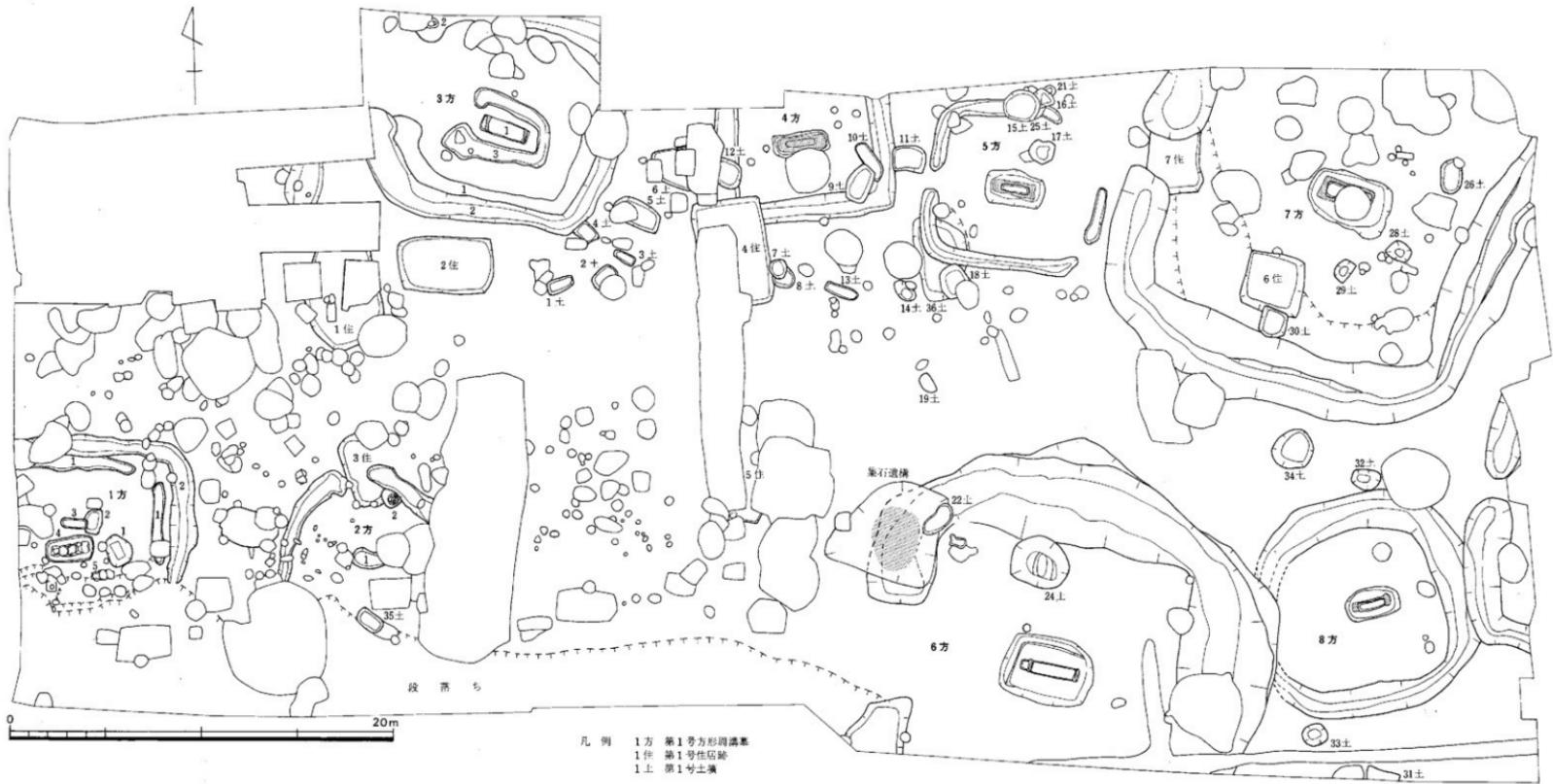
本地点は西区百道二丁目807番地に所在する。発掘対象面積は3,000m<sup>2</sup>であったが、調査時道路として使用されている部分があり、最終的に発掘調査を行なったのはバスターミナル等構築物を中心とした2700m<sup>2</sup>であった。

調査にあたっては、当初対象地を西から東へ20mごとにA・B・C区と3分割し(C区は30m)、各区を順次発掘してゆく予定であった。しかし、B・C区がバスの待機所に使われたり、他の工事のため占有されたりする状況が出現し、A区以外は予定通りには行かなかった。特にA区が終了し、明け渡した後は、建築工事に追われる恰好になり、C区は細切れの調査にならざるを得ず、不備な点も少なからず出てきた。

4月13日、ユンボによるA区の表土剥ぎから調査を開始し、7月31日、第8・9号方形周溝墓の実測終了によって調査は完了した。この間に調査した遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓9、古墳時代～奈良時代の住居跡7、中世までの土壙および土壙墓34、他に集石遺構などがある。遺物は方形周溝墓の周溝、住居跡などから多く出土した土師器を中心とし、他に2面の青銅鏡、鉄製武器、工具、玉類などがあげられる。この他、近・現代の擾乱坑(多くがゴミ穴)から大量の陶磁器類が出土したが、本報告では時間的制約から扱いえなかった。

以下、調査経過を月を追って述べる。

4月13日からユンボによるA区の表土剥ぎを開始。15日から作業員を入れ本格的な調査にかかる。西端部で周溝に囲繞された方形区画の中に箱式石棺・土壙を検出し、方形周溝墓であることを確認(第1号方形周溝墓)。さらに東側で第2号方形周溝墓を検出。北側は現代の擾乱ではほとんど遺構面を残さない。月末近くから写真撮影・実間にかかる。



第5図 藤崎遺跡第6地点全体図(1/200)

5月 陽差しによる遺構の崩壊が著しいため、休日を返上して実測を行なう。5月にA区東側が終了し、工事にあけわたす。第3号方形周溝墓が北側に延びるため、部分的拡張を行なう。中旬に第3号方形周溝墓の調査が終了し、B区に入る。月末までに第4号方形周溝墓の写真撮影および実測を行なう。

6月 第5号方形周溝墓の調査と平行して集石遺構の実測を行なう。南で第6号方形周溝墓を検出したがC区にまで周溝が延びているため拡張する。24日、第6号方形周溝墓主体部から三角縁二神二車馬鏡・素環頭大刀などが出土。森貞次郎先生に来ていただき御教示をこう。

7月 C区に入る。工事の関係から排土場所がなくなり、北側と南側に分けて調査することになる。北側で第7号方形周溝墓を確認。雨の日が多くなり、小止みになった所をみはからって実測をする状態が続く。中旬に北側が終了し、南側部分に入る。第8・9号方形周溝墓を検出。29日に実測作業が終る。30日に機材等を撤去する。



5月 第3号方形周溝墓



6月 第6号方形周溝墓



7月 第7号方形周溝墓

## (2) 方形周溝墓

本地点では9基の方形周溝墓を検出した。発掘区内で9基の方形周溝墓は、北側に列をなすもの（第3・4・5・7号墓）と南側に列をなすもの（第1・2・6・8・9号墓）がある。うち北側列のものには重複関係が認められないが、南側列では第6・8・9号墓が切り合う。また南側列の第2号墓と第6号墓の間には約20mの空白部分があり、第1・2号墓が切り離された様相を呈する。

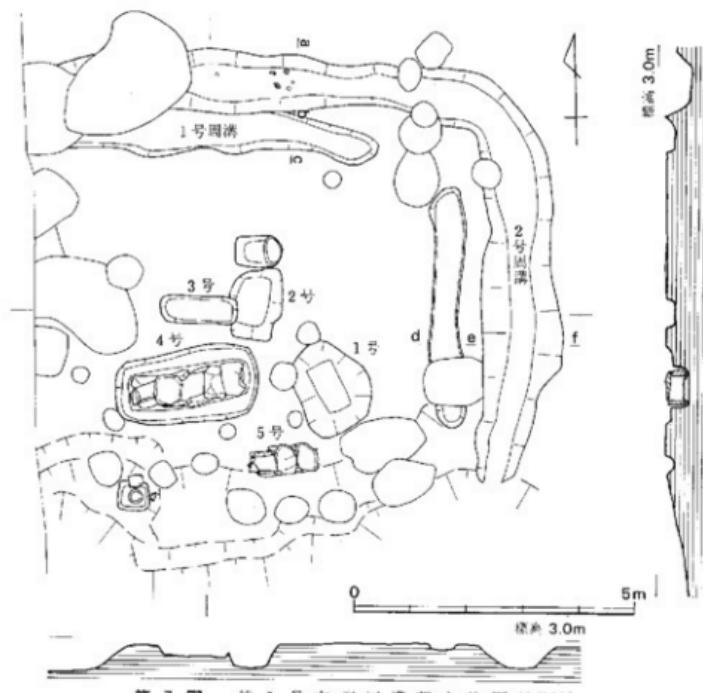
いずれの方形周溝墓も残存状況は最良とはいがたい。近・現代の擾乱坑が周溝、埋葬主体部を破壊しているものが多い。また現地表面から遺構面までの距離が浅く、削平が著しい。発掘区内で全容を示すものは第5号墓と第8号墓の2基にすぎない。しかし幸いなことに周溝の一部しか発掘区に入らなかった第9号を除いた残りの方形周溝墓では、ほとんど良好な状態で埋葬主体部を検出することができた。盛土、葺石等の外部施設は確認できなかった。

方形周溝墓を記述するにあたって次のように各部の名称を用いる。周溝—墓地を区画する溝で、同一墓で複数の周溝をもつもの（第1・3号墓）については1号周溝などと番号をつけた。台状部—周溝に囲繞された方形区画を呼ぶ。陸橋部—周溝の切れた（掘り残された）部分。埋葬主体部—台状部・周溝に位置する埋葬施設で複数のもの（第1・2・3号墓）には番号をふった。これらの位置を示すには、本遺跡の方形周溝墓が各々の辺をほぼ東西南北にとることから、周溝・台状部では北辺・南辺などと表わす（例えば北辺の周溝、台状部の東辺）。陸橋部の位置もこれで表わすが、隅に設けたものは多少方位がずれても各辺との関係から便宜的に東北隅、西北隅などと記す。また規模の計測にあたっても東西・南北という表記を用いる。この場合も正確な方位を示している訳ではない。主軸方位などに関する正確な方位は各々の文章中で記す。

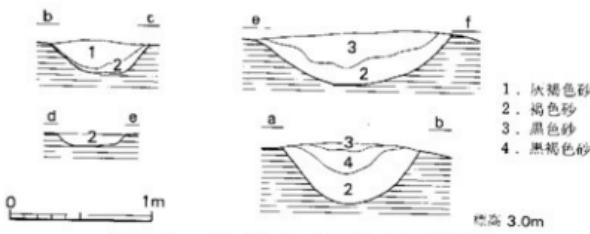
### i) 第1号方形周溝墓（第7～13図、図版3～6・40）

発掘区の西南端付近で確認した。西側は発掘区外にかかり、南側も13世紀以降の段落ちに崩されている。また表土層が薄く、その直下が遺構面であったためかなりの削平を受けており、残存状態は良好とはいがたい。周溝は北・東両辺に二重にめぐる。外側をめぐる周溝が北辺で内側のものを切っており、先後関係がとえられた。この二重の周溝はその形態からみて、2つの方形周溝墓の重複ではなく、内側の周溝が埋没後新たに外側の周溝が作られたものと考えられる。以下内側の周溝を1号周溝、外側のものを2号周溝と呼ぶ。

1号周溝は北辺で7.5mが残存し、それとは直角に南に延びる東辺で4.3mを計る。両辺が交わる東北隅には幅約1.3mの陸橋部を設ける。また東辺の南側も周溝が切れており、少なくとも2ヶ所の陸橋部を設けていることになる。溝の規模は幅0.5～0.7m、深さ0.1～0.4mの断面「U」字形を呈し、2号周溝に比べ狭くて浅い。覆土の土色も薄く出土遺物はなかった。1号周溝に囲繞される台状部は東西幅で約6.8m、南北幅で約5.6mが残存している。以上の計測値と主体部の位置関係からすれば第1号墓は、当初一辺が8m前後、台状部が7m前後の規模であったこ



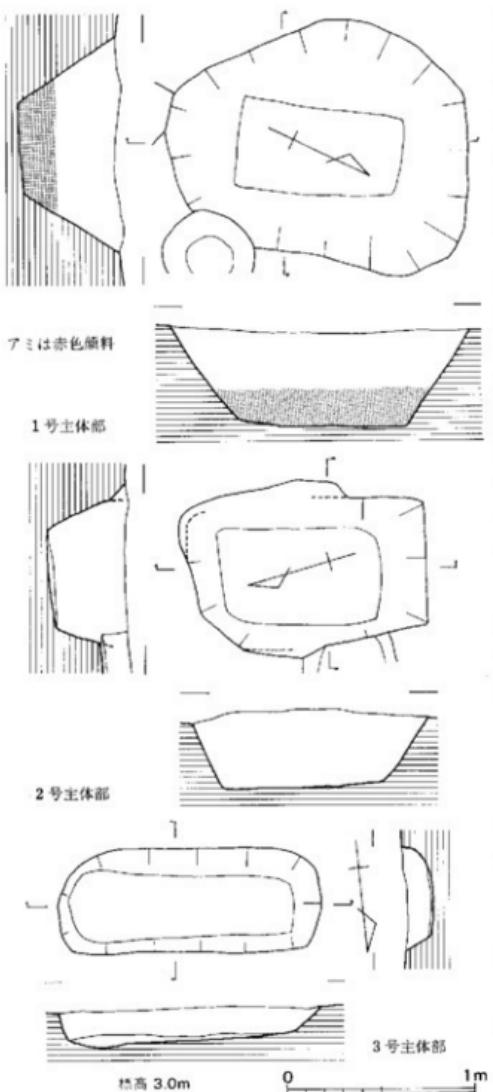
第7図 第1号方形周溝墓全図 (1/100)



第8図 周溝土層実測図 (1/40)

とが推定できる。

2号周溝は1号周溝の約0.3m外側に平行して築かれている(北辺では一部重複)。幅0.7~1.4m、深さ0.4mの断面「U」字形をなし1号周溝よりひとまわり大きい。残存する北・東辺の周溝は各々9.5m、6.2mを計り、直線的に走り、東南隅では直角に交わって連なる。覆土は黒褐色



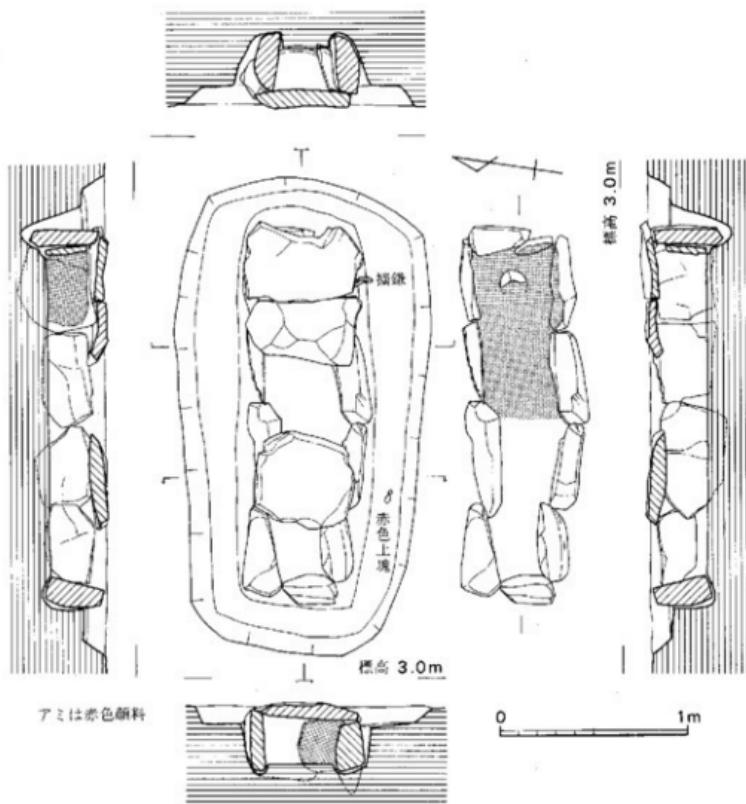
第9図 第1・2・3号埋葬主体部実測図(1/30)

砂が厚く、その中より3個体分の土師器が出土した。東辺の南側は段落ち部分まで続く。台状部は東西幅で7.5mあり、最終的な第1号墓の規模は一辺10m、台状部で8mほどと推定できる。陸橋部は発掘区内では確認できなかった。

**埋葬主体部** 台状部のほぼ中心部より5基の埋葬主体部を検出した。第1～3号主体部が土壌、第4・5号主体部が箱式石棺である。主軸方位は第1・2号主体部がほぼ南北にとるのに対し、残りのものは東西にとっている。また第2号主体部は第3号主体部に切られている。以下各々の主体部について詳述する。

**第1号(第9図)** 台状部の中心よりやや東に寄った所に位置する。主軸方位をN-27.5°-Wにとる長方形土壙である。上面1.5×1.25m、底面0.9×0.46m、深さ0.55mを計る。上面の丸みは砂の剥落によるものと思われる。墓底から上へ0.25mにかけての部分には赤色顔料がかなり濃く撒布されていた。この赤色顔料中よりガラス製丸玉7点と管玉1点が出土しており、副葬品と考えられる。

**第2号(第9図)** 第1号主体部の北西に位置し、第3号主体部に西側の一部を切られる。N-5°-Eに主軸方向をとった長方形土

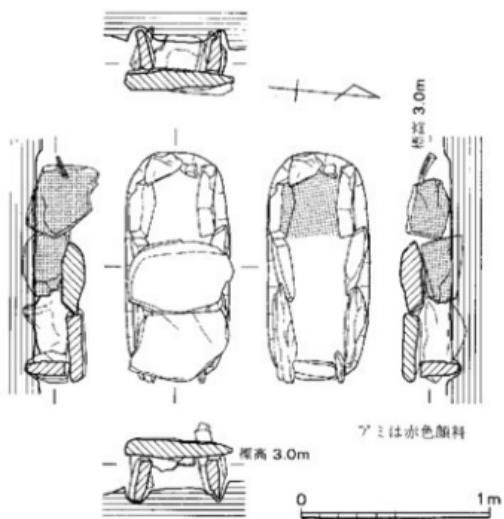


第10図 第4号埋葬主体部実測図(1/30)

壙である。長さ1.25m、幅0.75m、深さ0.42mの規模であるが、上面はかなり崩れている。埋土中より楕円形と思われる土師器の細片の出土をみたが、副葬品とは認定しがたい。

第3号(第9図) N-88.5°-Wに主軸方向をとり、第2号主体部とは直交して東端で切り合う土壙である。長さ1.4m、幅0.56mの長方形の平面をなすが、深さは0.17mと1・2号主体部に比較して浅く、かなりの削平を受けたものと考えられる。墓壙内は薄く赤色顔料が撒かれてあった。副葬品など出土遺物はなかった。

第4号(第10図) 第3号主体部のすぐ南にN-82°-Eに主軸方向をとって設けられた箱式



第11図 第5号埋葬主体部実測図(1/30)

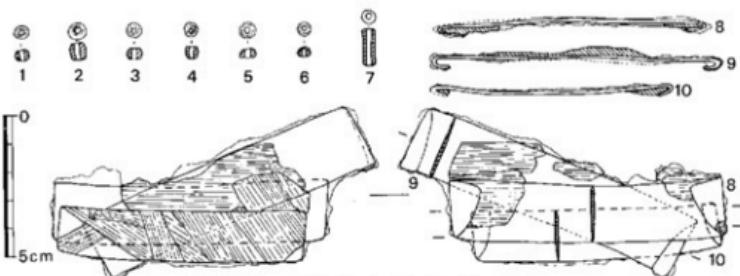
赤色顔料が撒布されており、その東端部近くで頭蓋骨の1部を検出したことにより頭位が東であることが判明した。また赤色顔料は東小口南側およびそれと隣接した両側壁東端の石の内面にも塗布されている。この両側壁東端石の外側より、蓋石に一部覆われるようにして縛錆3点が密着して出土しており、棺外副葬品と考えられる。他に右棺南側の墓壙より赤色の土塊が2点出土した。

出土人骨は九州大学医学部解剖学教室の永井昌文教授により、残っていたのは周辺部を欠失した頭蓋骨で、20代後半位の成年男性(?)であろうとの鑑定結果を得た。

第5号(第11図) 主体部中一番南に位置する。周辺の擾乱・削平が著しく石棺部のみが孤立して残されており、明確な墓壙は確認できなかった。石棺は主軸方向をN-85.5°-Eにとり、両小口に各2石、両側壁に各3石ずつ扁平な玄武岩を配している。このうち東小口の1石は小ぶりで北側壁との間隙を埋めたものである。また西小口の2石はともに小さく薄いもので、本来の小口石は抜かれた可能性が強い。蓋石は2石残存し、さらに西側に1石置かれていたものと想定できる。棺の内法は長さ1.0m、幅0.3m、高さ0.2mを計る。棺内の西側床面には赤色顔料が撒かれ、そこより歯の一部を検出した。これは破損した歯冠一個体分のみで、性別・年令の鑑定は不可能であった。赤色顔料は他に西側蓋石、両側壁の西寄りの各2石のいずれも内面に塗布されている。遺体の頭位は西と考えられる。

石棺である。この位置は本方形周溝墓のほぼ中心に相当する。石棺は長さ2.55m、幅1.37m、深さ0.12mの墓壙の中央部をさらに掘り下げて構築されている。棺には比較的扁平な玄武岩が用いられており、南北両側壁に各4石、東小口に2石、西小口に1石を配する。また蓋石は3石が残存しており、そのあり方からして本来的には5石の使用が推定できる。棺の内法は、東小口0.4m、西小口0.25m、長さ1.75mで、東小口から西小口に向うにつれ狭くなっている。

棺内の東側半分の床面には赤



第12図 副葬品実測図(1/2)

副葬品(第12図、第1・2表) 1~7は第1号主体部床面近くの赤色顔料の混った埋土中より出土した玉類である。1~6はいずれも藍色のガラス製丸玉で、径4.4~6.0mm、高さ3.2~6.2mm、孔径1.0~1.8mmを計る。表面の磨き仕上げは丁寧といいがたく凹凸が激しい。7は濃緑色の碧玉製管玉で、径4.9mm、高さ13.4mmを計り、孔は径1.8mmの一方穿孔である。

8~10は、第4号主体部の頭位の東側にあたる石棺外(墓壙中)より3点密着して出土した摘鍊である。残存状況が極めて不良だったため、保存処理を施した後実測を行なった。長さ(刃幅)8.6~10.2cm、幅1.8~2.3cmを計り、長さ4に対し幅は1弱の長方形を呈する。いずれの方部もわずかに外反りし、背部は内反りする。厚さは背部で0.2cm。折返し部は左右若干の幅の違いをみせ、身との間隔は0.2~0.3cmである。8の正面折り返し部分の周囲には横に走る木質が、刃部端上0.6cmより背部の上1.3cmにかけて約3.0cm幅で認められる。また10の身と折り返し部の間に木質が残存しており、8・10ともに着装した木製柄の痕跡と考えられる。これとは別に10の背面を中心に縦横に走る木質(樹皮)痕が認められる。

周溝内出土遺物(13図) 3点の土師器がいずれも第2号周溝の黒褐色砂層より出土した。  
1は肩球の胸部にはば直立する頸部をつけ、さらに二段に屈曲して外方に大きく開く口縁部

(単位: mm)

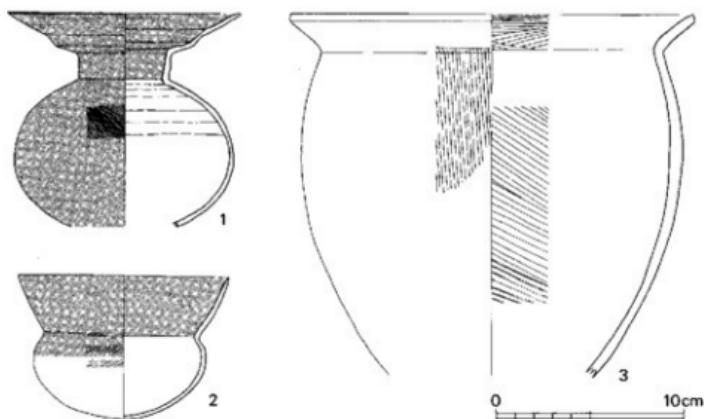
No.	種類	長径	短径	高さ	孔径	色調	材質	備考
1	丸玉	5.3	4.4	4.2	1.8	ライムブルー	ガラス	
2	"	6.6	6.0	6.2	1.5	"	"	
3	"	5.3	5.3	4.2	1.5	"	"	
4	"	5.2	4.8	4.5	1.4	"	"	
5	"	6.0	6.0	3.5	1.8	"	"	
6	"	5.2	5.0	2.2	1.0	"	"	
7	管玉	4.9	4.9	13.4	1.8	濃緑色	碧玉	片側穿孔

第1表 玉類計測値

(単位: cm)

第12図 番号	長さ (刃幅)	中央部の幅 (最大幅)	厚さ	刃部の反弓	折り返しの幅 左	折り返しと身との間の幅 右	備考
8	9.4	1.8	0.15~0.2	外反弓	1.0	0.85	0.3 0.2 正面に平行木質痕
9	10.2	2.3	0.1~0.2	"	0.6	0.7	0.2 0.25
10	8.6	2.0	0.15~0.2	"	0.6	0.65	0.2 0.25 背後に樹皮痕

第2表 摘鍊計測値

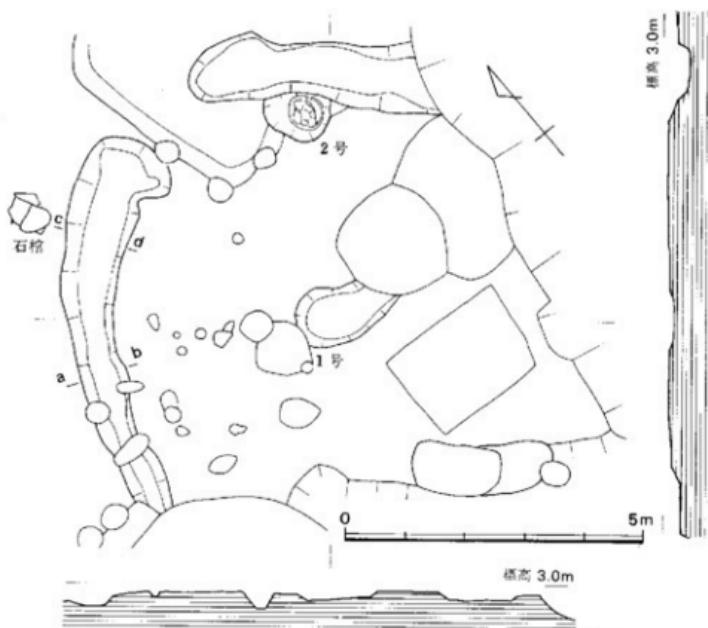


第13図 周溝出土土器実測図(1/3)

をとりつけた壺形土器である。口径12.4cm、残高11.5cm、胴部最大径11.6cm。口縁部は尖り気味に外へ引き出す。底部は欠損しているが穿孔の可能性が強い。胴部内面の上位には輪積の痕跡が残る。胴部外面は横の籠研磨で仕上げるが、上半分と下半分の接合部にあたる中位には細い斜め刷毛目による調整が残る。他の外面と内面はすべてナデによる仕上げである。精良な胎土中には石英粒・赤色粒を混え、焼成良好、赤褐色を呈する。また胴部内面を除いたすべての器表に赤色顔料を施す。器壁も薄く、全体的に端美な作りの土器である。胴部が北辺周溝、他が東辺周溝と2つに分れて出土した。

2は扁球の胴部から口縁部がやや内湾氣味に立ち上り開くいわゆる小型丸底壺である。口径11cm前後、器高7.8cm。胴部最大径より口縁部径の方が大きく、また胴部高の方が口縁部高よりも大きい。頭部内面は稜をなし、口縁端部は尖る。頭部から胴部上位は細かい斜め刷毛目で調整し、さらに胴部下位とともに籠研磨で仕上げるが、全体にいきわたらず一部刷毛目が残る。石英粒・赤色粒を混えた精良な胎土を用い、焼成良好、赤褐色を呈する。外面の胴部以上と口縁部内面には赤色顔料が塗布されている。東辺の周溝から出土。

3は1・2がほぼ完形品であったのに対し、口縁部から胴部にかけての全体の約2/3弱の壺形土器破片である。復元口径21.4cm。ほとんど膨みをみせない胴部から「く」の字状にかなり強く口縁部が開く。また口縁部外面がほぼ直線的に開くのに対し、内面ではいくぶん丸味をもって外反する。内外面とも刷毛目調整を主としているが、口縁部外面は横ナデを行ない、内面頭部から胴部上位にかけては比較的粗い刷毛目を横ナデで消している。細かい砂粒と赤色粒を混えた胎土を用い、焼成はやや軟で風化による器表の剥落が著しい。くすんだ赤褐色を呈する。



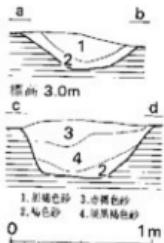
第14図 第2号方形周溝墓全図(1/100)

ii) 第2号方形周溝墓 (第14~19図、図版7・8・41)

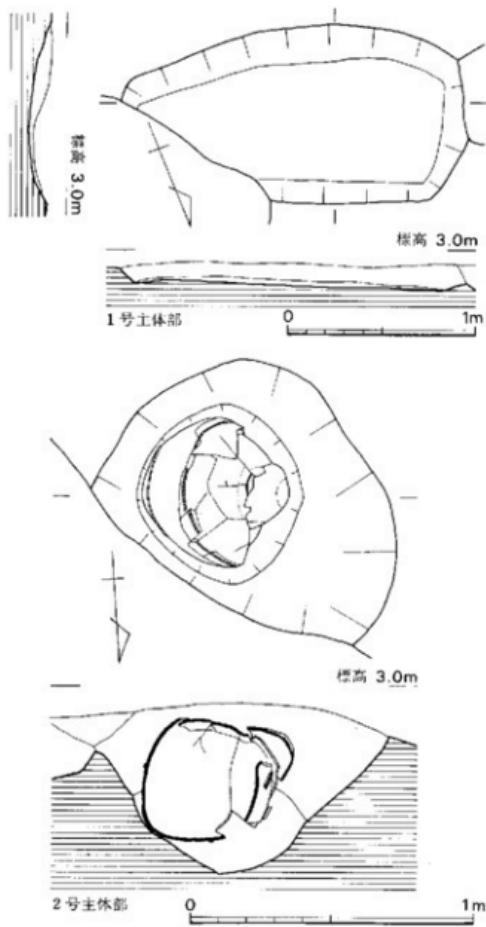
第1号方形周溝墓の東側約4.5mに位置する。この一帯は近・現代の擾乱・削平が特に著しく、第2号方形周溝墓も南側と東側を破壊されており、また第3号住居跡からも北辺で切られ、残った周溝・台状部とも遺構の状況は極めて悪い。

周溝は西辺と北辺に残る。西辺の周溝は南から湾曲気味にまた溝幅を広げながら北へ6.5m延びる。幅約0.9mの西北隅の険愾部をはさんで、北辺の周溝が東南に4m走る。周溝は幅0.6~1.2m、深さ0.2~0.4mの断面「U」字形をなす。周溝覆上の黒褐色砂層から土器片と円筒形の土錠片が出土した。

台状部は東西幅で約7m、南北幅で約6m残存しており、多くの擾乱を受けながらも、中心部と北辺に2基の埋葬主体部を遺存していた。この中心部にあたる埋葬主体部と周溝との位置関係から推し計ると、本周溝墓の本来的な規模は--辺約8m前後と考えられる。また西辺周溝外に1基の箱式石棺が存在し、他に関係する遺構が見当らないことから、本周溝墓に伴うものと思われる。



第15図  
周溝上層実測図(1/40)



第 16 図 第 1・2 号埋葬主体部実測図 (1/30, 1/20)

た。以下、棺に使用された土器（第17図）について述べる。

**上蓋** かなりいびつな形をした甕形もしくは壺形土器の底部付近を打ち欠いたものである。残高16.6cmで、上端部で径29.3cmを計る。底部からの立ち上りをみると、胸部の最大径は残存している上端部ときほど変わらず、その位置も上端部より少し上にあたるものと思われる。底部

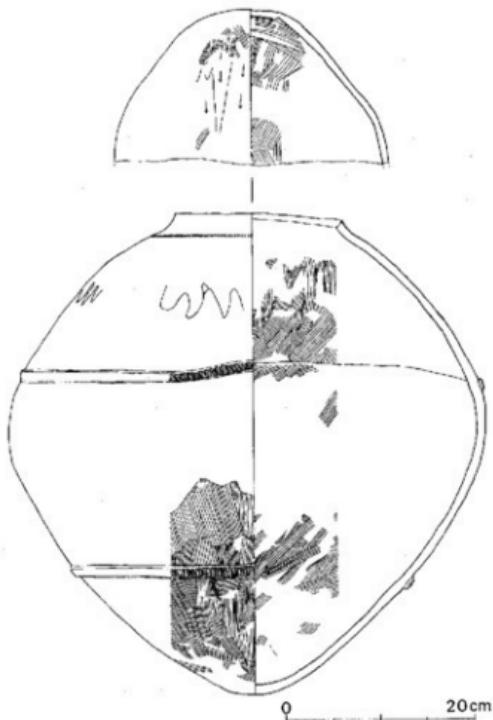
#### 埋葬主体部（第16図）

第1号 台状部のほぼ中央に主軸をN-84°-Wにとって位置する土壤である。残存長1.8m、幅0.95mの長方形をなすが、西側の端は狭くなる。深さは0.1mと浅く、上部はかなり削平されているものと考えられる。埋土に赤色顔料がわずかではあるが混っており、位置関係などと考えあわせて埋葬主体部と認定した。副葬品など出土遺物はない。

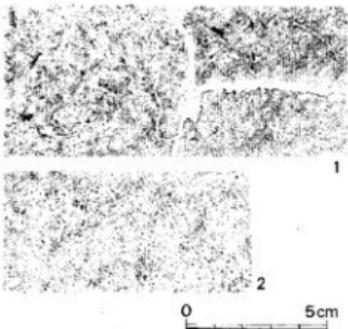
第2号 台状部の北辺で検出した甕棺である。第1号主体部の東北約2.5mの所に位置し、北辺の周溝を墓壙の北側で一部切っている。長径1.1m、短径0.8m、深さ0.6mの楕円形墓壙中に、N-85°-Wに主軸をとった組合せ式甕棺を33°の傾斜角度で埋置する。棺は口縁部を打ち欠いた大型の壺形土器を用いた下甕に、壺もしくは壺形土器の底部部分を使った上蓋で蓋をかぶせたものである。下甕内部および墓底面近くに赤色顔料が認められた。後者は下甕の削れた部分の下にあたり、棺内の赤色顔料が流出したものと考えられる。棺内および墓壙内からの出土遺物はなかっ

は外面では丸底を呈するが、内面では径6.5cmほどの平坦面をなす。底部外面は粗い刷毛目を縦横に走らせており、それよりやや上位の部分には長さ約8cmにわたって、下から上に向う板の小口を用いた強いナデを行なう。内面は1cm幅4~5本の粗い刷毛目調整を、重複させながら縦横に行なう。砂粒と金雲母を多量に混えた胎土で焼成良好、明黄褐色を呈する。

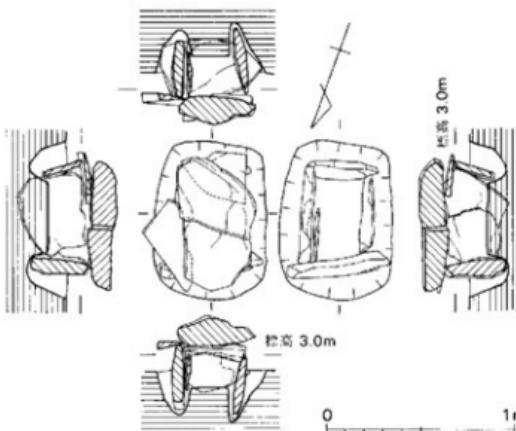
**下図** 口縁部を打ち欠いた大型の壺形土器である。残高51.5cm、胴部最大径51.2cmを計る。径約25cmとすばまつた頸部から胴部が球形に大きく張り、器高約30cm前後の所で最大径をなし、そこよりすばまって尖り気味の丸底へ続く。外面の頸部直下には細い棒状工具の先端で押出した径0.2×0.4cmの米粒状の文様を一周めぐらす。また胴最大径部の直上と、底部より約12~3cm上にいずれも刻目突帯をめぐらせている。前者は幅約1.3cm、高さ0.3~0.4cmの扁平な台形状突帯で貝殻腹縁のような工具による長さ1cm、幅0.2~3cmの楕円形の刻目を右下がりに入れる。これは胴部接合上に設けられたもので、その貼付位置は多少の上下をみせながら胴部上を一周する。後者は前者より突帯幅がわずかに大きくなり、刻目幅が小さく密になる。胴部下位は縦の細い刷毛目、さらに底部近くでは一部横刷毛目調整を行なう。胴部中



第17図 第2号埋葬主体腰柄実測図(1/6)



第18図 腰柄上刻文拓影(1/2)



第19図 周溝外石棺墓実測図(1/30)

位以上では、突帯を挟んで下は縦、上は横のナデで仕上げている。内面は斜めあるいは縦の刷毛目調整を主とするが、胴部中位および底部近くではその刷毛目を消すように、板の小口による荒いナデが行なわれ擦痕が残る。また頭部直下と底部は指ナデによる仕上げである。胎土には多くの砂粒、金雲母を混え、焼成良好、外面黄褐色、内面暗赤褐色を呈する。胴部から底部にかけての約1/3近くを占める黒斑があり、他にも数ヶ所小さな黒斑が見受けられる。

すべての調整を終わった後施された線刻文を、外面点列文と上の突帯間に2ヶ所見出した(第18図)。両者は約7cm離れて、ほぼ同じ高さに施文されている。ともに細線で描かれ、その横幅および細部では異なるものの丸みをもった山形の文様を3つ連続させて、さらに左端にはほぼ垂直に延びる線をつなぐほぼ同一の文様構成をなしている。

#### 周溝外石棺墓(第19図)

第2号方形周溝墓の西辺周溝の外約0.3mの所にある。他にこの種の遺構が見られず、また位置的にかなり近接している所から、この石棺墓は第2号方形周溝墓に関連した埋葬施設と考えられる。

本石棺は主軸方向をN-24°-Wにとる箱式石棺で、内法で長さ0.45m、幅0.26mと極めて小型のものである。側壁、小口とともに各々扁平な石を一枚ずつ配して組合せている。ただ西側壁の内側には幅・高さとも約30cmの扁平な割石を重ねるように配置している。北小口石が最も大きく、幅65cm、高さ35cmを計り、両側壁石から東西にはみ出す。蓋石には長さ72cm、幅40cm、厚さ15cmの1枚石を用いているが、安定が悪かったのか東側と南側で扁平な石を小口・側壁石との間に挟み込んでいる。蓋石は出土時すでに2つに割れていた。蓋石下面から墓底までは23cmにすぎない。石材は玄武岩である。

棺内からの出土遺物はなかった。

### iii) 第3号方形周溝墓（第20～27図、図版9～13・41・42）

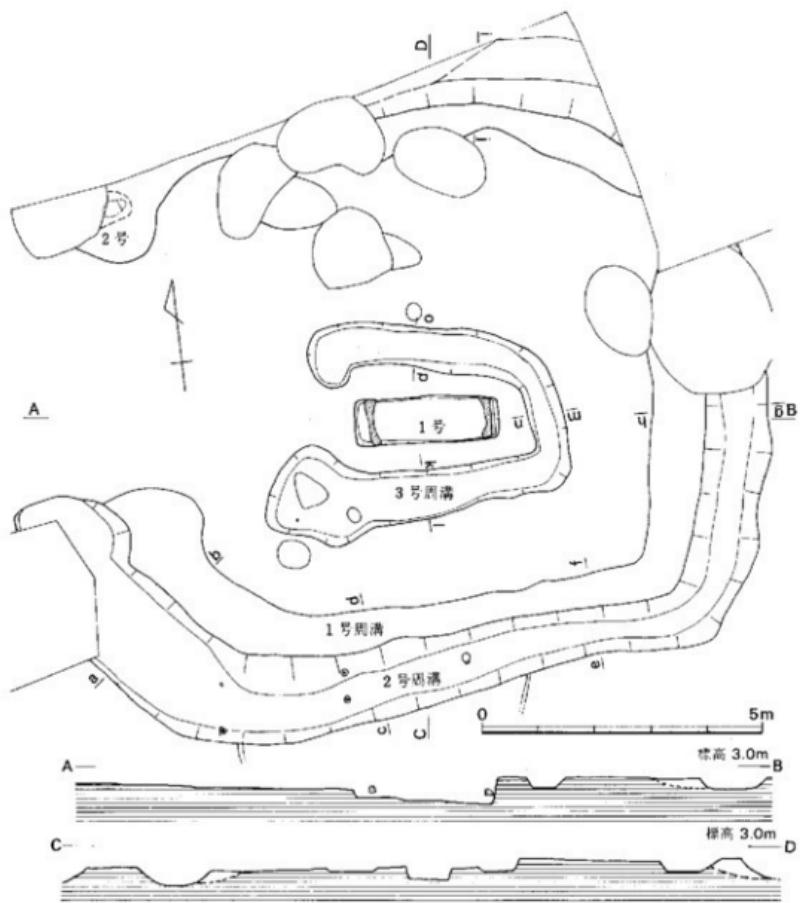
第2号方形周溝墓の北約13mの所に存在し、北側に列をなす方形周溝墓中一番西に位置する。表土剥ぎを行なった段階で、南側半分が現われたため、さらに北側を拡張した。その結果、台状部についてはほぼ全容を検出したが、北辺周溝および東辺周溝の一部はなお未掘のまま残った。また西辺付近はかなりの削平を受けている。

本周溝墓は全体的にみれば、周溝を含めた東西幅が約13.5mの西辺に陸橋部をもつ方形周溝墓といえるが、周溝は明確に切り合いをもって二重にめぐる外側のものと、主体部を囲繞する内側のものとの3つに分かれる。このうち外側の二重の周溝は、その内側のものが外側のものに切られており、古い時期のものを1号周溝、新しい時期のものを2号周溝と呼ぶ。これは、1号周溝をなぞるようにして外側に2号周溝が作られていることから、1号周溝の埋没等によって新たに第2号周溝が設けられたものと考えられる。主体部をめぐる周溝を3号周溝と呼ぶが、これは1・2号周溝とは性格を異にするものであろう。すなわち1・2号周溝が本墓の外に向かっての区画をなすのに対し、3号周溝はその区画内（台状部）での主体部の位置を示すものと考えられる。しかしいずれの周溝も西辺に陸橋部をもつのは同じである。これらの周溝および主体部は、旧地表上から掘り込まれ、盛土などは認められなかった。

1号周溝に囲まれた台状部は、東・西辺で各々7m、南北辺で各々8mを計る。また西南隅と西北隅が丸みをもってやや外開き気味に陸橋部へ続くため、北辺と南辺はわずかに膨らんだようになり、主体部を通した部分での南北幅は8mとなる。1号周溝は深さ約0.3mの「U」字状をなし、幅は1~1.5mと推定される。ただ、西南隅および西北隅から陸橋部に向けて徐々に浅くなる。周溝の土層は大きく灰褐色砂層と灰白色砂層の2つに分かれ、上層にあたる灰褐色砂層より土師器の出土をみた。陸橋部は幅4mで、西辺中央部に位置する。これらを総すれば、1号周溝で区画された当初の本周溝墓は、東西幅11m前後、南北幅10m前後の規模をもつたものと推定できる。

2号周溝は1号周溝と重なりつつ外側に設けられる。したがって囲繞される台状部は、当初のものに比べひとまわり大きくなる。発掘区内での2号周溝は東辺が約6m残り、それとは直角に南辺が西に8m延びる。そこから周溝は北東に3m走り、さらに北に向きを変え1.5mで陸橋部へと続いている。いわば幅4.3m以上の陸橋部を中央部に有する西辺が、外開きになった形状を呈する。周溝幅0.8~1.8m、深さ0.3m前後を計るが、陸橋部に近づくにつれ溝幅が広がりかつ浅くなる傾向にある。周溝土層は暗黒褐色砂と淡灰褐色砂の上下2層に分かれ、暗黒褐色砂層中より土師器の出土をみた。土色は1号周溝に比べ濃い。この作り変えられた本周溝墓の規模は、台状部で東西幅10.5m、南北幅9.3mを計り、全体では東西幅13.5m、南北幅12m前後と推定される。

3号周溝は主体部を囲むようにして陸橋部を西辺に設けた長方形の区画をなす。北辺3m、

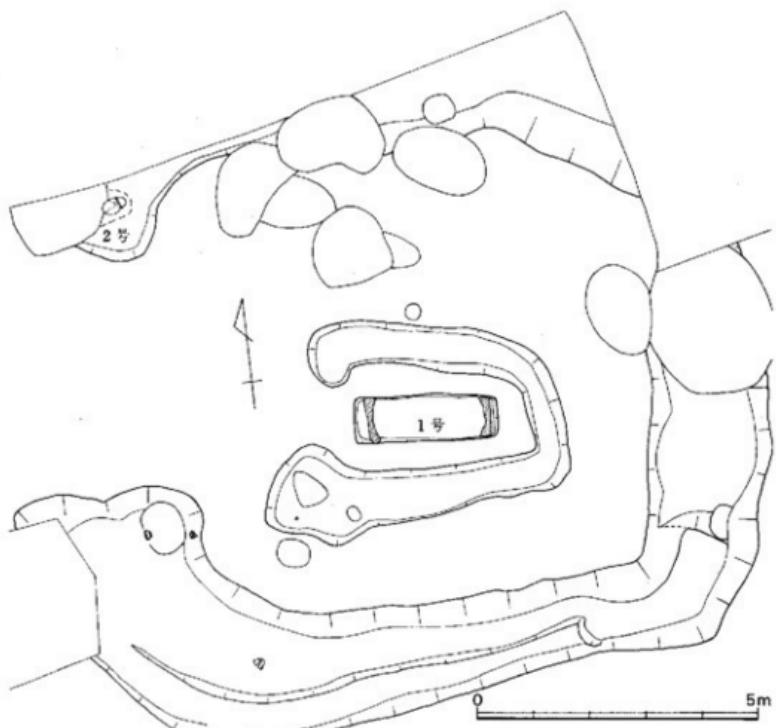


第20図 第3号方形周溝墓全体図—1号周溝発掘前(1/100)

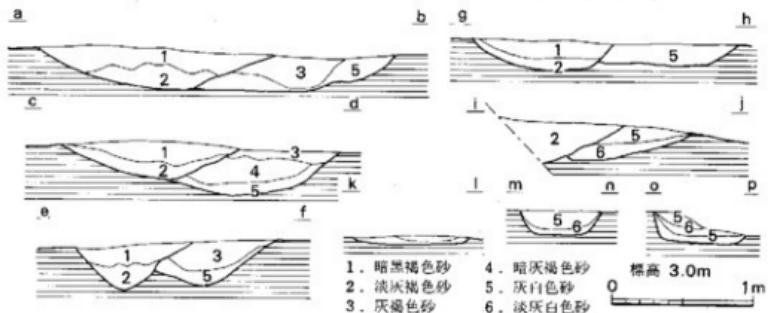
東辺1.3m、南辺3mを計る。西辺では、西北隅からほぼ南に0.5m、西北隅から東北にやや開き気味に1.5m溝が延び、その間の幅1mの部分が陸橋部をなす。溝幅0.6~1.4m、深さ0.2m前後で、土色は薄い。

#### 埋葬主体部

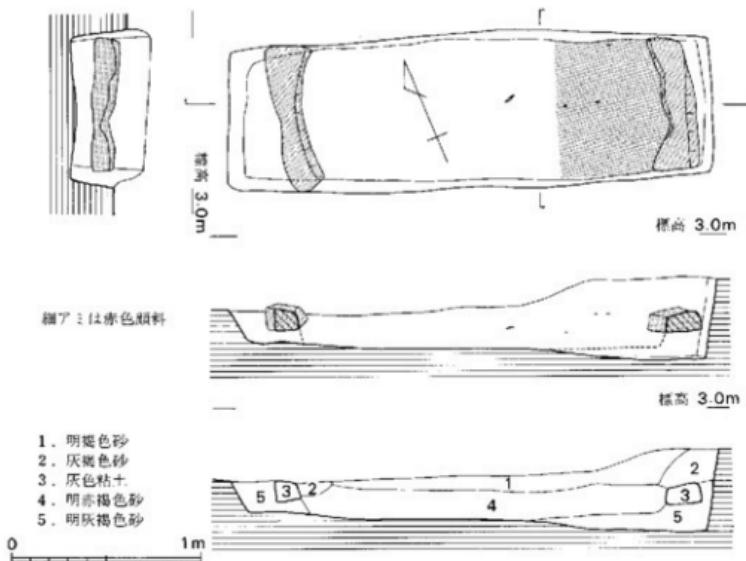
第1号(第23図) 台状部の中央よりやや南寄りに、主軸N-68°-Wの方向をとって位置す



第21図 第3号方形周溝墓全体図－完掘時(1/100)

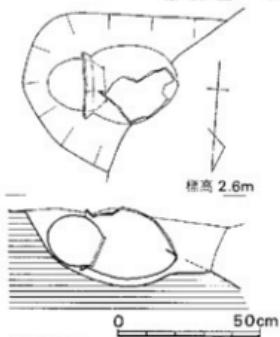


第22図 周溝土層実測図(1/40)



第 23 図 第 1 号 墓 墓 主 体 部 実 測 図 (1/30)

る木棺である。約0.5m外側には西辺に陸橋部をもつ3号溝がめぐる。墓壙は長さ1.72m、幅0.56m、深さ0.3mを計り、東小口から5cm、西小口から15cmの所に、墓壙横幅いっぱいに幅8~16cm、厚さ10cm程度の灰色粘土を置く。粘土帯はともに5~10cm墓底から浮く。木棺はこの2つの粘土帯間に設けられたものと考えられ、長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.25m以上の寸法が推定できる。粘土帯はこの木棺の小口板の固定のために使用されたものと思われる。また木棺部分には赤色顔料が撒かれており、特に東側半分には濃く分布していた。この東側部分の赤色顔料中より、ガラス製



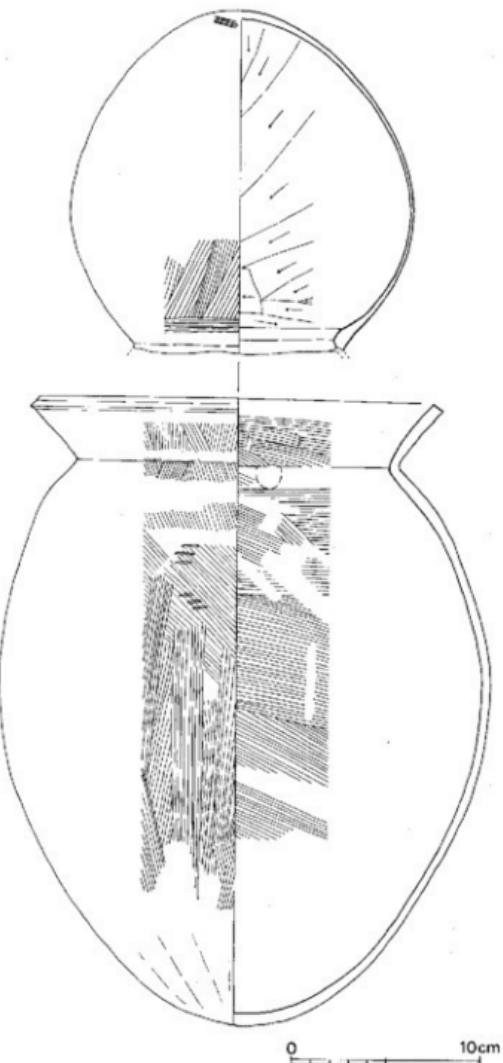
第 24 図

第 2 号 墓 墓 主 体 部 実 測 図 (1/20) 連玉と刀子が出土した。ともに床面から浮いており、あるいは棺外に副葬されたものかもしれない。

第 2 号 (第 24 図) 1号周溝底より検出した小型の喪棺である。陸橋部のすぐ北側の周溝部分に位置し、墓壙は東側で現代の掘乱坑によって破壊されているが、喪棺自体はほぼ全部が残存している。墓壙は幅0.55m、深さ0.25mの平面橢円形で、喪棺はその中にN-86°-Eに主軸

をとり、 $14^{\circ}$ の傾斜角度をもって埋設されている。棺には上窓に口縁を打ち欠いた夔形土器、下窓にはやや大きめの夔形土器を用い。上窓が下窓の中に胴部上位あたりまで突込まれている。この埋葬主体部は、1号周溝上面では確認できず、溝底ではじめて検出したものであり、1号周溝埋没前に當なまれたものと考えてよい。棺内・墓壙からの出土遺物はない。以下、棺に使用された土器（第25図）について述べる。

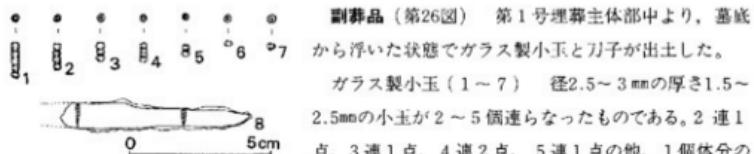
**上窓** 口縁部を打ち欠いた夔形土器である。残高18.5cm、肩部最大径18.3cm、頸部径11.3cm、胴部は最大径を中位よりわずか上にとり、かなりの張りをみせる。そこより丸味をもちながら序々にすばまり、小さな平坦面をなす底部へと続く。外面頸部直下には横にはば一周走る8本/0.8cm単位の刷毛目調整を行なう。その下は斜めのやや粗い刷毛目調整を施すが、縦のナテによりほとんど消され、上位部分が残るのみである。内面は頸部が横ナテによる他は、すべて粗い横と斜めの範削りであり、削りによる凹凸が顕著である。しかし、器壁は2mm以下の所もあり、かなり薄手の仕上がりとなっている。



第25図 第2号埋葬主体櫛棺実測図(1/3)

胎土には砂粒とともに細かい金雲母を多く含み、焼成は極めて良好、堅緻である。外面は煤に覆われているが地肌は明黄褐色、内面は赤みをおびた黄褐色を呈する。

**下彫** 口径21.1cm、高さ33.5cm、胴部最大径26.7cmを計る變形土器である。口縁部は頸部から直線的に強く外反する。端部は平坦面をなすが、ナデによりわずかに中央部に窪みをみせる。また外側にいくぶん引き出され、小さな段をなす。胴部はゆるやかな張りをもって、その中位よりやや上で最大径をとり、丸い底部へとすばまる。外面は粗い斜めの刷毛目または縦の細い刷毛目で調整を行なうが、肩部あたりは横ナデによって消される。底部付近は籠状工具によるナデがみられる。また胴部上位には横の叩き痕が、刷毛目の間にわずかに残っている。内面は口縁端部あたりと底部がナデによって仕上げられている他は、概または斜めの刷毛目調整を行なう。胎土には径2~3mmの石英粒や細かい金雲母を多く混え、焼成は堅緻である。外面は胴部最大径付近を中心に厚い煤に覆われ、地肌のみえる底部は暗褐色、また内面は明赤褐色をなす。

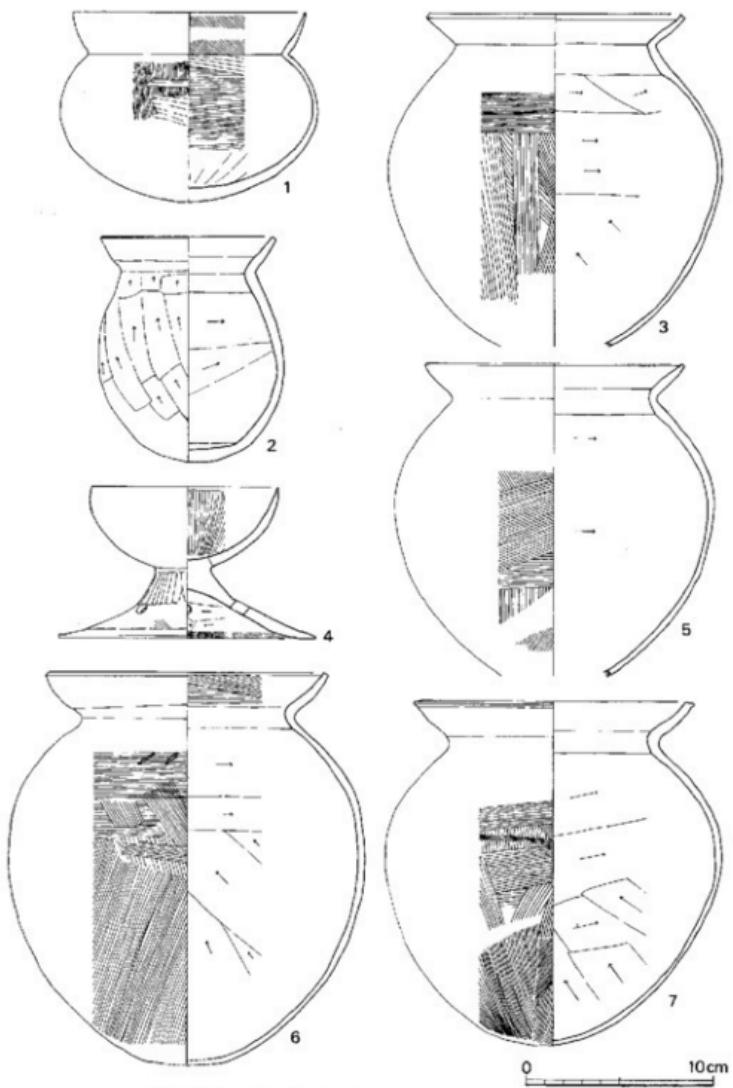


第26図 副葬品実測図（1/2） 墓底から浮いた状態でガラス製小玉と刀子が出土した。ガラス製小玉（1~7） 径2.5~3mmの厚さ1.5~2.5mmの小玉が2~5個連なったものである。2連1点、3連1点、4連2点、5連1点の他、1個体分の合計は20個であるが、他に破片が数個体分出土している。

刀子（8） 残長6.7cmを計る細身の刀子である。関は背部・刀部の両側に小さく設けられ、茎部端部は先細りする。また茎部には刃目痕が残存する。

**周溝出土土器**（第27図） 1・2号周溝より比較的の残存状況の良好的な土師器が7点出土した。1・2号周溝とも陳構部寄りの南辺から西辺にかけての場所で出土するものが多い。土師器は1号周溝では灰褐色砂層から、また2号周溝では暗黒褐色砂層中に埋没しており、ともに溝底からは浮いた状態であった。いずれの土師器も破損していたものの、ほぼ同じ位置に別の土師器と混わることなく1個体分ずつ検出した。1~3は1号周溝、4~7は2号周溝からの出土である。第3号周溝からも土師器が出土しているが細片のため図化には至らなかった。以下1・2号周溝まとめて詳述する。

**變形土器（3・5~7）** 3は全体の約半分の破片資料であり、復元口径13.5cm、胴部最大径17.9cmを計る。頸部から稜をなして口縁部が直線的に外反する。端部は角ばって外傾するが、その内面はわずかにつまみ上げられ段を作る。頸部内面も5~7に比べ鋭い。胴部は丸味をもちながら張るものとの線はかたい。口縁部から肩部にかけては内外面とも横ナデで丁寧に仕

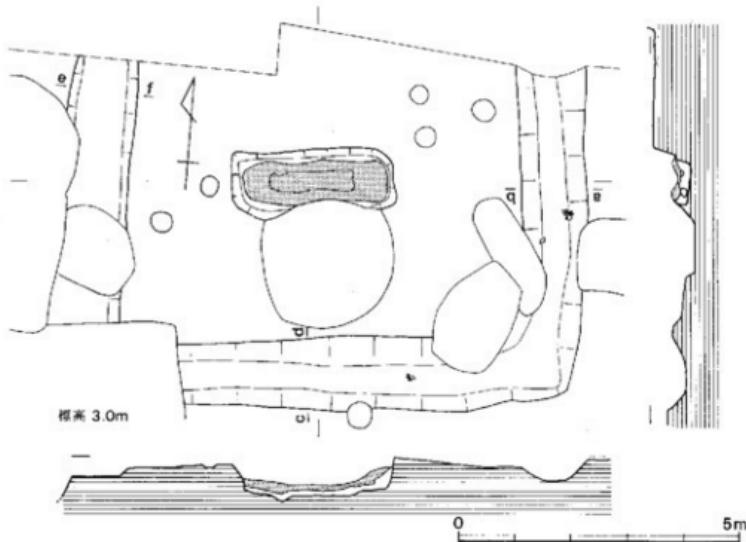


第27図 周溝出土土器実測図(1/3)

上げる。外面肩部以下は上位に横刷毛目、それ以下底部近くまで縦・斜刷毛目で調整を行なう。その調整順序は斜→縦→横とたどることができる。底部はナデを行なう。内面肩部以下は底部近くから斜→横の範削りを施し、胴部器壁は2mmと口頭部に比べ半分位の薄さになっている。5は比較的したまつ頸部から、わずかに内湾氣味に口縁部が開く。端部は小さくつまみあげられ、丸く仕上げられている。頸部内面はナデによって丸くなり明確な稜をなさない。胴部はゆるやかに張り、中位よりやや上で最大径をとる。外面は胴部中位以下底部あたりまで斜・横の刷毛目調整、それ以外は横ナデ。内面は口頭部が横ナデで、胴部には横の範削りを行なう。口径13.8~14.4cm、胴部最大径17.1cm。6・7はともに球形に近い胴部をもち、丸く稜をなさない頸部から口縁部が内湾して外に開く形態をとる。6は口径14.1cm、器高21.1cmを計り、口縁端部は外傾するが、仕上げの際のナデで内面に段をなす。底部は小さいが平坦面をもつ。外面胴部上位には横刷毛目、それ以下底部あたりまで斜めの細い刷毛目で調整する。上位横刷毛目の後に貝殻腹縁状工具による施文が、肩部の約1周部分に連続して10個なされている。内面口縁部には刷毛目、胴部には範削りを行なう。7は口縁部の内湾度が大きく、端部は外傾するものの外端はわずかに引き出され丸い。胴部外面では中位から底部にかけて横・斜刷毛目、内面では範削りを行なう。他の部分は横ナデで仕上げる。口径14.1cm、器高18.5cm。いずれの壺形土器も胎土には砂粒を多く混える。うち5・6には赤色粒が混り、6のものは径4mmほどの大きさである。焼成は良好で、特に1は堅緻である。色調は黄褐色~褐色を呈する。5・7には煤が付着する。

壺形土器（1・2） 1は肩球の胴部から内湾して開く口縁部をつけたいわゆる小型丸底壺である。口径12.4cm、高さ10.2cm。口縁部の立ち上がりは大きくなく、端部は尖り氣味である。頸部内面には鋭い稜をなす。胴部外面上位には細い斜刷毛目、下位には範研磨を行なう。内面には斜・横の刷毛目調整であるが底部近くでは粗いナデでそれを消す。底部近くに穿孔を設ける。石英粒と金雲母を混えた良質の胎土で、焼成堅緻、赤褐色を呈する。2は口径9.1cm、高さ12.1cmを計る。張りの少ない下彫れの胴部から口縁部がわずかに内湾しながら開く形態をもつ。口縁端部は丸味をもって外傾する。頸部には明瞭な稜をなさない。底部は丸底であるが、内面では平坦面を作る。胴部外面は幅1.5cmの単位で、下から上への範削りを行なう。底部付近は範ナデである。胴部内面にも横の範削りが行なわれ、口縁部は内外面とも横ナデで仕上げている。多量の石英粒の他金雲母を含んだ胎土で、焼成堅緻、黄褐色を呈する。

高杯（4） 径10.1cm、高さ4.3cmの端部が尖り氣味の楕形の杯部から、脚部が途中でわずかに屈曲をみせて大きく広がる高杯である。脚底径13.7cm、全高8.1cm。脚部のほぼ中位に径6mmの円形の透し孔を3ヶ所穿つ。杯部外面は一部横の範研磨がみられる他は横ナデ、内面は細かい範研磨で丁寧に仕上げる。脚部外面は上位で縦の範ナデ、下位では斜刷毛目を横ナデで消す。内面は幅の狭い範削りと刷毛目調整を行ない、後者部分に赤色顔料が残る。砂粒を多く混えた胎土で、焼成堅緻、脚部内面が黄褐色、それ以外は赤褐色を呈する。



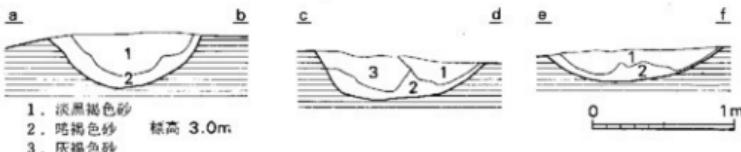
第28図 第4号方形周溝墓全休図(1/100)

iv) 第4号方形周溝墓(第28~32図、図版14・15・43)

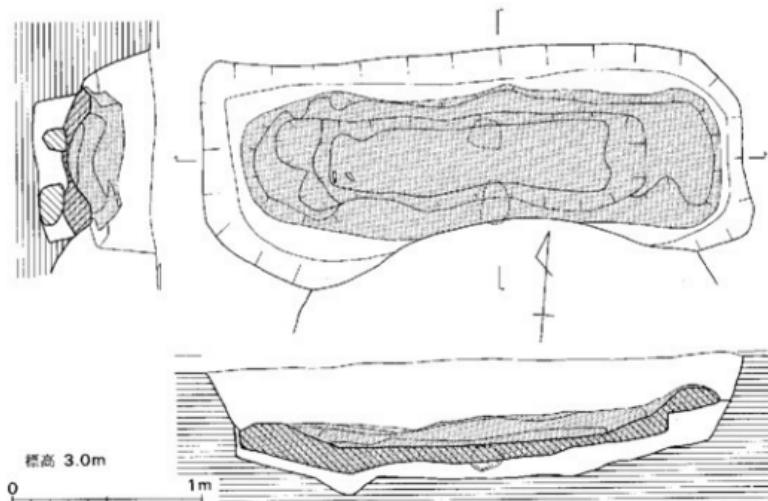
第3号方形周溝墓の東に5m隔てて位置する。北側が発掘区外にかかり、周溝・台状部とも住居跡・土壙、および現代の擾乱坑により一部破壊されている。

本周溝墓は各辺をほぼ東西南北にとり、周溝は東辺で6m、南辺で6.8m、西辺で4.7m残存する。これに円錐される方形の台状部は東西幅で6.9mを計り、周溝を含めた全体の東西幅は、9.1mである。埋葬主体部が台状部の中心に位置するならば、南北の全休幅は8m前後となり、東西に少し長い約9×8mの規模の方形周溝墓が想定される。陸橋部は残存する3辺には設けられていない。

周溝は幅1.1~1.2m、深さ0.4mを計る断面「U」字形で、淡黒褐色砂と暗黒褐色砂の上下2層の堆積状況が各辺でみられた。周溝内からの遺物は土師器破片だけが少量みられ、ともに淡黒褐色砂層内またはその上面から出土した。



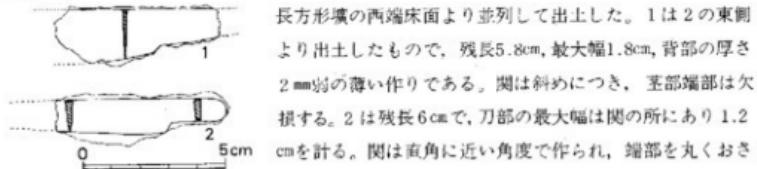
第29図 周溝土層実測図(1/40)



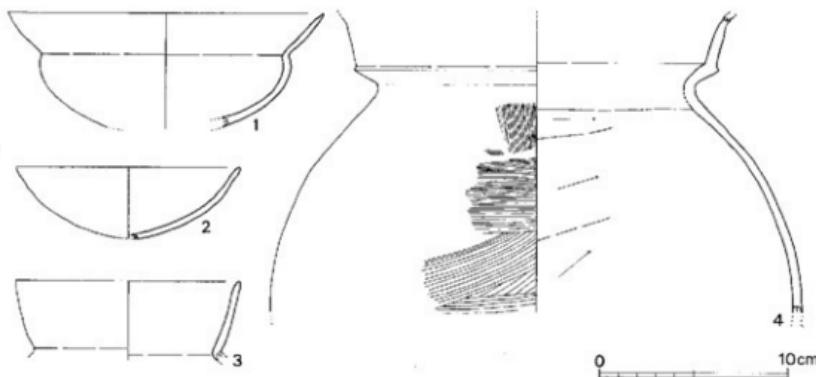
第30図 墓葬主体部実測図(1/30)

**埋葬主体部(第30図)** 台状部のほぼ中心にN-85°-Eに主軸方向をとて位置する粘土塚である。南側は現代の擾乱坑によって一部破壊されるものの、全体的にみて残存状況は良好である。墓壇は上面で長さ2.88m、幅1.2mで、深さ0.6mを計る。墓壇底のほぼ中央に、南北に並べて径15~20cmの丸石を置く。墓底より0.2m上に、厚さ15~20cmの灰色粘土を長さ2.7m、幅0.7mにわたって敷きつめ、その中央部に長さ1.8m、幅0.42m、深さ0.15mの長方形の窪みを設ける。この粘土塚は、東側が西側に比べ約15cmほど高くなるが、中央部の棺を置いたと考えられる長方形の窪みの床面はほぼ水平である。粘土の断面は「U」字形に近く、あるいは削竹形木棺を置いたものかもしれないが、棺の痕跡は残らず、また両小口側の立ち上がりがゆるやかであり、それとはっきりは認定しがたい。粘土上面あるいは覆土に赤色顔料の使用は認められなかつた。粘土中央部の長方形窪みの西端床面から、副葬と考えられる刀子が2点出土した。

**副葬品(第31図)** 刀子2点のみである。ともに闇部を中心とした破片で、粘土塚中央部の



第31図 副葬刀子実測図(1/2) めた長さ2cm、幅0.8cmの基部へと続く。背部の厚さ3mmで、



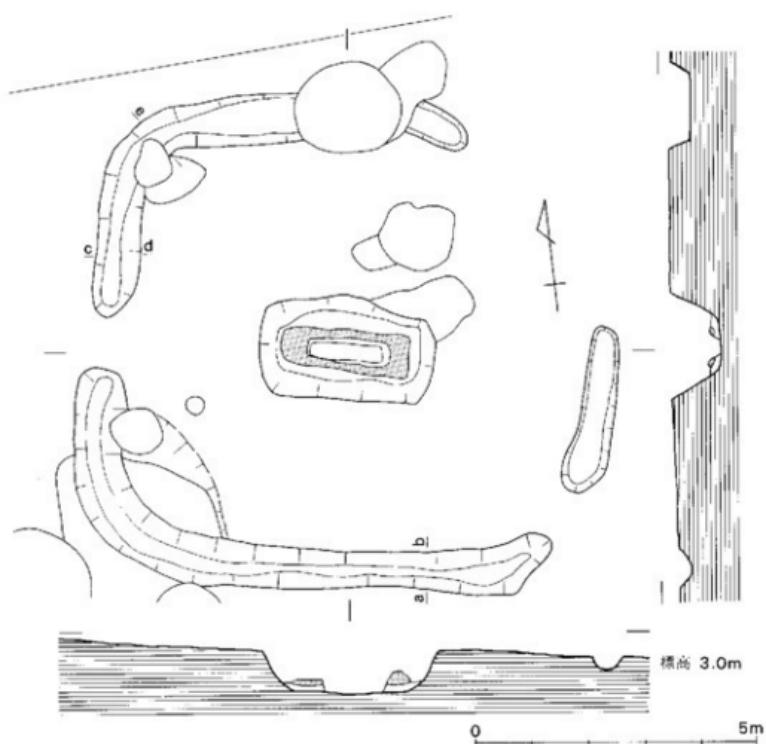
第32図 周溝出土土器実測図(1/3)

1にくらべ厚く、身幅が狭い。

**周溝出土土器**(第32図) 東辺および南辺の周溝の淡黒褐色砂層中およびその上面から土師器が出土した。個体数は少なく、図示した4点の他は甕・壺形土器数個体分の細片である。図示した4点はいずれも破片である。

**壺形土器(1・3・4)** 4は肩部から口縁部が外に開き、さらにその上に外反して立ち上がる口縁部を設けた、いわゆる大型の二重口縁壺である。口縁の立ち上る部分の外面は鋭い棱をなす。頸部は丸く反転し内外面とも稜をなさない。内外面とも磨滅が激しいが、外面には刷毛目、内面は窓削りを行っている。胎土には砂粒を混え、焼成良好、明黄褐色を呈する。東辺周溝からの出土である。1・3はいわゆる小型丸底壺である。1は復元口径16.8cmを計り、扁半球の胴部から口縁部がわずかに内湾しながら外方に大きく開く。端部は尖り気味である。外面は横の窓研磨を口縁部から胴部中位まで行い、底部および内面はナデによって仕上げる。胎土には細かい赤色粒、金雲母と少量の石英を混え、焼成良好、くすんだ赤褐色を呈する。3は口縁部の破片であるが、1に比べ外への開きが小さく、内湾気味に立ち上がる。端部はわずかに外に引き出され丸くおさめる。残存部分は横ナデで仕上げ、赤色顔料が塗られていた可能性がある。細かい金雲母と白色粒を混えた精良な胎土で、焼成良好、淡い赤褐色を呈する。

**壺形土器(2)** 復元口径12.0cm、器高3.9cm。丸い底部から半球状に立ち上がり、口縁端部はわずかに外に引き出し、丸くおさめる。外面中位は横の窓研磨、底部は窓ナデ、口縁部および内面は横のナデ調整を行なう。少量の石英粒・赤色粒・金雲母を混えた精良な胎土を用い、焼成良好、くすんだ赤褐色～黄褐色を呈する。南辺周溝よりの出土である。



第33図 第5号方形周溝墓全図(1/100)

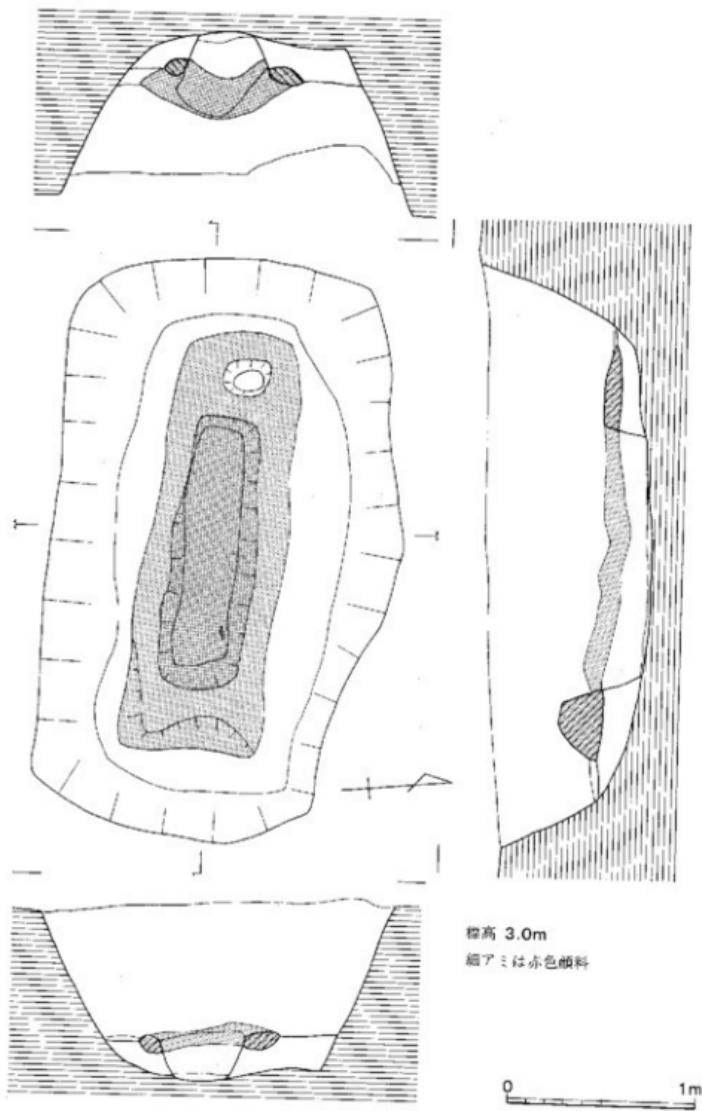
V) 第5号方形周溝墓(第33~37図、図版16, 17)

第4号方形周溝墓の東1mで検出した。墓崎遺跡で唯一の全容を示す方形周溝墓であるが、周溝には後世の土壠が切り合い、また西側は削平を受けて残存状態が不良である。東西幅9.5m、南北幅9.0mのほぼ方形を呈し、中央に東西方向の埋葬主体部を置く。陸橋部は西辺中央と東北隅および東南隅で合計3ヶ所検出したが、後2ヶ所は前述したように削平が著しく、本來的なものは明らかにしがたい。陸橋幅は西辺中央部、東南隅部で0.9m、東北隅部は東辺周溝北端と北辺周溝の東端間の直線距離で4mを計る。すなわち北辺周溝は東に5m、東辺周溝は南北に3mしか伸びていない。

a b c d e f

1. 黒褐色細砂  
2. 明茶褐色細砂

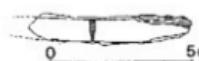
第34図 周溝土層実測図(1/40)



第35図 埋葬主体部実測図(1/30)

対し、南辺は幅0.5~0.7m、深さ0.1m未満である。いずれも浅い「J」字形の断面を呈し、埋上は上下2層に分かれたが、出土遺物は土師器の細片が数点出土しただけであった。台状部は東西幅8m、南北幅7mのわざかな長方形をなす。

**埋葬主体部**（第35図） 台状部の中央に、主軸方向をN-77.5°-Wにとって位置する。上面長3.23m、最大幅1.90m、底面長2.35m、最大幅0.9m、深さ1.0mの長方形墓壇を設け、そのほぼ中央に底面に接して長さ1.3m、幅0.35m、高さ30cm以上の木棺を埋置したものと考えられる。その後棺のまわりを砂で充填し、棺の上面近くで厚さ10cm、幅15~20cmの青灰色粘土を1周させ棺の固定を計ったものと思われる。この粘土帶は東西小口部分で35~40cmと幅広く、また西側小口部分では25cmと粘土が厚い。西側小口部分の粘土帶中には25×20cmの楕円形ピットがある。棺と考えられる長方形土壙内には赤色顔料が全体的に認められ、特に西側小口付近では濃い分布をみた。粘土および赤色顔料のあり方からして、頭位を東にもつものと推定される。その西側小口の北側壁近くから刀子を1点検出した。床面より20cm近く浮いており、棺外副葬品と考えられる。



第36図 剣弾刀子実測図(1/2)

**副葬品**（第36図） 刀子1点だけで、出土状況から棺外(蓋上)

に副葬されたものと思われる。残存長5.6cmで、刃部幅は0.8cmを計る。闊は背と刃で0.5cmほどずれる。茎は1.4~1.8cmの長さをもち丸くおさめる。蓋上部に横方向の木目痕が残る。

**周溝出土土器**（第37図） 周溝から出土した土器は極めて少なく、またいずれも細片で実測しえるのは第37図の1点のみであった。それらの細片は西辺周溝とそれに近い南北辺周溝の、



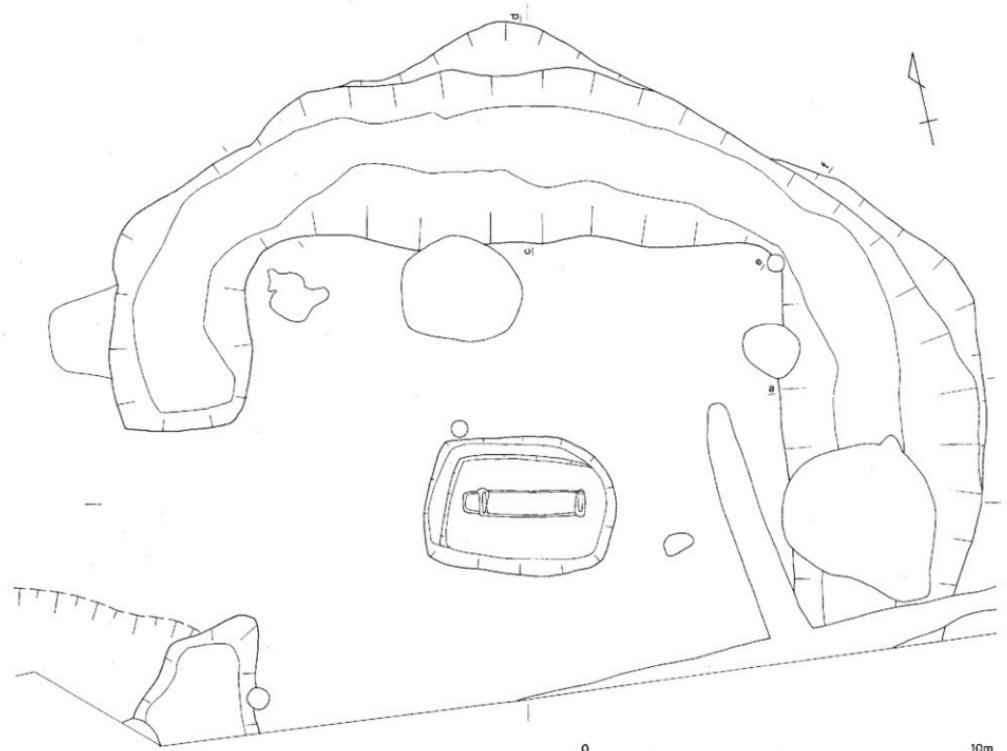
第37図 周溝出土土器実測図(1/3)

いずれも上面付近から出土したもので、この方形周溝墓に伴うものかどうかは問題が残る。図示した上器は、口縁部の1/3ほどの破片で、壺形土器と考えられる。やや外反気味に立つ口縁部で、縁部は丸くおさめる。復元口径14.2cm。

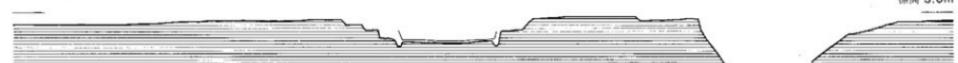
内外面とも磨滅が著しいが、外面は斜刷毛目をナデ消しているようであり、内面は横刷毛目が残る。砂粒を多く混えた胎土で焼成良好、淡黄褐色を呈する。

#### Vii) 第6号方形周溝墓（第38~44図、図版18~24、43~45）

第5号方形周溝墓の南9mの所で検出した大型の方形周溝墓である。西辺北側で集石遺構、第22号土壙に切られ、台状部でも第23・24号土壙によって切られている。また西辺南側を中心にして、13世紀以降の段落ちによってかなりの削平を受けている。また、東辺部付近では現代の井戸・埋設管による破壊がみられる。さらに本周溝墓の上面にはすぐ表土層があり、ある程度の削平を受けているものと考えられる。



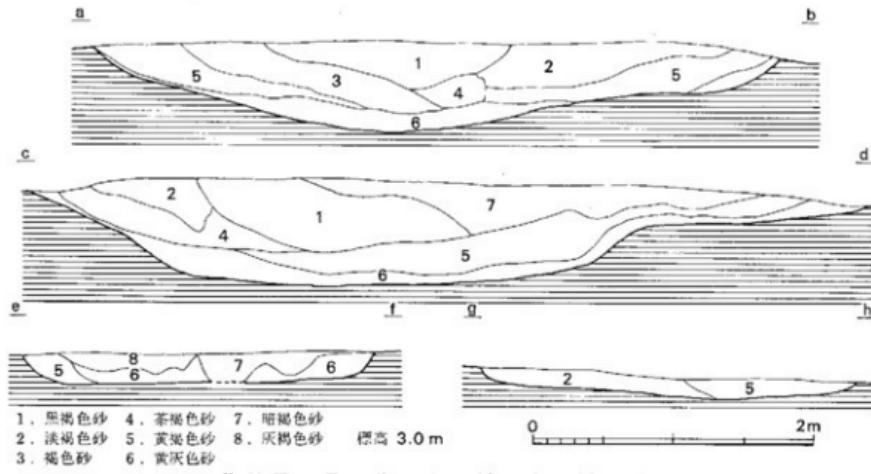
第38図 第6号方形周溝窯全体図(1/100)



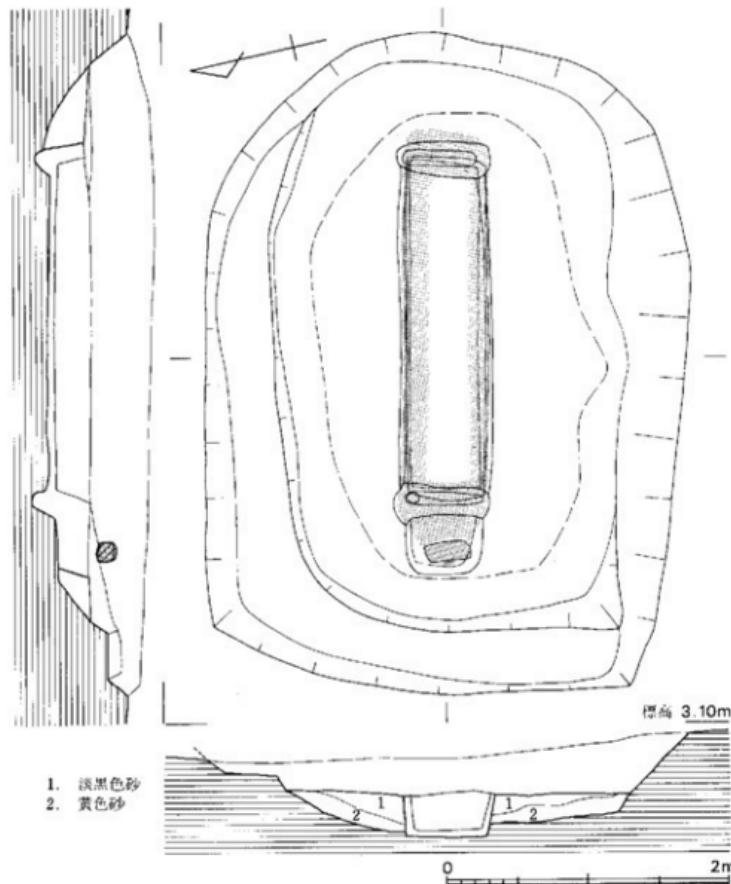
今回の調査で確認できたのは南辺周溝を除いたほぼ全域である。南辺周溝も、1978年の地下鉄工事によって、その一端を検出しており、その全容をほぼ観うことができる。本周溝は東西幅22.0m、南北幅（1978年検出分も含める）22.5mの規模をもつ。台状部は東西幅13.5mの方形区画なしし、その外に隅々で丸味をもった幅2.5~5.5m、深さ15~75cmの周溝がめぐる。陸橋部は西辺に設けられ、その幅は4.5mを計る。主体部は陸橋部と平行に、台状部のほぼ中心に位置する。

周溝をさらに細かくみると、西辺では陸橋部を挟んで南北で3.0mが残存する。外側から台状部に向って尖り気味な形態をなすが、これは先述した中世以降の段落ちに削られたことによる。北側は東石造構などによって削平されながらもその陸橋部側は幅3.0mの矩形をなす。西辺から北辺に至るコーナーは、幅2.5m、深さ15cmと狭くて浅い。北辺は中央部が幅5.5m、深さ75cmを計り、周溝中最も広く深い場所にあたるが、周溝北側は崩れによって溝幅が拡張されたものと考えられる。ここより東に向って幅・深さとも減じ、東北隅では幅2.5m、深さ20cmになる。東辺周溝は一部崩れがみられるものの幅5m前後で、やはり中央部付近が65cmと深くなる。以上をまとめれば、本来的な周溝は幅4m前後のもので、コーナーは狭くかつ浅く、西辺を除いた各辺の中央部付近に最深部をもったかなり緩い傾斜をもつものであったことが推定される。周溝埋土はおおむね3層に大別でき、最下層が掘削から間もない時期に堆積したと思われる色の薄い砂層で、その上に黄褐色~茶褐色砂層があり、最上層が褐色~黒褐色の色濃い砂である。土器が出土したのは最上層からだけである。

**埋葬主体部（第40・41図）** 台状部のほぼ中央に東西方位で設けられた組合せ木棺である。



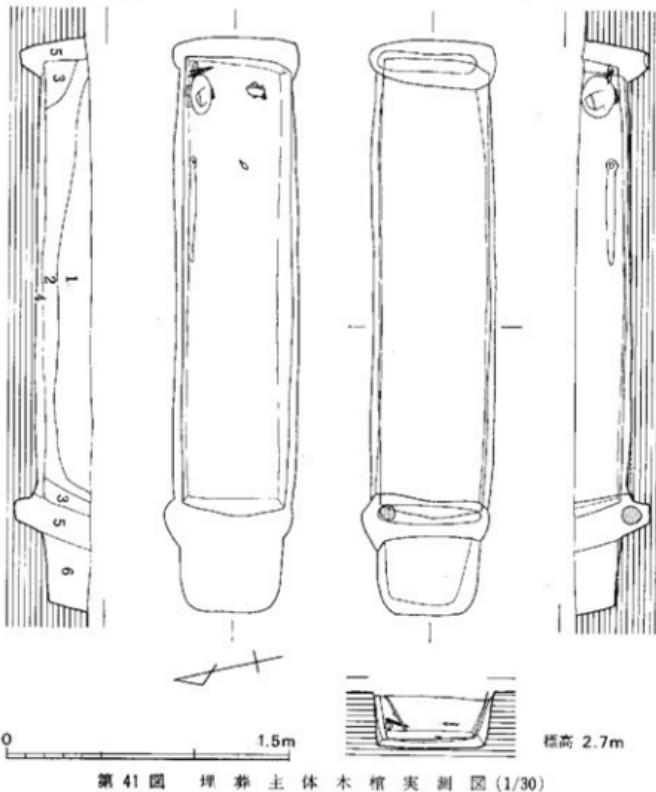
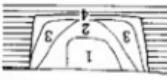
第39図 周溝土層実測図 (1/40)



第 40 図 埋 菲 体 部 実 制 図 (1/40)

この主体部上には、西側の段落ちから陸橋部を通り、東側の発掘区外に抜ける幅4mほどの砂の固まつた“道”状のものがのっており、また地山との上色の違いも認められずその検出は困難をきわめた。周溝はすでに検出していたことから、あるいは主体部は削半されているのではないかとの見方も行なった。しかし念のため中央部にスコップを入れた所、深さ30cmあたりで赤色顔料の混った砂が出土した。そこで“道”状の固い砂を撤去し、表面をかかせ精査した所、

1. 暗褐色砂
2. 朱混り砂
3. 朱混り砂(濃い)
4. 黄褐色砂
5. 黄褐色砂(朱混る)
6. 黄灰色砂(朱混る)



第41図 埋葬主体木棺実測図(1/30)

長さ4.7m、幅3.4mの東側が丸みをおび、西側が矩形の墓壙を検出することができた。この埋土はわずかに汚れた黄色砂であった。この墓壙は南側から北側に向かって20cmほど低くなっているが、これは削平によるものである。

墓壙を20~30cm掘り下げた所で淡黒色の面が現われ、その中央に長さ3.1m、幅0.63mの東西方位をとる長方形の赤色顔料部分を検出した。この赤色顔料は、中央の長さ2.3m、幅0.62m

の長方形部分には見られず、幅15~20cmの帶状を呈している。特に東側では幅30m、西側では幅55cmを計り、西端部上には長さ33cm、幅13cm、厚さ12cmの青灰色粘土が一塊わざかに浮いた状態であった。この赤色顔料には濃淡が認められ、その濃い部分は長さ2.45m、幅0.75mを計る長方形をなしていた。この部分が棺をなすと考え、ベルトを残しながら東側から掘り下げていた所、東側小口に近い北側壁より銅鏡の出土をみた。棺の横断面は「V」字状に赤色顔料がおちこんどおり、蓋が埋没した状況を示していると思われる。棺底までの深さは27cmであり、棺内からは銅鏡の他に素堀頭大刀・鎌・鉈・刀子の出土をみた。

この状態で写真撮影・実測を行ない、遺物を取り上げた後さらに周囲を掘り下げた所、両小口に深さ36~40cmの掘り方を確認した。これは小口板を挿入した痕と考えられ、棺が組合せ式木棺であると認定した。また側壁部分も5cmほど外に拡がり、あるいは木棺の厚さを表わしているのではないかと思われる。最後に墓壙底まで掘りさげた所、淡黒砂層-黄色砂と続き、墓壙上面から約50cmの所で白色砂の地山に至った。

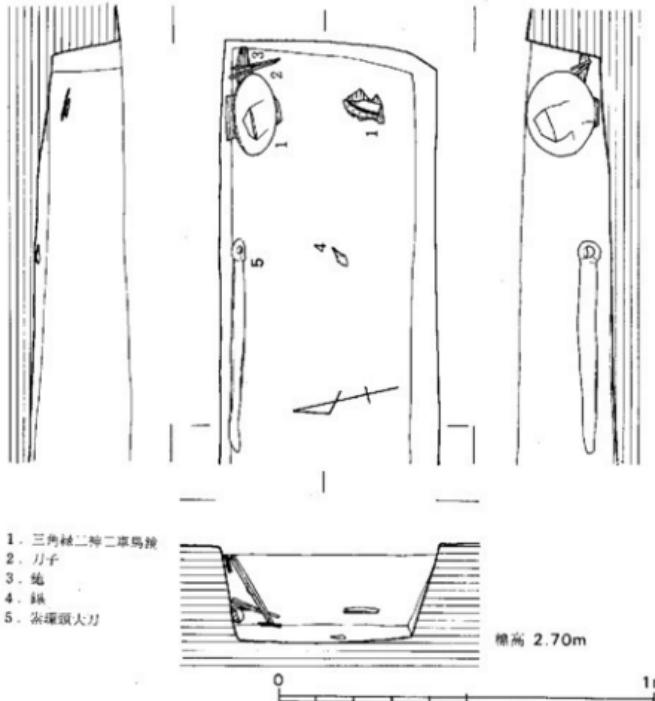
以上、埋葬主体部調査過程を順を追って述べてきたが、まとめれば次のようになる。墓壙は長さ4.7m、幅3.4m、深さ50cmを計る東側が丸味をもった長方形に近い平面をなす。深さ10cmの所で西北両側に幅30~40cmのテラス状の平坦面を設ける。棺はこの墓壙の中心に主軸方位をN-77.5°Wにとった組合せ式木棺で、墓壙が20cm(黄色砂-淡黒砂)埋められた段階で長さ3.06m、幅0.65mの長方形の掘り方を設け、その東寄りに構築されたものである。棺自体は長方形で、長さ2.45m、幅0.57m、深さ27cmの内法規模をもつ。棺材の厚さは5cmほどと推定され、また刀子・鉈・鏡片の下に棺材が残っていたことから床板も使用していたものと考えられる。棺材については鳴鳥巳三郎氏によりヒノキ様材との鑑定を得ている(付論4参照)。棺の内側には赤色顔料(朱-付論1参照)がまんべんなく塗布されていたものと想定される。

#### 副葬品(第42・43図)

棺内から三角縁二神二車馬鏡1面、素環頭大刀1口、刀子1口、鉈1個、鐵鎧1個の合計5点の副葬品を検出した。ともに棺の東側半分での出土であった。また棺外からの遺物の出土はなかった。

このうち刀子と鉈は棺東北隅で検出し、一端が北側壁にかかり、一端が棺底に向って下がり、鉈が刀子の上に重なっていた。この2本の工具の下には東西に木目の走る長さ12cm、幅4cmの板材片が残っており、棺床材かと考えられる。これとは別に、施および刀子の下に平行して走る(先に述べた板材とはほぼ直交)木材片がみられる。あるいは柄または鞘をなしていたものかもしれない。これらの木材の上には布目痕が残り、2点の工具が布で包まれていた可能性が高い(付論4参照)。

銅鏡は刀子・鉈のすぐ西に、鏡面を棺内に向けた状態で北側壁に約30°の傾斜角度をもって立てかけてあった。その内区の一部分は三角形状に割れてなくなり、それは18cm南に離れた棺底



第42図 副葬品出土状況実測図(1/15)

で鏡背を上に向けて出土した。調査時にはこの割れが、副葬時に意識的に割られ鏡本身と鏡片を別位置においていたものか、また副葬された時は完形で側壁に立てかけられたものが後の自然的諸条件のなかで割れて飛び出上時の状態になったものかの判断が困難であった。しかし久野雄一郎氏の金属学的調査により後者にはば違いないことが判明した(付論1・2参照)。鏡本身の鏡背上端部と下端部および鏡片下には東西方向に木目をもった板材片が残存しており棺材と考えられる。また鏡面および棺材には布目がみられ、少なくとも2種類の布で鏡が包まれていたと思われる。

素環頭大刀は銅鏡から20cm西の北側壁底に沿って環頭を東に向けて置かれていた。刀身には布目が残り、この大刀も布にまかれていたことが窺われる。

以上の4点の副葬品がともに本来的には北側壁に沿って配列されていたのに対し、鉄錆の位

置はやや異なる。これは東小口から約50cm西の棺底中央部よりやや南側で、鋒先を西南に向けて出土した。副葬品の配置状況からすれば遺体の頭位が東にあったことはほぼ確実と思われ、とすれば鉄鎌の出土位置はほぼ左胸の辺りに相当する。これが何かの意味をもつものかどうかは興味深い所である。

以下各々の副葬品について述べる。

三角縁二神二車馬鏡（第43図・1）　面径22.3cm、現重量1058gの銅鏡で、発掘時に3つに割れ、その1片は別場所で出土した。全体に緑青に覆われるとともに砂粒が付着している。また鏡には大小の亀裂がみられ、上になって出土した鏡面から縁にかけては赤色顔料（朱）が付着している。別場所で出土した鏡片は背を上に向けており、下になった鏡面に赤色顔料（朱）および布目が残っていた。鏡は径4.0cm、高さ1.7cmの円形で、紐孔は神像に向って貫通する。この紐孔は鋤放しと思われ、断面は不整な蒲鉾形を呈する。紐座は有節重弧文圓座である。

内区は撰文圓座をもった高さ6mmの4個の乳によって4区分され、その間に二神と二車馬を各々対置させている。神像は正面座位であり、一方の神像（東王父）の右側には獸の左半身が、またもう一方の神像（西王母）の左側には下に撰文團を置いた傘松形文様、乳を挟んだ右側の狭い部分にも獣らしき文様がある。車馬はともに4頭立てで、細部では違いがある。これらの主文の間を満文や松葉状の圓形で埋めている。この文様帶の外に鋸歯文帶があり、さらに23の小乳の間に1字づつ文字を置いた銘帶がある。鏡は23文字で構成され、鋤や砂の付着で「□二酉圖□青同上有仙人不知君宜高官保子宜圓□□」としか判読できないが、同范鏡の銘からすれば「陳氏作鏡用青同上有仙人不知君宜高官保子宜孫長壽」となることは明らかであろう。この銘帶の外に梅齒文帶があり内区が終わる。

外区は梅齒文帶から一段高くなり、鋸歯文帶、複線波文帶、さらに鋸歯文帶と続き三角縁で終わる。

鏡の厚さは内区で2.0mm、外区で4.5mm、縁で11.5mmを計る。鏡の反りは約10mmである。その金属性学的調査および鉛同位体比は付論1、付論3に詳述する所である。

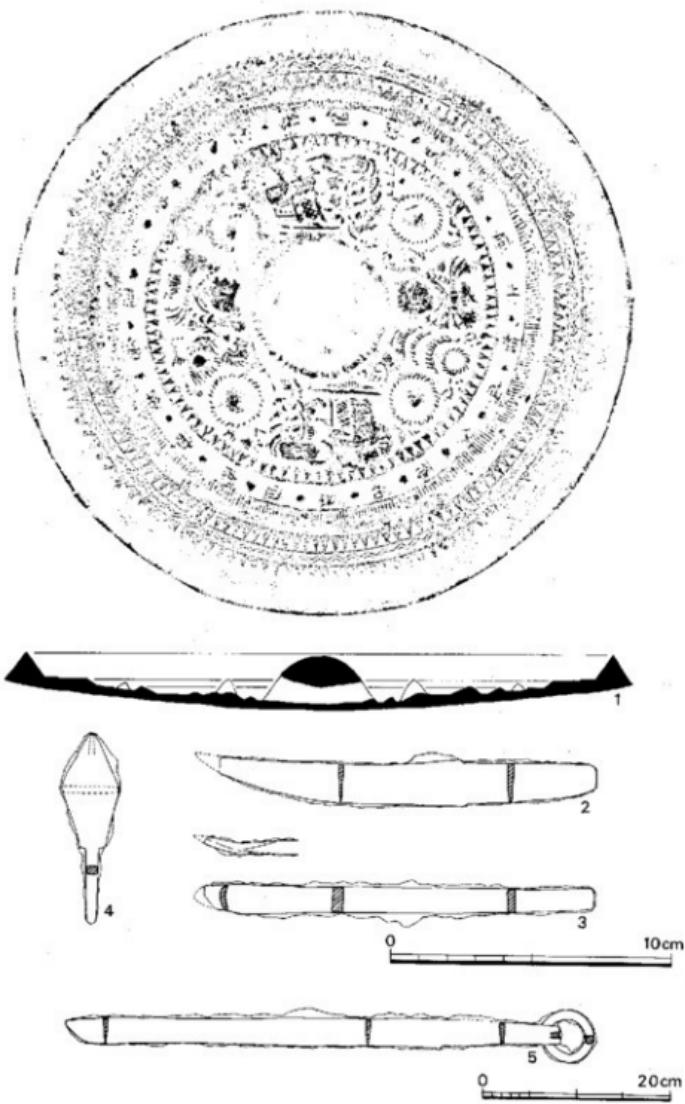
この鏡の同范鏡の出土例は現在までに、①岡山県湯迫車塚古墳（註1）、②山梨県東八代郡中道町下曾根銚子塚古墳（註2）、③伝群馬県藤岡市三本木（註3）の3面がある。

註(1) 塙木義昌『岡山市域の古墳時代遺跡』『岡山市史 古代編』1962

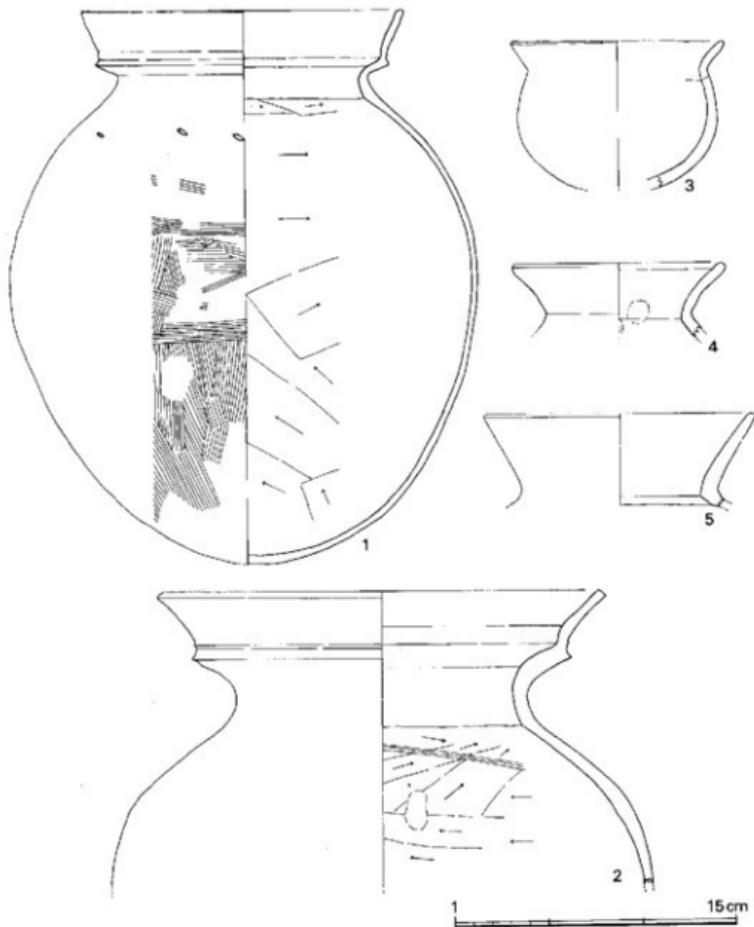
(2) 上田三平『山梨県銚子塚古墳』『史蹟調査報告書』第5編 1930

(3) 後藤守一『漢式鏡』 1926

素環頭大刀（第43図・5）　全長56.6cmの鉄製素環頭大刀である。身は直線的で長さ40.1cm、幅3.1cmを計り、小さな刃開ちを設けて茎に統く。茎は12.6cmの長さで背が厚く、断面は梯形をなす。先細りになった茎の端部に5.5×5.7cmの環頭をとりつけている。環頭の断面は径1.1cmの円形を呈する。鋒による彫らみがみられたが、残存状況は比較的良好で、基部および身背部付



第43図 墓葬品実測図(1/2, 1/6)



第44図 周溝出土土器実測図(1/3)

近には布痕が幾重にも付着している。木質の付着は見られなかった。

刀子(第43図・2) 残長13.3cmの鉄製刀子である。先端部が約1cmほど欠損している。極めて薄い作りで、刃先端はかなり反りをみせる。身は残長8.5cmで、最大幅は1.5cmを計る。株・

刀とも小さな間を設け、4.6cmの茎部が続く。茎部は背が厚い断面柳形をなす。

鉈（第43図・3） 残長13.8cmの鉄製鉈である。身は幅0.9cmを計り、断面は長方形をなす。先端部に行くにつれ厚さが減り、断面も半月状を呈する。残存端部から1.4cmの所で約15°ほど上方に折れ曲る。表面には布目が数ヶ所残っている。

鎌（第43図・4） 全長6.7cmの鉄鎌である。平面長菱形の身に長さ2.1cmの茎をつけたもので、身と茎の間は小さな段を設ける。身は断面扁長方形をなし稜をもたず、また茎は断面方形をなす。木質などの残存はなかった。

周溝出土土器（第44図） 周溝から出土した土器はその規模の割には極めて少なく、実測したもののは図示した5点のみである。このうち完形に近いものは1・3のみで、他は小破片にすぎない。また、1977年の調査の際南辺周溝から1点完形の小型二重口縁壺が出土している（図版43参照）。これらの土器のいずれも満底より浮いた褐色～黒褐色砂層からの出土である。器形はいずれも壺形土器である。

1・2は二重口縁壺である。1は口径17.2cm、器高29.5cmを計る。中位に最大径をもった胴部から、頸部外面が比較的シャープな「く」の字形に外反して稜を作り、その上にゆるやかに外反する口縁上半部をもうけたものである。口縁端部は内面に傾斜をもたせて丸く仕上げる。底部は丸底である。胴部外面は刷毛目調整後それをナデで消し、内面は箠削りを行なう。肩部から口縁にかけては横ナデで仕上げる。全体的に薄手の作りで、肩部には不定間隔で米粒状の刺突文が一周施されている。2は1に比べ厚手の作りで、頸部から丸味をもって口縁下半部が半転して稜をなし、その上に大きく外に開く口縁上半部をとりつけたものである。復元口径は24.0cmで、口縁端部は外傾する平坦面を作る。残存部分では外面および内面口頭部が横ナデ、内面胴部が箠削りを行なっている。1にともに砂粒を混えた胎土で、焼成良好（特に2は堅緻）、黄褐色を呈する。ともに西辺周溝からの出土で、1は陰橋部の北側、2は南側で検出した。

3はほとんど鄙みのない胴部から、口縁部がよく外反する壺形土器である。口縁端部あたりはわずかに立ち上り、丸くおさめる。外面は胴部で箠研磨、口縁部が横ナデを行なう。内面は磨滅して調整は不明瞭であるが、ナデの痕がわずかに残っている。全体の約 $\frac{1}{3}$ の破片で復元口径11.2cm、胎土には微砂粒・金雲母を混え、焼成堅緻、外面淡黄褐色、内面淡赤褐色を呈する。北辺周溝からの出土である。

4・5は壺形土器の口縁部片で、胴部から直線的に口縁部が外に開くものである。復元口径は4が11.1cm、5が14.2cmを計る。口縁端部はともに丸くおさめるが、4は内面に横ナデによる小さな段をもつ。4・5とも残存部分は横ナデで仕上げられているが、わずかにみられる胴部内面には箠削りが認められる。砂粒を混えた胎土で、焼成堅緻、内外面とも淡い赤褐色を呈する。北辺周溝の上面近くからの出土である。

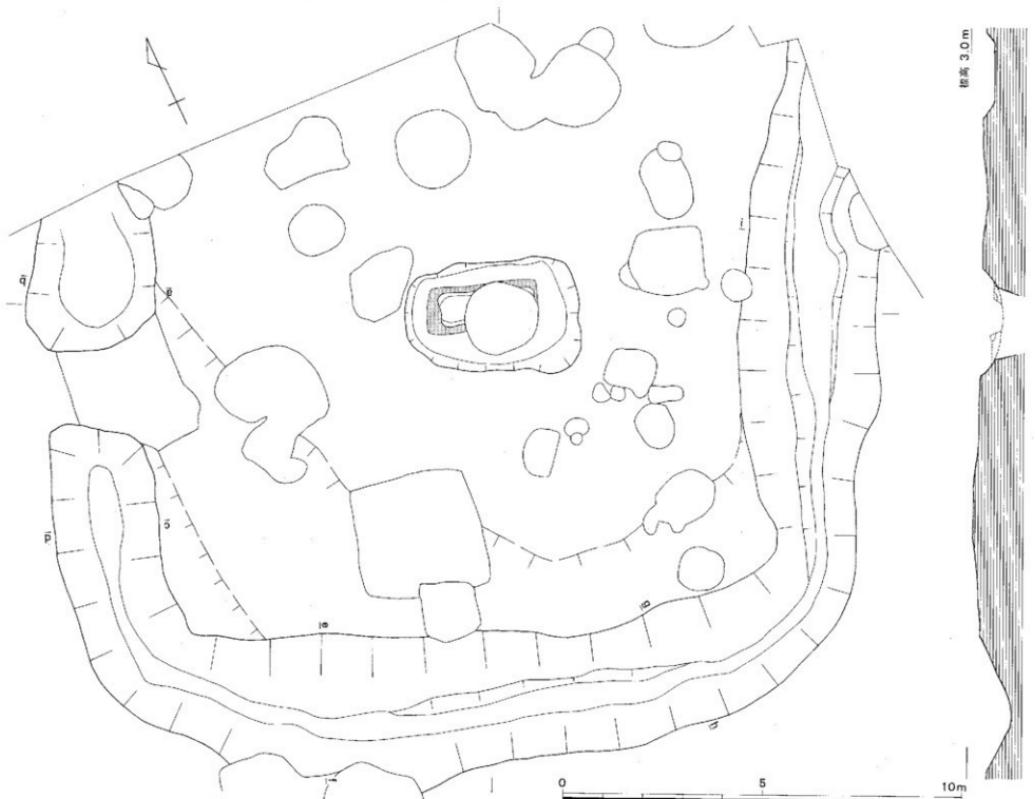
### Vii) 第7号方形周溝墓（第45～56図・図版25～30・46～48）

発掘区の東北隅で検出した。西は第5号方形周溝墓とは接し、南は第6・8号方形周溝墓から4～6m離れ、東は第9号方形周溝墓と約2mの距離をもつ。本周溝墓は、北辺が発掘区外にかかり調査を行なわなかったが、残りの三辺はほぼ全体を検出することができた。この周溝墓も他の周溝墓と同様、周溝および台状部に遺溝が重複している。全体的に上面が削平されているが、西南部は特にそれが著しい。台状部内には現代の擾乱孔とともに、第26・28・29・30号土壙および第6号住居跡が重複している。このうち本周溝墓と切り合うのは第30号土壙だけで（本周溝墓より新しい），それはさらに第6号住居跡を切っている。残りの土壙と本周溝墓の先後関係は明らかにしがたいが、形態および覆土の土色からすれば埋葬主体部とはまず考えられず、おそらくは本周溝墓より新しい時期の所産と想定される。陸橋部には第7号住居跡が重なっており、これは明らかに住居跡を破壊して本周溝墓が作られたことがその切り合い状況からわかった。

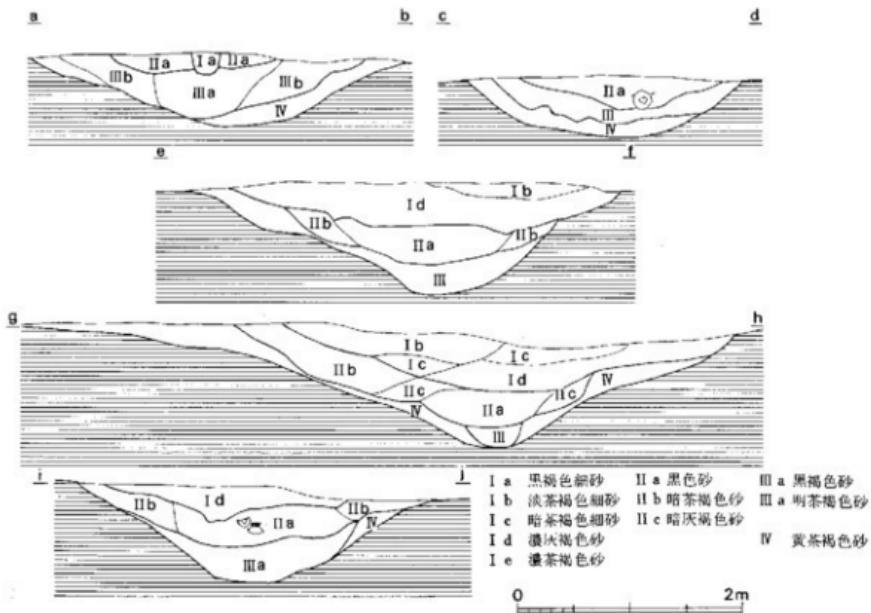
検出した第7号方形周溝墓は、東西幅が20.8mの大規模なものである。周溝は東辺および南辺で最大幅3.3mを計る。各々のコーナーおよび西辺の陸橋南側は幅狭くなり、2.2～2.3mである。この周溝に囲まれた台状部は東西幅14.2m、南北幅14.7m+αと、やや南北に長い方形をなすものと推定される。この台状部の西南～南側は削平によって緩い傾斜をなすが、削平はすべて現代時のものではなく、南側部分は奈良時代頃の削平一段落ちであると考えられる。陸橋部は西辺の中央部に設けられ、その幅は1.8～2.2mである。埋葬主体部は台状部の中央よりやや東寄りの位置で、陸橋部と平行に設けられていた。

周溝をさらに細かくみていくと、東辺ではほぼ直線的に12.5mが残存し、その中央部が幅広くなっている。断面は溝底近くで段がつくもののほぼ「V」字形に近く、深さは約70～110cmを計る。溝底は東南隅に向って低くなる。南辺周溝は長さ約15mで、コーナー部分が狭いのを除けば、ほぼ3.0～3.3mの溝幅をもつ。断面は「V」字形に近く、北側台状部が削平されているにもかかわらず約65～100cmの深さをもつ。溝底は両コーナーから中央部に向って深くなる。西辺周溝の陸橋南側は、南辺周溝からほぼ直角に折れて5.5m続く。溝幅は2.5m前後で、深さは15～65cmと陸橋部に近づくにつれ浅くなる。断面は緩い「U」字形状を呈する。陸橋部を挟んだ北側周溝は長さ4mしか調査できなかった。幅3.0～3.3mで、深さは60cm前後、断面が緩い「U」字形状をなす。

周溝の覆土は大きく4層に区別できた（第46図）。I層は主に南・東辺周溝にみられるもので、主として茶褐色系統の砂層をなし、須恵器・土師器などの出土をみた。特に南辺周溝ではこの層から奈良時代の須恵器・土師器などの一括資料が出土し、溝の落ち窪んだ所を利用した土器溜りと考えられる。II層は黒色砂を中心とした層で、30～40cmの厚さをもつ。黒色砂は溝中央部にあり、その周辺は暗茶褐色砂あるいは暗灰褐色砂となる。本周溝墓から出土した供獻土



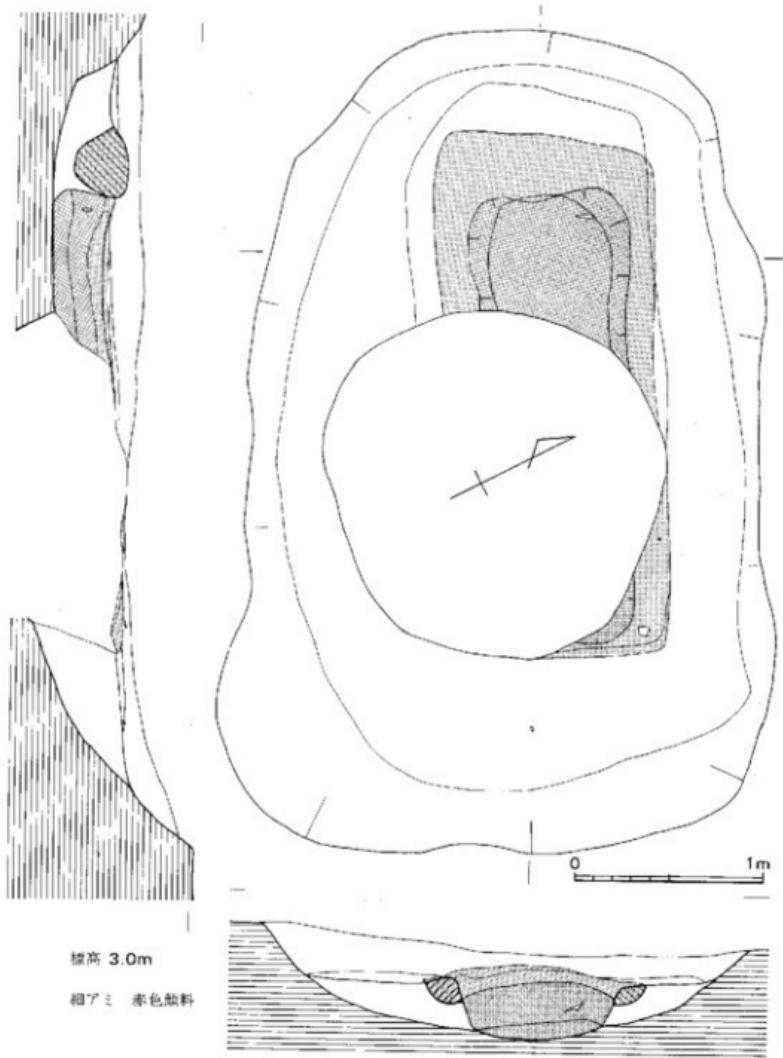
第45図 第7号方形周溝高全休図 (1/100)



第46図 周溝土層実測図(1/50)

器はすべてこの層で検出したものであり、その大部分が黒色砂中に包含されていた。III層は厚さが20~40cmの黒褐色を主とした層でII層の下に入るが、場所によってはII層を囲むような状態をみせる。また逆に南辺周溝のようにII層の下に小さくおさまる場所もある。土師器の細片が出土したが実測には至らなかった。IV層は周溝を掘削して間もない時期に堆積した層と考えられ、土色も黄褐色と薄い。特に陸橋部を挟んだ西辺周溝でみられた。この層からの出土遺物はない。

以上のことまとめれば次のようになる。第7号方形周溝墓は東西幅20.8m、南北幅18.0m+αのやや南北に長い形態をとり、幅1m前後の陸橋を西辺中央部に設ける。周溝は東・南辺が幅3m前後、深さ65~110cmの断面「V」字形を呈する。各コーナーは幅狭く2.2~2.3mである。西辺周溝は陸橋部に向って溝底が浅くなり、また溝幅も東・南辺に比べ狭い。周溝に回繞された台状部は東西14.2m、南北14.7m+αの幅をもつ。周溝で出土した供献と考えられる遺物はすべて第II層からの出上で、溝底からは20~30cm浮いている。埋葬主体部は台状部の中央やや東寄りに設けられたもの1基だけである。



第47図 埋葬主体部実測図 (1/30)

**埋葬主体部**（第47図） 台状部の中央よりやや東に寄った位置で検出した、主軸方位をN-64.5°-Wにとった木棺墓である。中央部は径1.8mの現代の塵芥穴によって破壊されている。墓壇は上面で長さ4.40m、幅3.70mの不整な隅丸

長方形を呈し、緩い傾斜で長さ3.05m、幅1.40mの長方形の底に至る。深さは約60cmを計る。この墓壇底に長さ2.45m、幅0.85m、高さ40cm以上の木棺を埋置したものと考えられる。この棺の位置は墓壇のやや西寄りに当る。棺を置いた後、その周囲を砂で充填し、棺の上面付近で幅8~45cm、厚さ5~30cmの青灰色粘土帯を棺の周囲にめぐらしている。この粘土帯は棺の固定、もしくは蓋の目張りに用いられたものと考えられ、西側小口では幅が45cm、厚さが30cmを計るのに対し、東側小口では幅8cm、厚さも5cmと相違がある。側壁は幅・厚さとも15cmを一定している。棺内には赤色顔料がまんべんなく撒かれてあり、西北隅で床面より5cmほど浮いた状態で刀子を検出した。棺内副葬品と考えられる。この他に粘土帯上面および墓壇東側の粘土帯上面と同じレベルから鉄片を各々1点検出したが、細片のため器種はわからない。また墓壇埋土から土師器の細片が出上っているが、本墓に伴うものとは思われない。副葬品および粘土帯のあり方からすれば、遺体の頭位は西である可能性が強い。

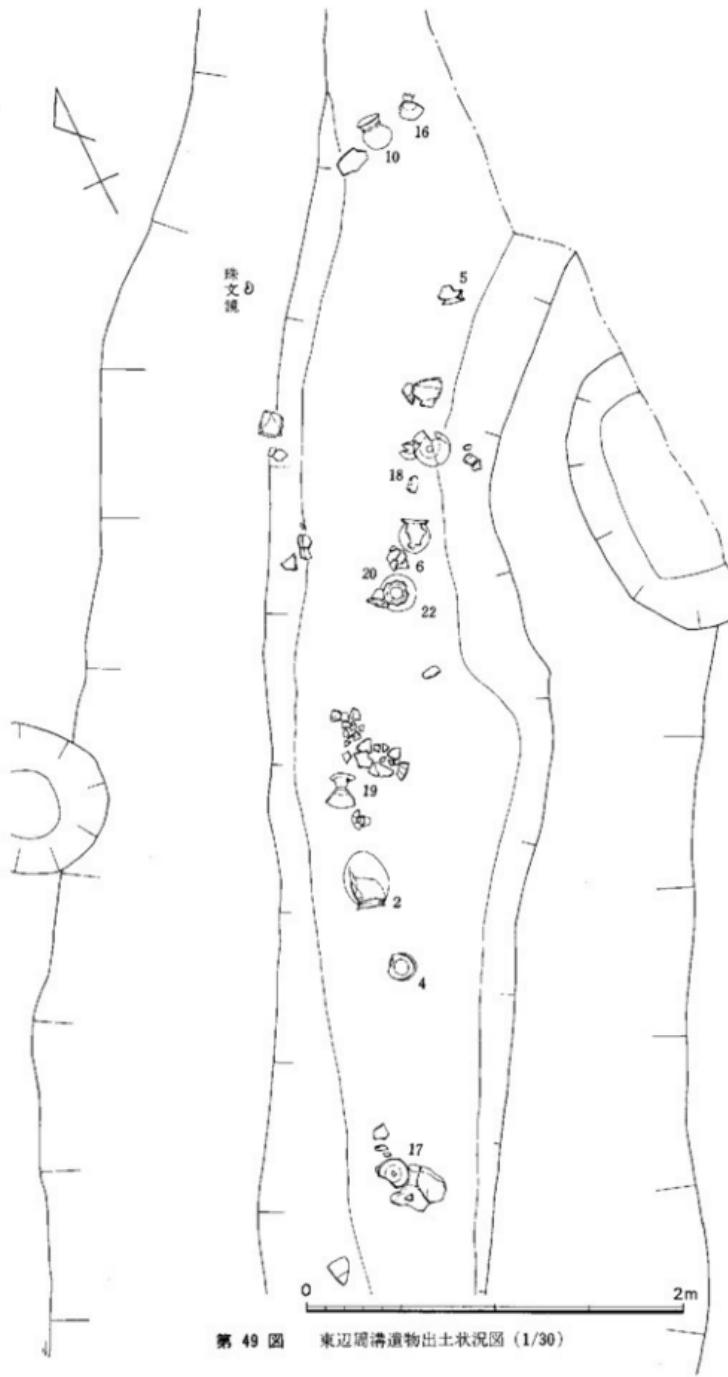
**副葬品**（第48図） 確実に副葬品と考えられるのはこの鉄製刀子1口のみである。全長11.2cm、身幅1.5cm前後を計る。間は棟と刃で多少ずれるものの、ともに小さい。茎は2.8cmで、背部が厚い断面梯形をなす。布目などの付着はみられない。

**周溝出土遺物**（第49~54図） 周溝からは銅鏡1面と多数の土師器、須恵器などが出土したが、ここでは第II層の遺物を主にして述べる。第I層で検出した土器羣についてもそれは他の遺溝（92頁）で述べる。第II層から出土したのは珠文鏡1面と35個体分近くの古土師器である（うち24個体分を実測）。

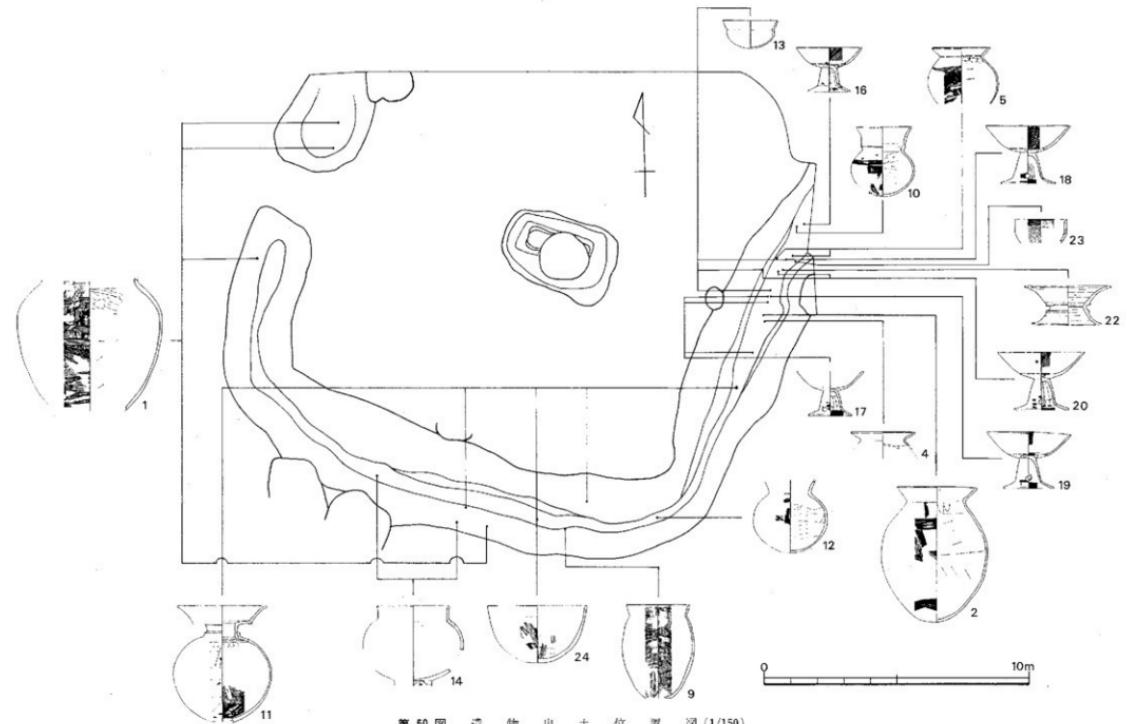
この第II層の遺物群は、周溝によって出土状況が異なる。出土土器が最も集中したのは東辺周溝で、壺・甕・高杯などを完形に近い状態で検出した。破片についても、その周辺のものを集めることによって完形近くに復元できた。これらの土器は横置で検出したものがほとんどであるが、一部倒置や正置のものもみられる。そして溝底に沿って約7m南北に列をなす。珠文鏡もこの周溝の北側近くからの出上で、鏡面を上にして、突き刺したかのように第II層中に埋まっていた。また土器群の列からは約50~60cm台状部寄りである。いずれの遺物も溝底から30cm近く浮いた状態であるのは前述した通りである。南辺周溝の第II層からの出土した土師器は極めて少なく、実測したものは3個体しかない。それも2個体は破片で、復元で完形近くになった二重口縁壺も東辺周溝も含め4地点からバラバラに出土したものであった。西辺の陸橋部南側周溝では数片の土師器細片とともに表の完形品が1個体横置で出土した。陸橋部北側周溝



第48図 副葬刀子実測図(1/2)



第 49 図 東辺堀溝遺物出土状況図 (1/30)



第50図 認物出土位圖図 (1/150)

では中型甕の胴が半分出土した。この甕の内面には赤色顔料が厚く付着しており、周溝検出時には甕の上面および周囲が赤く染まっていた。またこの甕の破片は陸橋部南側周溝および南辺周溝でも出土している。

第III層では土師器が出土したが細片のためその形態等については明らかにしがたい。また第IV層からの出土遺物はなかった。

以下、第II層出土の遺物について詳述する。

珠文鏡（第51図） 東辺周溝から鏡面を上にしてほぼ直立気味に出土したものである。面径7.04cmであるが、鋏および内区からの縁にかけて約3%を欠損している。鏡座は重圓文をなし、内区は珠文帶一二重円圈一繩齒文帶と続く。珠文は内外2列をなすが、珠文の大きさおよびその間隔にはばらつきがみられる。縁は平縁で幅1.15cmを計る。鋏がほとんどみられず、文様もいたって鮮明で、鏡面は鈍い鉛色の光沢をおびる。鏡面の反りは約2mm、珠文高は1mm前後で、厚さは鋏座付近で1mm弱、外に向ってやや厚みを増し、縁では2.5mmを計る。管見の限りでは同范鏡は認められないが、これと鏡背文様の構成がほとんど同じ珠文鏡が、福岡県筑紫郡太宰府町成屋形遺跡から1面（径7.2cm・九州大学文学部考古学研究室蔵）出土している。

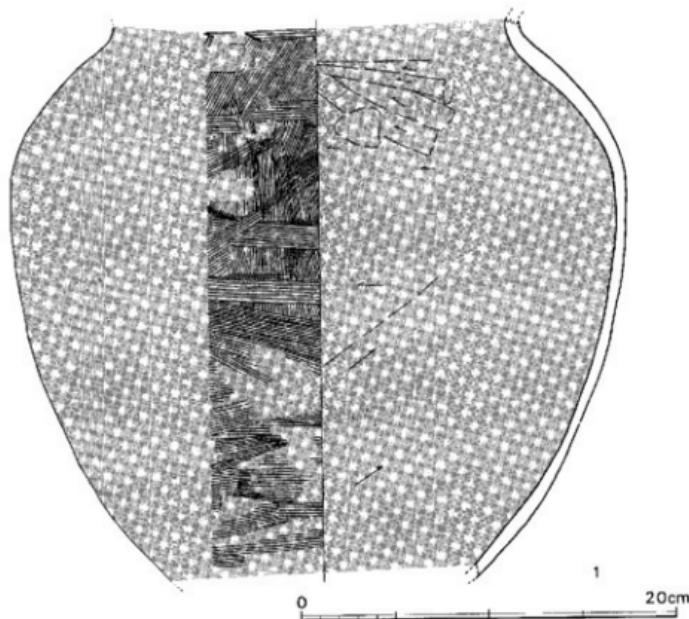
上器（第52～56図） 第II層から出土した土器は40個分近くあるが、実測したのは1～24の24個体のみである。他は細片や胴部片で実測を行なえなかった。第56図の25～28は周溝の第I層から出土したものである。これは後でまとめて述べる。

第II層から出土した土器はその器形から甕・壺・高杯・器台・碗の5種類に大別でき、さらに各々の器形の中での細分が可能である。

變形土器（1～9） 1～6は外来系の甕である。1は比較的大型のもので、西辺陸橋北側周溝から胴部の半分だけが出土した。胴部の上位に最大径をもち、あまり丸味をもたないまま底部へと続く器形をなす。残存高29.5cm、胴部最大径32.9cmを計る。外面は刷毛目調整、内面は荒削りを行なう。外面肩部上には一番最後に施された1cm幅7本単位の刷毛目が一周する。胎土には砂粒を混え焼成良好、外面黄褐色、内面赤褐色を呈する。この器表には赤色顔料がみら

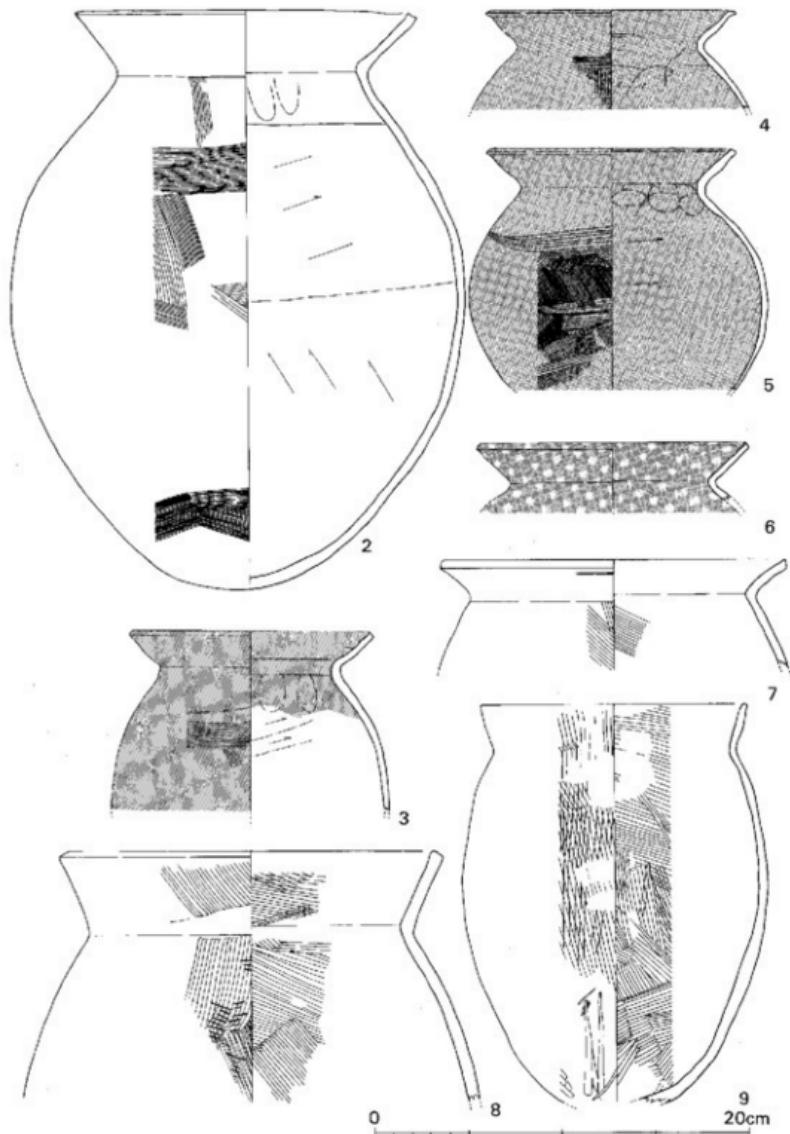


第51図 周溝出土珠文鏡実測図(1/1)

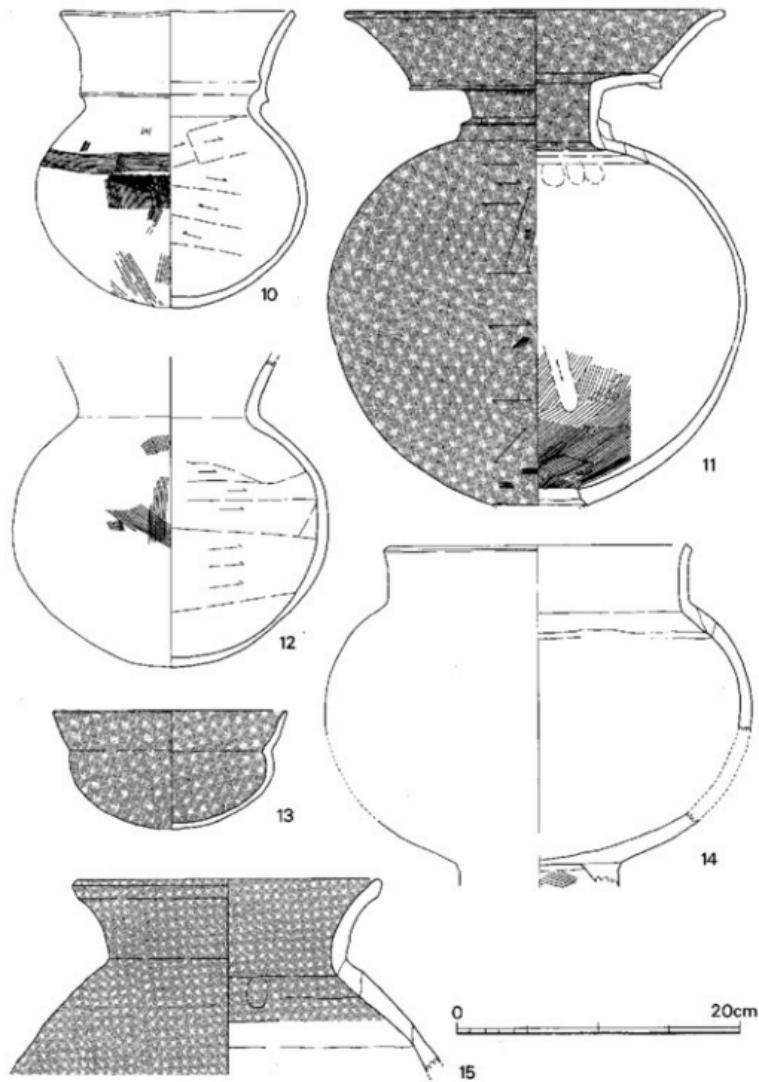


第 52 図 周 溝 出 土 土 器 実 潟 図 1 (1/3)

れ、特に内面には厚く付着している。これは器表に塗布されたというよりも、顔料そのものを器内に入れていたのではないかと考えられる。2は口径18.2cm、器高30.8cmを計る。最大径を中位にもったやや長い胴部から、口縁部が直線的に大きく外方に開く。口縁端部は内側でつまみあげられ、中央は沈線状にくぼむ。底部は丸底である。外面は細かい刷毛目調整で、張りのない肩部上には横刷毛目が幅2.8cmで一周する。細砂を混えた胎土で、焼成はやや脆弱、黄褐色を呈する。胴部最大径以下には煤の付着がみられる。東辺周溝から出土。3～6は1・2に比べ小型なもので、胴部も球形に近くなる。口径はおよそ13～14cmを計り、胴部から丸味をもって口縁部が外方に直線的(5・6)あるいはわずかに内湾気味(3・4)に開く。口縁端部は外傾し内面に段を有するもの(3・4・6)と、外方に引き出されたれ下ったようになるもの(4)がある。胴部は5のように大きく張り球形に近いものと、3のように胴部から張りをあまりみせないまま底部へ続くものがある。胴部外面は細い刷毛目調整、内面は荒削りを行う。残りの部分はほとんど横ナデ仕上げであるが、頭部内面には指押え痕が残る。胎土には比較



第 53 図 局 溝 出 土 壺 実 測 図 II (1/3)



第54図 周溝出土土器実測図 III (1/3)

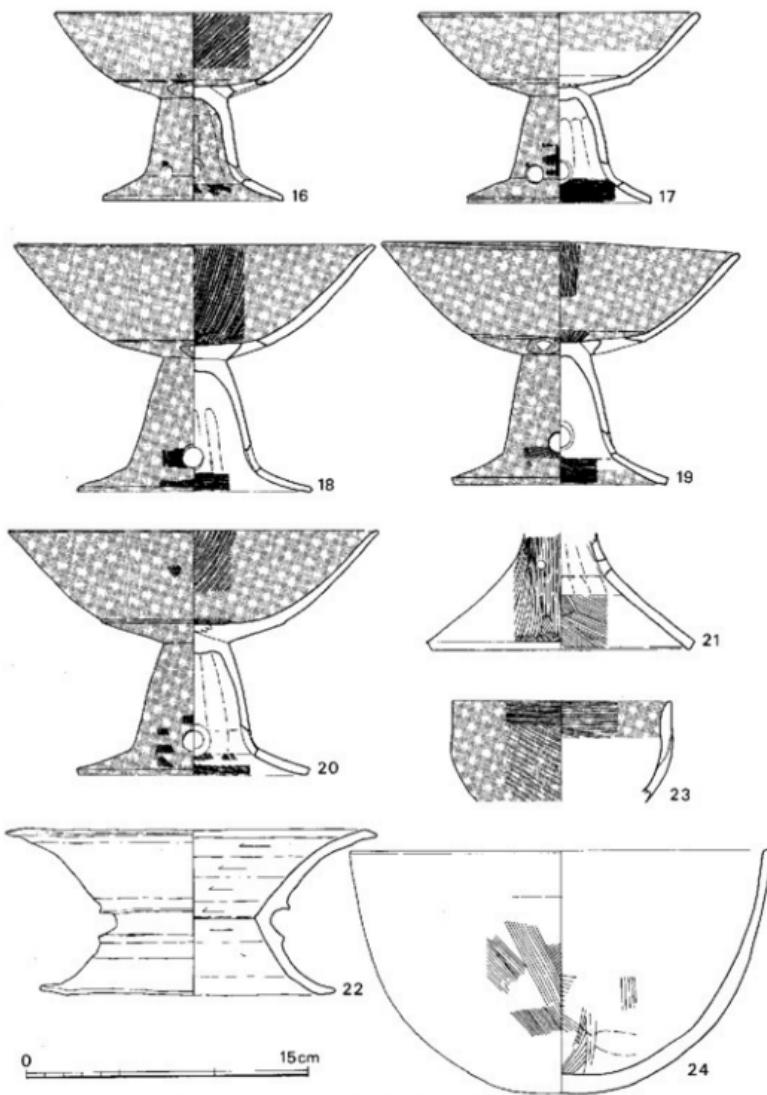
的多くの石英粒と少量の金雲母を混え、焼成は良好であるが、胴部を中心とした器壁の薄い部分はかなり脆弱になっている。色調は黄褐色（3～5）、暗灰褐色（6）を呈する。いずれの裏も内外面に赤色顔料を塗布している。3が西辺陸橋南側周溝から出土した以外は、すべて東辺周溝からの出土である。また4は第II層上面より検出した。

7～9は在地系の甕である。8は口縁が外方に大きく開くもので、復元口径19.4cmを計る。7・9は長胴から口縁部が外開き気味に立ち上がるもので、7は口縁端部が外傾し復元口径18.4cm、9は口径13.8cm、残高21.3cmを計る。8の口縁部で横ナデ調整を行なう以外はいずれも内外面とも刷毛目調整を主とする。7の胴部外面には叩きが残る。また9の底部外面は縦の窓ナデが行なわれている。ともに石英粒・金雲母を混えた胎土で、焼成良好、赤褐色（8・9）、淡黄褐色（7）を呈する。

壺形土器（10～15） 壺形土器はバリエーションに富み、二重口縁壺、單口縁壺、小型丸底壺、台付壺に分けられる。10・11は二重口縁壺であるが、その形態は著しく異なる。10はやや扁球状の胴部から頭部が短く反転して外面に稜をなし、その上に外反する口縁上半部を設けたものである。口縁部は丸くおさめる。全体的にみれば口縁下位に窓をもった直口壺といえる。口縁部は横ナデ、胴部は外面が細い刷毛目をナデで消し、内面は窓削りを行なう。石英・金雲母・赤色粒を混えた胎土で焼成やや軟、暗黄褐色を呈する。口径12.3cm、器高15.9cmの完形品で東辺周溝から出土した。11はいわゆる茶臼山式土器と呼ばれる類の壺で、大きく張った球形の胴部から頭部が直立し、そこから外に向って水平に口縁下半部が引き出され、さらにその上に大きく外反する口縁上半部が設けられている。口縁端部は丸くおさめ、上半部と下半部の接合には断面三角形状の粘土を貼り付ける。また頭部と胴部の境にも粘土帯をめぐらせている。口径20.4cm、器高26.4cm、胴部最大径26.4cmを計り、底部には径5cmほどの穿孔を行なっている。器面調整は胴部外面が刷毛目の後全面にわたって窓研磨、胴部内面下半が斜刷毛目、上位がナデ、頭部から口縁部は横ナデである。石英粒、金雲母、赤色粒を混えた胎土で焼成良好、黄褐色を呈する。外面および頭部には赤色顔料を塗る。

12・15は球形の胴部から口縁部が外反する壺である。12は残高14.4cm、胴部最大径16.8cmを計り、胴部外面は刷毛目調整、内面は窓削りを主として行なう。口縁部は横ナデで仕上げる。胎土には砂粒を混え焼成良好、内面淡褐色、外面赤褐色を呈する。15は復元口径16.0cmで、厚い器壁をなし、胴部内面には輪積みの痕が残る。内外面とも横ナデ調整で、頭部内面には指押え痕がみられる。砂粒を混えた胎土で焼成堅緻、外面灰黒色、内面淡黄褐色を呈する。内外面とも赤色顔料が認められるが、破片の断面上にもそれはみられ、本来に塗布されていたか問題が残る。

13は口径12.3cm、器高6.3cmの小型丸底壺である。扁球状の胴部から口縁部が、内面で稜をなしやや内湾気味に外に開くものである。器表は窓研磨を行なうが、口縁部はその上に弱い横



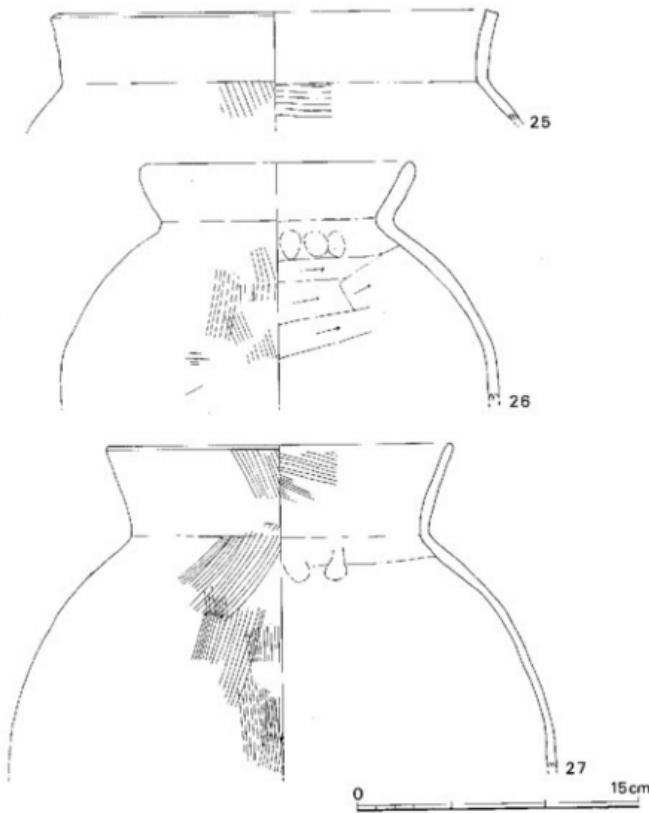
第55図 周溝出土土器実測図IV(1/3)

ナデを施す。砂粒を混えた良質の胎土を用い、焼成良好、内外面とも赤色顔料を塗布する（地は赤褐色）。

14は台付壺である。扁球の胴部から口縁部が直立し、壺部付近で小さく外反する直口壺に台がついたものであるが、台部はほとんど残存していない。外面胴部から台部にかけては横の範研磨、口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面はナデで調整を行なう。台部内面には刷毛目調整が残る。石英粒を多く混えた胎土で焼成良好、赤褐色を呈する。壺部は復元口径15.8cm、高さ17.1cmを計る。

高杯（16～21） 高杯は脚部の形態からみて、中膨みの筒部から屈曲して裾部が広がるもの（16～20）と筒部から屈曲することなくラッパ状に裾部が広がるもの（21）に大別される。前者はすべて赤色顔料を塗布した高杯でほとんど完形品といってよく、その法量から大小に細別することができる。16・17は法量の小さいもので、口径14.8～15.0cm、器高10.1～10.2cm、脚底径9.6～9.8cmとはほぼ同一の規格をもつ。杯部は底部で接合時の小さな段をなし、やや内溝気味に外方に開く。端部は丸くおさめる。脚の筒部と裾部の屈曲境近くには不对称的な位置に径1cm前後の円形の孔を焼成後設ける。外面は範研磨の後軽い横ナデ調整を行うが、部分的に細い刷毛目が残っている。杯部内面には16が暗文風の斜範研磨、17は横範研磨の後横ナデ調整を行なう。脚部内面は裾部が細い刷毛目調整、筒部が指押えナデである。杯部と脚部は別々に作られ、杯部に脚部を挿入して一体化している。16の杯底部には内側からの穿孔が焼成後設けられる。外面および杯部内面、脚裾部内面には赤色顔料が塗られるが、穿孔部の断面にもそれが付着していることから焼成後の最終段階でそれがなされたことが知られる。胎土はわずかに細かい砂粒を混えただけの精良なもので、焼成良好、赤色顔料の塗布されていない所は黄褐色～暗黄褐色を呈する。

18～20は16・17に対して法量が大きいもので、口径19.1～19.8cm、器高13.0～13.2cm、脚底径11.4～12.5cmを計る。杯部は下部に接合時の小さな段を設け、外方に大きく開く。脚部は16・17に比べ杯部との接合部分に向っての繰りが強い。筒部と裾部の屈曲部分に設けられる2つの円孔はほぼ対称な位置にあり、径は1.2～1.5cmを計る。成形・調整についてはほとんど16・17と異なる所がない。外面は横の範研磨を行うが、部分的にその上に横ナデを行い、また新めの細い刷毛目も脚部を中心に残る。杯部内面はすべて暗文風の斜範研磨で仕上げるが、19は磨減して一部しか残存しない。脚裾部内面は細い刷毛目調整、筒部は指押えナデである。杯部と脚部は別々に作られ、脚部を杯底部に差し込んで接合する。18・19については杯底部に焼成後内面から穿孔を行なっている。いずれも少量の砂粒を混えただけの精良な胎土を用い、焼成も極めて良好である。焼成後、脚部の円孔および杯底部穿孔を設けた後に、脚部内面部分を除いた全面に赤色顔料を塗る。脚部内面および地は黄褐色を呈する。以上述べた16～20は、精美を作りと形態をもった高杯の一群で、赤色顔料を塗り、また杯部に穿孔がみられる所から、特殊な祭



第 56 図 周 溝 出 上 上 器 実 測 図 V (1/3)

紀土器であったと考えられる。

21はラッパ状に開く高杯脚部片である。復元底径13.8cmで、焼成前の円孔を複数設けるものと考えられる。外面は刷毛目調整を行った後旋磨を行う。内部下位は斜刷毛目、上位は指押えナデで器面を調整する。砂粒を比較的多く混えた胎土で、焼成堅緻、黄褐色を呈する。

器台(22) 口径19.8cm、底径15.7cm、器高8.9cmのいわゆる鼓形器台である。受部は大きく外反し、端部は引き出され外に垂れ下り気味になる。台部は受部に比べて開きが小さく、底面近くでわずかに屈曲し端部は丸くおさめる。台部と受部の間は、外面では丸みをもって短く

反転する形態をなすが、内面は受・台部両方からの窓削りが鋭い稜を作る。外面および受部・台部の口縁内面は横ナデ調整を行なう。残りの内面は前述した窓削りを行なうが、受部が左向き、台部が右向きと削りの方向が異なる。石英粒・金雲母を混えた胎土で、焼成堅緻、暗赤褐色を呈する。

楕形土器（23）小型の楕形土器の破片で、復元口径11.7cmを計る。丸底と想定される底部から口縁部がほぼ直立し、端部は丸くおさめる。外面口縁部近くは横の窓研磨、下位は斜窓研磨を行なう。内面は口縁下が横の窓研磨、下位は横または斜刷毛目調整で仕上げる。外面および内面口縁下には赤色顔料を塗る。石英粒を混えた胎土で、焼成堅緻、赤色顔料塗布部分以外は明黄褐色を呈する。

鉢形土器（24） 口径22.6cm、器高13.0cmを計る半球状の鉢形土器である。口縁端部は平坦面をなす。外面底部は弱いナデ調整を行なうが、そこから口縁下近くまで強い縦の窓ナデを行なう。このため胎土中の砂粒が動き、器表は小さな穴が多くみられる。口縁直下は横ナデで調整する。内面は粗い刷毛目調整を縱横に行ない、指ナデでそれを消している。胎土には僅2~3mmの石英粒を多く混え、焼成堅緻、外面黄褐色（部分的に赤褐色）、内面赤褐色を呈する。

以上第II層出土の土器について述べてきたが、細片または接合が不可能で実測できなかったものに、在地系の楕形土器7~8個体がある。いずれも「く」の字状口縁をなすものと考えられる。そのうちの1個体は大型の裏で、外に小さく開く口縁部直下に横状工具によって「×」字状に刻目を入れた突帯を有するものである。また、円筒状の上鍤も1点出土している。

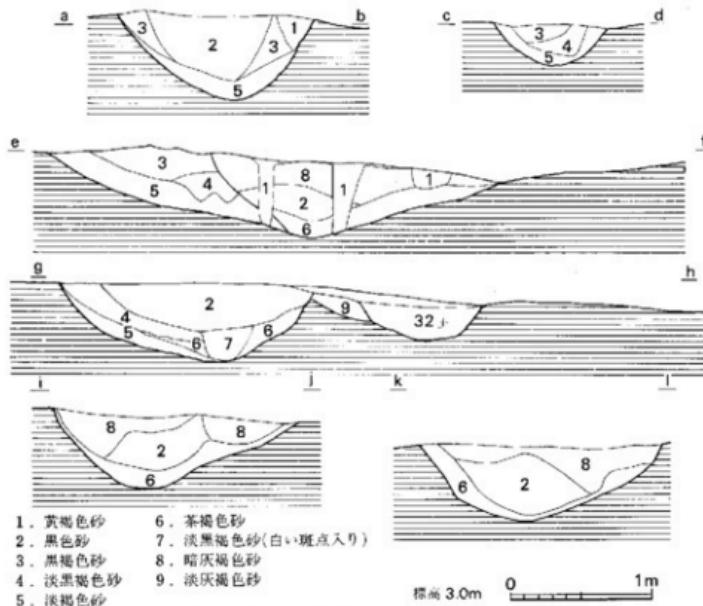
第56図の25~27はともに第I層から出土した土器である。25は楕形土器の口縁部破片で、復元口径24.0cmを計る。胴部から小さく口縁部が外反し、端部は外傾する平坦面をなす。胴部外面は間隔の大きい刷毛目調整、口縁部は横ナデで仕上げる。砂粒を混えた胎土で、焼成堅緻、黄褐色を呈する。26は球形の胴部から口縁部が外方に短く開く壺形土器である。口径14.6cmで、口縁端部は丸くおさめる。接合は出来なかったが底部片が出土しており、丸底を呈する。外面は頸部が横ナデで仕上げてある以外はすべて粗い縦または斜の刷毛目調整を行う。内面は口縁部が横ナデ。頸部は指押えを全周にわたって行なっている。胴部は窓削りである。胎土には砂粒を混え、焼成やや軟、黄褐色を呈する。厚手の作りの土器で、器形も整端さまに欠ける。27は球形に膨らんだ胴部から口縁部が直線的に外方に開く壺形土器である。復元口径18.5cm。外面は粗い斜めの刷毛目、口縁部内面は縦・斜刷毛目の後軽い横ナデを行う。胴部内面は全体的に磨減が激しいが、縦刷毛目の後ナデ調整を行なっている。頸部内面には指圧痕が残る。胎土には砂粒を多く混え、焼成やや軟、外面黄褐色、内面淡赤褐色を呈する。

Viii) 第8号方形周溝墓 (第57~60図、図版32・33・48)

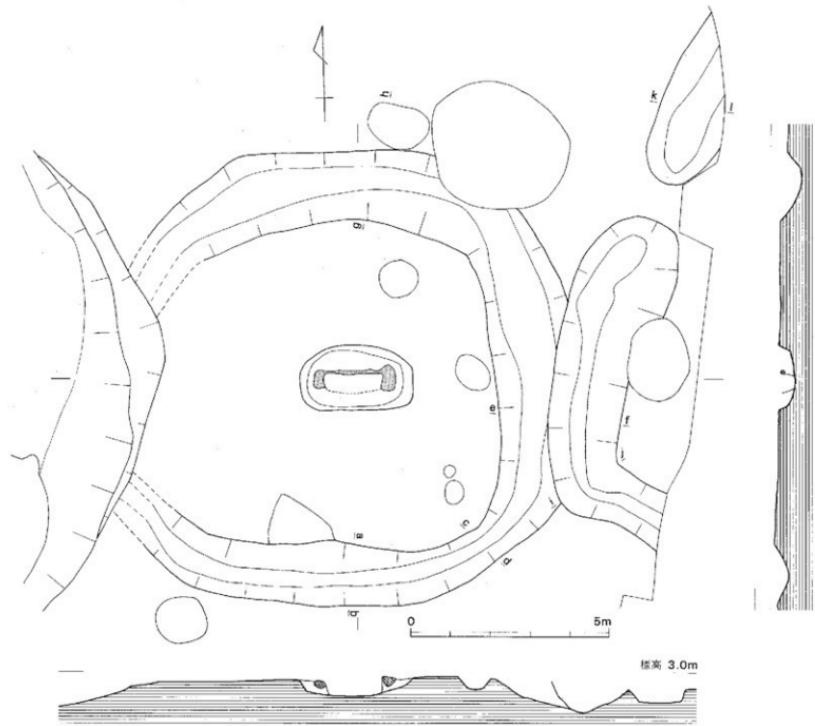
発掘区の東南隅付近で検出した方形周溝墓である。西側を第6号方形周溝墓に切られ、また東側は第9号方形周溝墓に切られている。東北隅は現代の便乱坑によって一部破壊されているものの、他の部分には擾乱は比較的少ない。ただ上面は削平を受けている。

本周溝墓は南北幅11.5m、東西幅11.0m+αの平面規模をもつ。その形態は隅丸方形に近い。周溝は幅1.0~2.0mで、丸みをもってめぐる。西辺は第6号方形周溝墓に切られ全容が知れないが、周溝は南北両辺溝から直角に折れ曲るのでなく、第2号方形周溝墓の西辺のようにいくらくか開きかけに続く。陸橋部は完全に調査した東・南辺では検出できず、前述した西辺周溝のあり方などから考えれば、まず西辺中央部に設けられていたことは確実であろう。台状部は南北幅8.0m、南北幅8.7m+αのやや不整な長方形を呈す。埋葬主体部は台状部の中央やや東寄りに設けられている。

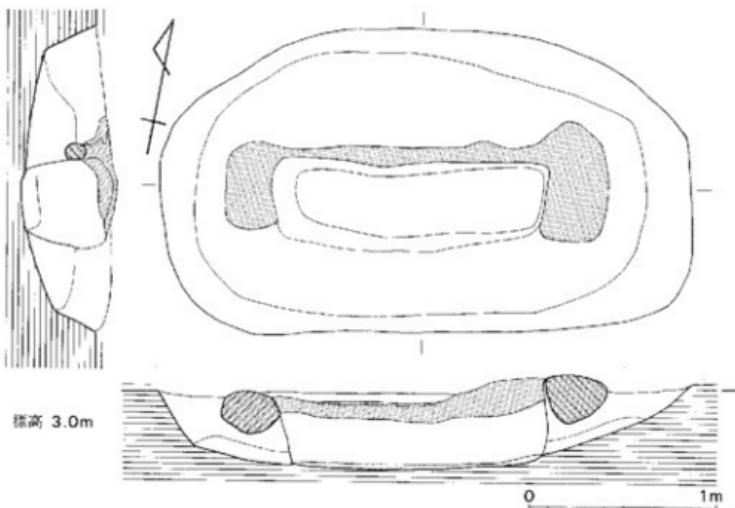
さらに細かく周溝をみれば、溝幅は北辺・東辺で広く2.0mを計り、南辺・西側は狭く1.5m前後しかない。特に狭いのは東南コーナー部分で幅は1mに満たない。断面はなだらかな「U」字形を呈し、深さは40~50cmとほぼ一定で、周溝底の差異も10cmとない。溝の覆土の土層は大



第57図 第8・9号方形周溝墓周溝土層実測図 (1/40)



第 58 図 第 8・9 号 方 形 坑 槽 墓 全 体 図 (1/100)

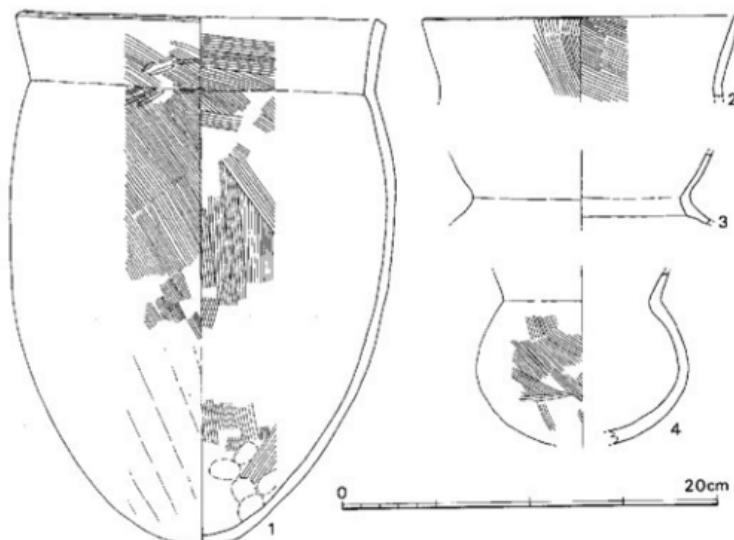


第59図 第8号方形周溝墓埋葬主体部実測図(1/30)

まかに上・中・下層の3つに分けられる。下層は明るい茶褐色砂で、おそらく溝掘削時に堆積した層と考えられる。中層は淡黒褐色砂で、やや厚みをもつもののその幅は狭い。上層はやや粘質をもった黒色粗砂と黒褐色細砂からなる。場所によってはさらにこの上に黄褐色砂がのる。本周溝墓からの遺物の出土は極めて少ないが、その遺物はすべて上層からの出土である。第9号方形周溝墓と東辺周溝の切り合い関係は第57図の土層e- $\rightarrow$ ミにみられるとうりである。また第6号方形周溝墓との切り合い関係は、その部分が発掘区境になり図面の作製が出来なかった。

以上をまとめれば、第8号方形周溝墓は一辺11.5m前後の規模をもち、その形態は隅丸正方形に近い。陳橋部は検出しえなかつたが、第6号方形周溝墓部分に設けられていた可能性が大である。周溝は幅1.0~2.0mを計り、北辺・東辺で広く、南辺・西辺で狭い。周溝の深さは40~50cmではば一定している。また西辺周溝はやや聞き気味である。台状部は南北幅8.0m、東西幅9.0m前後の不整な長方形をなし、その中央東寄りに東西方向で埋葬主体部が設けられている。

**埋葬主体部(第59図)** 台状部の中央やや東寄りで検出した。東辺周溝から2.0m、南北辺周溝から各々3.0m、西辺周溝から約4.0mの所に位置する。主軸方位をN-79°-Eにとった木棺墓と考えられる。墓壙上面は東西長2.84m、南北幅1.63mの北側壁が張った隈丸長方形を呈する。墓壙底は長さ2.42m、幅1.42mを計り、その形態は上面と変わることがない。上面から深さ40cmの墓底面中央に、長さ1.45m前後、幅0.45m前後、高さ45cm前後の木棺を埋置したものと想



第60図 第8号方形周溝墓周溝出土上器実測図(1/3)

定される。この棺の上面付近に厚さ10~25cm、幅5~35cmの青灰色粘土帯をめぐらす。この粘土帯は南側壁部分には設けられず、また北側壁部分も幅5~10cm、厚さ10cmと東西小口部分に比べ小さい。この粘土帯は棺蓋の目張りと棺の固定を計ったものと考えられる。粘土が厚くまた広く用いられたのは東側小口で、第5号方形周溝墓などと併せ考えると、遺体の頭位は東であった可能性が強い。棺内および墓壙埋土からの出土遺物はなかった。

**周溝出土土器 (第60図)** 周溝から出土した土器は少なく、比較的完形に近い甕・壺形土器各1個体を除けばいずれも細片で、図示したものはあわせて4個体にすぎない。ともに上層からの出土である。

**甕形土器 (1~3)** 1はほとんど張りをもたない長胴から口縁部がわずかに外方に開き立つ甕形土器である。口径19.7cm、器高28.0cmを計る。底部はすばり小さな丸底となる。口縁部はほぼ直線的で、端部は外傾する。その端部外傾面はナデにより、沈線状に中窪みする。外面は口縁下から頸部にかけて斜・横の叩きを行ない、その上を粗い斜刷毛目で消しているが、部分的に叩き痕が残っている。胴部上半には斜めの細かい刷毛目調整を行なう。胴部下半は縱方向の強いヘラナデ、底部は指ナデで仕上げている。内面は口縁部が横刷毛目、胴部が斜・縱刷毛目調整である。調整がかなり強いため、頸部内面には棱ができる。底部は指押えを行

なう。砂粒を多く混えた胎土で、焼成やや軟、黄褐色を呈する。外面には黒斑がみられ、また内面器表の剥落が著しい。2は口縁部の細片であり、復元口径17.0cmを計る。外反する口縁部で、端部は平坦面をなす。内外面とも刷毛目調整を行なう。胎土には砂粒を混え、焼成良好、灰褐色を呈する。3は1・2がいわば在地系の変形土器であるのに対し、外来系のものといえるものである。頭部を中心とした細片で、丸みをもった頭部から口縁部が直線的に外方に開く。口縁端部は欠損する。外面は横ナデ、内面は器表が剥落して調整不明である。砂粒を混えた胎土で、焼成やや軟、外面灰褐色、内面黄褐色を呈する。1が東辺周溝、2・3が南辺周溝よりの出土である。

壺形土器(4) 扁球形の胴部から口縁部が近く外反する壺形土器である。口縁端部と底部は欠損するが、口径9.5cm、器高10cm前後に復元できる。胴部外面は斜刷毛目調整、口縁部は内外面とも横ナデ調整を行なう。胴部内面は器表の荒れが著しく、底部近くに範削りと部分的にナデがみられる程度である。胎土には砂粒を混え、焼成良好、明黄褐色を呈する。東辺周溝より出土した。

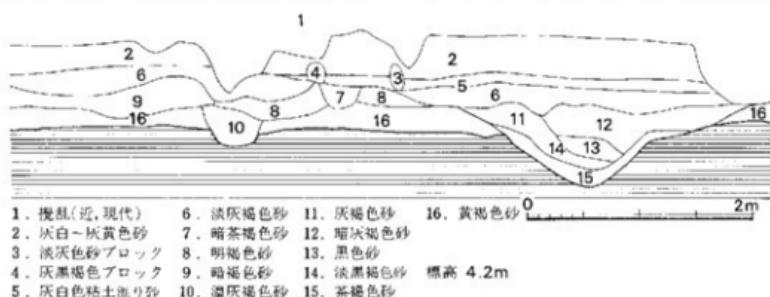
#### IX) 第9号方形周溝墓 (第57・59・61~63図、図版31~33・48)

発掘区の東南隅で検出した。しかしその大部分が発掘区外にかかり、確認したのは陸橋部を中心とした西辺および南辺の一部にしかすぎない。陸橋南側周溝は第8号方形周溝墓を切っている。

本周溝墓の検出部分の規模を計れば、西南が南北方向に13.0m、南辺が1.5mにすぎない。西辺の陸橋南側周溝は長さ6.0mで、幅1.0mの陸橋部をはさんで、北側周溝が4.0m北へ延びる。南辺と西辺の陸橋部両側周溝がほぼ直角になるのに対し、北側周溝はやや内側に傾く。南辺と陸橋部までの距離からすれば、およそ本周溝墓の南北幅は16m前後と推定される。

周溝は、西辺で1.8~2.3m、南辺で1.3mの幅をもち、深さは40~50cmを計る。ただ周溝底は南辺が高く、西辺南側周溝に向って低くなる。溝の断面は「U」字形をなし、その堆積土は3層に大別できた。最下層は茶褐色砂でこれは周溝掘削から間もない時期に堆積したものと考えられる。中層はレンズ状の堆積をする黒色砂で、場所によっては粘質をおびる。本周溝墓から出土した土器の多くがこの層から検出したものである。最上層は暗灰褐色砂である。

以上述べてきたように第9号方形周溝墓は、西辺を中心とした部分しか確認できなかつたが埋葬主体部はさらに東側未掘部分に存在することは疑いのないところである。ただこの周溝墓と境をなす東壁が比較的良好な土層の堆積状態を示していた(第61図)。それによれば、台状部上から現地表面までの層は5つに大別できた。表土層(第1層)は現代の道路舗装面および攪乱層で、厚さ40cm前後を計る。場所によってはさらに下層にくい込んでいる。第2層は灰白~灰黄色砂の層で厚さ20~40cm。第3層は灰褐色砂で厚さ10~20cm。南側部分ではこの第3層



第 61 図 第 9 号 方 形 周 溝 墓 土 層 実 測 図 (1/50)

と第2層の間に厚さ10cmたらずの灰白色粘土混り砂層がはさまる。以上の層は東壁北側から第9号方形周溝墓南辺周溝を横切り南に続く層である。第4層は南辺周溝北側より北に延びる層で、周溝南側にそれと対応する層は見当たらない。明灰褐色砂で、厚さは10~40cmを計る。第5層は黄褐色砂で厚さ20cm、南辺周溝の南側にもその対応層がみられる。第5層以下は白色砂の地山である。

藤崎遺跡の基本的な層序は、1977~78年の調査において、おおまかに第1層一黒褐色～暗褐色土（江戸～現代）、第2層一白色砂（中世遺物を一部含む）、第3層一暗褐～黒褐色砂（古墳時代～弥生時代）の3層が確認されている。このうち第3層は遺構の密集地により土層および厚さも変化している。これと前述した東壁土層との関係を求めれば、第1・2層が各々対応することは問題がない。しかし第3層との対応はかなり問題が残る。東壁の第5層は周溝南側にも対応する層があり、この層を切って周溝が設けられていることから、第7号方形周溝墓構築前の表土層と考えられる。また第3層は周溝が埋没した後、堆積した層であることはまちがいない。問題なのは台状部上で第3層と第5層にはさまれた第4層である。第1~8号周溝墓では削平などにより台状部上の上層の状態を確認することができなかった。第3号方形周溝墓では旧地表面を一部で検出したものの、その上層は周溝埋没後の土層であった。だがこの東壁の第4層は周溝北側から始まる層で、第7号方形周溝墓の封土の可能性もある。ただほぼ水平な砂の一層をなし、固められた様子もみられないことなどの点から疑問も残る。以上を考えあわせば、藤崎遺跡の基本的な層のうち第3層は、東壁の第3~5層が対応するものと思われる。

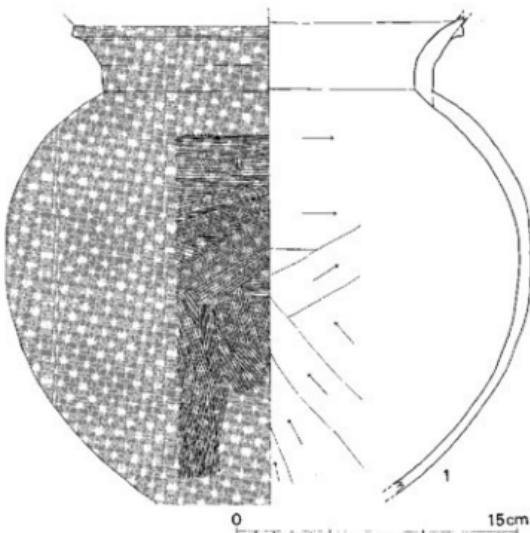
周溝出土土器（第62・63図）周溝からは變形土器・壺形土器などが出土した。

變形土器（2・3）2は外米系の變形土器の口縁部片である。復元口径15.0cm。肩部が直

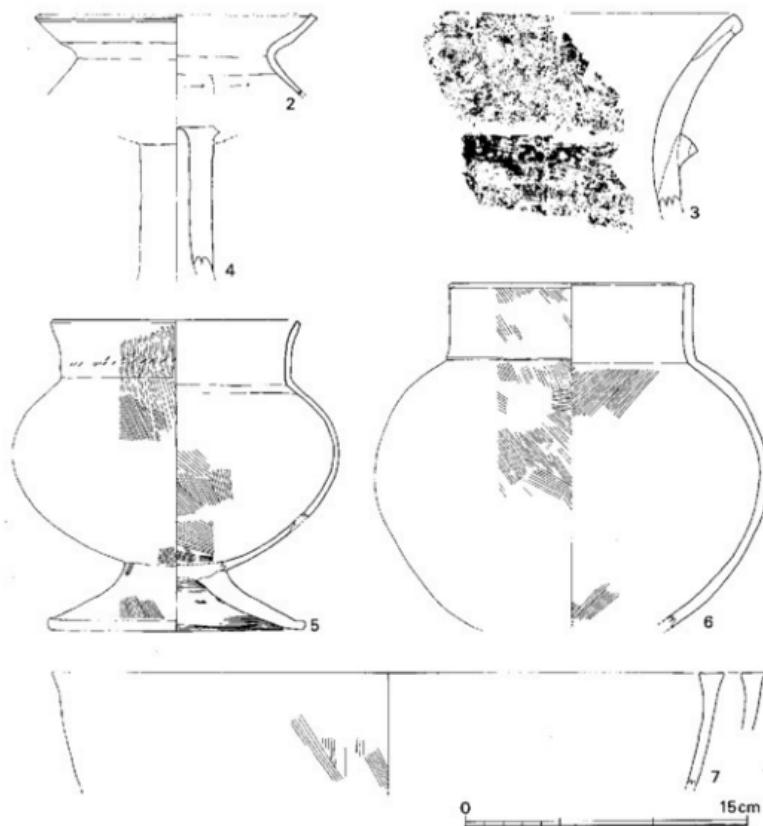
線的に頸部へ続き、そこより口縁部が外方に向ってやや内済気味に大きく開く。口縁端部は外傾する面を作る。残存する部分においては胴部内面が右方向の横窓削り、他の部分は横ナデ調整で仕上げている。砂粒を混えた胎土で、焼成堅緻、器表は暗褐色と暗黄褐色のまだらな色調を呈する。陸橋部のすぐ両側の周溝より出土。3は在地系の大型壺の破片である。あまり張りをもたないと考えられる胴部から、口縁部がゆるやかに外反する。口縁端部は丸味をもって外傾する。頸部

には櫛状工具による刻目をもった一条の三角突帯をめぐらす。外面はナデ調整、内面は斜刷毛目調整で仕上げている。径3~5mmの石英粒を多く混えた胎土で、焼成良好、一部暗黄褐色を呈する以外は赤褐色をなす。南辺周溝から出土した。

壺形土器（1・5・6）1は二重口縁をなす大型の壺形土器片である。口縁端部と底部は欠損している。最大径28.0cmを計る球形の胴部から頸部が短く直立し、さらに外方に開いて外面に棱をなす。口縁上半部はこの上に外反して端部へ続くものと考えられる。全体的に器壁の厚い七器で、胴部外面は上位で横方向の刷毛山、下位で縱方向の刷毛目の器面調整を行なう。内面は下位が斜方向、上位が横方向の窓削りを行なう。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げる。胎土には径5mmほどの石英粒を多く混え、焼成良好、赤褐色を呈する。外面全体に赤色顔料を塗布している。南辺周溝から出土。5は台付壺である。口径13.0cm、器高16.7cm、台底径13.4cmを計る。壺部は最大径17.4cmを計る肩球状の胴部から、口縁部が直立し、端部近くでわずかに外反する。口縁端部は外傾する平坦面を作る。全体的に薄手の作りをなすその底部にラッパ状に聞く台部をとりつけている。この台部は壺部との接合部分で器壁が厚く、底部に近づくにつれ厚さを減じる。端部は小さく横に引き出し丸くおさめている。器面調整は、壺部外面が口縁下から胴部上位にかけて窓の窓研磨、胴部下位が横の窓研磨を行なっている。また胴部上位



第62図 周溝出土土器実測図I(1/3)



第63図 周溝出土土器実測図II(1/3)

には細い斜刷毛目調整が、縫の範研磨の間に残っている。内面口縁部は横ナデ、胴部は器表の剥落が著しいが、部分的に細い新刷毛目がみられる。台部外面は斜刷毛目の後横ナデ、内面は横刷毛目の後横ナデを行なっている。壺の口縁部外面下位には、瓜先でつけたような左下りの文様が一周めぐる。また胴部最大径部分には穿孔らしき一孔みられる。細かい砂粒を混えた良質の胎土で、焼成良好、壺外面灰黒色、内面褐色、台部黄褐色を呈する。壺口縁部・胴部・台部の同じ側面に黒斑がみられる。陸橋部南側肩溝の中央から出土。6は直口壺の約1/3の破片である。

復元口径13.0cm。底部を欠くが器高は20cm前後と推定される。最大径21.0cmの球形の胸部から、器面調整による小さな段をもって口縁部が直立する。口縁端部は丸くおさめるが、ナデによつてやや中くぼみ状になつてゐる。器面はかなり磨滅しているが、外面は口縁部が斜刷毛目調整の後巻の鏡研磨、さらにその上に軽い横ナデを行なつてゐる。胸部は斜刷毛目調整の痕が残る。内面は口縁部が斜刷毛目を横ナデで消す。胸部は斜刷毛目が頸部下と底部近くにみられ、それ以外はナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒を混え、焼成良好、淡黄褐色を呈する。陸橋部のすぐ南側の周溝から出土した。

高杯（4）脚筒部の破片である。器壁は1.2cmの厚さをもち、幅1.4cmの中空部分をもつ。器面は著しく荒れており調整は不明である。胎土には砂粒を多く混えており、焼成良好、内面灰褐色、外面亦褐色を呈する。周溝西南隅で出土した。この種の高杯は破片とはいえ今回の調査では出土例がほとんどないものである。ラッパ状に聞く脚部をもつものと考えられる。

不明土器（7）復元口径35.8cmを計る器種の不明な土器片である。口縁端部が断面逆三角形状になり、上端は幅1.4cmの平坦面を作つてゐる。口縁部から胸部は内傾する。内外面そも刷毛目を横ナデで消しているが、外面には部分的に斜刷毛目の痕が残る。砂粒を混えた胎土で焼成堅緻、淡黄褐色を呈する。あるいは口縁部ではなく、底部である可能性もある。また大型の鉢形土器かとも考えられる。いずれにせよ類例をまちたい。

### (3) 住居跡

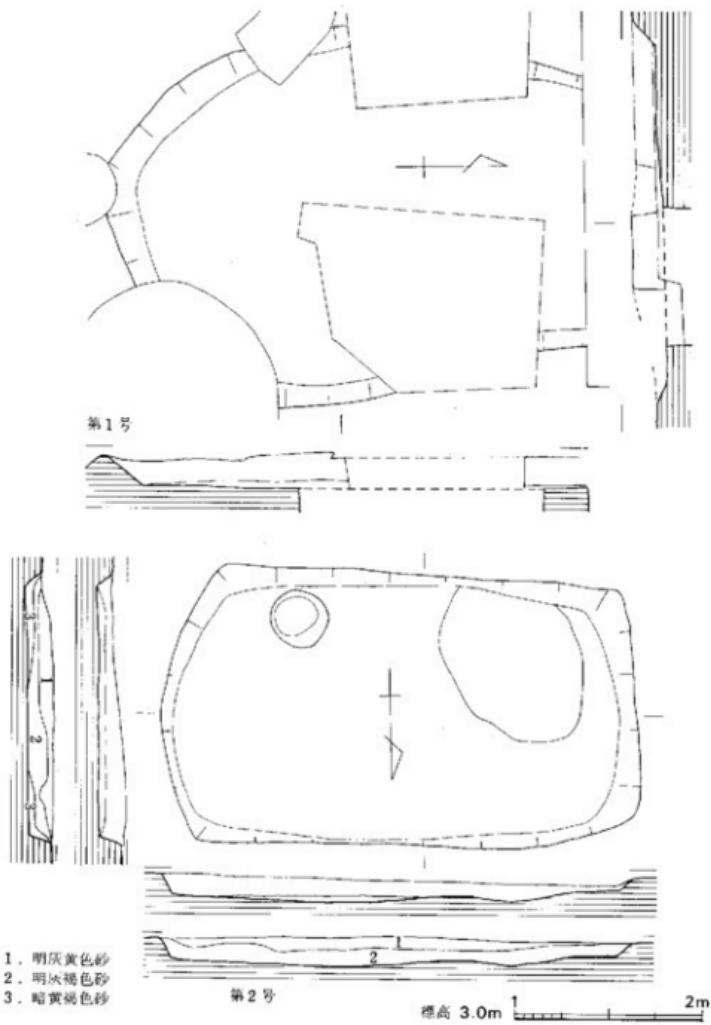
今回の調査で検出した住居跡は合計7軒である。しかし第2号住居跡および第6号住居跡を除いた他の住居跡の残存状況は極めて悪い。それは後世の擾乱や削平によるもののがほとんどであるが、第7号住居跡のように第7号方形周溝墓によって破壊されたものもある。住居跡の位置は発掘区内において集中する傾向をみせない。それは複数の時代に営なされたことによるものであろう。出土遺物が確実にその営みの時期を表わしているのは第6号住居跡と第7号住居跡だけである。以下各住居跡とその出土遺物について述べる。

**第1号住居跡**（第64図） 第3号方形周溝墓の西南2.5mの所で検出した堅穴住居跡である。現代の建築物基礎および幌乱によって大きく破壊されている。南北に長軸方向をとった残存長5.1m、幅4.0mの不整長方形のプランをなす。壁高は30cmを計る。柱穴は確認できなかった。覆土中から土器破片など少量の遺物が出土した。

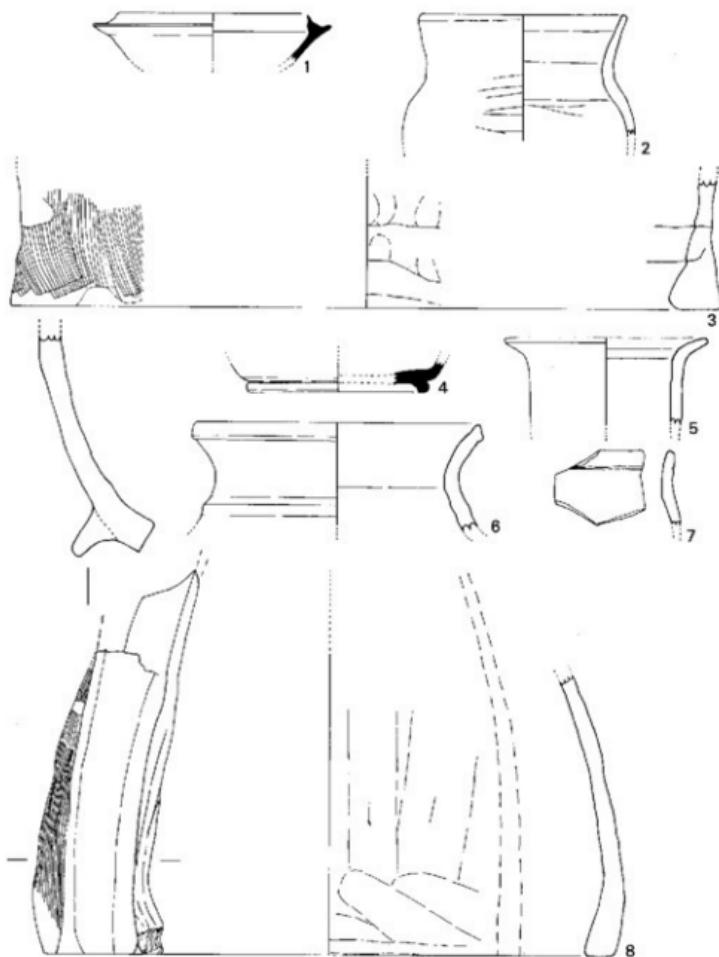
**出土遺物**（第65図・1～3） 須恵器・土師器・甕などの破片が出土した。**1**は須恵器杯片で、復元口径10.1cmを計る。体部から受部にかけて外反気味に上外方へのびる。たちあがり部は短く内傾し、端部付近で上方へ屈曲する。端部はとがらせる。内外面とも横ナデ調整を行なう。黒灰色を呈し、焼成は良好。**2**は土師器の壺形上器で、口径11.2cmを計る。胴部は下半を欠損しているが、球形を呈し、なだらかに頸部に至る。口縁部は頸部から内湾ぎみに上外方へのび、その端部はまるくおさめる。口縁部は横ナデ調整を行ない、胴部内外面は、範状工具による反時計まわり方向への強い横ナデづけを行なう。金雲母を多く含んだ精良な胎土を用い、焼成良好、淡赤褐色を呈する。**3**は甕の脚部と思われる破片である。下端は厚く安定している。外面は粗い縦刷毛目調整、内面には粘土帯の接合痕が明確に残り、指圧調整痕がみられる。胎土は粗く角閃石、長石粒を多く含んでおり、焼成良好、赤褐色を呈す。

**第2号住居跡**（第64図） 第1号住居跡の東隣、第3号方形周溝墓のすぐ南側で検出した比較的の残存状態の良好な堅穴住居跡である。東西に長軸をとった長さ5.1m、幅2.9mの長方形を呈する。西辺がやや狭くなり、周壁高は15～20cmの規模をもつ。東南隅近くの床面には径60cmのピットが掘り込まれている。東北隅の覆土中より須恵器、土師器片に混り、甕が出土した。

**出土遺物**（第65図・4～8） 覆土中から須恵器、土師器の破片などが出土した。**4**は須恵器杯の底部片である。張りのない貼付高台を持ち、底部外面には明瞭な範切り離し痕がみられる。体部は横ナデ、底部内面は刷毛状工具によるナデ調整を行なう。器表は黄白色を呈し、焼成は不良。**5・6・7**は土師器である。**5**は壺形土器の口縁部片と考えられる。復元口径11.0cmで、ほぼ直立した頸部から口縁部が外方に大きく開く。器表は風化がはげしく、器面調整は不明。砂粒を混えた胎土で、焼成良好、黄褐色を呈する。**6**は復元口径15.1cmの壺形土器片である。胴部から口縁部が「く」の字状に外反する。口縁端部は垂直に近い面をなす。肩部上には薄い三角状の突帶をめぐらせており、内外面とも横ナデによって仕上げており、外面には炭素が



第64図 第1・2号住宅路実測図(1/60)



1~3 第1号住居跡  
4~8 第2号住居跡

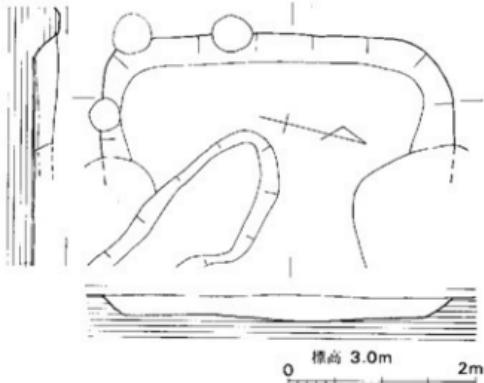
0 10cm

第65図 第1・2号住居跡出土遺物実測図(1/3)

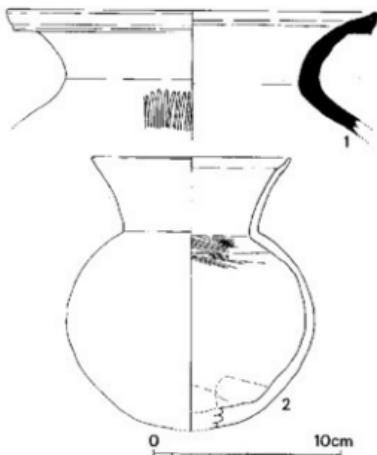
付着する。細かい砂粒を混えた胎土で、焼成良好、褐色を呈する。7は壺形土器の口縁片と思われる。やや膨らみをもった胴部から口縁部が近く直立するもので、口縁端部は丸くおさめる。口頸部は内外面とも横ナデで仕上げ、胴部外面は縱方向、内面は主に横方向の鉗状工具による強いナデ調整を行なう。また口縁部外面には一条の沈線がめぐる。胎土には細かい砂粒を多く混え、焼成やや軟、黄灰色を呈する。8は竈の下半部である。底端部は、厚く安定しており、底部上3cmで最大径を計る。そこより上部に向かって、内湾しながらのびる形態をもつ。また両側面縦方向にひれ状の突出帯を付設する。外面は粗い継刷毛目、内面は底部より4.5cmの高さまで横方向の鉗削り、上部は縱方向の鉗削りによって器形を整えている。

**第3号住居跡（第66図）** 第2号方形周溝墓の陸橋部付近を切った状態で検出した竪穴住居跡である。住居跡の北側壁は擾乱によつて破壊され、また東側壁は削平によりすでに飛ばされていた。西壁長3.5m、壁高15~25cmを計る隅丸の方形もしくは長方形の住居跡と想定される。これに伴う遺構は確認できなかつた。覆土からは少量の上器が出士した。

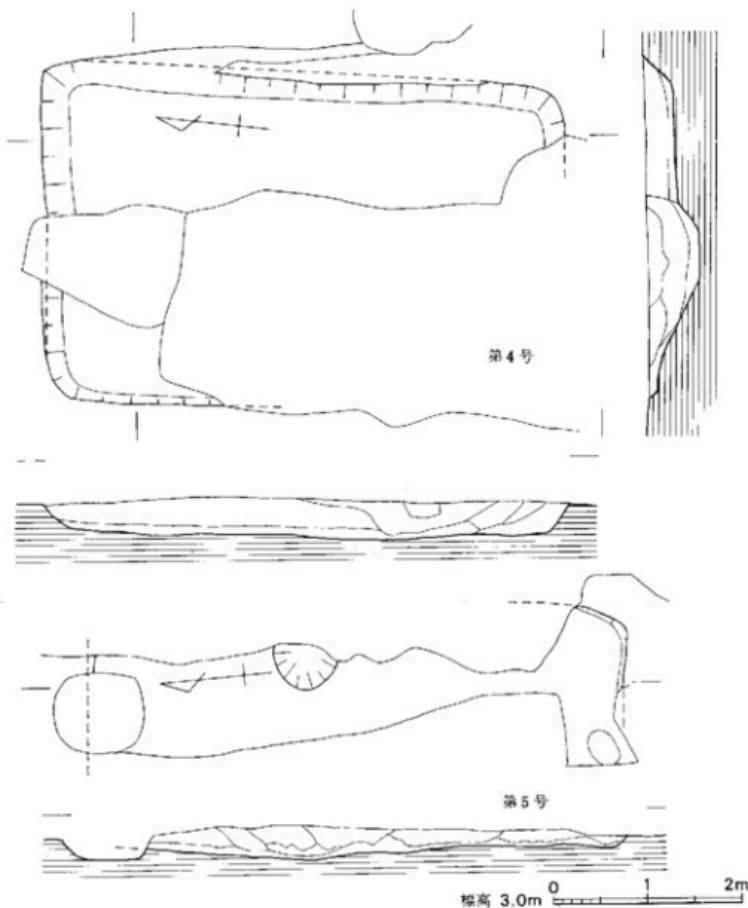
**出土遺物（第67図）** 覆土から出土したのは土器だけである。1は須恵器壺の口縁片である。球形をなすと考えられる胴部から口頸部が大きく外反する。端部は断面三角形をなし、その下位には一条の凹線が走る。口頸部は横ナデ調整、胴部外面は縱方向の平行叩き、内面は同心円状叩きを施した後ナデ消している。胎土は精良で焼成も良好、灰色を呈する。2は土師器の壺形土器である。球形の胴部から、口縁部が鋭く外反して上外方へのびる。端部はやや内渦気味



第66図 第3号住居跡実測図 (1/60)



第67図 第3号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 68 図 第 4・5 号 住居跡 実測図 (1/60)



第 69 図

第 5 号 住居跡出土土器実測図 (1/2)

につまみ上げ尖らせる。腹部外面は刷毛目の後横ナデで仕上げ、内面は下位を指押えナデ、上位を横刷毛目調整によって仕上げる。口縁部は丁寧な横ナデにより調整している。全般的に優手で丁寧な成形をみせている。口径は 10.7cm、器高 14.7cm。胎土中には角閃石、長石等が多く含まれ、焼成良好、赤褐色を呈する。

**第4号住居跡（第68図）** 第4号方形周溝基の東南隅を切った状態で検出した竪穴住居跡である。西側の大半を攪乱によって破壊され、東南部も第7・8号土壌に切られている。南北に長軸方向をとり、長さ5.5m、幅3.5m、周壁高約40cmの規模をもつ長方形住居跡である。東壁の南側にはやや粘質をもつ赤褐色土砂層の土壌が住居跡を切っており、異なる時期の炉址と考えられる。覆土からの出土遺物は極めて少ない。

**出土遺物（第69図）** 覆土から須恵器の蓋片と高台付楕片が出土した。図示した蓋片は復元口径14.8cmであるが、焼成時の歪みが激しく天井部は下部へ湾曲している。口縁部は下方へ短く屈曲し、端部はまるくおさめる。天井部には寛削りの痕がわずかにみられる他は横ナデ調整を行なう。暗灰色を呈し、焼成良好である。

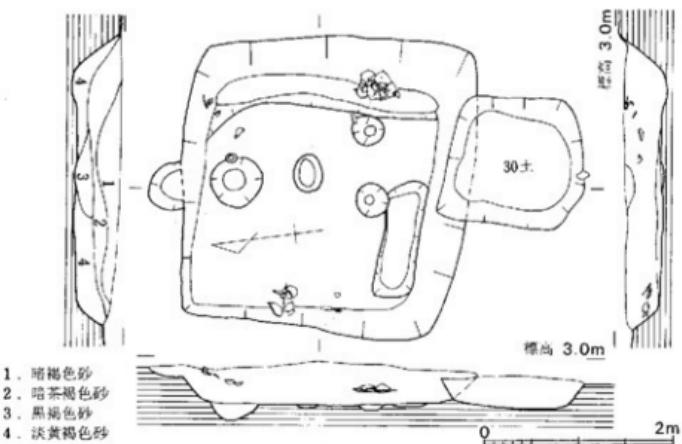
**第5号住居跡（第68図）** 第4号住居跡の南6mの所で検出した竪穴住居跡である。大部分を攪乱によって破壊されており全容は見出せなかった。残存長5.7m、残存幅1.7m、周壁高10cmを計る。残存部の形状から長方形を呈する住居跡と想定される。残存部南西隅に長径40cm、短径30cmの構造形ピットを検出したが住居跡に伴うものかは明確にしがたい。また、残存部の東端中央部の床面に直径70cm、深さ10cmほどの円形くぼみがあり、炉の痕跡ではないかとも考えられる。覆土中からの出土遺物はない。

**第6号住居跡（第70図）** 第7号方形周溝基の台状部内で検出した住居跡である。主体部の南西側に位置し、南側は第30号土壌によって切られ、さらに第30号土壌は南辺周溝を切っている。東西幅3.2m、南北幅3.1mのほぼ方形の平面をなし、周壁高は30~40cmを計る。西壁に沿って幅30cm、床面からの深さ10cmの浅い溝状の施設をもち、また南壁の東側には長さ1.3m、幅40cm、床面からの深さ5~10cmの長方形上壌状の施設をもつ。床面には4個のピットをもつ。うち3個が北から南に向ってほぼ一直線上に並ぶ。一番北側のピットは径55cm、深さ15cmの円形、中央のピットが長径42cm、短径31cm、深さ15cmの楕円形、南側ピットが径35cm、深さ15cmの円形をなす。南北両側のピットが柱穴をなし、中央のピットががをなす可能性がある。残りのピットは東南側にあり、径35cm、深さ10cmの円形をなす。

住居跡内からは土器の出土をみた。いずれも床面から10cm程度浮いている。東西両側からは壁面に張りつくような状態で甕形土器を各々1個体分、東北隅部分では鉢形土器2個体分、北側柱穴の東側上面では2個体の楕円形土器が重なって出土した。

**出土土器（第81図）** 住居跡内から出土したのは甕・鉢・楕円形土器あわせて5個体である。楕円形土器が完形であったのを除けば、他の3個体はすでに破片となっていた。しかし接合によつてほぼ完形となった。この5個体以外の土器片は1片たりとも混つてなかった。

**甕形土器（1・2）** 1は口径21.4cm、器高30.5cmを計る甕形土器である。腹部はさほど張りをみせず、その最大径を中位よりやや下にもつた下膨らみの形態をなす。口縁部はあまりしまりのない頸部から外反し、口縁端部は外傾する。口縁部がナデ調整している他は内外面とも

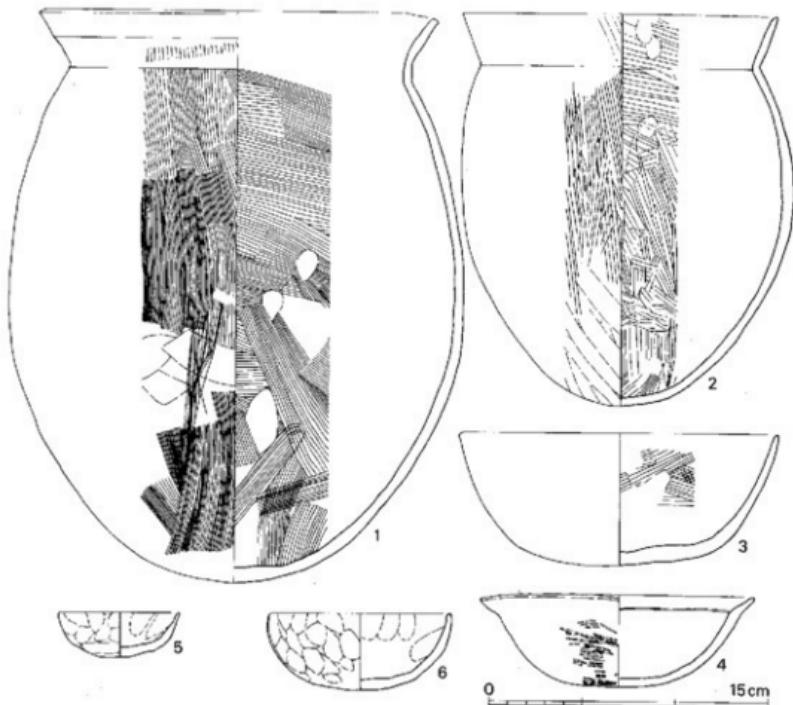


第70図 第6号住居跡・第30号上塙実測図 (1/60)

刷毛目調整を行う。外面は縦刷毛目で、上位と下位では原体が異なる。また部分的に指ナデがみられる。内面は横・斜崩毛目で、部分的に指押えの痕が残る。胎土は細かい石英粒を混えた比較的良質なもので、焼成良好、外面は全体にはば煤が付着し、残りの部分は褐色を呈する。2は1に比べやや小型の鉢形土器で、口径16.9cm、器高21.0cmを計る。最大径をほば中位にもった胴部から、口縁部が直線的に外方に開く。その開く角度は小さく、口縁端部は尖り気味になる。底部は丸底である。器面調整は外面口縁が横ナデ、胴部が縦・斜めの粗い刷毛目、底部が下から上方向への竜ナデである。内面は粗い刷毛目調整で、その方向は不定である。また口縁下は横ナデを行なっている。胎土には砂粒を多く混え、焼成良好、赤みをおびた褐色を呈する。1は東壁、2は西壁に張りつくようにして出土した。

鉢形土器（3・4）3は口径17.0cm、器高7.1cmを計る鉢形土器で、やや丸みをおびた平面から内湾気味に口縁部が開く。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整で仕上げているが、内面中位には縦刷毛目が部分的に残っている。砂粒を混えた胎土で、焼成堅緻、淡赤褐色を呈する。また外面には黒斑がみられる。4は丸い底部をもった鉢形土器で、口縁部が短く、またやや内湾気味に外方へ開く。屈曲部内面は緩い棱をなし、口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部が横ナデを行なっている他は竜研磨で仕上げている。ただ外面の竜研磨は粗い。口径14.7cm、器高5.0cmを計る。胎土には砂粒を混え、焼成堅緻、淡い褐色を呈する。

楕形土器（5・6）5・6ともに手捏ねの扁半球形の楕形土器である。5は口径6.5cm、器高2.4cmの小形なもので、外面は指押え痕が明瞭に残り、底部だけナデを行なっている。内面

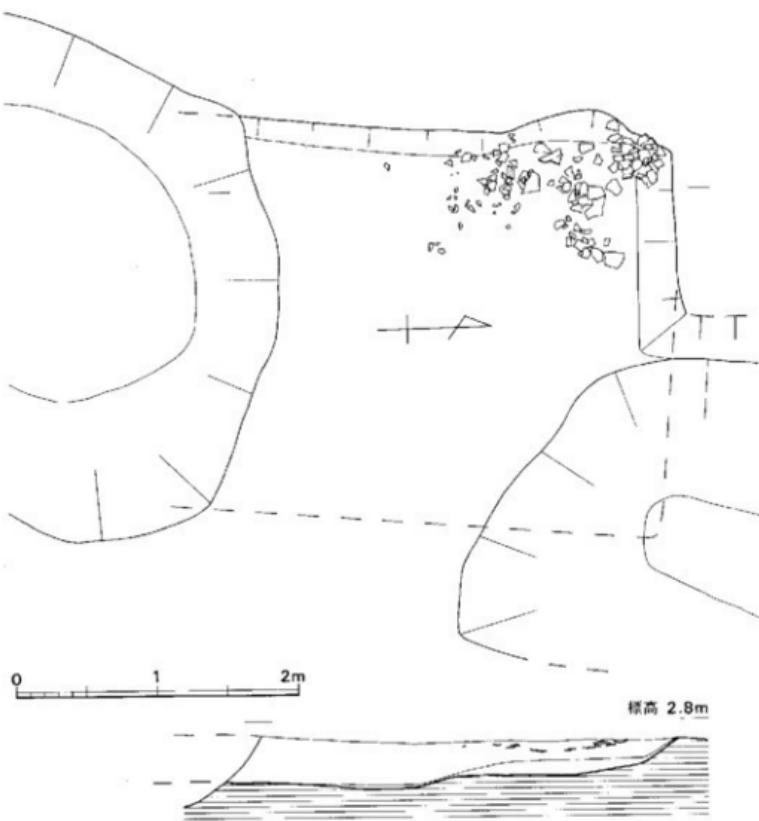


第71図 第6号住居跡出土土器実測図(1/3)

は指搾えナデを行なう。砂粒を混えた胎土で、焼成良好、淡い黄褐色を呈する。6は5より大型で、口径9.7cm、器高4.1cmを計る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面および内面口縁下は指搾え痕が残り、内面底部は指の押えナデで仕上げている。砂粒を混えた胎土で、焼成良好、淡い赤褐色を呈する。

**第7号住居跡(第72図)** 第7号方形周溝墓の陸橋部で検出した。この周辺は削平が著しく、また陸橋部を挟んだ西辺の両周溝から切られており、はっきりと確認できたのは東壁および南壁の一部にしかすぎない。長方形の住居跡と考えられ、長さ3.1m、幅約3.0mを計る。壁高は25~30cmで、床面は中央部がわずかに窪んでいる。床面上に柱穴等の遺構はみられなかった。東南隅部分では、床面より10cmほど浮いた状態で上器が集中して出土した。

**出土土器(第73・74図)** 出土したのは菱形土器3個体である。いずれも破片での出土状態であったが、接合してほぼ完形となつた。住居跡内からはこの3個体の土器以外の破片は1片



第72図 第7号住居跡実測図(1/40)

たりとも検出できなかった。

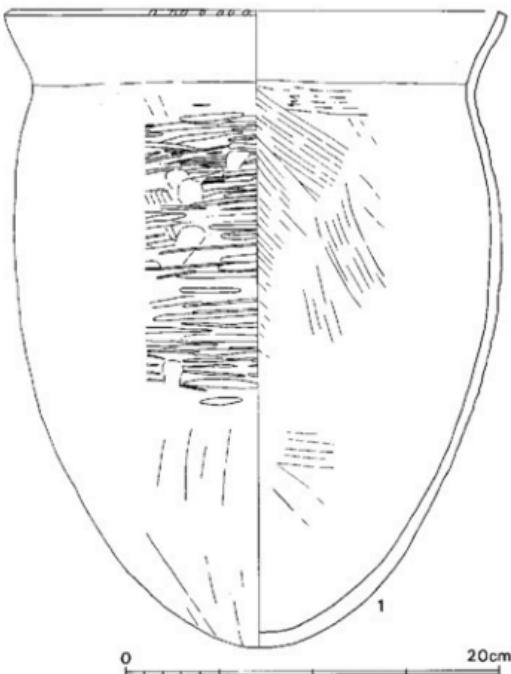
1は口径26.6cm、器高34.1cmを計る變形土器である。ほとんど張りのない長胴をもち、底部は尖り気味の丸底をなす。しまりのない頸部から、口縁部が外方に開き、端部近くでわずかに立ち上がる。口縁端部は外傾する平坦面をなし、そこには棒状工具による長径0.5cm、短径0.3cmの橢円形刻目を、0.2~0.5cm間隔で左下かりで入れている。胴部外面には横位の平行叩きが上位~中位部分に施され、器表は凹凸が激しい。底部から胴部下位に向っては、板状工具の小口

による強い縦ナデが行なわれている。胴部内面は、底部近くが指ナデによる調整を行なっている他は、下から上方への板状工具の小口による強いナデを施している。口縁部は内外面とも横ナデ調整である。胎土は砂粒を少量混えただけの良質なもので、焼成堅緻、赤褐色を呈する。外表はほぼ全体にわたって煤が付着している。

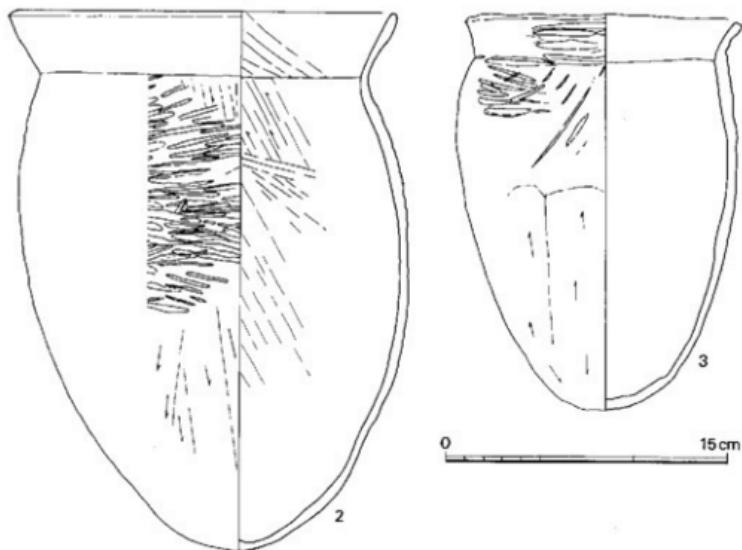
2は1に比べひとまわり小型な変形土器で、口径20.7cm、器高28.7cmを計る。胴部は最大径が20.5cmで口径とほとんど変わらず、全体的に張りのない長胴を呈する。底部は丸底というよりも尖底に近い。いくぶんか丸みをもった頸部から口縁部がほぼ直線的に外方に開

く。口縁部は上半部が外側で肥厚し、端部は丸くおさめる。器面の調整はほぼ1と同じであるが、胴部外面の上位～中位にみられる叩きの方向は斜めまたは横で、かなり入り混った様子が窺われる。胴部下位には板状工具による強い縦方向のナデが行なわれる。内面は、底部近くが指ナデ、胴部下位～口縁部下間にかけては板状工具の小口による強いナデで仕上げている。砂粒を混えた胎土で、焼成良好、淡赤褐色を呈する。外表にはほぼ全体にわたって煤が付着している。

3は2に比べてもさらに小型の変形土器で、口径14.8cm、器高21.2cmを計る。胴部はほとんど張りのない長胴で、その最大径は口径より小さい。底部は尖り気味の丸底を呈する。口縁部は頸部より短く外方に開き、端部は外傾する。外面は口縁部から胴部上位にかけて横または斜めの叩きを行ない、その後ナデ消しているが、叩き痕は消しきれないまま所々残存している。



第73図 第7号住居跡出土土器実測図I (1/3)



第 74 図 第 7 号 住居跡出土土器実測図 II (1/3)

胸部下位は下から上方向の板状工具による強いナデがなされている。内面は底部近くが指押えナデ、胴部が板状工具による弱いナデ、口縁部が横ナデで仕上げている。胎土には砂粒を混え、焼成良好、淡赤褐色を呈する。口縁部から胴部上位にかけては叩きによる器表の凹凸が激しく、また、口縁部にはかなりの歪みがみられる。

#### (4) 土壙・土壙墓

今回の調査区では、近・現代の多くの擾乱土壙と三十余基の上塙・土壙墓が検出されている。ここでは近・現代擾乱土壙を除いて、簡単に概要を述べたい。

土壙は調査区の北側、第3、4、5号方形周溝墓を中心に一つのまとまりをもち、他は全体にまばらに広がっている。確実に時期決定できるのは、第10号中世土壙墓のみで、他は周溝を切っている例が多いことから、いずれも方形周溝墓より新しい時期と思われるが一応古墳時代に取まるものであろう。また、明確に長方形掘り方をもつものは土壙墓であると思われるが、それ以外の土壙の性格は不明である。土壙墓と思われるものの主軸は、ほぼ東西をとる傾向が強い。

**第1号土壙**（第75図） 第3号方形周溝墓の外部周溝東南隅の南辺にあり、古墳時代の土壙墓であると思われるが、副葬品等は検出されていない。やや隅丸の長方形をしたもので、主軸は、N-68°-Eの方向をとり、長軸1.51m、幅0.7m、深さ0.28mを計る。床面は中央部がやや凹む。また、土壙西南隅を近・現代擾乱土壙によってわずかに切られている。

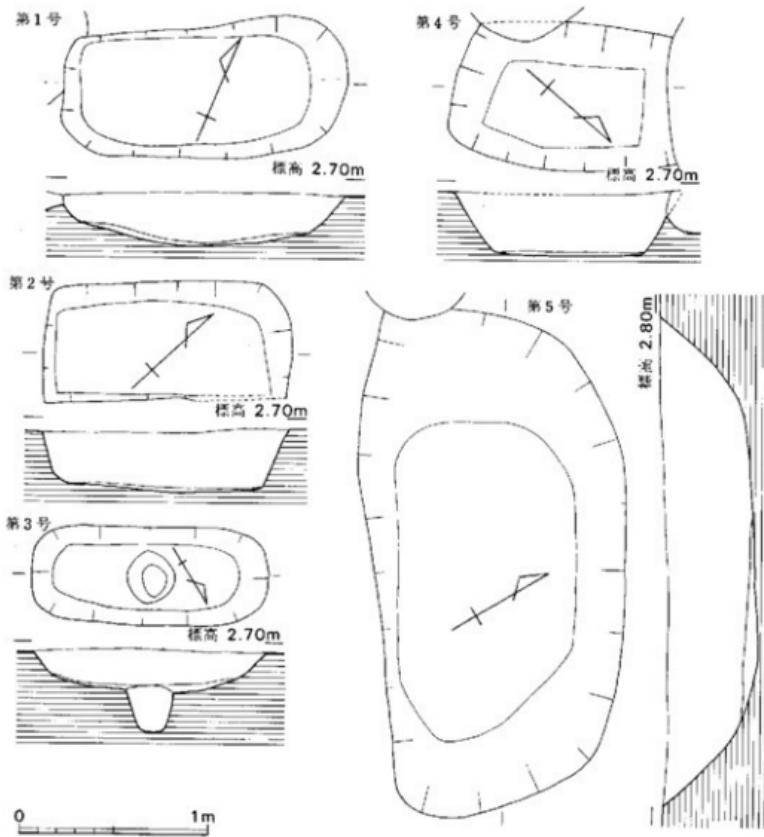
**第2号土壙**（第75図） 第3号方形周溝墓の2号周溝東南隅の東辺にあり、おそらく古墳時代土壙墓であろうが、副葬品は検出されていない。東辺の一部を擾乱土壙によって切られているが、ほぼ長方形を呈していると思われる。主軸はN-43°-Eをとり、主軸長1.32m、幅0.63m以上、深さ0.32mを計る。

**第3号土壙**（第75図） 第3号方形周溝墓、2号周溝東南隅の東辺、第2号土壙に隣接する。古墳時代の土壙墓であると思われる。隅丸長方形で、主軸はN-58°-Wを向き、主軸長1.27m、幅0.44m、深さ0.23mを計るが、床面中央に、径0.25m、深さ0.25mの柱穴状掘り込みが見られる。

**第4号土壙**（第75図） 第3号方形周溝墓の2号周溝東南隅に小口部分が接している。古墳時代土壙墓と思われる。ややいびつな長方形を呈し、主軸はN-41°-Wをとる。南隅を近・現代擾乱土壙に切られ、さらに溝と接しているが、その先後関係は明確でない。主軸現存長は1.15mであるが、床面下端が明確であり、本来の長さもその程度であろう。幅0.52m、深さ0.32mを計る。

**第5号土壙**（第75図） 第3号方形周溝墓、2号周溝東辺外にある。規模が大きいため土壙墓とは考えられない。性格不明である。やや丸味をもった不整長方形で、主軸はN-59°50'-Wにとり、主軸長2.82m、幅1.35m、深さ0.46mを計る。西端の一部を近・現代擾乱によって切られている。

**第6号土壙**（第76図） 第3号方形周溝墓と第4号方形周溝墓との間に位置している。土壙上面にかなり浮いた状態で土師器1点が出土している。性格は不明である。東端部を近・現

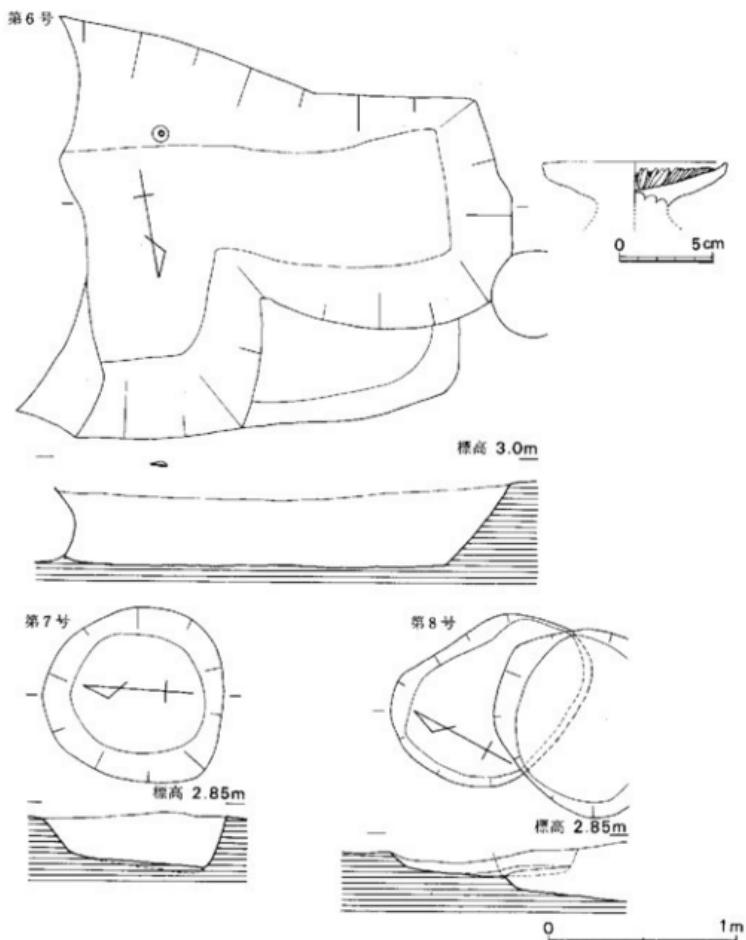


第75図 第1・2・3・4・5号土壤実測図(1/30)

代掘乱に切られており、さらにその形状も不整形である。おおよその主軸はN-80°-Wをとると思われ、現存主軸長1.83m、深さ0.34mを計る。

出土遺物(第76図)は、土器の小型器台であり、脚部を欠失している。外面ナデ調整で口縁直下に一条の浅い沈線がめぐる。内面は横刷毛目後に縦方向のヘラ研磨を行なう。口径9.65cmで淡赤褐色を呈し、焼成良好である。胎土には砂粒、金雲母を多く含んでいる。

第7号土壤(第76図) 第4号方形周溝墓の南にある。第8号土壤を切っている。性格不明



第76図 第6・7・8号土壙・第6号土壤出土土器実測図 (1/30, 1/3)

である。長径0.93m、短径0.78mのほぼ正円に近い形をなしている。深さ0.25mである。

**第8号土壙** (第76図) 第7号土壙に切られており、同様に性格は不明である。全体形は不整長円形で、長径1.07m、短径0.73mを計る。深さは0.07mと浅い。

**第9号土壙** (第77図) 第4号方形周溝墓の台状部東南隅に掘り込まれ、南半は周溝を切っ

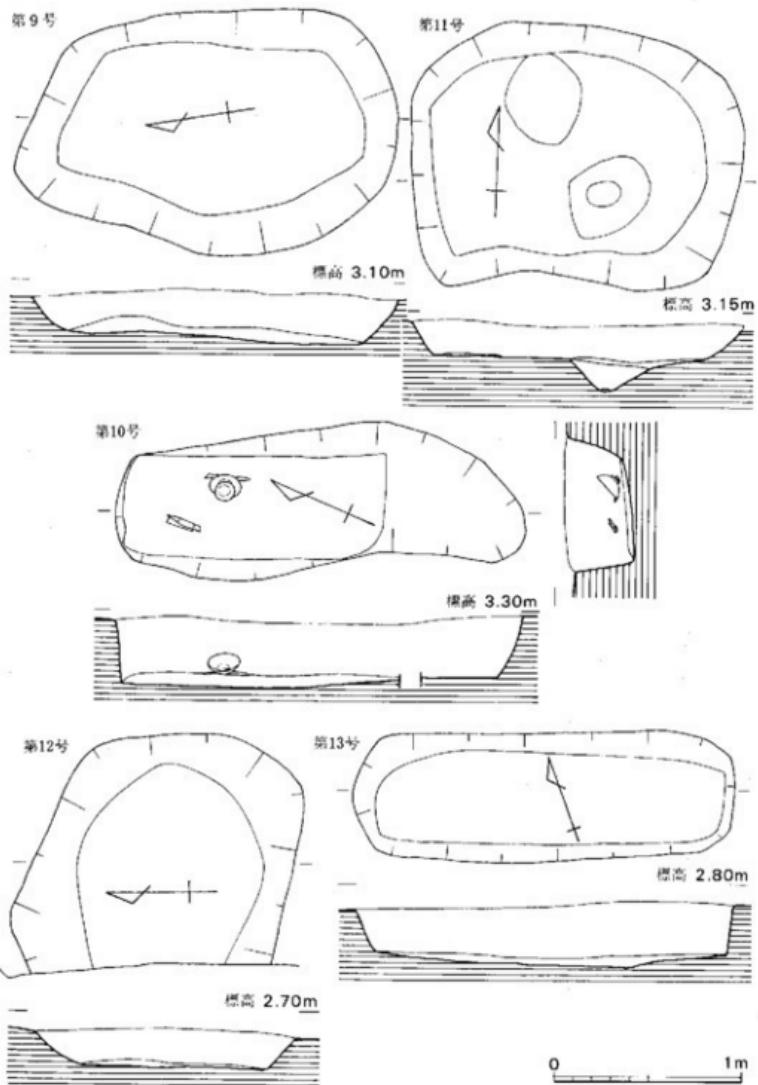
ている。また第10号土壙に接している。土壙墓であろうか。胴の一側面が外に張った不整長方形で、本軸をN-9°50'-Eにとる。主軸長1.75m、最大幅1.32mを計るが、深さ0.26mと浅い。

**第10号土壙**（第77図） 第4号方形周溝墓の古状部東南隅で検出された。上層より黄白色砂層（地山）に掘り込まれ、ほぼ長方形を呈する。今回の調査で出土した唯一の確実な中世土壙墓である。土壙の南側は樹木の植栽によって一部擾乱を受け、土壙下端の縁も木の根によって不明瞭となっている。本来の掘り方は長軸1.6~1.8m前後であったと考えられる。幅は0.7m前後を計る。副葬品は全て北側寄りの土壙底から出土し、中心より東側では、下から鉄製短刀、青磁碗、青磁皿の順に重ねて置かれ、西側では砥石と、その上に鉄製品が置かれている。このことから、頭位は北側であると思われる。土壙墓の長軸はN-23°30'-Wの方向をとる。

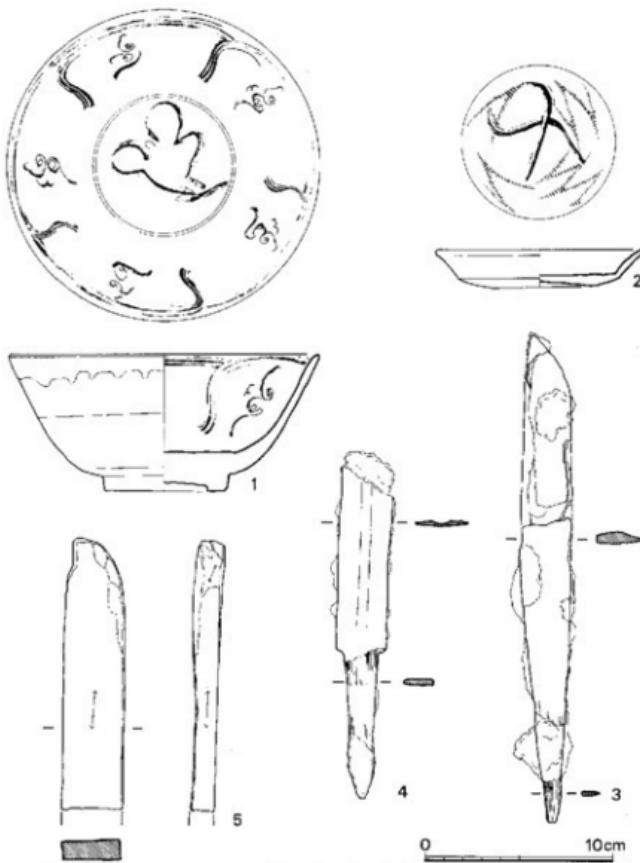
**出土遺物**（第78図） 1は龍泉窯系青磁碗の完形品である。底部は分厚く重厚で、高台内部の抉りが浅く、骨付きは幅広く断面四角を呈する。釉は緑の濃いオリーブ色の発色で、高台置付きとその内面を除いて全面に施釉される。内面体部は三本一単位の櫛様施文具で五区に区画され、その間に飛雲文のような片切り彫りが施され、口縁内部直下にも区分に従って二条の沈線がはいる。内面見込にも片切り彫りの、蓮華文が見られる。外面体部には回転ケズリ調整痕が残される。また、長期間使用されたものらしく、見込み面の釉はかなりの磨耗を見せている。2は同安窯系青磁皿の完形品である。外面体部の中位で屈曲し、上げ底状の底部をもつ。内面体部と見込みの境には段がある。釉は青味のある透明釉で、底部内面を除いて全面に施されている。見込みには櫛描きのジグザグ文様があり、その上に×字様のヘラの片彫り文が施されている。3は短刀と考えられる鉄製品である。全長26.1cm、刀部幅2.7cmもあり、大きさから刀子とは考えにくい。刀身と茎との境界は関がないため明瞭ではないが、茎部分に若干残された木質部の範囲から推測すると、茎部は6.5cm程、刀身部は20cm前後であると思われる。刀身は真直ぐに伸び、鋭い切先を持って直刀の形状を示す。断面図から推測すると、片面は鍛造り、他面は平造りとも思われるが、鎌がひどいため明瞭ではない。4は刀身先端部の欠損した鉄製品である。刀身は薄く平行に伸びる。両側が覗くなつて両刃のようである。茎との境には両側に明確な関があり、刀身の片面には櫛状の浅い凹みがある。木質部を残す茎部は、8cmの長さをもち、刀身部の残存長は9.8cmを計る。工具としてより武具としての印象が強い。5は濃灰色の粒子の細かい枯板岩を用いた砥石で、上下両側の四面を使用しており、短冊形を呈す。一端を欠損しているが、現在長は14.5cm、最大厚1.5cm、最小厚1.0cmを計る。また一部火熱を受けており、葱皮状剥離痕とタール状付着物が見られる。

ここでは土師皿の副葬がなく、詳細な年代決定はしかねるが、青磁碗、皿からみると12~13世紀という大きな枠で把えられる。しかし、周辺で若干出土した中世遺物を参考にすると、この墓の造営時期は、ほぼ13世紀におさまるものと思われる。

博多湾をめぐる砂丘上で、当該期の墓としては、都市遺跡博多の例を除くと、西新町遺跡



第77圖 第9・10・11・12・13号土壌実測図(1/30)



第 78 圖 第 10 号 土 墓 出 土 遺 物 実 測 図 (1/3)

(註1)、藤崎遺跡昭和53(1978)年調査地点(註2)、今津古墓(註3)があり、今津古墓が集団墓地を形成しているのに対し、他はいずれも単独出土の如き様相を示している。西新町遺跡、藤崎遺跡を含む百道松原一帯は、文永の役(1271年)の折の激戦地であり、蒙古の再度の襲来に備えて北辺に防壁が築かれていることは言うまでもない。これまでの調査は百道松原のわずか一部のみが対象であり、それぞれの被葬者の性格についても何ら確証がなく不明確であるが、13世紀から14世紀前半に葬られ、集団墓地を形成しないこれらの墓が、元寇そのもの、あるいは元寇防壁の築造、補修などと関係ある可能性もあって、これらの究明は今後の重要な課題であるといえる。

註(1) 福岡市教育委員会 「西新町遺跡 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告II」

福岡市埋蔵文化財調査報告第79集 1982

ここでは木棺墓が1基発見されており、龍泉窯系青磁皿、土師皿等が出土している。

(2) 土器墓が1基発見されており、龍泉窯系青磁瓶弁文碗が1個出土している。

文化課 井沢洋一氏の御教示による。

(3) 正式発掘例ではないが昭和33(1958)年に今津勝福寺西の砂丘より、

多量の中国陶磁とともに約200体の人骨が発見されている。

**第11号土壤** (第77図) 第4号方形周溝墓と第5号方形周溝墓との間に掘り込まれている。性格は不明である。丸味の強い不整長方形で、主軸をN-87°30'-Eの方向にとり、主軸長1.76m、幅0.77mを計り深さ0.17mと浅いが、床面東南寄りに、0.41m×0.4m、深さ0.18m程の不整円形の凹みが見られる。

**第12号土壤** (第77図) 第4号方形周溝墓の西辺周溝を掘り込んで作られ、西側は近・現代擾乱土壠によって切られている。性格不明である。全体の形状はわからないが、ほぼ不整長方形と思われる。長軸は現存長1.23mで幅1.41mを計り広い。深さは0.21mである。

**第13号土壤** (第77図) 第4号方形周溝墓の南側、第7・8号土壤の東に位置している。副葬品は見られないが、古墳時代の土被築であると思われる。やや隅丸で整った長方形である。主軸はN-70°-Wの方向をとる。主軸長は2.04m、幅0.7mと細長く、深さは0.34mである。

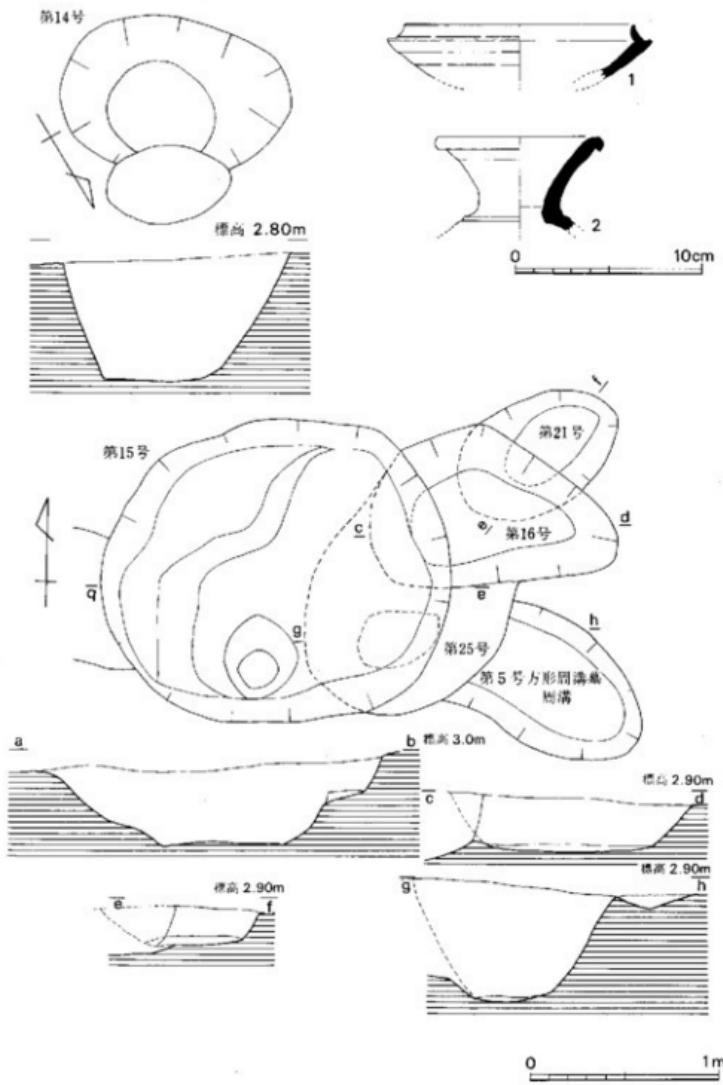
**第14号土壤** (第79図) 第5号方形周溝墓の周溝西南にある。近・現代擾乱により、北側が一部切られている。性格は不明である。長径1.23m、短径は0.77m以上で、深さは0.64mを計り深い。

**第15号土壤** (第79図) 第5号方形周溝墓の北辺周溝に切り込まれた土壠で、第16・21・25号の各土壤と互いに切り合っており、古い遺構から順に、第5号方形周溝→第15号→第16号→第21号・第25号となり、第21号と第25号との前後関係は不明である。しかし、各土壤間の時間的差は大きくないと思われる。

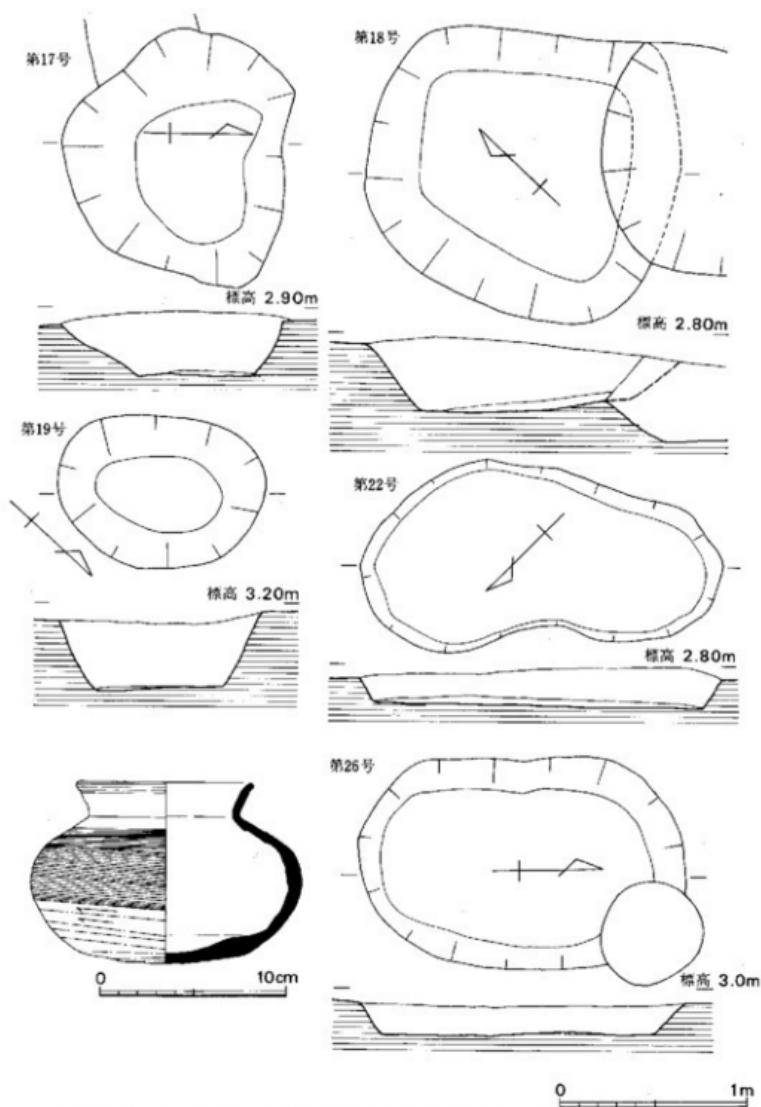
第15号土壤は、長径1.84m、短径1.63mの不整円形で、深さ0.61mを計る。西側にテラスを持ち底面南側に長径0.45m、短径0.40mで深さ0.2mの掘り方が見られる。覆土中から須恵器が検出されており、古墳時代の土壤であることは明らかであるが、性格は不明である。

出土遺物 (第79図) は須恵器2点である。1は杯身で、底部を欠く。復元口径は12.2cmを計る。受部は内傾しつつ外湾気味に立ち上がり、やや太い。内外面ともに横ナデ調條である。胎土はやや荒く、焼成も不良で、灰色を呈する。2は提瓶で頸部以上だけが検出された。頸部はすばまり、口縁にかけラッパ状に伸びる。口唇部はやや下方に下がり丸くおさまる。休部との境に小さな段がつけられる。内外面ともに横ナデで、内面の接合部には指ナデ痕が残る。焼成良好で、淡青灰色を呈す。

第15号土壤と切り合い関係のあるものから先に説明を加えることにしたい。



第79図 第14・15・16・21・25号土壤・第15号土壤出土器実測図 (1/30, 1/3)



第 80 図 第17・18・19・22・26号上塙・第19号土壤出土土器実測図 (1/30, 1/3)

**第16号土壤** (第79図) 第15号土壤に切られ、第21・25号土壤を切る。全体形は明確でないが、ほぼ台形に近いものと思われる。現存長軸長1.18m、同短軸長は0.87m、深さ0.29mを計る。性格不明である。

**第21号土壤** (第79図) 第16号土壤に南西半分を切られる。全体形は不明であるが、ほぼ卵形であろうと思われる。現存長径0.44m、短径0.61m、深さ0.2mを計る。性格は不明である。

**第25号土壤** (第79図) 第5号方形周溝の周溝を切っているが、第16、15号土壤に切られており、上端は東南部のみが残り、底面はほぼ残っている。全体形はその大部分が切られているため不明であるが、底面形から推測すると、ほぼ長円形であろう。深さ0.56mと深い。性格不明である。

**第17号土壤** (第80図) 第5号方形周溝墓の主体部北側、台状部内に位置する。古墳時代の土壤であるが、性格は不明である。不整形で、長軸長1.32m、短軸長1.18m、深さ0.35mを計る。

**第18号土壤** (第80図) 第5号方形周溝墓の南辺周溝外に位置し、第36号土壤を切り、そして東南辺を近、現代攢乱によって切られている。隅丸の不整方形を呈し、長軸長は1.29m以上、短軸長は1.54m、深さ0.4mを計る。古墳時代の土壤であろうが、性格不明である。

**第19号土壤** (第80図) 第5号・第6号方形周溝墓の中間に位置する。古墳時代の土壤墓であると思われる。須恵器が1点浮いた状態で出土している。長径0.82m、短径0.6mの長円形で深さ0.34mを計る。主軸方位はN-47°-Wをとっている。

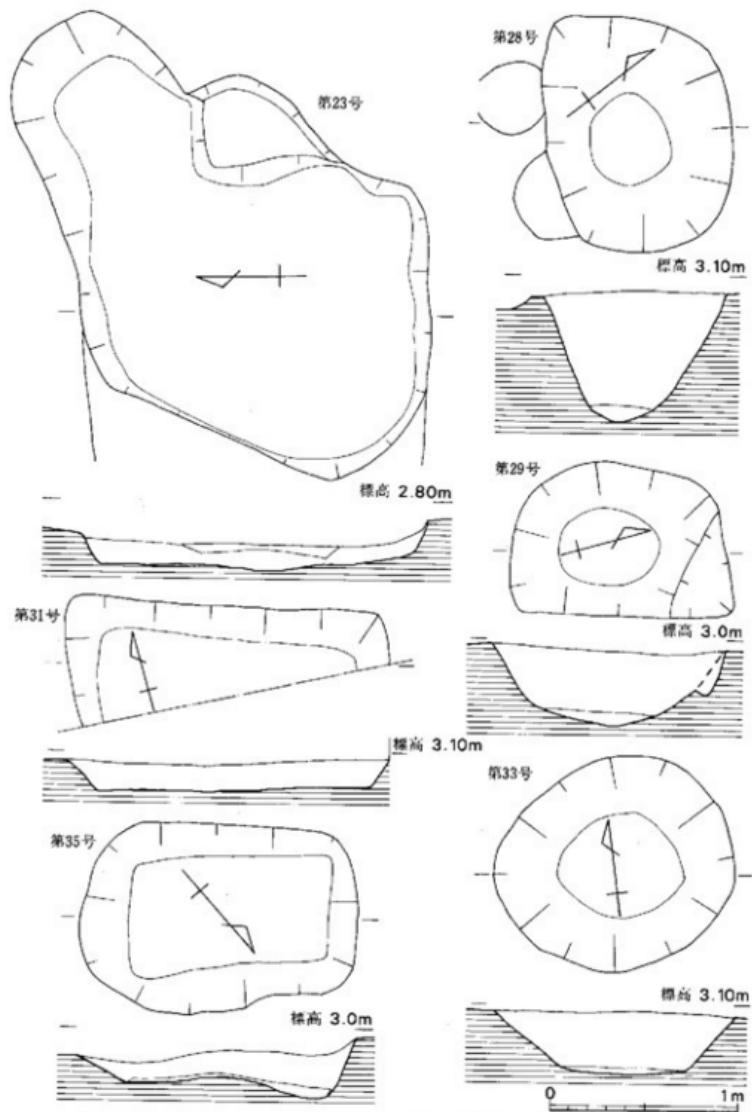
**出土遺物** (第80図) 須恵器小型短頸壺のみである。体部は扁平な球形に近く、中位に最大径をもつ。底部はやや膨らみをもつが、平底に近い。頸部は短かく外反し、口縁端は丸くおさまる。外面の調整は、体部下半と底部がヘラ削り、上半がカキ目、頸部以上は横ナデである。内面はヘラ削りの後横ナデを施している。焼成は良好で、淡青灰色を呈す。

**第22号土壤** (第80図) 第6号方形周溝墓の西南角周溝上に掘り込まれた土壤である。不整長円形を呈し、長軸長1.95m、短軸長0.99mを計るが、深さ0.16mと浅い。主軸方位はN-45°-Eをとっている。古墳時代土壤であろうが、性格は明確でない。

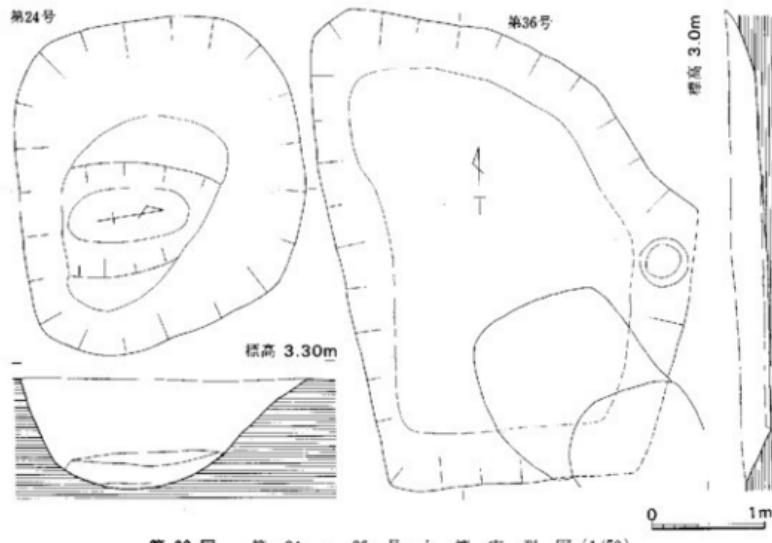
**第23号土壤** (第81図) 第6号方形周溝墓の台状部、西北隅に位置している。古墳時代の土壤と思われるが、性格については不明である。不定形で、長軸長2.88m、短軸長1.87mを計るが、深さ0.13mと浅い。東辺にはかすかなテラスが見られる。主軸はN-54°30'-Eをとる。

**第24号土壤** (第82図) 第6号方形周溝墓の台状部北側に位置し、北辺周溝を一部切り込んでいる。古墳時代の土壤であろうが、性格は不明である。隅丸の長方形を呈しており、長軸2.88m、短軸2.55mを計り深さ0.97mと深い。二段掘りになっており、東西にテラスがある。

**第26号土壤** (第80図) 第7号方形周溝墓の台状部にあり主体部の東北に位置している。ピットに東北隅を切られている。古墳時代土壤墓であろうか。長円形を呈しており、主軸をN-1°30'-Eをとっている。長軸長は1.76m、幅1.13mを計り、深さ0.15mと浅い。



第 81 図 第 23 · 28 · 29 · 31 · 33 · 35 号 土 填 実 洞 図 (1/30)



第82図 第24・36号土壤実測図(1/50)

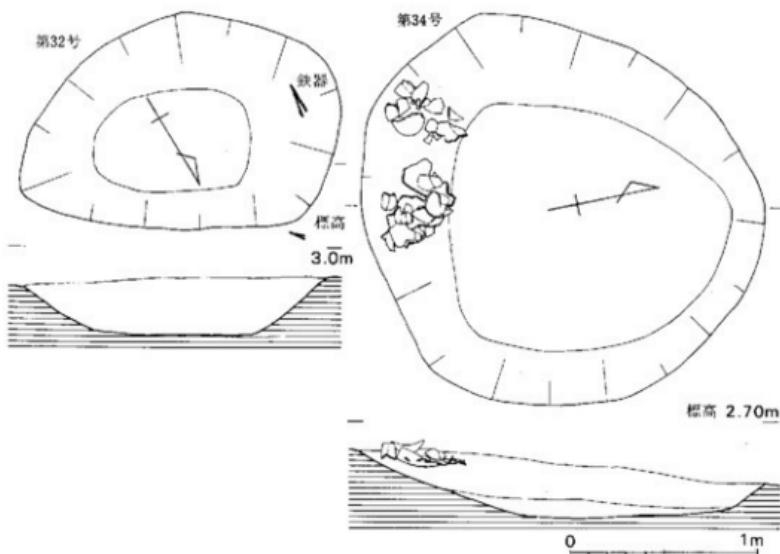
**第28号土壤（第81図）** 第7号方形周溝墓の台状部に掘り込まれ、主体部の東側に位置している。古墳時代の土壤であろうが、性格は不明。上端は隅丸長方形の形状を呈するが、下端は円形に近い。長軸長1.25m、短軸長0.99mを計り、深さ0.7mと深い。

**第29号土壤（第81図）** 第7号方形周溝墓の台状部に掘り込まれ、主体部の南側に位置する。古墳時代の土壤であろうが、性格は不明である。北東隅で小土壤と切り合う。ほぼ隅丸長方形の形状を呈し、長軸長1.16m、短軸長0.83m、深さ0.39mを計る。

**第30号土壤（第70図）** 第7号方形周溝墓の台状部南側に位置しており、第6号住居跡と第7号方形周溝墓の周溝を切っている。1.47m×1.40mのはば方形を呈し、深さは東端で0.11m、西端で0.3mを計る。南壁上に石が1個置かれていた。性格不明である。

**第31号土壤（第81図）** 第8号方形周溝墓の南側に位置し、調査区境界にかかっている。古墳時代の土壤基であると考えられる。半分は未調査であるものの、ほぼ長方形を呈すると思われ。長軸1.75m、短軸現存長0.5m深さ0.13mを計る。主軸はほぼ東西を向く。

**第32号土壤（第83図）** 第8号方形周溝墓の北にあり、北辺周溝に接している。掘り方上面に浮いた状態で鉄器が出上している。古墳時代の土壤基かもしれない。上端は不整円形であるが、下端は隅丸方形を呈している。長軸長1.63m、短軸長1.17m、深さ0.31mを計る。



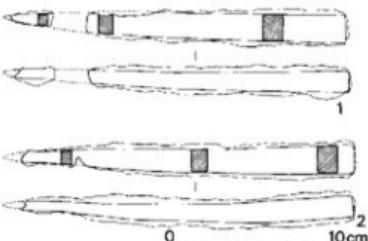
第83図 第32・34号土壙実測図(1/30)

出土鉄器(第84図)ともに長方形の断面をなす鉄器で、1が復元全長18.2cm、2が18.6cmを計る。一端は横1.5cm、縦1.1cmの長方形を呈し、徐々に細くなり他の一端は尖り気味になる。2は中央部分からやや湾曲している。鍔のような工具かとも考えられる。

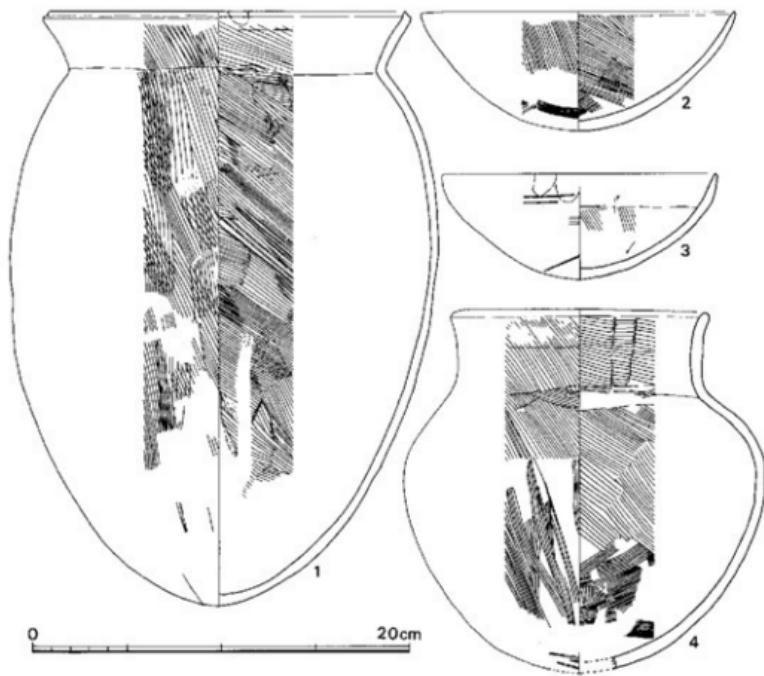
**第33号土壙(第81図)** 第8号方形周溝墓の南西角外面に位置している。古墳時代の上塙と思われるが、性格は不明である。ほぼ長円形を呈し、長径1.29m、短径1.16m、深さ0.34mを計る。

**第34号土壙(第83図)** 第7号、第8号方形周溝墓の中間に位置している。不整円形で、長径2.15m、短径2.05mを計る。掘り込みは浅い皿状で、深さは北側で0.15m、南側で0.3mを計る。南側の傾斜のゆるやかな壁面上に、土師器が一括して遺存していた。古墳時代のデボであろうか。

出土土器(第85図) 出土時には一括し



第84図 第32号土壙出土鉄器実測図(1/3)



第 85 図 第 34 号 土 壤 出 土 土 器 実 測 図 (1/3)

た破片であったが、復元を行なった所 4 個体分の土器となつた。その他の破片は 1 片も混っていない。1 は壺形土器である。口径 20.0cm、器高 22.9cm、胴部最大径 22.9cm を計る。張りの少ない長刷から、口縁部が直線的に外方に開くものである。口縁端部は外傾するが、内側ではつまみ上げられ、内面に小さな段をなす。底部はやや尖り気味の丸底をなす。外面は刷毛目調整が主として行なわれるが、口縁部から胴部上位では粗いながらも整のった縦・斜刷毛目調整であるのに対し、胴部下位ではやや細い縦・斜刷毛目を荒く行っている。底部は板状工具の小口によるナデ、口縁端部は横ナデ調整を行なう。内面は、口縁端部が横ナデ、底部が指押えナデであるのを除けばすべて斜刷毛目調整を行なっている。胎土には砂粒を多く混え、焼成良好、淡い黄褐色を呈する。外表には煤が付着し、また黒斑および赤変した部分がある。

4 は口径 13.8cm、推定器高 19.5cm の壺形土器である。上位に最大径をもつ扁球状の胴部から、口縁部が直立し、端部近くがわずかに外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面とも刷毛目

を主とした調整を行なう。ただ外面に関しては、口縁部から胴部上位にかけてが比較的整った斜刷毛目であるのに対し、胴部下位は幅の狭い原体によるナデ状の刷毛目となっている。内面は口縁部が横刷毛目、胴部が斜刷毛目であるが、胴部下位の刷毛目は細くなっている。胎土には砂粒を混え、焼成堅緻、淡い赤褐色（一部黄褐色）を呈する。

2・3は椭形土器である。2は口径16.8cm、器高6.4cmを計る。0.7cmの厚さの底部から厚さを減じながら、やや内湾気味に口縁部が外方に開く。端部はやや尖り気味である。外面は口縁下から胴部中位までが斜刷毛目、その下位幅2cm位がナデ、底部は刷毛目調整を行なう。内面は斜刷毛目である。胎土には砂粒を多く混えており、焼成良好、外面暗褐色・内面淡褐色を呈する。3は口径14.7cm、器高5.6cmと2に比べ小型であるが、形態的にはほとんど変わることがない。ただ、器壁はほぼ一定の厚さをもつ。器面調整は外面口縁下が指押えナデ、その下に横位の叩きらしき痕跡があり、さらに下位は刷毛目調整後ナデで消す。内面は口縁下が横ナデ、それ以下は斜刷毛目をナデで消している。砂粒を多く混えた胎土を用い、焼成良好、褐色を呈する。

**第35号土壙**（第81図） 第2号方形周溝墓台状部の南隅に位置している。古墳時代土壙墓であろう。隅丸の長方形で、長軸長1.47m、短軸長1.0m、深さ0.22mを計る。底面は西端がやや深くなっている。主軸はS-48°-Eの方向をとる。

**第36号土壙**（第82図） 第5号方形周溝墓の西南隅にあり、周溝を切っている。また第18号上塙によって切られている。不整四角形を呈しており、長軸4.11m、短軸3.38mと大規模である。深さは0.26mと浅い。主軸はN-1°30'-Eの方向をとる。規模から古墳時代住居跡の可能性もあるが、形態が不定で明確ではない。

第20、27号土壙は欠番である。

## (5) その他の遺構・遺物

**集石遺構**（第86図） 第6号方形周溝墓の西辺周溝上で検出した。東西幅3.5~5.5m、南北幅5.0mの平面台形状の浅い窪みの中心に、東西2.5m、南北3.3mにわたって径約1~20cmの石を集めたものである。石は焼けており、石の間の黒色粘質砂中にはカーボンが多く混っていた。また須恵器・土師器片が出土した。火を用いた祭祀遺構とも考えられるが、その性格は明らかにしがたい。出土土器からみれば6世紀後半から7世紀にかけてのものと考えられる。

**出土土器**（第87図） 須恵器・土師器が出土したがいずれも細片で、実測したのは図示した須恵器1点のみである。中型甕の口縁部片で、復元口径は23.0cmを計る。球形をなすと考えられる胴部から、口縁部が短く立ち、さらに大きく外反する。端部は下方にやや垂れ下り気味である。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行なうが、外面に一部叩き痕が残る。また胴部外面には縱方向の叩き痕、内面には同心円状の叩きがみられる。淡黄灰色を呈し、焼成は良好である。他の器形として高杯片が出土している。

**第7号方形周溝墓南辺周溝上土器溜り出土遺物**（第88・89図） 第7号方形周溝墓南辺周溝上より須恵器・土師器などの一括出土をみた。これらは2m四方の範囲から石塊などとまとまって出土したもので、7~8世紀代の土器溜りと考えられる。以下出土遺物について述べる。

**須恵器（1~11）** 杯蓋・杯・壺・平瓶が出土した。その他に、大型甕の胴部片数点、杯身片などが出土しているが細片のため図示しえなかった。

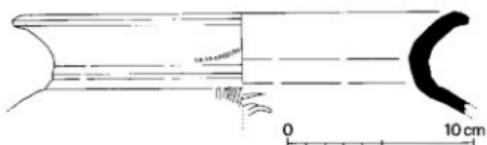
**蓋（1・2）** いずれも返りを有せず、天井部は低いドーム型を呈す。1は口径14.3cm、器高3.1cmを計り、天井部には扁平の凝宝珠つまみを有す。天井部はやや膨らみをもって成形され、口縁部との境には段をなす。口縁部は下方へ短く屈曲し、端部は断面三角形を呈す。天井部外面は回転範削りを施し、輪轤の回転方向は反時計回りである。口縁部は内外面とも横ナデ調整、天井部内面は不定方向のナデにより仕上げられている。淡灰褐色を呈し、焼成は不良。2は中心部を欠くが径17.9cm、器高3.0cmを計り、大型で扁平の凝宝珠つまみを有すると思われる。天井部はやや扁平状に成形され、口縁部との境には明瞭な段をなす。口縁部は下方に短く外反ぎみに屈曲する。天井部外面は時計回りの輪轤回転による範削りの後全面にヨコナデを施している。内面は、口縁部付近のみ横ナデを施し、残りの大半部分は不定方向のナデによって仕上げている。全般につくりが丁寧であり、濃灰色を呈し、焼成は良好である。

**杯（3~9）** 杯は貼付高台を有するものと有さないものに大別でき、さらに高台を有するものは、口径の大小により2種類に分けられる。3~6は口径14cm前後、器高4.2~4.5cmを計る。口径に比して器高が低く、成形はやや粗雑である。3・4は底部の範切りが未調整のままである。体部は内湾ぎみに上方に伸び、口縁部はやや外反して端部に至る。内外面とも体部から口縁部にかけては横ナデ調整を行ない、底部内面は不定方向のナデにより仕上げている。高台には

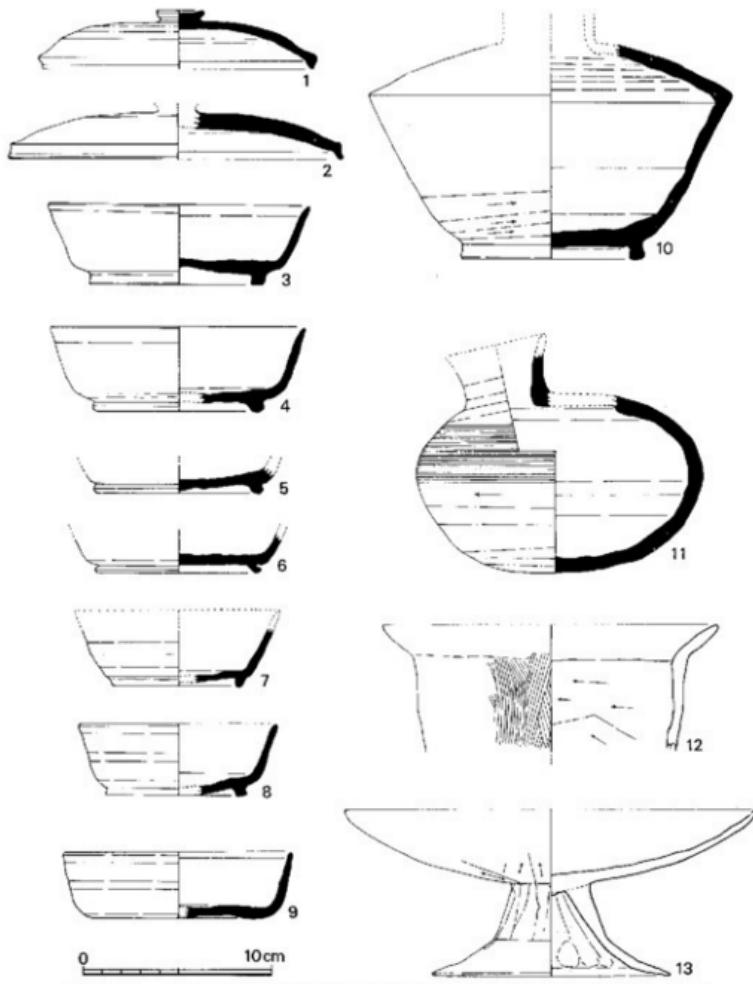


第 86 図 集 石 遺 構 実 測 図 (1/40)

張りがなく、3は内傾、4は外傾する。端部はともに丸くおさめる。3は青灰色、4は淡灰色を呈し、いずれも焼成は良好である。5・6



第 87 図 集 石 遺 構 出 土 土 器 実 測 図 (1/3)



第 88 図 第 7 号方形周溝墓南辺周溝上土器溜り出土遺物 I (1/3)

は体部を欠く。底部外面は籠の切り離しが未調整のまま残る。内面は粗い不定方向ナデを施す。いずれも粘土ひもの接合痕と思われる円形亀裂を残す。高台は底部をひねりぎみに張り出し、端部は丸くおさめる。5・6ともに青灰色を呈し、焼成も良好である。7・8は口径11.0cm前

後、器高4.0cm前後、口径に比して器高の大きい杯である。

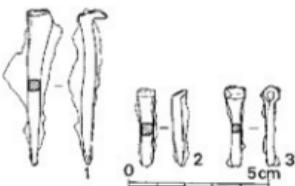
成形はともに丁寧である。7は口縁部と底部中心付近を欠き、底部は下方に膨らみ、体部との境界近くに内傾する高台を貼り付ける。体部との境界には明瞭な段を有し、体部は上外方へ直線的に伸びる。内外面ともに横ナデ調整を行なうが、底部内面には不定方向のナデ仕上げが見られる。8は底部中心付近が欠損している。底部は下方に向って膨らみ、体部との境界よりやや内側に断面正方形の外傾した高台を貼り付ける。体部はやや外反して上外方へ伸び、口縁端部はまるくおさめる。体部は内外面とも横ナデ調整、底部には不定方向のナデを施す。7は淡青灰色、8は黒灰色を呈し、いずれも焼成はよい。9は高台を持たない杯である。口径12.0cm 器高3.5cm。やや上方に凹む底部より、内湾ぎみに体部が外方へ開き、口縁部は外反してまるくおさめる。底部外面は範切り後未調整のままで、範の使用痕が明確に残る。内面は不定方向のナデ調整、体部から口縁部にかけては内外面とも横ナデ調整を施す。胎土は精良であるが、調整が全般に粗く厚手である。青灰色を呈し、焼成は良好。

壺(10) 頸部を欠損しているが、長頸壺と考えられる。底部にはやや高い貼付高台を有する。体部は直線的に上外方へ伸び、肩部との境界に明確な稜をもつ。体部の中心部や上面には、成形時の粘土帯接合底を明瞭に残す。肩部は接合部より鋭く内傾し、しまった頭部を形成する。肩部内面の接合痕から、頸部の接合に際しては、三段構成で成形されたことが窺われる。体部は下位で、時計まわりの輻轆回転による範削りを行ない、そこより上位には横ナデが見られる。内面は全面横ナデ調整で仕上げている。精良な胎土を使用しているが焼成はやや軟質で、灰色を呈す。

平瓶(11) 胴部最大径15.4cm。器高は口縁部を欠き定かではないが、13.0cm前後に達するものと思われる。胴部断面は、明確な稜を持たない稍円形を呈し、上面開口部を円板で塞いだ後、中心部よりはずれて、注口部を接合している。外面は底部より体部中位まで反時計まわり方向の輻轆回転により範削りを施す。上位ではカキ目を施した後、軽く横ナデ仕上げを行なっている。内面は横ナデ調整で仕上げる。底部には指頭圧痕も残っている。体部上面に×印の範記号を記す。胎土はやや粗いが、焼成は良好、器表は青灰色を呈す。

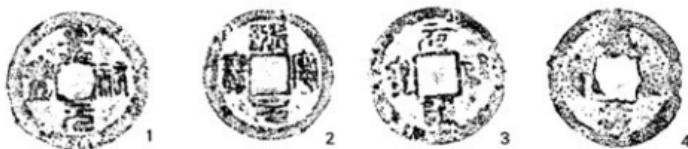
土師器(12・13) 土師器は、甕と高杯が出士した。

甕(12) 胴部下半部は欠損している。胴部上位は、内湾ぎみに口縁部下に至り、そこより大きく「く」の字状に外反し、端部に至る。胴部外面は縱方向の刷毛目調整を行ない、内面は右方向への断続的範削りによって器壁を薄く仕上げている。口縁部外面は横ナデ、内面は横方向の刷毛目調整を行なった後ナデを施して仕上げる。淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。

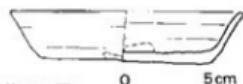


第89図

第7号方形肩溝甕南辺周溝上土器  
窯より出土遺物II (1/2)



第90図 発掘区南側段落ち出土古銭拓影 (1/1)



第91図 発掘区南側段落ち出土土器実測図  
(1/3)

**高杯 (12)** 杯部口径22.0cm、器高9.9cmを計る。底の浅い碗状を呈する杯部に、外側に張り出す脚部を付設する。筒部は直線的に下方に広がり、裾部との境界は不明瞭である。裾部は大きく外傾し、端部は丸くおさめる。杯部内面は不定方向のナデ、口縁部内外面および脚裾部内外面は、横ナデで仕上げる。杯底部外面は、縦の範研磨、脚筒部は上方向への範削りを行なう。脚筒部内面は右方向への範削りを行なう。淡赤褐色を呈し、焼成はよくない。他にもう一個体分の高杯が出土しているが、摩滅が著しく実測を行なわなかった。

**鉄製品 (第89図)** 鉄釘が3本出土した。頭部は逆「L」字形をなし、先端は尖り気味になる。長さ2.8cmの小型のもの2本と、長さ5.5cmのもの1本がある。断面はともに方形である。

#### 発掘区南側段落ち出土遺物 (第90・91図) 南側段落ちの底面から古銭と土師器が出土した。

**古銭 (第90図)** 合計4枚出土した。**1**は初鑄景祐元年 (1034年) の景祐元寶である。篆書体の銭面で無背。鋸が著しい。径2.51cm, 3.83g。**2**は初鑄熙寧元年 (1068年) の熙寧元寶である。篆書体の銭面で無背。鋸が著しい。径2.40cm, 3.3g。**3**は初鑄元符元年 (1098年) の元符通寶である。篆書体の銭面で無背。鋸が著しく、「符」「通」の2文字が若干見にくい。以上の**1~3**は北宋銭である。**4**は銭面の摩耗と鋸がひどく、「寶」しか確認できない。宋銭であると思われる。無背。孔には紐ズレかと推定される抉れが見られる。

**土師器 (第91図)** 口径12.2cm、底径9.0cm、器高3.0cmを計る土師皿である。底面には糸切り痕と、その上に板状圧痕が残される。体部は内外面とともに回転指ナデ、内面底は同一方向への指ナデによって器面調整されている。体部下半と底部にかけて、相対する2個づつの指頭痕が残される。砂粒を多く含み胎土は粗いが、焼成は良好で黄褐色を呈する。13世紀末から14世紀初頭頃に位置づけられよう。

### 3 第7地点の調査

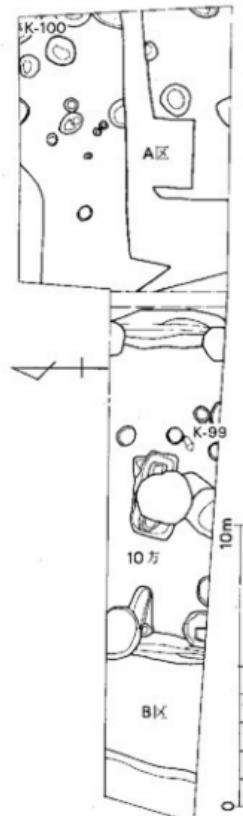
#### (1) 調査の概要と経過

第7地点は、高速鉄道1号線藤崎駅舎の出入口建設工事にともなって発掘調査が行なわれた二地点のうち、西区役所の南側に位置している地点で、本体部調査における区分のF・G区の北側に接している。このF・G区付近は藤崎交差点に近いため、本体部調査には下水管、水道管、電信電話ケーブル、信号ケーブル、ガス管等が縦横に走っていたが、発見された甕棺墓の基數は多く、これらの擾乱によって破壊された甕棺墓も含め、また、202号線をはさんだ南側でも、昭和52年にビル建設工事にともない発掘調査が行なわれ、60基近くにも及ぶ甕棺墓が検出されており、この交差点付近がおそらく藤崎遺跡における甕棺墓群の中心的位置であったと考えられる。

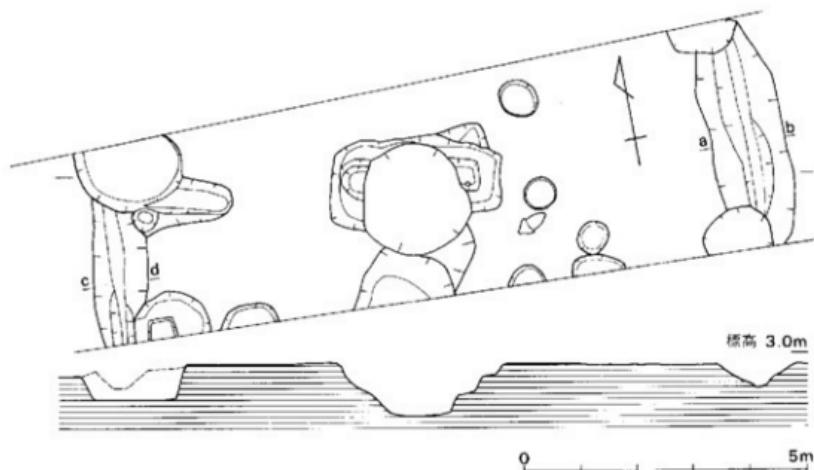
第7地点の調査区は、いびつなし字形をなしており、路線に沿って東西に長い。ここでは中央部の土留杭によって、調査区の東半分をA区、西側をB区と呼んでおく。A区は $7.5m \times 9.4 \sim 10.4m$ の約75m<sup>2</sup>、B区は細長く $3.2 \sim 4.2m \times 18 \sim 19m$ の約68m<sup>2</sup>で、計約143m<sup>2</sup>の狭い面積である。全体的にはやや幅広のトレンチ調査区の体である。

発掘調査は昭和55(1980)年5月19日に開始し、5月28日に完了した。工事工程と安全確保の関係から、発掘調査に先行して土留用鋼矢板の打ち込みを行ない、その後発掘調査となった。なお、本体調査時に遺跡の基本的層序が、1層黒褐色砂質土層(江戸時代～現代)、2層やや汚れた白色砂層(中世)、3層暗褐色砂層(弥生・古墳時代)、そして地山黄白色砂層と続くことが確認されており、地表下約1mの厚さをもつ1層は機械で除去したのち、以下を手掘りで精査した。うち中世包含層の2層は確認できなかった。

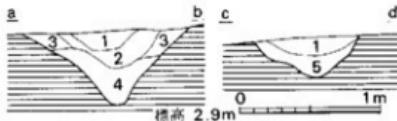
A区でも例外ではなく、中央部を東西に走る電信電話ケーブルによる擾乱や、表土層から掘り込まれた擾乱土塊(ごみ穴等)によって寸断されており、遺構全体の遺存状態は不良である。辛うじて擾乱をまぬがれた部分では、古墳時代遺物包含層である暗褐色砂層から黄白色砂層に掘り込まれた性格不明の小土塊



第92図  
藤崎遺跡第7地点全体図(1/200)



第93図 第10号方形周溝墓全体図(1/100)



第94図 周溝土層実測図(1/40)

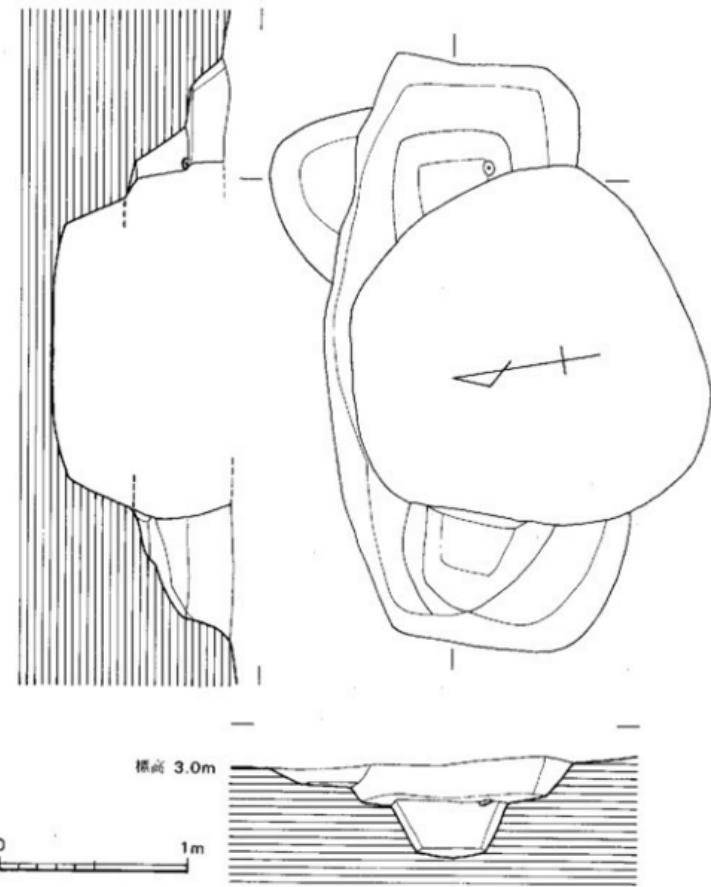
10基と小ピット3基が検出されている。それらの関係も不明であった。遺物も殆んど含まれていなかった。また唯一確実な遺構として、土留杭によって約半分が壊されてしまっているものの、A区東北隅より弥生時代

中期の単棺の小児葬棺墓(K-100)が検出されている。小土壇中に主軸を東南に向け埋置されており、蓋は見られなかった。

B区についてもA区と同様に、大小様々な14基の近・現代擾乱土壇によって乱され、遺構の遺存状態は良好とは言えなかった。しかしながら、ここでは弥生時代中期の合せ口式小児葬棺墓(K-99)1基と、方形周溝墓(第10号方形周溝墓)が1基検出されている。擾乱がひどく、しかも狭い調査区であっただけに、全容こそ不明であるが方形周溝墓の遺存していたことは幸いであった。

## (2) 第10号方形周溝墓

前述のとおり、第7地点B区で検出されたものである。当初、細長い調査区を横切るような溝が2本検出されたのであるが、主体部付近が擾乱を受けている上に埋土の色の違いがあつてそれぞれ時期の異なる古墳時代の溝かとも思われた。しかし本体調査時における平面図と付き



第95図 埋葬主体部実測図(1/30)

合わせた結果、この2本の溝に繋がる南辺の溝の存在が確認された。また中央部の擾乱を精査したところ、直径2m程度の井戸と思われる近・現代掘り込みに切られた土壙の主体部が検出されて、方形周溝墓であることが確実になった。

この方形周溝墓は北辺の周溝が調査区外にあるため正確な規模は述べられないが、現状では東西の内法は11mを計り、今回調査された方形周溝墓中では小規模な部類にはいる。東辺の周溝は幅1.3~1.5m、深さ0.55mで「V」字形、西辺の周溝は幅0.9m、深さ0.3mのやや脇のたるん

だ「V」字形をなしている。周溝からは遺物は全く検出されていない。また陸橋部の所在も不明である。主体部は隅丸長方形の土壙で二段の掘り方を持つ(註)。中央部の大半は近・現代の井戸様の掘り方に切られていて、幸うじて両端が残っているだけである。上部掘り方は長軸3.1m、下部掘り方はそれぞれ2.5m、0.6mを計り、主軸はS-80°-Eをとる。主体部の東側では上部掘り方は黒褐色砂が覆土となっており、下部掘り方は朱混じりの赤味の強い砂があつて、その上部では青灰色粘土ブロックが混じっている。主体部西側は上部掘り方は黄褐色砂が覆土となっているが、その中央部から下部掘り方にかけては、朱によって赤味の強いやや粘土質のある砂が充たされている。

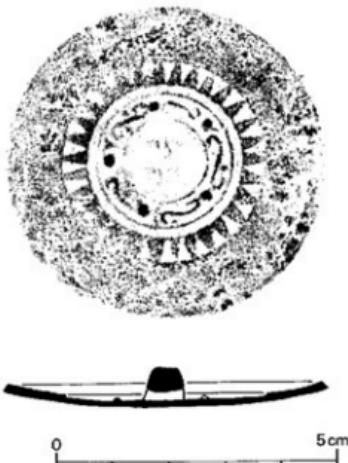
この主体部確認面のレベルは、すぐ東南位に接している弥生中期の小児寝棺墓(K-99)の上面より低い位置であることから、本米の掘り方上面はまだ高いレベルであったことが想像される。また西辺周溝端から西側にかけてやや傾斜しており、幾分削平を受けていることが考えられる。副葬品には、銅鏡一面と管玉一個があつた。いずれも、東端から検出されたもので、銅鏡は下部掘り方最上面から、鏡面を下にして出土し、管玉は埋土中から出土している。主体部の大半が破壊されているため、副葬品の全体であるか否かは不明である。

銅鏡は面径5.76cmを計り、完形である。五乳の間に虺龍文の簡略化されたものとも考えられる細長い逆S字状の文様をひとつづつ配している。さらに鈍曲文帯を経て平縁へと統く。現在のところ類例資料は見られないようである。仿製鏡であると思われる。表面の鏽は著しいが、鏡本体の質は良好である。また鏡面にはわずかであるが布痕が残り、棺材かと思われる木片が付着している。鑑定の結果、極柔軟な破片でヒノキ様材であるという。管玉は濃緑色の碧玉製で長さ2.25cm、径0.95cmを計る。両小口から穿孔している。外面は丁寧に研磨されている。

第10号方形周溝墓では土器等の時間的位置を明確にしうるような遺物の出土がなかったが、造営時期については他の方形周溝墓とほぼ同じく4世紀後半に求められよう。

本体部や今回のような細切れ調査では、方形周溝墓の全容の把握は困難であると感じた。

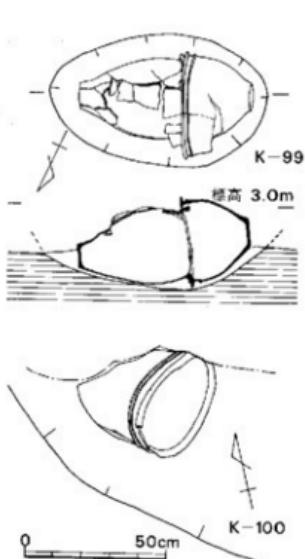
註 副葬銅鏡に木片の付着していることから、木棺を下部掘り方に埋置したと思われる。



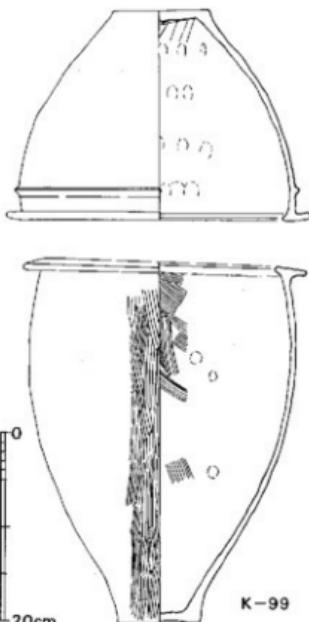
第96図 副葬変形文鏡実測図(1/1)



第97図 副葬管玉  
実測図  
(1/2)



第98図 第99・100号寝棺墓実測図 (1/20)



### (3) 寝棺墓

A・B区とも1基づつの小児用寝棺墓があり、いずれも弥生中期のものである。第99号寝棺墓は第10号方形周溝墓主体部の東南隅に接し、接口式である。上蓋には口縁下に一条の三角突帯をめぐらす鉢形土器を、下蓋には外面を縱方向の刷毛目調整した壺形土器を用い、壺形土器は本来日常炊器に使用されていたものと思われ、外面全体に煤が付着している。主軸はS-64°-W、埋置角度は10°である。第100号寝棺墓は、先に述べたとおり、単棺であるが上留杭に下半部を切られている。口縁下に二条の三角突帯をめぐらしており、体部外面は縱方向の刷毛目調整を行なっている。主軸はほぼS-52°-Eにとり、浅い土壤に埋置するが、角度は明確でない。



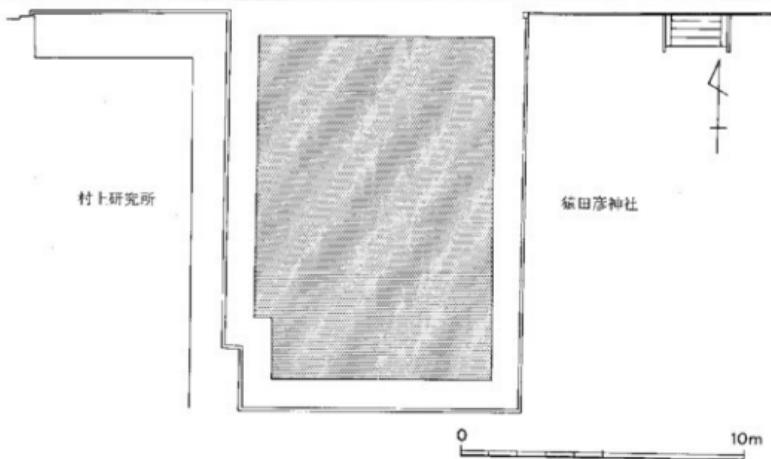
第99図 第99-100号寝棺墓実測図 (1/6)

#### 4 第8地点の調査

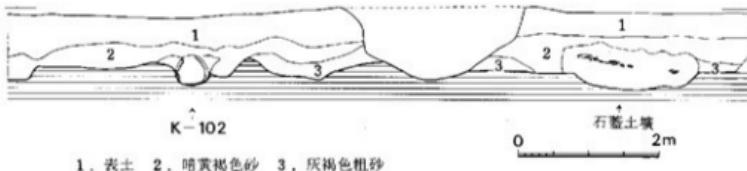
第8地点は第7地点と同じく高速鉄道藤崎駅舎の出入口建設にともなう調査地点である。藤崎バスターミナルの国道202号線を挟んだ南側猿田彦神社と村上研究所に接する民家立ち退き部、約140m<sup>2</sup>がその対象である。本体調査時のB区の南側にある。A・B区は中世以降の削平を受け、遺構は殆ど検出されていないが、道路南の猿田彦神社を挟んだ東側に近接する川庄氏宅地内では、明治45年に三角縁二神龍虎鏡を副葬する箱式石棺墓が発見され、更に溝柵区内に南接する村上氏宅地内でも大正6年に方格渦文鏡を副葬する箱式石棺墓、昭和5年にも箱式石棺墓、甕棺墓、弥生土器等が発見されており、第8地点の調査にも期待がもたれた。

調査は昭和55(1980)年5月29日に行なった。周辺のブロック塀に影響を与えぬよう1mの距離をあけ、表土層の除去を機械で行なった。しかしながら結果的に期待に反して、約30cm程の表土層の直下に地山である明黄褐色砂層が現われ、遺構は全く検出されず、わずかに2個体の成人用甕棺の破片が若干地山直上に散乱していたのみであった。宅地造成のための削平によると思われる。猿田彦神社がこのあたりでは標高が高く、調査区との比高差が約1mあって、プライマリーな土層を残していると考え、後日調査区の東側の土層図の観察と作成を行なった(第101図)。それによると、表土層は黒色土で若干の粘質を含み、その下に暗黄茶褐色の粒子の

国道202号線

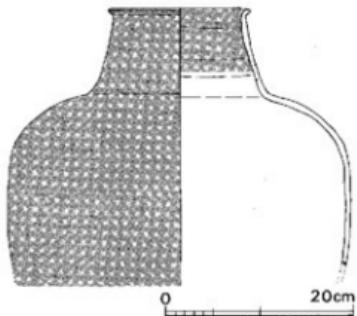


第100図 藤崎遺跡第8地点全体図(1/200)



第101図 第8地点東側土層実測図(1/80)

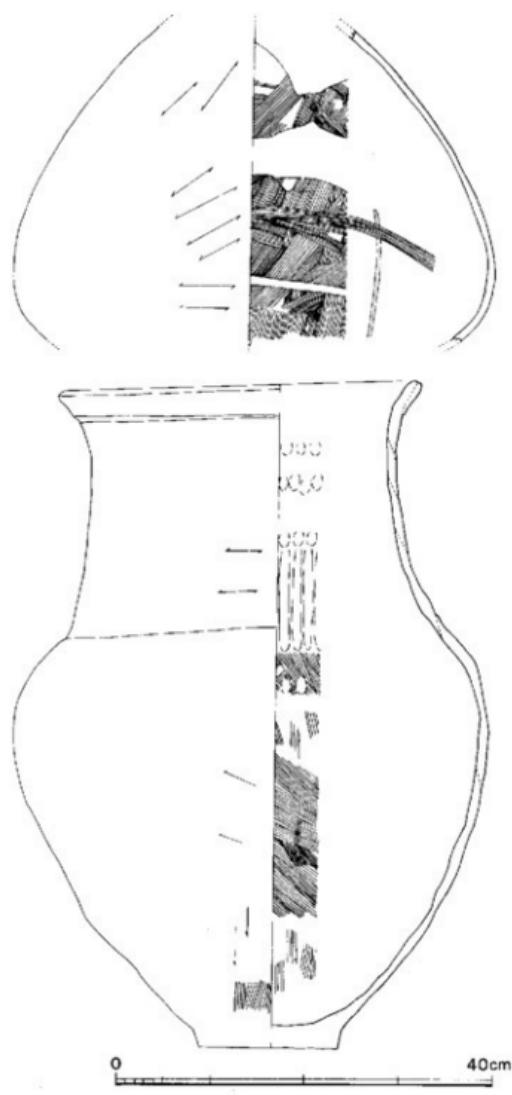
細かい砂層、一部灰褐色細砂層をはさみ、地山明黄褐色砂層へと移る。この土層観察壁には、2基の斎棺墓(K-101, 102)がかかり、いずれも暗黄茶褐色土から地山に掘り込まれている。また南側の一部に同様の掘り込みが見られ、中位に玄武岩の平石が水平にあって、石蓋土壤墓の可能性も考えられていたが、確証は得られなかった。これらはいずれも地表下約50~60cmのレベルにあり、村上氏宅地で昭和5年土取り中に発見された一連の遺構、遺物の出土レベル、地表下2~3尺にはほぼ一致して



第102図 第101号斎棺実測図(1/6)

いる。このことから猿田彦神社をはじめ、周辺の削平を受けていない部分には、今なお重要な遺構が包蔵されていることは想像に難くない。

出土した斎棺墓は、壁面検出の2基のみが実測可能なものであり、それらについて簡単に説明する。第101号斎棺墓は、弥生初頭の夜白式の丹塗壺形土器を用いた斎棺で、中に人骨細片があった。体部は肩が張り、頸部はやや小さくすぼまりつつ口唇部がわずかに開く。下半は欠失している。外面は全面、内面は頸部下半まで丹塗りで、ヘラ研磨後ナデ調整を行なっている。第102号斎棺墓は、上下斎棺に板付II式に比定される壺形土器を用いている。上斎は頸部を打ち欠いた壺形土器である。下斎は、胴部最大径が上位にあるがやや撫で肩に近く、頸部はややすぼまりつつ、口縁部にかけて外反する壺形土器である。このうち夜白式の斎棺墓は、藤崎遺跡の各種の墓制中最古の一群であって、藤崎遺跡形成の初源を探る上で重要な資料と言える。



第 103 図 第 102 号 銅 罐 実 検 図 (1/6)

## IV おわりに

藤崎遺跡における今回の第6・7・8地点の調査では、方形周溝墓10基、住居跡7軒、土壙・土壙墓36基、豪棺墓4基などを検出した。その詳細については「III. 調査の記録」すでに述べてきたとうりである。以下、各遺構について豪棺墓、土壙・土壙墓、住居跡、方形周溝墓の順で簡単なまとめを行ないたい。

**豪棺墓** 今回の調査で検出した豪棺墓は予想に反して4基にすぎなかった。そのいずれもが第7・8地点からの出土である。このうち第101・102号豪棺墓が弥生時代前期、第99・100号豪棺墓が中期中葉に属する。特に第101号豪棺墓は夜白式の丹塗り壺形土器を棺に使用しており、弥生時代を通じて200基以上の豪棺を中心とした共同墓地を形成するこの遺跡の初源的なものとして把握できる。

**土壙・土壙墓** 土壙および土壙墓は一括して述べた。副葬品を伴った確実な土壙墓は第10号墓だけである。その時期は13世紀代と考えられる。他に形態からして土壙墓と思われるものに第1・2・3・4・9・11・13号土壙があげられる。いずれも伴出遺物がなくその時期の決定はしがたいが、第1～4号土壙は第3号方形周溝墓の東南にまとまっており、第3号方形周溝墓と関係をもつた土壙墓の可能性もある。しかし、第9号土壙のように第10号墓を切るものもあり、すべてが古墳時代前期のものとは認定しがたい要素もある。上壙は長方形あるいは橢円形の平面を呈するものが多く、第36号土壙のように方形周溝墓から切られるもの、また第34号上壙のように方形周溝墓とその時期が余り変わらないものから方形周溝墓形成以後のものまである。その性格は明らかにしがたいが、貯蔵穴的なものではないと考えられる。土壙・土壙墓に確実に弥生時代に属するものは認められなかった。

**住居跡** 7軒検出したが、第2・6号住居跡を除いた5軒の残存状況は極めて悪い。うち第7号方形周溝墓に切られた第7号住居跡が弥生終末期に属し最も古い。この時期と大差がない住居跡は第4地点のM区でも5軒検出されている(註1)。第6号住居跡は第7号方形周溝墓の凸状部内に位置するが、出土した土師器は外米系統のものを含まず、方形周溝墓より先行するものと考えられる。一番新しい時期の住居跡は第1・2号住居跡で、奈良時代はじめ墳の所産と考えられる。ともに土製甕が出土している。この時期の遺構は第4地点では確認されておらず、第7号方形周溝墓周溝上の土器溜りの一群の須恵器・土師器とともに藤崎遺跡に新たな時期の宮みを見出したことになる。残りの第3・4・5号住居跡は古墳時代後期のものと考えられる。しかしこれの時期においても、第6地点内での住居跡のあり方は1～2軒の単発的なものにすぎず、集落をなす所までに至っていない。弥生時代終末期の住居跡は前述したように第4地点のM区付近に集中し、集落をなすと考えられるが、方形周溝墓に伴う住居跡または集落は現

号 数	形態・規模 (m)							主 体 部								
	周溝	東西幅	南北幅	西溝幅	東溝深	後壁厚	前壁厚	埋出上端物	構 造	主體方位	副 品	その他の 事項				
1	7.5±e (8)	5.6±e (8)	0.5~0.7	0.1~0.4	東北崩 東南凹	1.3	?	土器等3	1	七 碗	N-27.5°-W	ガラス丸玉6 貝玉1				
									2	土 壁	N-5°-W					
									3	土 壁	N-85.5°-W	赤色顔料				
	9.0±e (10)	7.5±e (10)	0.7~1.4	0.4					4	箱式石棺	N-82°-E	板鏡3 赤色顔料 鏡位東				
									5	箱式石棺	N-85.5°-E	赤色顔料 鏡位西				
									1		N-84°-E					
2	7.0±e (8)	5.6±e (8)	0.6~1.2	0.2~0.4	西北崩 土器等細片	0.9	?		2	甕 壺	N-85°-W	赤色顔料				
									3	西式石棺	K-24°-W					
									1							
3	10.5±e (11)	9.3±e (10)	1.0~1.5	0.3	西中央	4.0	土器等3	木 棺	K-68°-W	ガラス平7以上 刀子1	赤色顔料 鏡位東					
	13.5	11.5±e (12)	0.8~1.8	0.3	西中央	4.3±e	土器等4		2	甕 壺	N-86°-E					
4	9.1	6.8±e (8)	1.1~1.2	0.4			土器等4以上	木 棺	N-85°-E	刀子2						
5	9.5	9.0	0.8~0.9	0.2	西中央	0.9	土器等細片	木 棺	N-84.5°-W	刀子	赤色顔料 鏡位東					
6	22.0	22.5	2.5~5.5	0.15~0.75	西中央	4.5	土器等5以上		H-77.5°-W	三角錐2 二重筒2 单筒2 箱式石棺 鐵入刀・劍 刀子・劍	赤色顔料 鏡位東					
7	20.8	18.0±e (21)	2.2~3.3	0.6~1.1	西中央	1.8	土器等5以上 瓦文鏡1	木 棺	N-84.5°-W	刀子1 鐵片	赤色顔料					
8	11.5	11.0±e (11.5)	1.0~2.0	0.4~0.5			土器等4以上	木 棺	N-79°-E							
9	19.0±e (16)		1.3~2.3	0.4~0.5	西中央	1.0	土器等7以上				木 体 木 板					
10	12.5		1.3~1.5	0.55				木 棺	N-78°-W	变形文鏡1 貝玉1	赤色顔料					

第3表 方形周溝墓一覧表

在の所藤崎遺跡内で見出すことができない。

**方形周溝墓** 今回の調査で検出した方形周溝墓は第6地点9基、第7地点1基の合計10基である。周溝が発掘区外に延びたり、後世の遺構、特に近・現代の擾乱坑によって破壊されたり、また現地表面から遺構面までの距離が浅いため削平が著しかったりして、その検出状態は決して良好といえるものではなかった。しかし幸いなことに第9号方形周溝墓を除いた9基から埋葬主体部を検出することできた。

これまで福岡県内で調査された方形周溝墓がほとんど丘陵もしくは台地上に造営されており、藤崎遺跡のように古砂丘上に立地するものは例をみなかった。そのため、発掘開始当初は、丘陵・台地に比べより埋没しやすくまた壊われやすい砂丘上に周溝で区画した墓地が形成されるのかどうか多少の懐疑があった。しかし最終的には10基という群集した方形周溝墓を検出するに至った。最近になって、藤崎遺跡と同じように砂丘上に占地する方形周溝墓は、福岡市の博多遺跡群で検出され(註2)、また佐賀県唐津市でも発見されているとく。

検出した10墓の方形周溝墓は、その規模で約8~22mと異なるものの、各辺をほぼ東西南北にもつ。第6地点の9基は、発掘区の北側で東西に列をなすもの(第3・4・5・7号墓)と南側で東西に列をなすもの(第1・2・6・8・9号墓)に大別できる。さらに南側列では第1・2号墓と6号墓の間に約20mの空白部分があり、第1・2号墓が分離されたようになっている。第7地点で検出した第10号墓は位置的には南側列にあたる、もしこの第10号墓が第6・8・9号墓と一緒にをなすと想定すれば、第9号墓との約30mの間にさらにもう1墓の方形周溝墓が存在する可能性がある。北側列では第4・5・6号墓がかなり近接して作られており、その間隔は0.5~1.5mである。第3号墓は第4号墓と約4.5mの間隔をもつ。南側列の第1号墓と第2号墓は約4.5mの間隔をもって作られている。南側列の第6・8・9号墓は周溝の切り合い状況がみられる。第8号墓が作られた後、西辺を第6号墓が、東辺を第9号墓が切っている。第6号墓と第9号墓の先後関係は切り合いの状態からは確定しえない。

これらの周溝墓は上面の後次の削平が著しく、封土の有無について確認が困難であった。上面の残りが比較的良好であった第3号墓では、旧地表面から主体部および第1~3号周溝が掘り込まれておらず、封土に相当するものは見当たらなかった。また第9号墓が切れる発掘区の東壁では、旧地表面上に厚さ約20cmの砂層があり、第9号墓の台状部を覆っていた。これは同じ土色・土質による一層であり、つき固められた痕跡もなく、状況的には周溝から掘り上げた砂を堆積させた程度のもので、意識的な封土というには問題があると考えられる。別の観点から封土の有無についていえば、第1・2号墓は削平の度合が激しく一部埋葬主体部がむき出しの状態になっていたが、残りのものは一定程度の削平を受けているにもかかわらず埋葬主体部は深く掘り込まれ完全に残っていた。これは地山中に深く埋葬主体部が設けられていることを示し、封土がなかったことをうかがわせる。福岡県内で方形周溝墓(円形周溝墓も含む)として報告され

た遺跡は30ヶ所近くにおよぶが(註3),封土が確認されている例は極めて少ない。残りのいいものとして峰山遺跡の4基の周溝墓(1基が方形、残りは円形)の1~1.5mの封土がある(註4)。

10基の方形周溝墓はその規模から、幅10m以下の小型のもの(第1・2・4・5号墓)、幅12~16mの中型のもの(第3・8・9・10号墓)、幅21~22mの大型のもの(第6・7号墓)の3つに大別できる。そのうち第1号墓と第3号墓には周溝の作り替えがみられる。ともに周溝どうしの切り合いにより先後関係が把握でき、新しい周溝が古い周溝の外に作られている。第1号墓では北辺は重複するものの、東辺は1号周溝の外0.4mの所に2号周溝がめぐる。また第3号墓では、1号周溝の台状部側から0.5~1.0m外に1号周溝ときれいに重複して2号周溝が設けられている。これは埋葬主体部のあり方からみれば、台状部の拡張という目的による周溝の作り替えではなく、墓域の区画をなす当初の周溝が砂により埋没したため新たに周溝が作り直されたものと考えられる。第1号墓の場合は複数の埋葬主体部があるので、台状部への埋葬のある段階で周溝が作り替えられた可能性が強い。しかし第3号墓の場合は台状部には1つの埋葬主体部しかなく、1号周溝中の第2主体部の軽棺も周溝底から墓壙をあけ埋置したものである。とすれば1号周溝が埋設した後2号周溝が作られたという事実は、一定期間第3号墓が“管理”されていた状況を示していると考えられる。また2号周溝中には供献の土師器が出土しており、2号周溝を設けた際この墓地に対する新たな祭祀行為をしたものと思われる。第3号墓には第1号埋葬主体部を囲繞して3号周溝がさらにめぐっている。この周溝がどのような意味をもって作られたものか明確にしがたい。この種の周溝の作り替え、すなわち結果的には台状部の拡張が他の遺跡の方形周溝墓でもみられるのか、それとも砂丘上に立地したこの遺跡特有のものなのか、今後の類例を待ちたい。

周溝の形態は方形をなすものがほとんどであるが、第3号墓のように陸橋部のある西辺が外に開き気味になるものや、第8号墓のように外側が丸みをおびるものがある。また第6号墓も外側が丸くなるが、これは後次的な崩れによるものと思われる。陸橋部は西辺に中央部に設けられるものが最も多く、第3・6・7・9号墓の4基がこれにあたる。第5号墓は西辺中央部の他に東北隅、東南隅にも周溝の途切れる部分があるが、この一帯は削平が著しい所で、東辺周溝の最も深い部分だけが残存したと思われ、元来は西辺中央部のみの陸橋部をもっていた可能性が強い。また第8号墓も西辺中央部に陸橋部を有していたのではないかと考えられる。第5号墓も考え合せれば、この種の陸橋部は幅0.9~4.8mを計る。この陸橋部幅は規模の大小と比例しない。第1号墓の1号周溝は東北・東南隅に、第2号墓は西北隅に周溝のとぎれる部分をもつ。また第1号墓の2号周溝および第4号墓・第10号墓には周溝のとぎれる部分が造構検出範囲内ではない。周溝幅・深さは第6・7号墓が大きいが、残りのものは大差はない。断面形は第7号墓と第10号墓が「V」字形に近い他は「U」字状である。

埋葬主体部はかなり変化に富んでいる。第1号墓は台状部に土壙3、箱式石棺2の合計5基

の埋葬主体部をもつ。そのうち2基の土壙は主軸方位をほぼ南北にとり、残りの3基および他の周溝墓の埋葬主体部がほぼ東西に主軸方位をとると大きく異なる。また埋葬主体部の切り合いかみられ、これは周溝の作り替えと関係するものかもしれない。遺体の頭位は2基の箱式石棺で確認でき、第4号が東、第5号が西であった。第2号墓も複数の埋葬主体部を台状部に設ける。中央に位置する第1号は削平が著しくその構造は不明であるが、北側で検出した第2号は腰棺であった。また第2号墓の周溝外には1基の石棺があり、この周溝墓と関連した埋葬施設と考えられる。第3号墓は台状部中央に隙縫部と平行して設けられた木棺、周溝中に腰棺の埋葬施設をもつ。中央部に位置する第1号は、長方形土壙の両小口に粘土を置き、その間に木棺を置いたものと想定される。第2号の腰棺は小型のものである。また東南周溝外に位置する4基の土壙もこの周溝墓に伴う埋葬施設の可能性がある。第1号の遺体頭位は東と考えられる。第4～8・10号墓は、いずれも東西方向に主軸をとった埋葬主体部を台状部中央に置いた、一周溝墓一主体部のものである。その埋葬施設は第4号墓が粘土塗、第5・7・8・10号墓が上面近くに粘土帯をめぐらせた木棺、第6号墓が組合せ式木棺である。木棺のうち棺材が残っていたのは第6号墓と第10号墓だけで、その樹種はヒノキ様材であった。また遺体の頭位が確定なものは第5・6号墓で、ともに東であった。以上述べてきた埋葬主体部には赤色顔料を使用する例が多く、第1号墓の第2号主体部、第3号墓の第2号主体部、第4号墓、第8号墓にだけそれが認められなかった。

検出した15基の埋葬主体部中8基から副葬品の出土をみた。周溝墓として副葬品をもたないのは第2号墓と第8号墓の2基にしかすぎない（第9号墓は埋葬主体部未検出）。これは副葬品出土例が少ないといわれる方形周溝墓にあって極めて特異的なものである（註5）。第1号墓第1号主体部からはガラス丸玉6・管玉1、第2号主体部からは鉄製摘鍊3が出土した。棺外副葬品である摘鍊は、弥生終末期から北部九州でみられるものと変る所がない（註6）。第3号墓第1号主体部からは鉄製刀子1、ガラス連玉7以上が出土した。ガラス連玉は最高5個連なる。この種のガラス小玉は長崎県対島洲遺跡で発見されている（註7）他、福岡県平原遺跡でも出土しているときく。第4・5・7号墓からは刀子が1～2点出土した。第6号墓からは三角縁二神二車馬鏡とともに鉄製の素環頭大刀・鉢・刀子・鎌が出土した。三角縁二神二車馬鏡は「陳氏作」以下23文字からなる銘文をもち、岡山県湯追車塚古墳、山梨県銚子塚古墳、群馬県三本木で同範鏡の出土例がある（註8）。方形周溝墓からの三角縁神獸鏡の発見例は初めてのことではあるが、その鏡片は筑紫野市蛭山遺跡で出土しているし、また甘木市大願寺遺跡からも出土した可能性が強いときく（註9）。第10号墓から出土したのは小型彷彿鏡と管玉であるが、前者は棺外、後者は棺内からの出土であった。彷彿鏡は5乳の間に眩龍文の簡略化された逆S字状の文様をおき、その他に鋸歯文帯をめぐらせたもので類例をみない。

供獻と考えられる遺物はすべて周溝内から検出し、台状部からの出土はみられなかった。そ

のいずれもが周溝底より浮いた状態で出土した。しかし、周溝土層中の1層に含まれ、また出土遺物の高低差もあまり大きくなかった。各周溝墓によって遺物の出土量は異なり、第2・5・10号周溝墓のように明確に供獻遺物といえるものがないものから、第7号墓のように40点近くものものまであるが、3~5点ぐらいのものが多い。出土場所は第1号墓が北辺、第3号墓が南辺、第6・9号墓が西辺、第7号墓が東辺に集中する傾向があるが、別の辺の周溝からも出土している。遺物としては第7号墓から珠文鏡が1点出土した以外はすべて土器である。土器は外来系のものが主体をなし、在地系のものは少ない。それも前者が完形に近い状態のものが多いのに対し、後者は破片で出土するものが多い。赤色顔料を塗ったり、穿孔をもうけるものも外來系の土器がほとんどで、周溝墓に対する祭祀行為が外米系の土器を用いてなされたことをうかがわせる。この外來系の土器は近畿地方から影響を受けたものと他、山陰地方の影響を強く受けたものが多い。第7号墓の陸橋部北側周溝から出土した斐形上器（第52図・1）の内部には赤色顔料がつまっていた痕跡がみられる。

次に10基の方形周溝墓の造営の順序について考えてみたい。先述したように周溝の切り合いで、先後関係が認められるのは、第8号墓（古）→第6号墓（新）、第8号墓（古）→第9号墓（新）の2つだけである。方形周溝墓の構造あるいは出土遺物からみれば、南側列の西に設けられた第1号墓、第2号墓が最も古い時期に造営された可能性が強い。台状部内に複数の埋葬主体部をもち、それも箱式石棺・槨棺・土壙という施設をとること、また陸橋部が周溝の隅に設けられることなど第3~10号墓に比べ大きく異なる。しかし、第1号墓で新たに作り替えられた2号周溝から出土した土器は、他の周溝墓の造営時期まで埋葬が継続して行なわれていたか、"管理"されていたかの状況を示唆している。北側列では一番西に造営された第3号墓が古いと考えられる。周溝の陸橋部は西辺の中央に設け、それと平行して台状部中央に埋葬主体部を作っている。埋葬施設は木棺で、粘土を用い棺を固定する方法がとられる。これらは第4~10号墓と共通する所であるが、周溝内に埋葬主体部をもつことでは異なる。第1・2号墓に次いで造営されたものと考えられる。ただこの周溝墓も周溝の作り替えがみられ、出土土器に時期差が認められ、台状部内の埋葬主体部が1基であることを考慮すれば、その期間"管理"されていたことをうかがわせる。第3号墓に次いで南側列の第8号墓が形成されたと考えられる。これに至って1周溝墓1埋葬主体部となる。以後北側列では第4・5・7号墓が、また南側列では6・9号墓が造営された。その先後関係は明確にしがたいが、その配列をみれば西から東に向ってあまり時期をおかずして造営された可能性が強い。第10号墓もほぼ同時期に形成されたと考えられる。周溝から出土した土器は祭祀に用いられたものでその特殊性を考慮せねばならないが、その時期に大きな幅はないと考えられる。武末純一氏による早良平野における古式土師器の編年（註10）に従がえば、I B期からII A期、すなわち布留式の古い段階から、それにやや遅れた時期に併行するものと考えられる。この比較的短い期間にはほぼ西から東に向

って、外形・内部構造に変化をみせながら方形周溝が造営されたことになる。

藤崎遺跡では、今回の調査で検出した10基の方形周溝墓と時期が変わないと考えられる墳墓として第1地点および第2地点で発見された箱式石棺墓がある(註1)。第1地点の箱式石棺からは彷彿三角縁二神龍虎鏡と索環頭大刀、第2地点の箱式石棺の1基からは方格溝文鏡が出上している。今回の調査例からみればこれらも方形周溝墓であった可能性が強い。ともに箱式石棺という在地的な埋葬施設をもち、第2地点ではそれが複数だったと考えられる。出土土器がないことから明確な判断はしがたいが、箱式石棺墓という埋葬主体部のあり方からすれば、第1号方形周溝墓とその形成時期は大差ないと想定される。とすれば藤崎遺跡における方形周溝墓群の範囲は、西が第1号墓、東が第10号墓、北を一応第6地点の北側列に求め、また南は立地の関係から第1・2地点あたりと推定できる。第6・7地点の方形周溝墓の位置関係から考えれば、この範囲内に少なくとも20基以上の方形周溝墓が存在したものと想定される。

最後にこの方形周溝墓群の性格についていくつかの問題点をあげてみたい。第6・7地点では1周溝墓複数主体部→1周溝墓1埋葬主体部という過程がほかどれる。1周溝墓1埋葬主体部のものも、その外形規模からすれば第6・7号のように20m以上の大型のものとそうでないものがあり、また第6号墓のように三角縁二神二車馬鏡をはじめとした他と隔離した副葬品をもつものがあり、その規模・内容に大きな差異が認められる。これを特定家族墓から特定個人墓さらにより強力な首長的個人墓といった発展段階としてとらえることができるかどうか。前述したように第1号墓は1周溝墓1埋葬主体部のものが造営される時期まで埋葬もしくは“管理”が継続されてなされており、また第3号墓も同じ状況がみられる。方形周溝墓群がかなり短い時期に形成されたこと、またその配置なども考えあわせれば、先述した発展段階を内包しつつも、かなり特定な集団の共同墓地的な様相が強いのではないかと思われる。この特定集団中の突出した存在が第6号墓や第1地点の箱式石棺墓として現われていると考えられる。この時期福岡平野や糸島平野には前方後円墳が出現しているのに対し、藤崎遺跡の位置する早良平野ではそれをみない。その中にあって三角縁神獸鏡を出土したこの方形周溝墓群の位置づけは大きな問題であるが、かならずしも早良平野にその存立基盤を求める必要はないと思われる。具体的な例証を欠くがその立地からして海路を通じて交易を行ない、また中央政権とも関係の深かった経済的に富んだ特殊な集団の墓地であった可能性も考えられる。今後さらに検討すべき問題であろう。

- 註(1) 浜石哲也(編)『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1980
- (2) 福岡市教育委員会が1981年に発掘調査。割竹形木棺を埋葬主体部となし、鐵剣などの副葬品を伴う。5世紀前葉のものと考えられる。柳沢一男氏御教示。
- (3) 中村勝氏作成の「福岡県方(円)形周溝墓・方墳地名表」(孔版)1981による。
- (4) 小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相」古文化叢書 第4集

- (5) 澤田大多郎「方形周溝墓の展開」『東アジア世界における日本古代史講座』第1巻 1980  
山岸良二『方形周溝墓』 1981
- (6) 川越哲志「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集』 1977
- (7) 高倉洋彰(編)『糸島遺跡』美津島町文化財調査報告書 第2集 1980  
4号箱式石棺から3通のものが出土している。
- (8) 小林行雄「三角縁神獸鏡の研究—型式分類編—」『古墳文化論考』 1976  
樋口隆康『古鏡』 1979 によれば、さらにもう一面個人蔵のものがある。
- (9) 柳出康雄氏の御教示による。
- (10) 武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」古文化談叢 第5集 1978
- (11) 島田寅次郎「鹿崎の石棺」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯 1925  
中山平次郎「古式文部鏡鑑沿革」考古学雑誌 第9巻第3号 1918  
鏡山集「鹿崎累考」史潤 第55輯 1953

# 図 版



鶴多崎





1



2

藤崎第6地点全景

1 東より

2 西北より



第1号 方形周溝墓全景



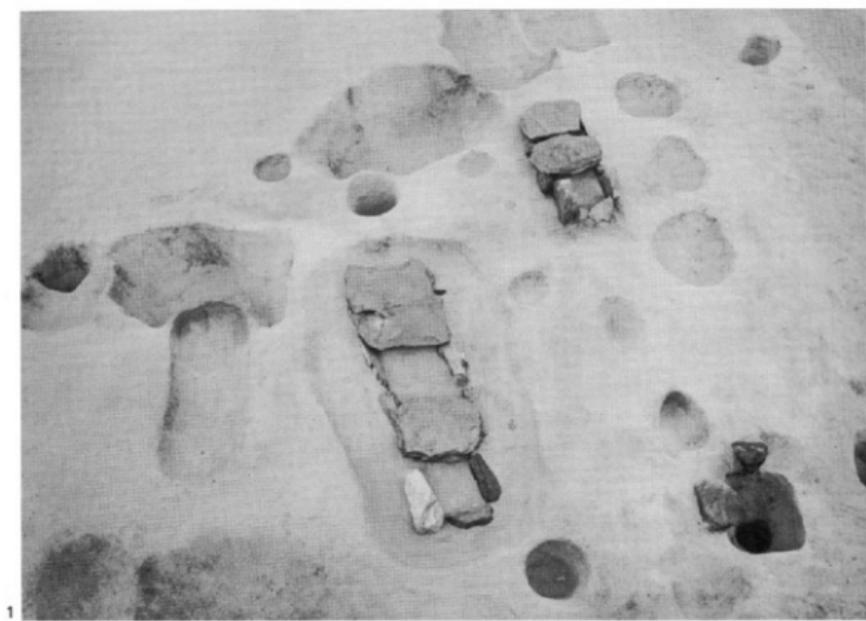
1

2



1 2号周溝

2 2号周溝内土器出土状况



1 埋葬主体部全景

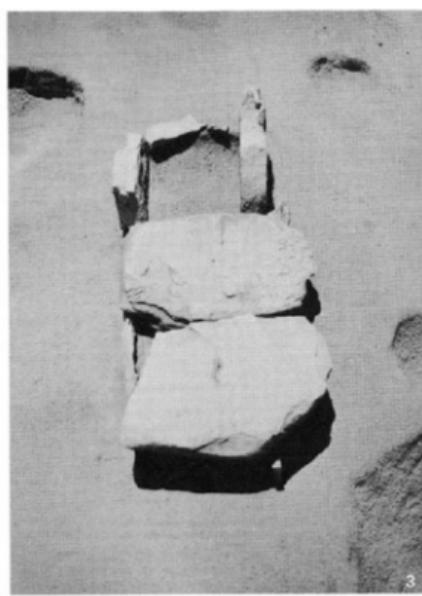
2 第2・3・4号主体部



1



2



3



4

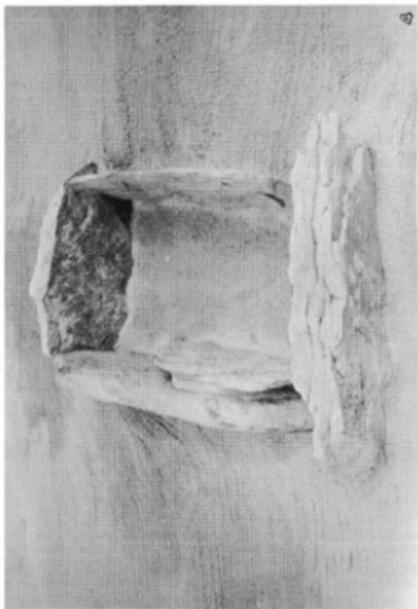
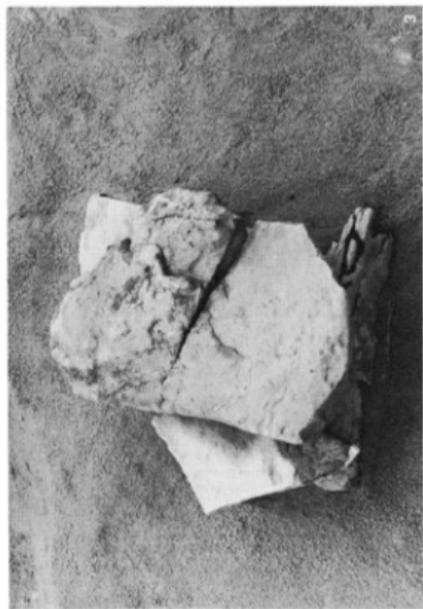
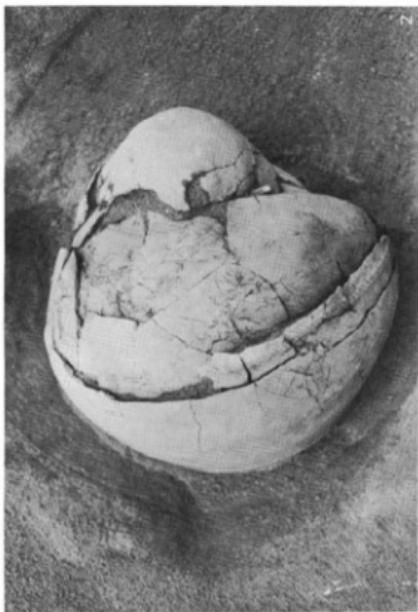
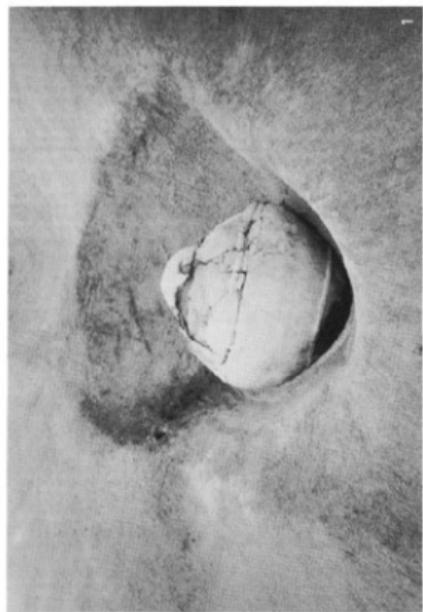
1 . 2 第4号主体部

3 . 4 第5号主体部



1 第2号方形周溝墓全景

2 第1号主体部



1.2 第2号主体部

3.4 固溝外石棺蓋



第3号 方形周溝墓全景

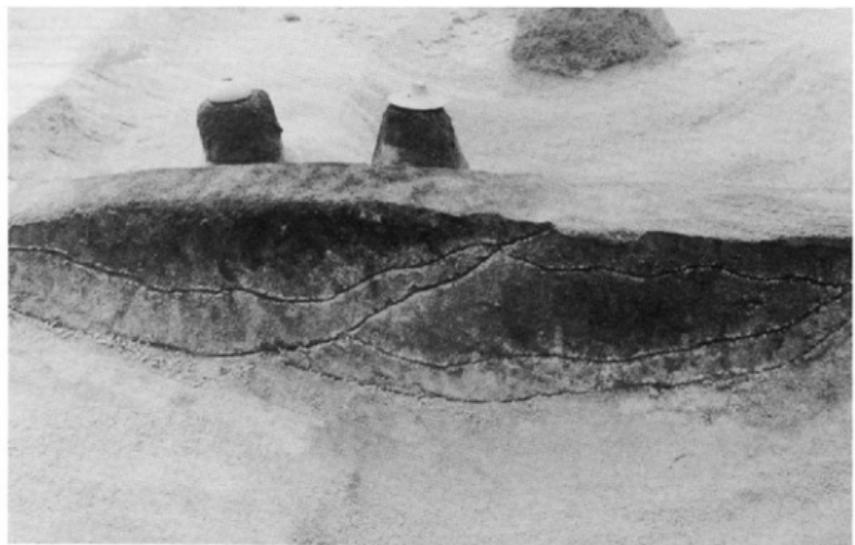


1

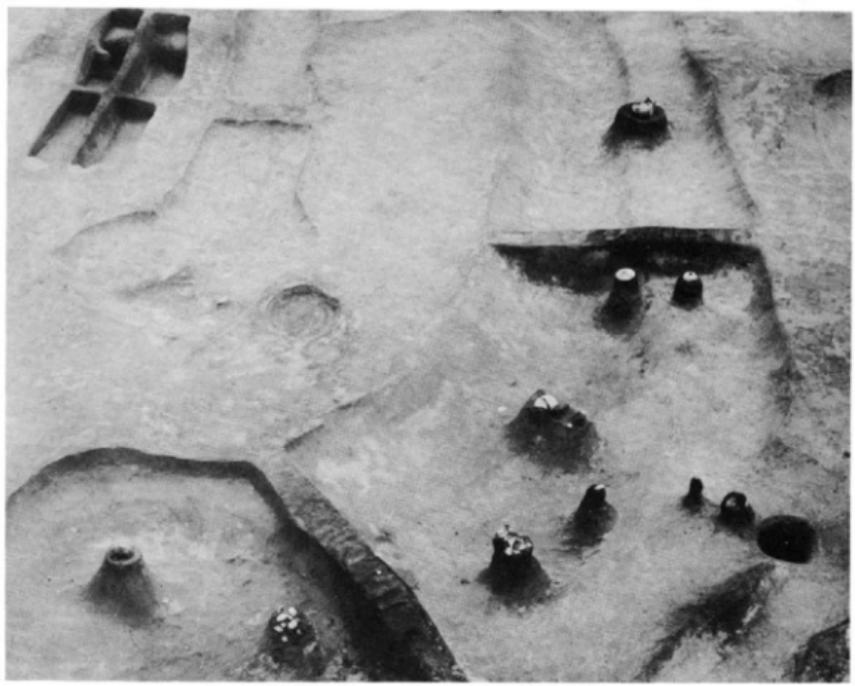


2

第3号方形周溝墓 1 2号周溝発掘時 2 完掘時



1



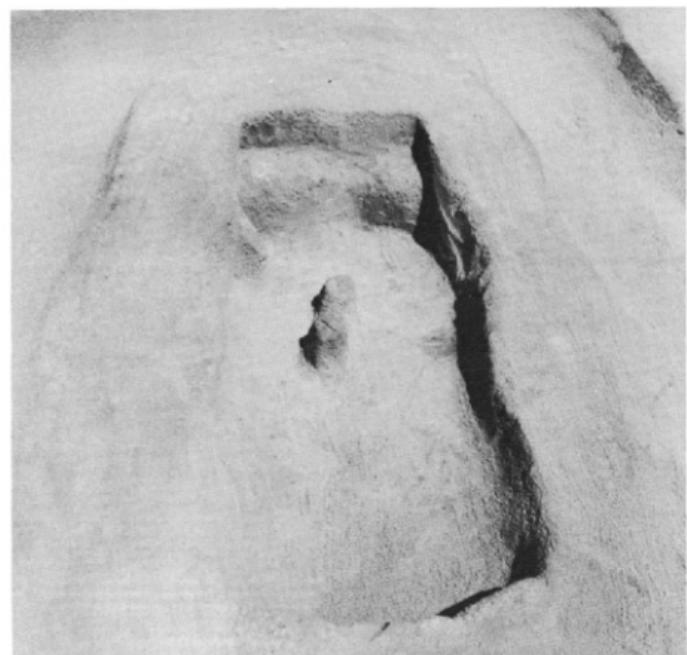
2

1 周溝土層斷面

2 周溝內土器出土狀況



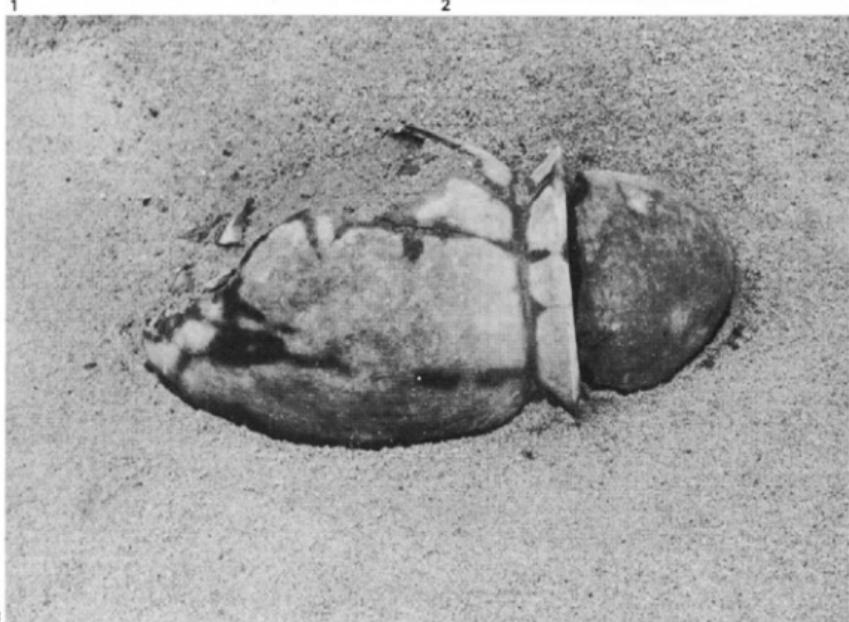
1



2

1 3号周溝と第1号主体部

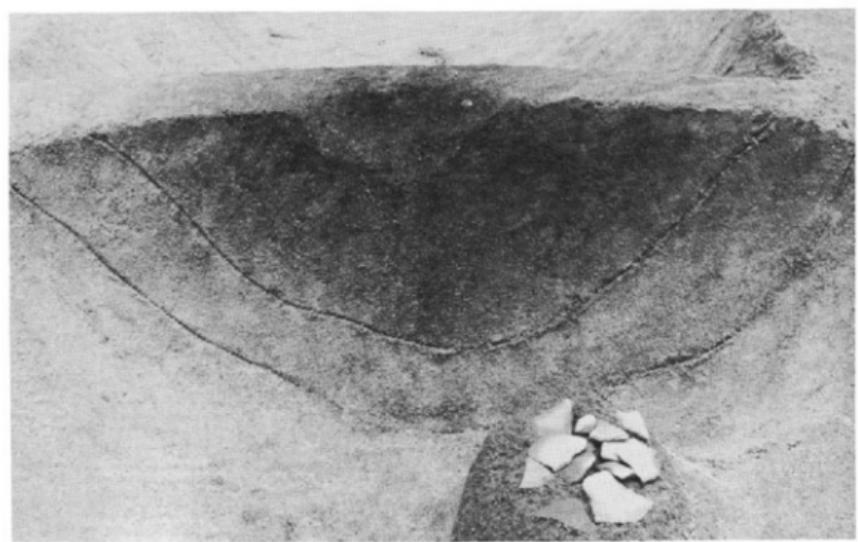
2 第1号主体部



1.2 第1号主体部副葬品出土状況 3 第2号主体部



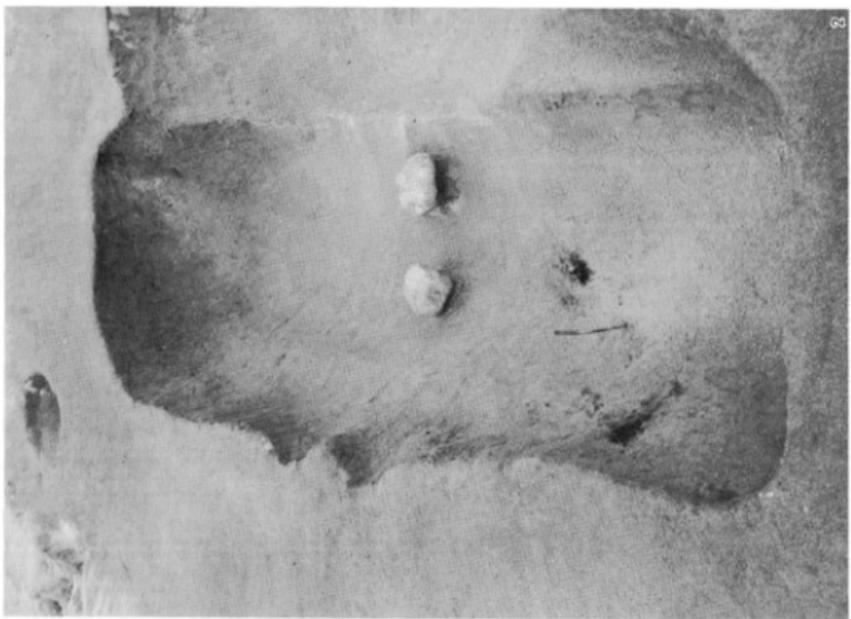
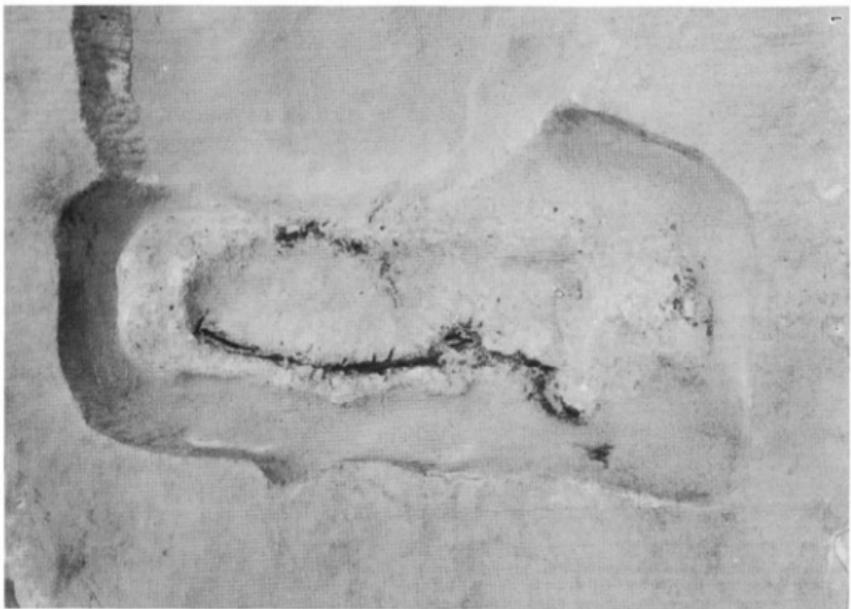
1



2

1 第4号方形周溝墓全景

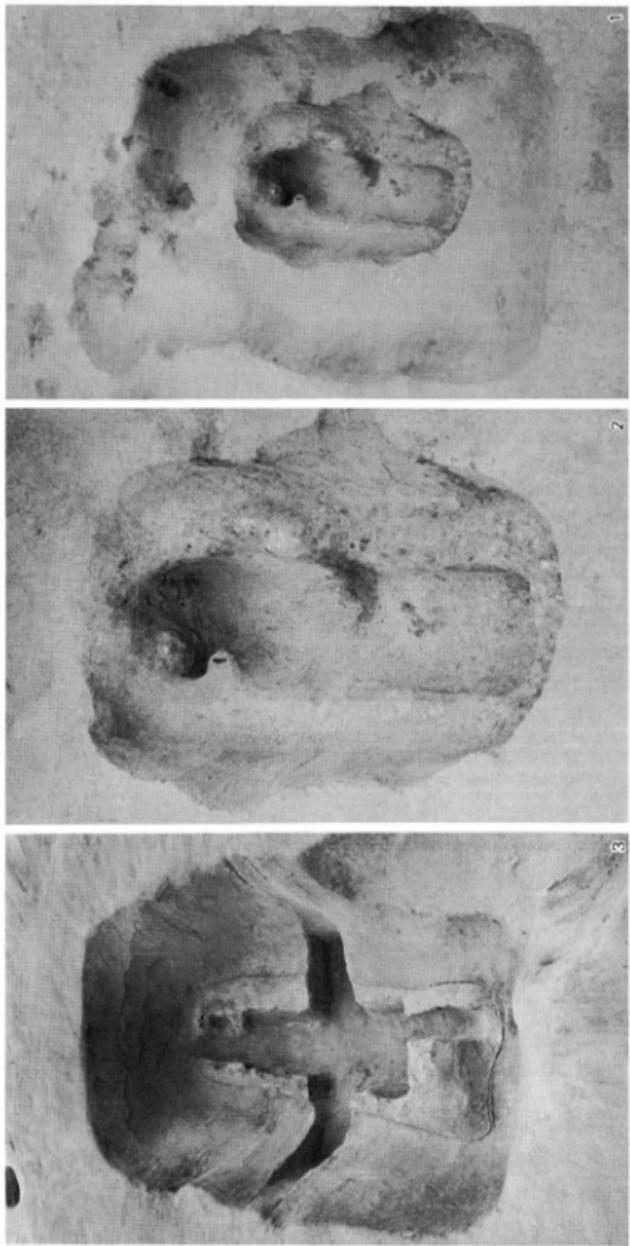
2 周溝土層断面



埋葬主体部 1 埋葬部 2 掘り方

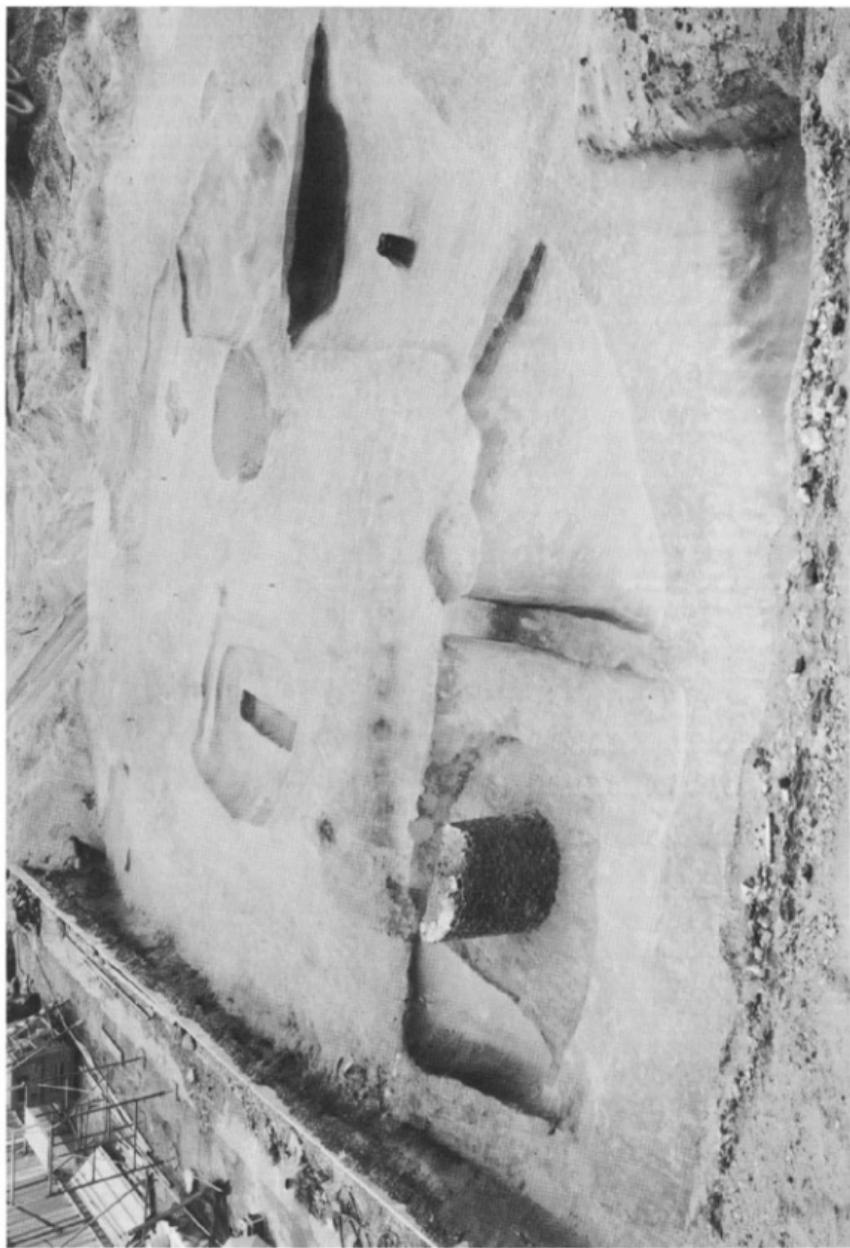


第5号 方形圓溝墓全貌



埋葬主体部 1 墓壙 2 埋葬部 3 掘り方

第 6 号 方 形 周 沟 墓 全 景





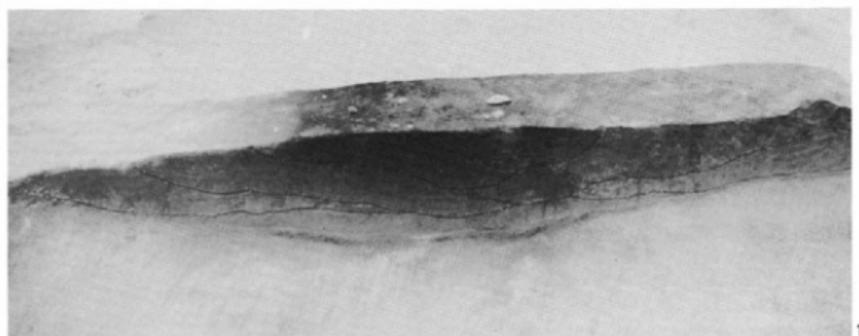
1



2

1 第6号方形周溝墓遠景

2 埋葬主体部と北辺周溝



1



2



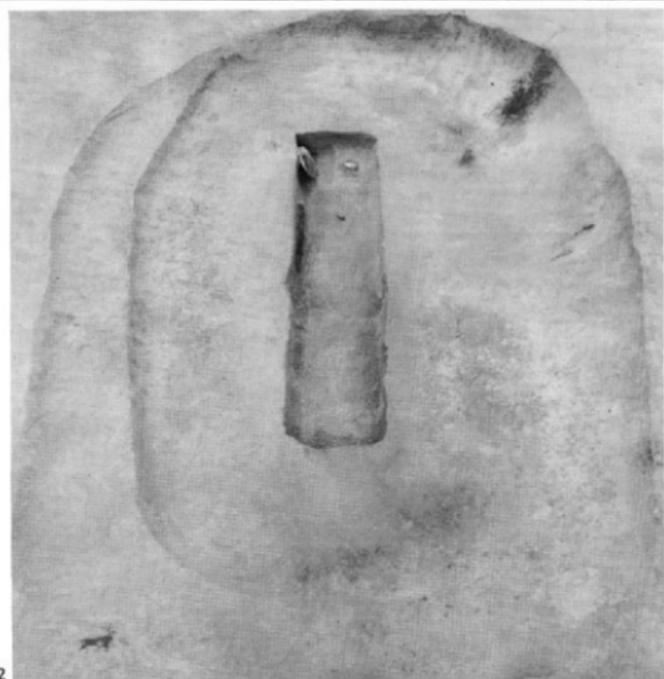
3



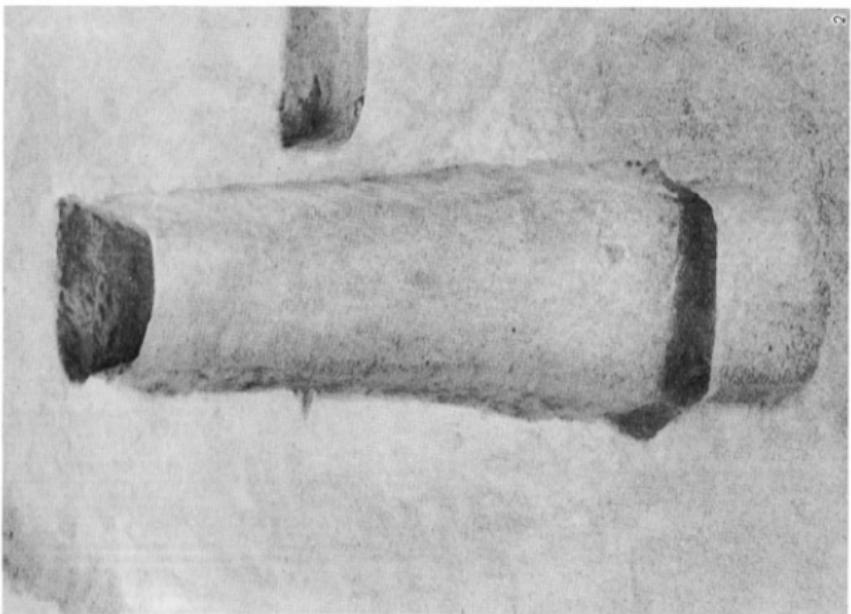
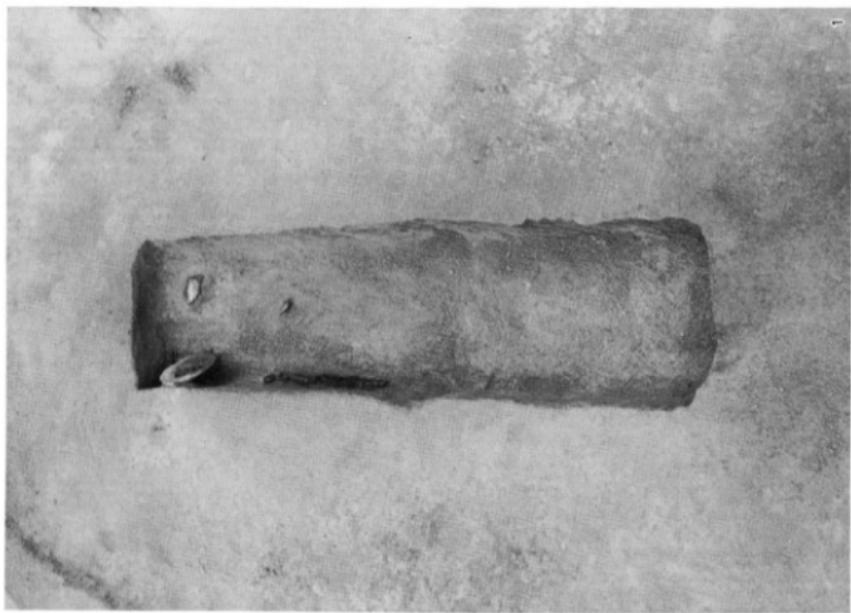
4

1.2 周溝土層断面

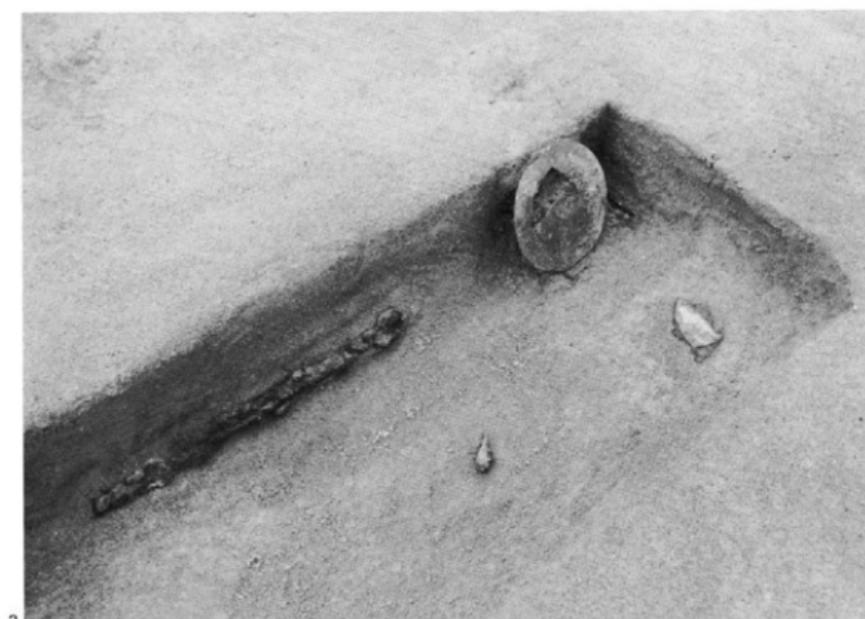
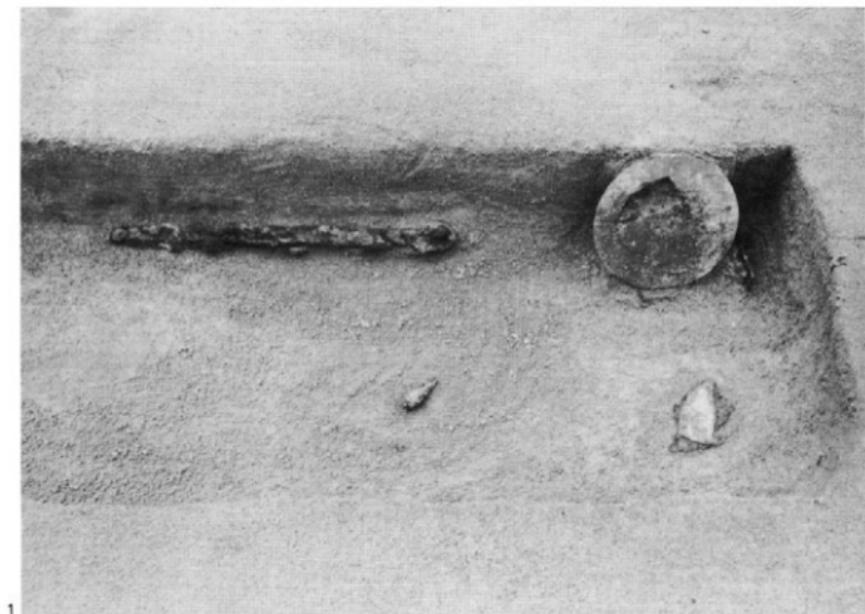
3.4 周溝内土器出土状況



埋葬主体部(1) 1 墓壇上面 2 埋葬部発掘時

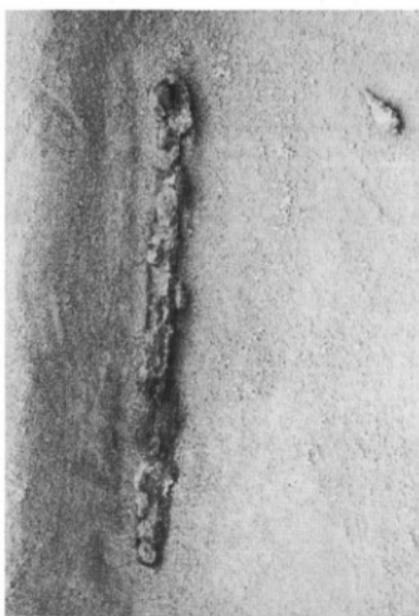
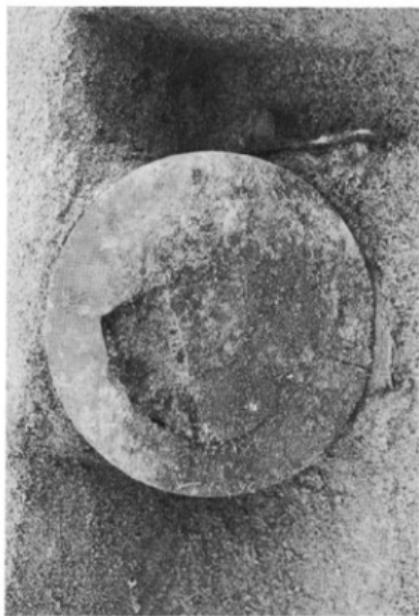


埋葬主体部(2) 1 埋葬部 2 埋葬部完损時



副葬品出土状況 1 南より 2 西南より

副葬品出土狀況近景



第7号 方形周溝墓全景





1



2

1 第7号方形周溝墓遠景

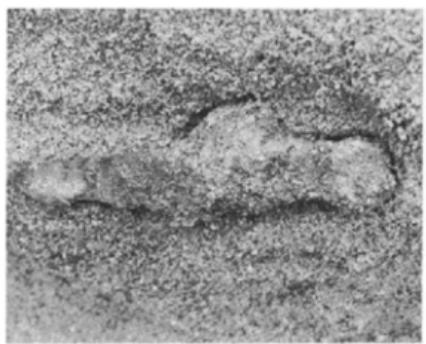
2 埋葬主体部付近近景



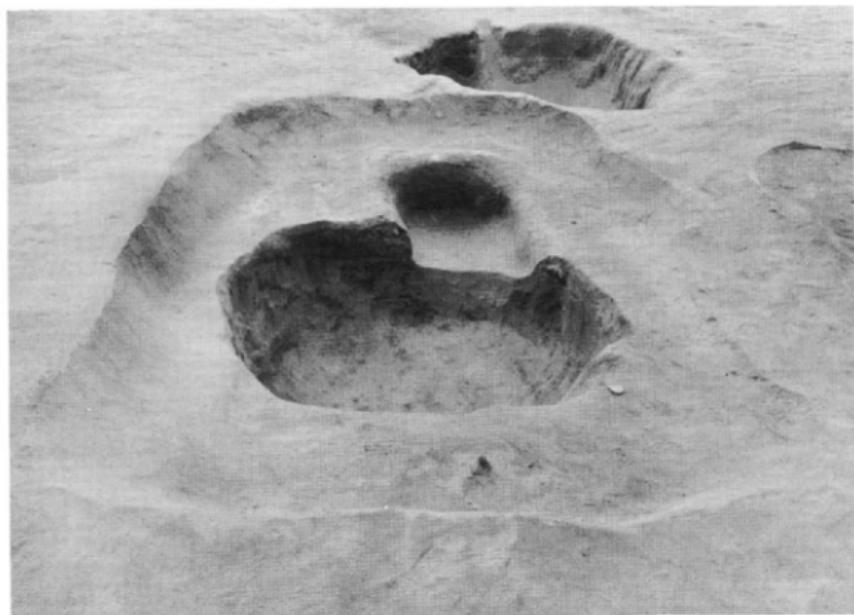
周溝土層断面



周溝内遺物出土状況



周溝内遺物出土状況近景



埋葬主体部 1 全景 2 近景



1



2

第8・9号方形周溝墓

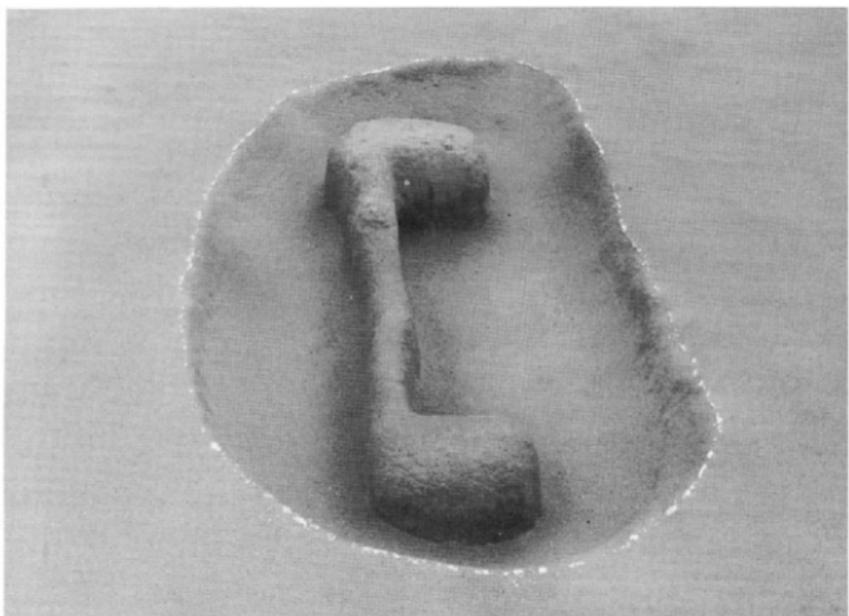
1 遠景

2 近景



1 第8・9号方形周溝墓周溝土層断面

2 第9号方形周溝墓土層断面



1 第8号方形周溝墓埋葬主体部

2 第9号方形周溝墓周溝内土器出土状況



1



2

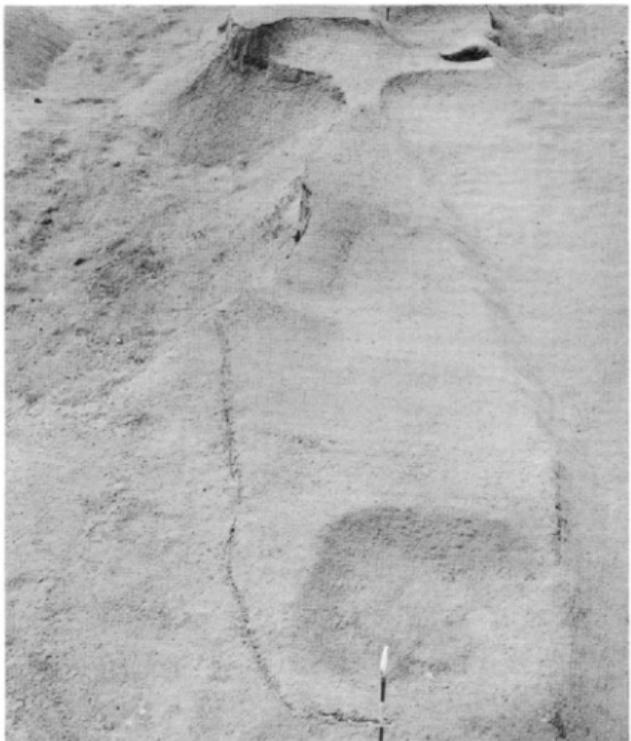
第2号住居跡

1 東より

2 完掘時西より



1



2

1 第4号住居跡

2 第5号住居跡



1



2

1 第6住居跡と第30号土壙

2 第6号住居跡土器出土状況



1



2



3



4



- 1 第1号土壤
- 2 第6号土壤
- 3 第3号土壤
- 4 第13号土壤



1



2



3

1 第9号土壤と第10号土壤

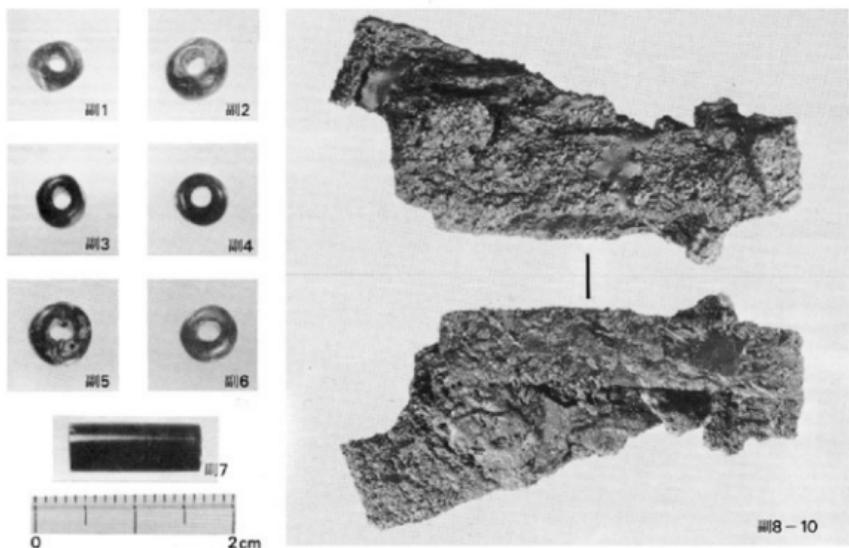
2 第10号土壤

3 第10号土壤副葬品出土状況



1 第34号土壤

2 集石遺構



第 1 号 方 形 周 溝 墓 出 土 遺 物



1



4

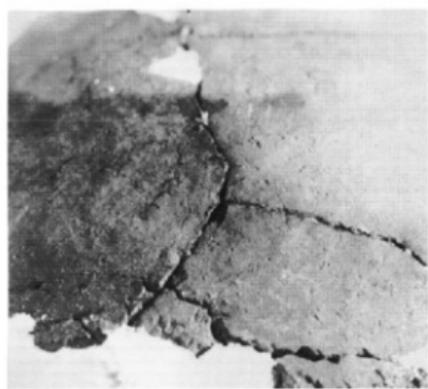


2



5

4. 上蓋  
5. 下蓋

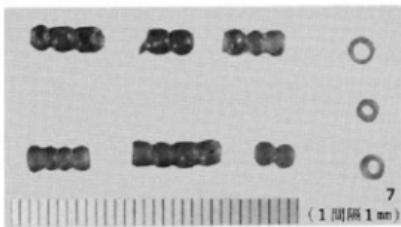


3

1. 上蓋  
2. 下蓋  
3. 下腹上縫刻文



6



7  
(1間隔 1mm)

1. 2. 3. 第 2 号方形周溝墓第 2 号主体部覆棺  
6. 7. 第 3 号方形周溝墓第 1 号主体部副葬品



周1



周5



周2



周6



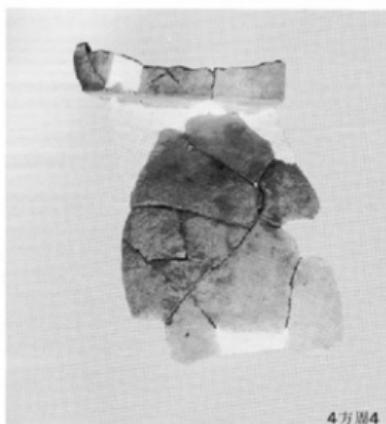
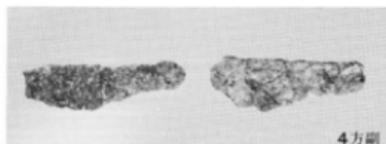
周3



周7



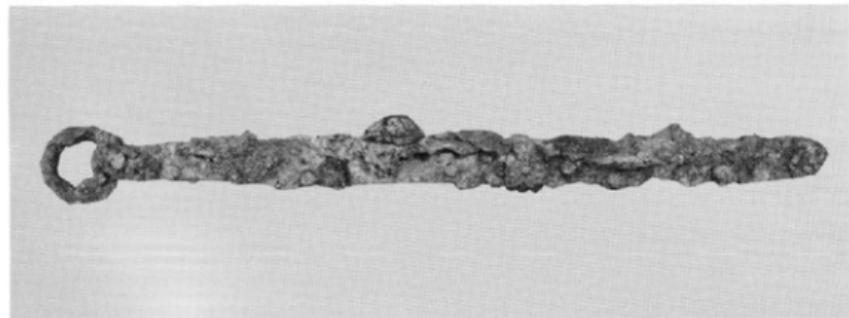
周4



第 4 · 5 · 6 号 方 形 周 溝 墓 出 土 遗 物



1

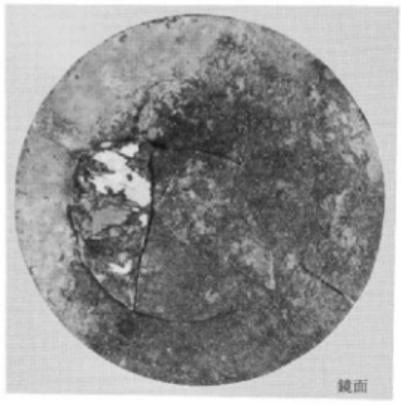


2

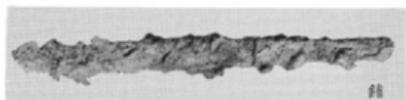
第6号方形周溝墓副葬品(1)

1 三角縁二神二車馬鏡

2 素環頭大刀



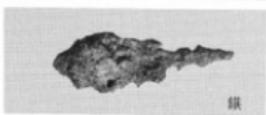
鏡面



鉢



刀子

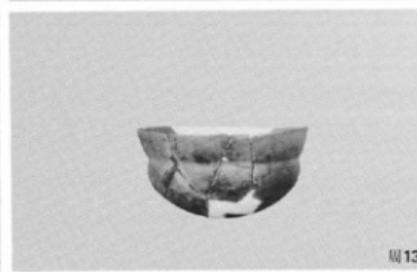
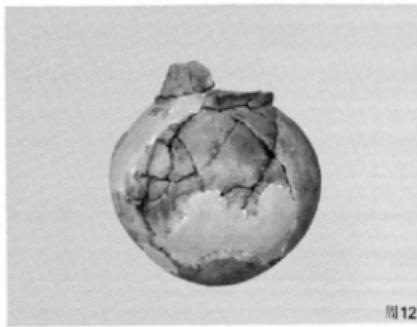
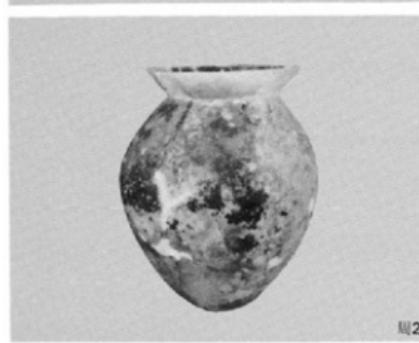
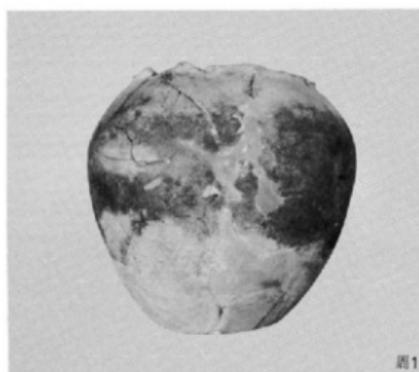


環



布目付着痕

第 6 号 方形 周溝 墓副葬品 (2)



第7号方形周溝墓周溝出土土器(1)



周16



周17



周18



周20



周21



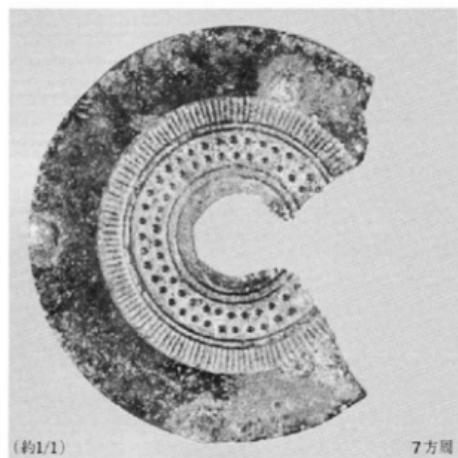
周22



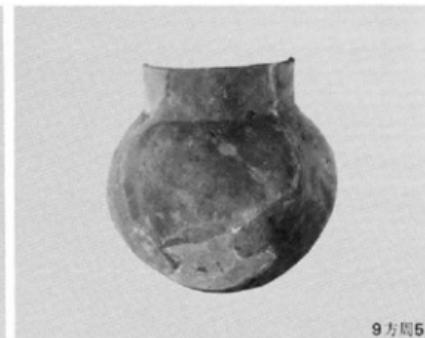
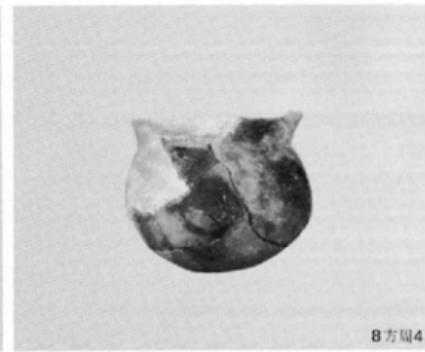
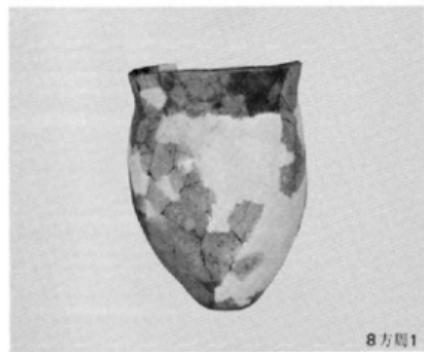
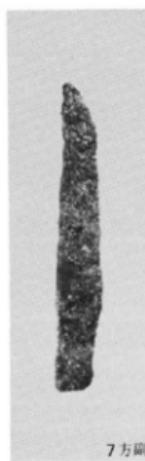
周23



周24



7方周



第 7・8・9 号 方形 周溝墓 出土 遺物



2住2



6住3



6住1



6住4



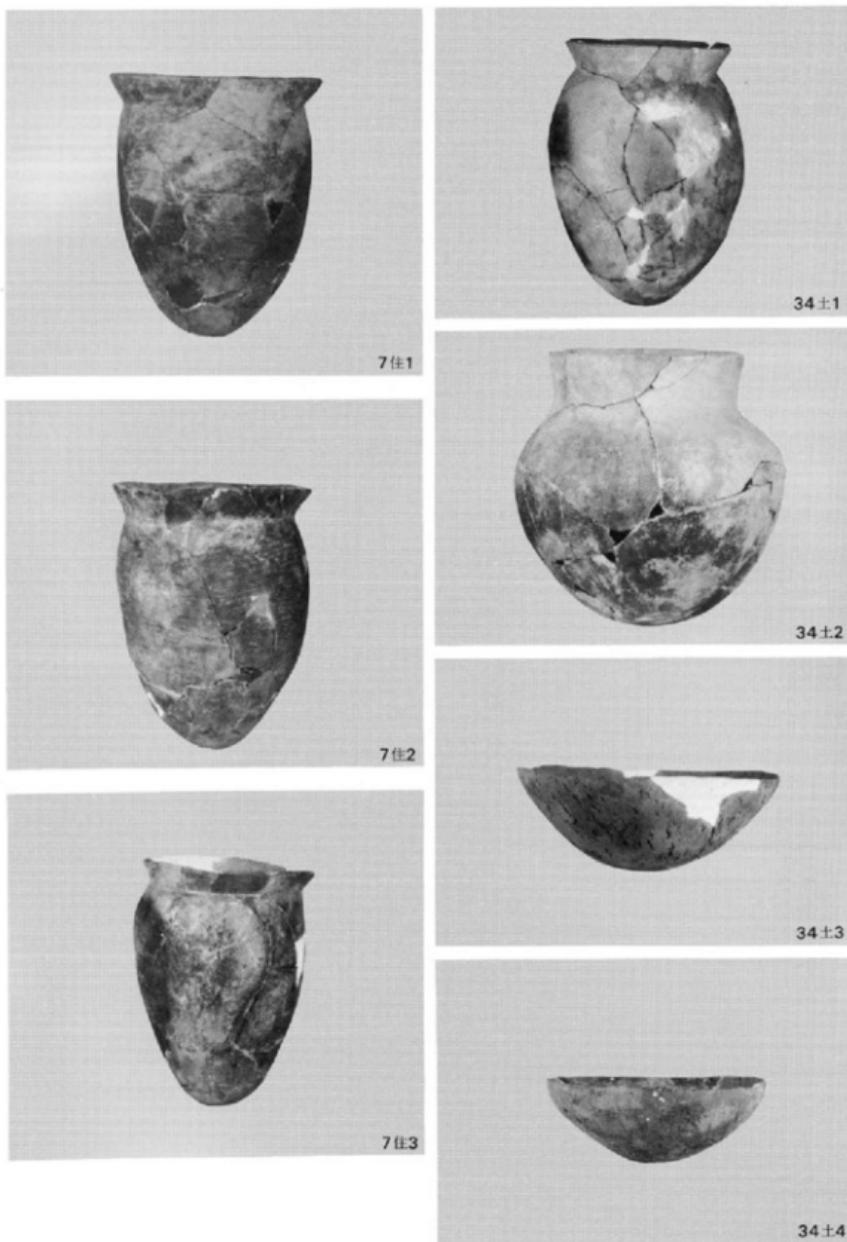
6住5



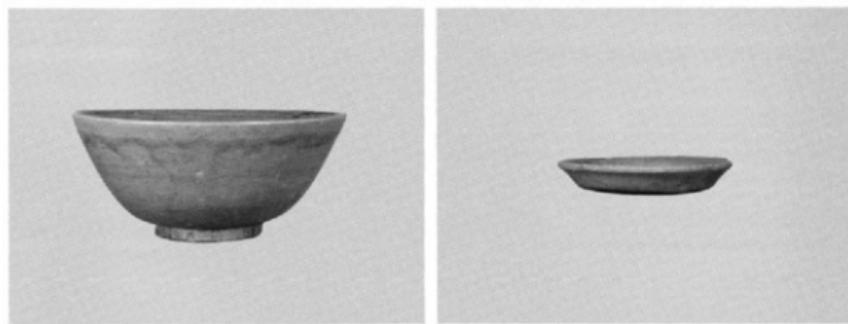
6住2



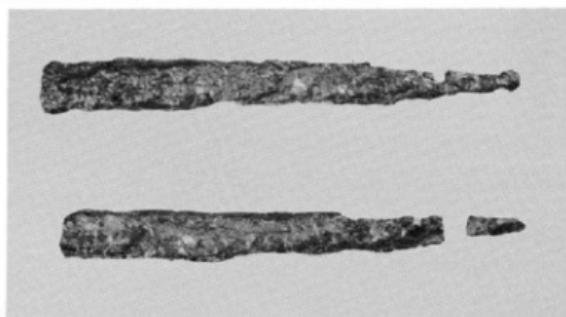
6住6



第 7 号 住 居 跡 · 第 34 号 土 壤 出 土 土 器



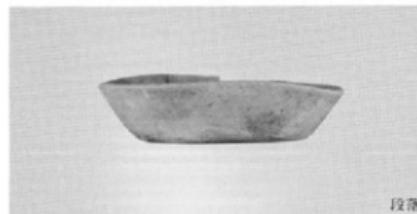
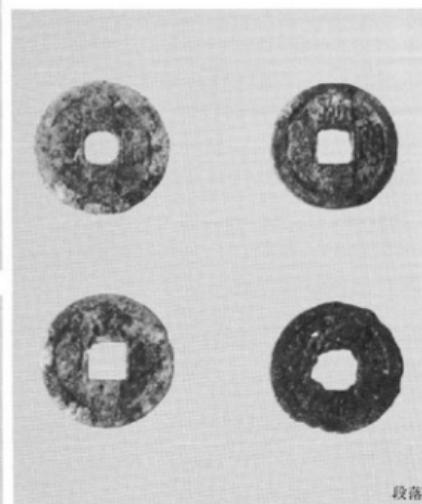
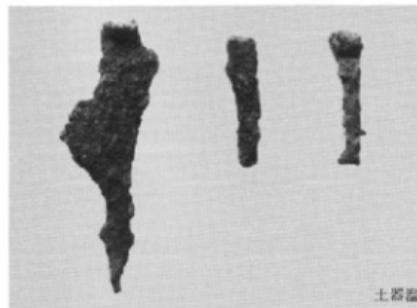
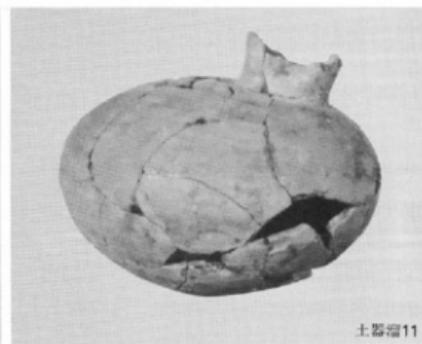
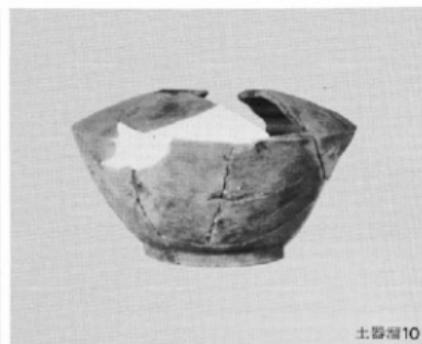
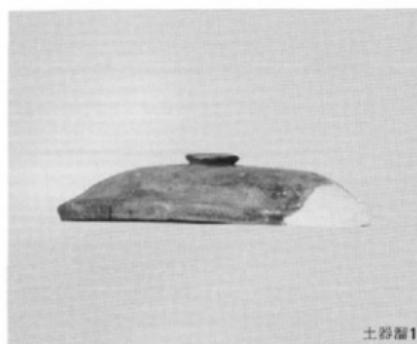
1



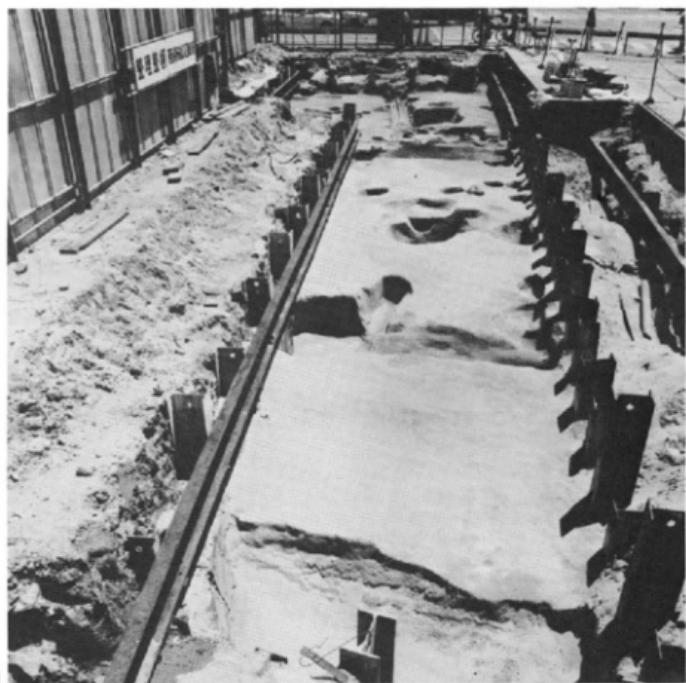
2

1 第10号土壤出土遺物

2 第32号土壤出土鉄器

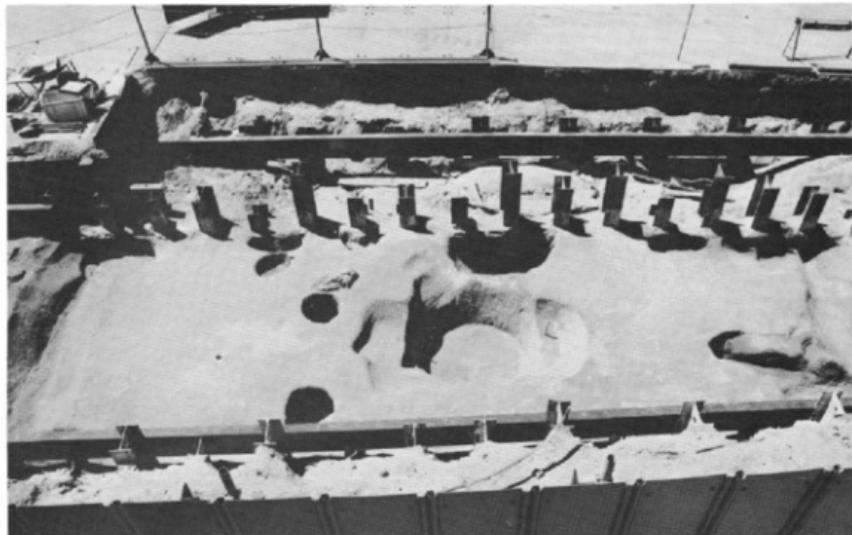


第7号方形周溝上土器溜り・段落ち出土遺物



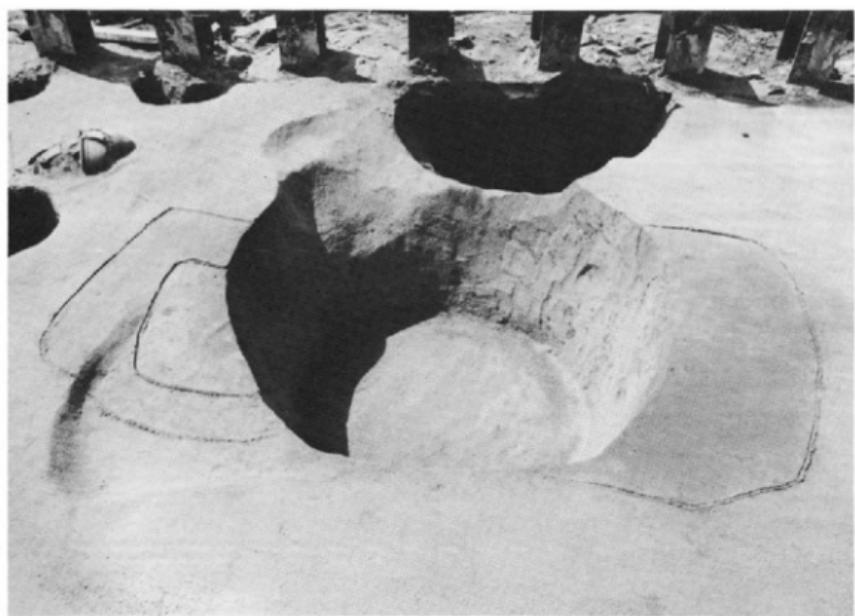
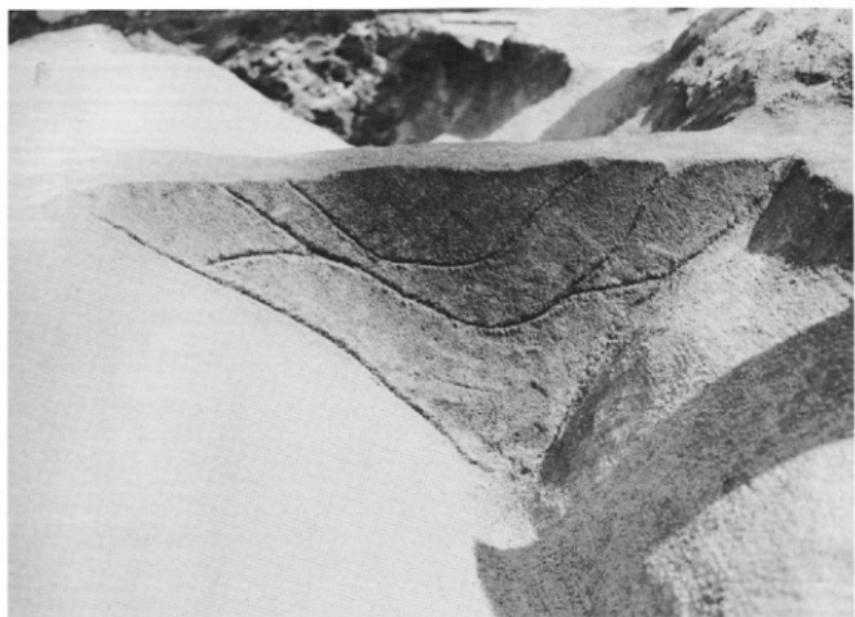
1

1 藤崎第7地点全景



2

2 第10号方形周溝墓全景



1 周溝土層断面

2 埋葬主体部上面



1



2

埋葬主体部 1 北より 2 西より



副葬変形文鏡出土状況

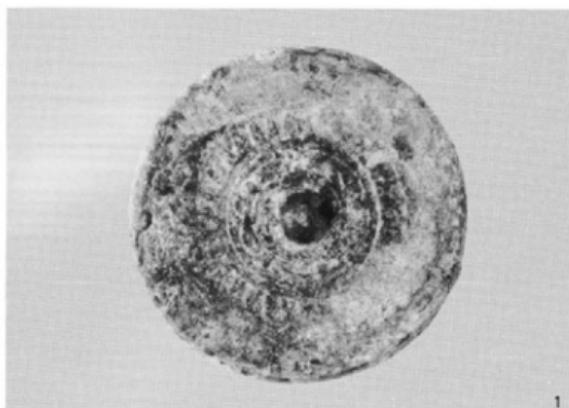


1



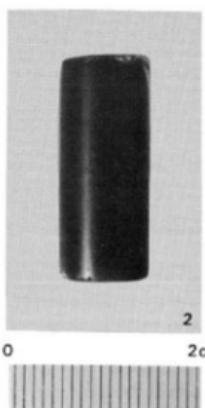
2

1 第99号腰棺墓      2 第100号腰棺墓



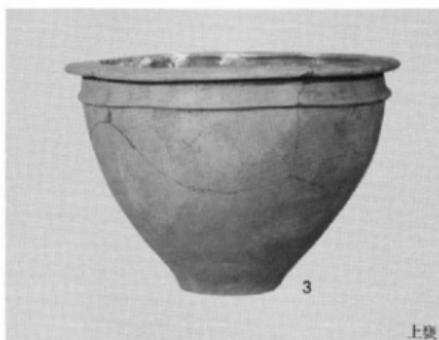
1

変形文鏡（約1/1）



2

0 2cm



3

上腹



4

下腹



5

1.2 第10号方形周溝墓副葬品

3.4 第99号墓棺

5 第100号墓棺



1



2

藤崎第8地点 1 遠景 2 発掘区



1



2



3

1 第102号腰棺墓

2 第101号腰棺

3 第102号腰棺下蓋

## 付 論

1. 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の金属学的調査報告

久野 雄一郎

2. 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の保存科学的立場からの観察

内田 俊秀

3. 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の鉛同位体比

馬淵 久雄

4. 福岡市藤崎遺跡出土棺材の樹種

鳴倉 己三郎

5. 福岡市藤崎遺跡出土の絹帛

角山 幸洋



## 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の金属学的調査報告

久野 雄一郎  
(三宝伸銅工業株式会社)

## 1. まえがき

昭和56年7月17日、元興寺文化財研究所員内田俊秀氏が来社され昭和55年福岡市藤崎遺跡の第6号方形周溝墓より出土した三角縁二神二車馬鏡を持参され金属学的調査を行うことを依頼された。

出土状況については浜石哲也氏が、考古学ジャーナル昭和56年1月号に「方形周溝墓出土の鏡」と題して報告されている。

持参された鏡を見ると全体が薄い緑青でおおわれていて直径は223mmである。

出土時には、鏡は数片に破壊していたため接着復元してあったが、鉢に最も近い内円との間の一部分は鏡本体から約200mm離れた棺底で、鏡背を上に向けて出土していたため本体に接着されていない。調査を行うため、内田氏は福岡市教育委員会の許可を得て、鏡より極微小片1個採取された。又、鏡面上、腐蝕のため隆起した層状物質の一部及び、「朱」と思われる物質を極微量採取され調査のための試料とした。

これら3点の調査試料を夫々試料A、B、及びCと呼ぶことにする。

以下、試料別に調査結果を述べる。

## 2. 試料A

## 2. 1 外観

試料Aは鏡破片の一端を切断して採取したもので、2辺の長さが約5.5mm、底辺が約3mmのはば2等辺3角形の形状をしている。その厚さは約1.6mmであり、肉面はほぼ均一に緑青にておおわれている。破断面のはば半分は白色、残る半分は銅に富んだ色を呈している。

それらを写真1～3に示す。

## 2. 2 重量

重量測定の結果0.0861gを得た。

## 2. 3 原子吸光法による成分分析

試料Aより重量0.0606g採取し、何等の試料清浄化処理を施さず原子吸光法によって分析した。その結果は第1表に示す通りである。

第1表の結果は從来、報告された腐蝕が進行した青銅器の分析例にもれず、合計値が100%に達せず、且つ、銅と錫の含有率がほぼ同じである

成 分	試料 A
主量元素	60.6 mg
Cu	24.44 %
Sn	21.53
Pb	4.44
O	15.3
Si	0.26
Sb	0.28
Fe	0.083
Ni	0.063
As	0.36
Zn	—
Ag	0.13
Au	—
Co	0.028
Al	—
計	66.932

第1表

ことが判る。

## 2.4 金属組織

成分分析に用いなかった重量、約0.025 g の微小片を樹脂に埋め込み、研磨した後、エッティングを施し、断面全体を倍率50にて拡大撮影した写真が写真4である。

この写真が示す如く、初晶は白色で樹枝状晶を形成しその間を2次凝固相が埋めて居り黒色を呈している。断面の下部には縦の方向に一部分亀裂が認められる。

この亀裂が存在する部分(1)を更に倍率200及び400に拡大した写真が写真5及び6である。

これらの写真から本鏡は透過で熔解され鋳型に鋳造後、除冷されたことが判る。又、鋳型や介在物は僅かであるので、優れた鋳造技術によったものと思われる。

## 2.5 EPMAによる分析

2.4の金属顕微鏡組織を観察した結果、青銅器特有の組織を示しているので、その分析値合計は100%にならなければならないにも拘らず第1表の如く、60%程度にしか達していない事は試料の大部分が外部環境物質と化学反応を起し鋳造当時の状態が失われていることを物語っている。

従って、鋳造当時の状態が残っていると思われる微小領域をEPMAで観察し、点分析と初晶及び2次凝固相の面積比を求めミクロな成分定量から、試料全体の成分含有率を推定した。

写真7及び8は(1)部の倍率200及び600の組成像、写真9は同部の2次電子像である。

又、写真10~16は(1)部の、銅、錫、酸素、塩素、鉛、硫黄及びアンチモニーのX線像である。

ミクロな領域の定量分析により、その結果から試料全体の組成を推定するため、写真8に於ける3点P、Q及びRに於ける銅、及び錫の点分析を行ない、相対強度を求め、ZAF補正法で補正し濃度を求めた。

その結果、第2表の値を得た。

		P	Q	R
相対強度 (%)	Cu	72.0	82.5	28.3
	Sn	25.0	12.8	41.1
	合計	97.0	95.3	69.4
補正後の濃度 (%)	Cu	71.6	82.2	27.9
	Sn	29.6	15.6	45.3
	合計	101.2	97.8	73.2

第2表

次に写真5に於て初晶及び2次凝固相、又、写真14に於て、鉛合金が占める面積の全面積に対する比率を求める第3表の如くなる。

	占有面積比率(%)	補正面積比率(%)	対、初相面積比
初晶	55.2	55.2	1
2次凝固相	43.31	43.41	0.79
鉛合金	1.49	1.39	0.025

第3表

写真14及び15より、鉛合金粒は硫化物と考えられX線像写真から鉛と硫黄の2元素から成り立っていると考えられるので、その形はPbSであると思われる。

第3表に於ける補正面積比率を求める根拠は、金属組織写真的領域の比重は8.1であると考えられるのに対し（亀裂など空隙が存在するので、8.6より小さい）PbSの比重は7.5であるから、PbS粒子の占有面積比率に $\frac{7.5}{8.1}$ 即ち0.93を乗することにより求めた。

又、2次凝固相の補正面積比率は

$$100\% - (55.2 + 1.39)\% = 43.41\%$$

として算出した。

第2表及び第3表の結果から試料Aのマクロとしての銅及び錫の含有率を推定すれば

$$\text{銅} = 71.6\% \times 0.4341 + 82.2\% \times 0.552$$

$$= 76.45\%$$

$$\text{錫} = 29.6\% \times 0.4341 + 15.6\% \times 0.552$$

$$= 21.46\%$$

と算出される。

鉛の含有率は第3表が示す如く、PbSが1.39%であるので

$$1.39\% \times \frac{207}{207+32} = 1.20\%$$

であり、硫黄は0.19%含有されると推定される。207及び32は鉛と硫黄の原子量である。

塩素は、写真13に見られる様に、亀裂部分に多く存在し、その他の部分にも多かれ少なかれ存在していることが認められ外部環境物質中の塩素が内部に滲透していることが判る。

写真16からアンチモニーの含有は殆ど認められない。

亀裂に近い点、且の点分析の結果、銅、錫の含有率が低いのは塩素、珪素等、外部環境物質がその周辺に存在しているためであると考えられる。

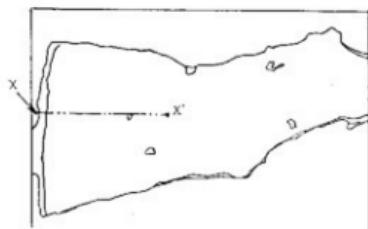
## 2. 6 EPMAの線分析

2. 5に於て述べた如く、本試料内部に外部環境物質、特に塩素が多量に滲透していることが判った。

本、白銅鏡の保存処理を行なうため、表面よりどの様な分布でこれら物質が存在しているのかを知るためにEPMAにより線分析を行なった。

第1図は写真4の概略図である。

第1図に於て、試料表面上の点、Xより内部の点X'迄の直線上の錫、珪素、塩素、ナトリウム、カルシウム、鉄、及び酸素の含有量を連続的にチャート紙上に描かせた圖が



第1図 断面概略図

第2～8図である。

錫の分布は第2図が示す如く、全体として周期性が認められるが、その理由は初晶の部分では含有量が少なく、隣接する2次凝固相の部分では多くなっていることを示している。

硅素は、第3図が示す如く表面にのみ多く存在し内部に含まれていないのは外部環境物質中の硅素が表面にのみ付着しているためである。

塩素は表面に於て最大で、内部に於ても比較的多く存在しているのは腐蝕が内部にまで進行しているためである。

ナトリウムは、第5図に示す如く表面で最大であるが、内部に於てもほぼ一定量存在するのはNaClとして内部に滲透したものと考えられる。

カルシウムも第6図が示す如く表面に於て最大で、内部にも或る程度存在するのは外部環境物質が腐蝕過程で滲透したものと考えられる。

弗素は、第7図が示す通り表面に於てやや多いが、全般に一定量存在するのは拡散能が大きいため均一に存在しているものと思われる。

酸素は、第8図が示す通り表面で最大であるのは外部から酸化が進んだものである。尚、チャートの横軸1目盛の長さは40μmである。

### 3. 試料B

#### 3.1 外観

試料Bはまえがきで述べた通り鏡面上隆起していた層状物質で、その表面は写真17が示す如く、緑青でおおわれているのに対し背面は一部、緑青が発生しているものの写真18が示す通り金属光沢を保っている五角形の試料である。

#### 3.2 重量

重量測定の結果、0.008gを得た。

この様な微量な試料では化学分析は行なえないため、金属組織観察とEPMAにより微小領域を点分析することに止めた。

#### 3.3 金属組織

試料Bを樹脂中に埋め込み、Y-Y'面を研磨した後、エッチングを施し倍率200及び400で組織を撮影したのが写真19及び20である。

写真19により、試料Bの幅は、約0.6mmで金属部と思われる部分の厚さは、約0.19mmであり白く写っている。又、この金属部分の中を水平方向に亀裂が走っているのが認められる。

外面は厚さ約0.05mmの腐蝕層によっておおわれている。

写真20は写真19のほぼ中央部を拡大した写真である。画面中白く写っている部分は銅、銅合金の凝固の際の初晶であり灰色部分は2次凝固相、黒点は腐蝕により混入した介在物と思われ

る。又、数個所に亀裂が認められる。

### 3.4 EPMAによる分析

写真21及び22はEPMAによる断面の倍率200及び600の組成像である。

これらの写真から、白色粒子と灰色物質とが混在するマトリックスの中に、多角形の島の様な形をした大きな粒子が存在する他に黒色の円形粒子が認められる。黒色の条痕は亀裂である。

写真23~28は、写真22が示す部分の銅、錫、硅素、酸素、鉛、アンチモニーのX線像である。

これらの写真から、銅、錫合金のマトリックスの中に(Sn·Si·Pb)·Oの組成を持つ粒子が散在していることが判る。

これらの結果から、試料Bは鏡の主成分である銅、錫、鉛が、液状の外部環境物質のため溶出し、土壤物質と反応して生成した腐蝕生成物であると考えられる。

写真29に於て粒子S、及びT、繊維状結晶U、及び多角形粒子Vの銅、錫、及び硅素のX線強度を測定し、標準試料のX線強度とから相対強度を算出した値を第4表に掲げた。

測定点	S	T	U	V
銅	29.8	56.7	45.3	18.3
錫	37.4	30.5	34.1	38.9
硅素	1.0	0.07	0.6	2.6

第4表 (単位)

第4表の結果を見ると銅の相対強度のバラツキが大きいのに比べて錫の相対強度のバラツキは小さい。このことは粒子S及びVは元来初晶であり、T及びUは2次凝固相であって初晶中の銅含有量は2次凝固相のそれより多いため腐蝕作用過程で起きる銅の脱銅速度が数倍早かったため粒子S及びV中の銅含有量がT及びU中の含有量に比し、少なく、そのバラツキが大きいものと考えられる。

この様に腐蝕の激しい試料では、試料Aの如くミクロな成分定量によりマクロな濃度の推定を行なうことは不可能である。

## 4. 試料C

### 4.1 外観

試料Cは鏡面の一部に付着していた「朱」と思われる物質が脱落したものである。

その外観は直径約1mmの多角形砂粒状で、朱色を呈している。

倍率11の外観写真を写真30に示す。

### 4.2 化学分析

この物質0.0014gをフレームレス原子吸光分析法によって分析した結果、水銀濃度19.64%を得た。この結果から、この朱色の物質は赤色硫化水銀(HgS)であることが推定される。

### 5.まとめ

本、白銅鏡の成分を知るため試料A、及びBを調査した結果

5.1 試料Aは腐蝕が進行しているためと試料重量が少ないため表面付着物を除去し、清浄な分析試料として分析出来なかったため、分析成分濃度が100%に達する様な分析が行なうことは出来なかった。

原子吸光分析の結果、分析された成分濃度の合計は60%程度であることや、銅、錫の濃度がほぼ等しいことは、他の腐蝕の激しい青銅器の分析例に同様に見られる現象であって、これは青銅器中の銅が、錫や鉛に比べて早い速度で外部に流出する脱銅現象によった結果である。

試料Bは微量のため原子吸光分析は行えなかった。

5.2 試料A、及びBの金属組織を観察した結果、初晶が樹枝状に発達した典型的な鋳造組織を示している。構成元素は互に均一な合金を作っていることから適温で熔解鋳造された鏡である。

5.3 試料Aの腐蝕が進行していない領域中の初晶と2次凝固相中の銅及び錫の濃度を求め、次に初晶、2次凝固相及び鉛化合物が占める面積を求め、これらの結果から、銅、錫及び鉛の濃度を算出し、推定値として

銅：76.45%，錫：21.46%，鉛：1.20%

を得た。

この様にEPMAによりミクロな領域での濃度測定値と占有面積とから、マクロな成分濃度を推定する方法の精度がどの程度であるかを知るため近似の合金を培養し、化学分析によって、銅、錫、及び鉛の濃度を測定した後に、その金属組織をEPMAで観察し前述の方法で、マクロな成分濃度の推定値を算出した。その結果を第5表に掲げた。

	化学分析値	EPMAによる推定値	相対誤差
銅	75.71	73.74	-2.6
錫	20.02	22.87	+14.2
鉛	4.25	4.8	+12.9

第5表 (%)

以上の結果から、本、白銅鏡の主成分濃度は

銅：(74±1)%、錫：(22±2)%、鉛：(10±0.5)%

であると考えられる。

上記、3元素以外有意な元素は含有されていない。

5.4 鏡面上の朱色の物質は、水銀化合物「朱」であると考える。

5.5 出土時、本、白銅鏡が数片に割れて居り且つ、その一片は約200mm離れた地点に落下していたことは、(1)本鏡中の錫含有量が多いこと、(2)肉厚が薄いこと、(3)文様の一部に鋳型が

崩れたと思われる部分が存在すること、(e)水銀化合物が墓内部に存在すること、(f)脱銅現象が起っていることから、本、白銅鏡内部には、内部応力が残留していて、年月が経つにつれ墓内部の水銀蒸気や、アンモニア性気体と反応して、「時期割れ」を起し、その時の衝撃で、1片が約200mm離れた所迄、飛び落としたものと考える。

5. 6 5. 3 で述べた結果と、他の分析例から本、白銅鏡は舶載鏡であると考える。

以上

加速電圧: 20kV

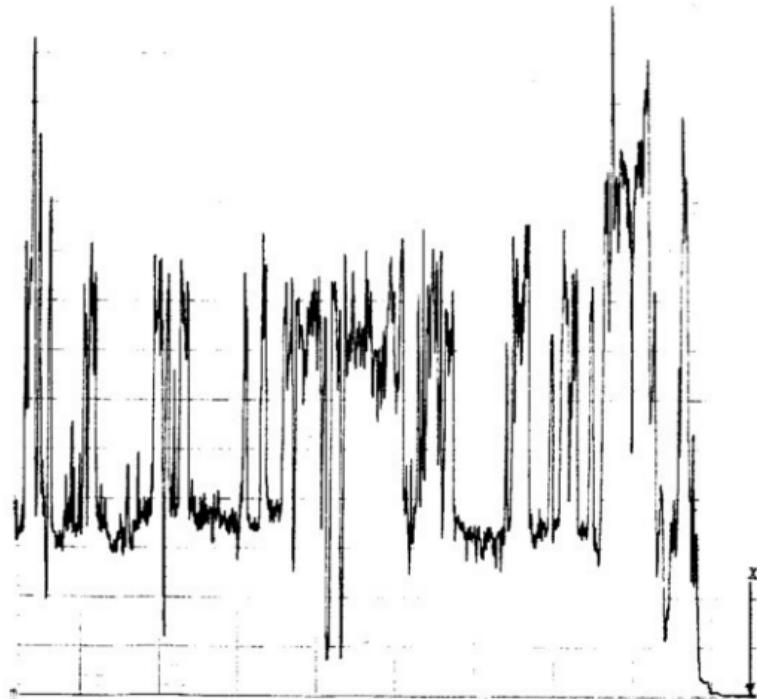
チャートスピード: 10mm/min

試料吸収電流:  $1 \times 10^{-8} A$

試料移動速度:  $40 \mu m/min$

分光結晶: PET

チャート: フルスケール: 10,000CPS

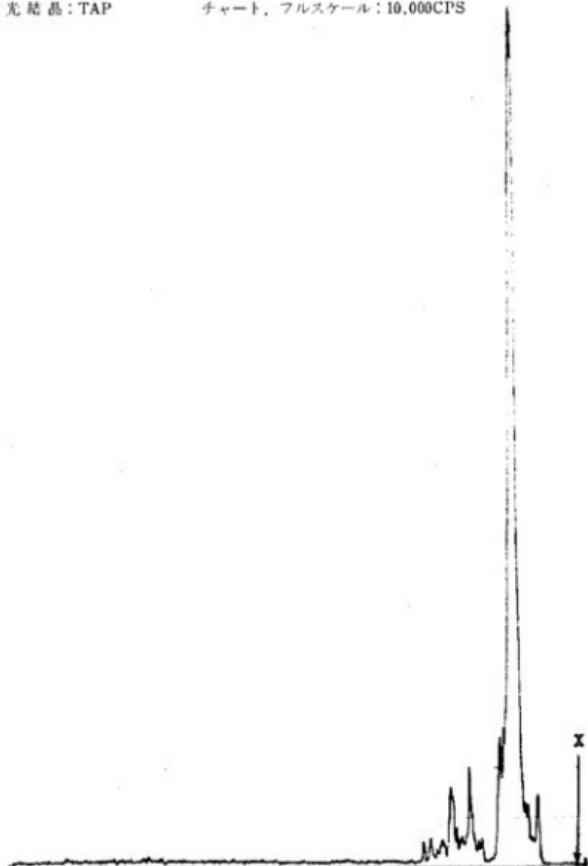


第2図 錫、錫分析チャート

加速電圧: 20kV チャートスピード: 10mm/min

試料吸引電流:  $2 \times 10^{-8}$ A 試料移動速度: 40 $\mu\text{m}/\text{min}$

分光結晶: TAP チャート, フルスケール: 10,000CPS



第 3 図 硅素、線分析チャート

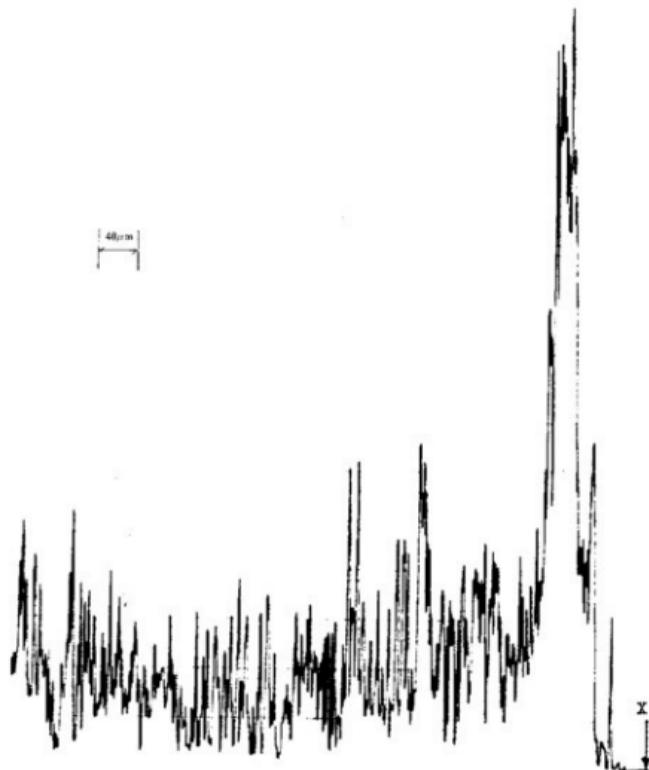
加速電圧: 20kV

チャートスピード: 10mm/min

試料吸収電流:  $1.7 \times 10^{-6}$ A 試料移動速度: 40 $\mu\text{m}/\text{min}$

分光結晶: PET

チャート, フルスケール: 5,000CPS

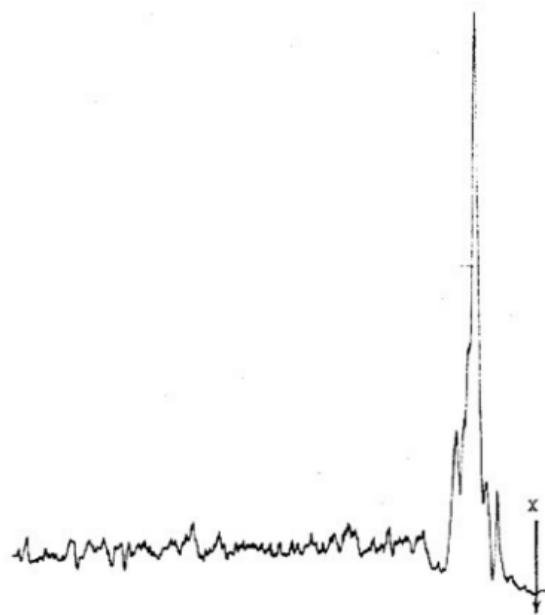


第 4 図 塩素、線分析チャート

加速電圧: 20kV チャートスピード: 10mm/min

試料吸収電流:  $5 \times 10^{-6}$ A 試料移動速度: 40μm/min

分光結晶: TAP チャート, フルスケール: 500CPS



第 5 図 ナトリウム、線分析チャート

加速電圧: 20kV

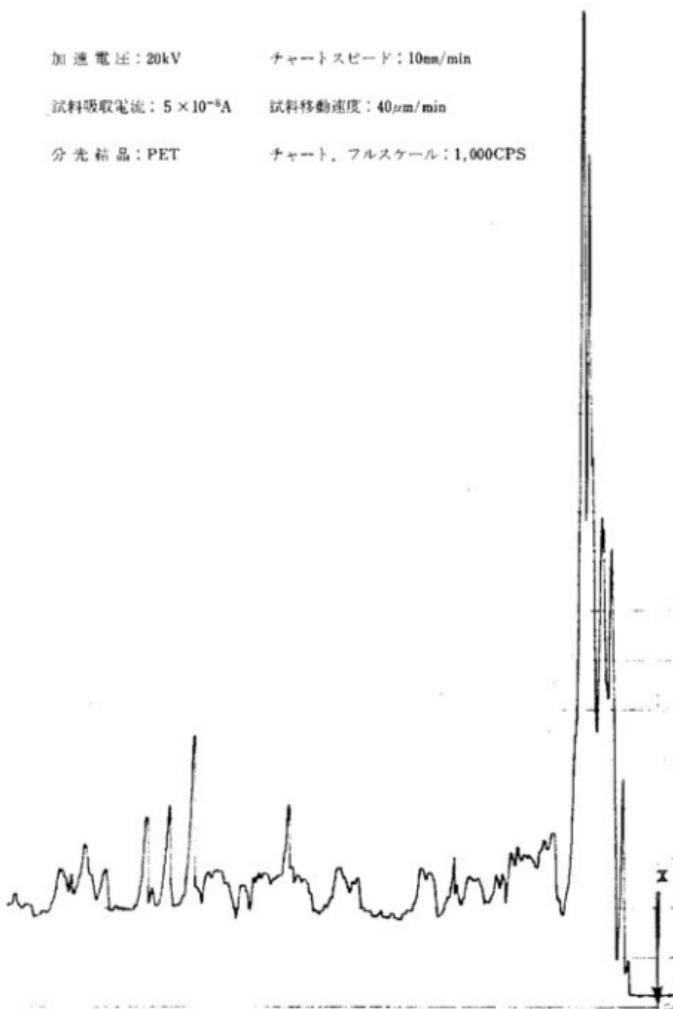
チャートスピード: 10mm/min

試料吸収電流:  $5 \times 10^{-8} A$

試料移動速度: 40 $\mu m/min$

分光結晶: PET

チャート, フルスケール: 1,000CPS



第 6 図 カルシウム、線分析チャート

加速電圧: 20kV チャートスピード: 10mm/min

試料吸引電流:  $6 \times 10^{-9} A$  試料移動速度:  $40 \mu m/min$

分光結晶: TAP チャート, フルスケール: 100CPS

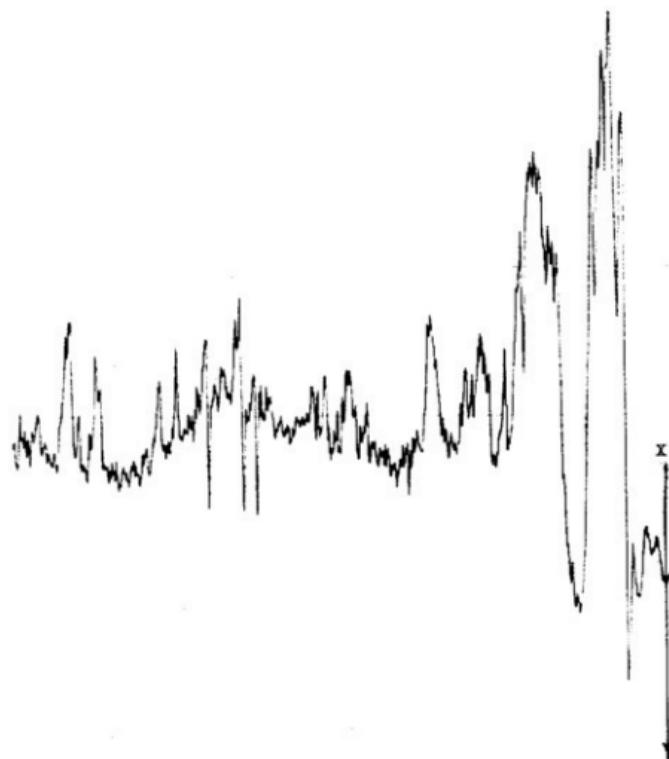


第 7 図 フラク。線分析チャート

加速電圧: 20kV チャートスピード: 10mm/min

試料吸引電流:  $5 \times 10^{-5}$ A 試料移動速度: 40 $\mu$ m/min

分光結晶: STE チャート。フルスケール: 1,000CPS



第 8 図 酸素。線分析チャート

写真 1 - 6



写真1 試料A, 鏡面 ( $\times 7$ )



写真2 試料A, 鏡背面 ( $\times 7$ )

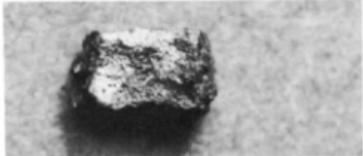


写真3 試料A, 破断面 ( $\times 12$ )



写真4 試料A, 断面全景 ( $\times 50$ )

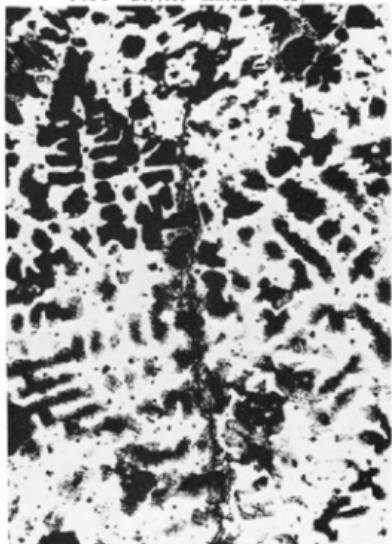


写真5 試料A, (d)部 ( $\times 200$ )

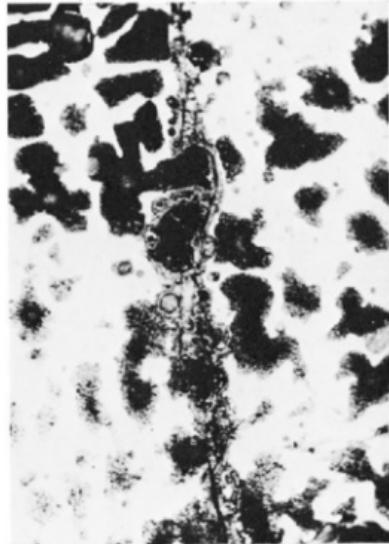


写真6 試料A, (d)部 ( $\times 400$ )

写真 7-10

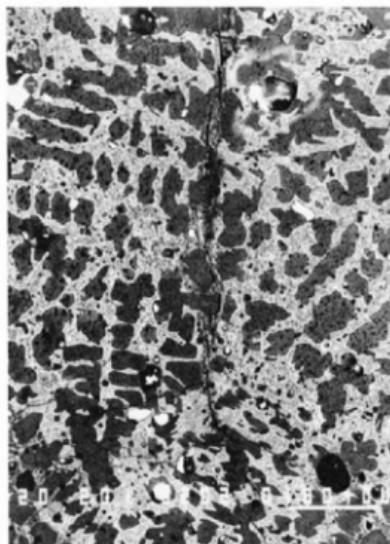


写真7 試料A, (4)部, 組成像 ( $\times 200$ )

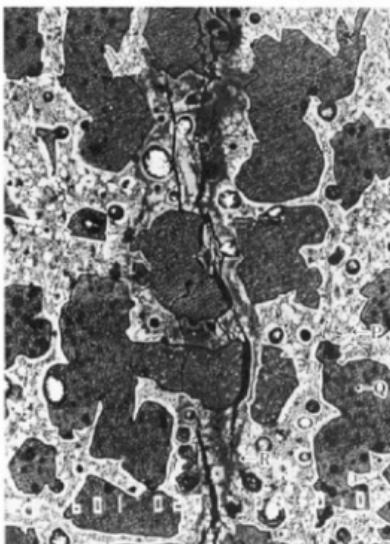


写真8 試料A, (4)部, 組成像 ( $\times 600$ )

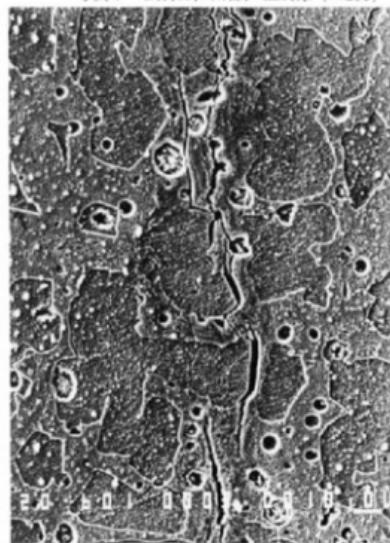


写真9 試料A, (4)部, 2次電子像 ( $\times 600$ )



写真10 試料A, (4)部, Cu : X線像 ( $\times 600$ )

写真 11-14

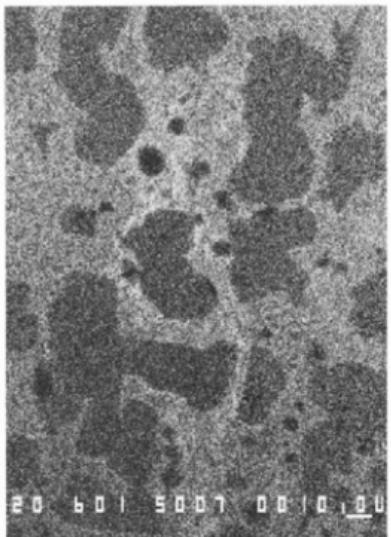


写真11 試料A、(6)部 Sn : X線像 ( $\times 600$ )

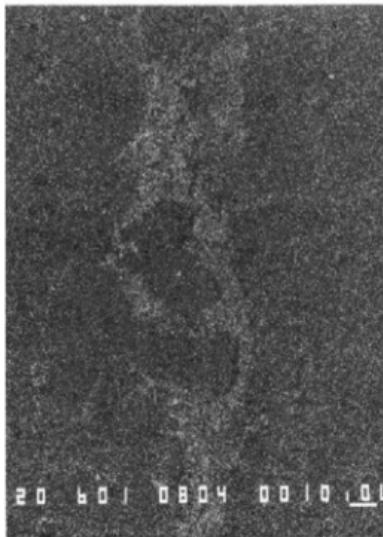


写真12 試料A、(6)部 O : X線像 ( $\times 600$ )

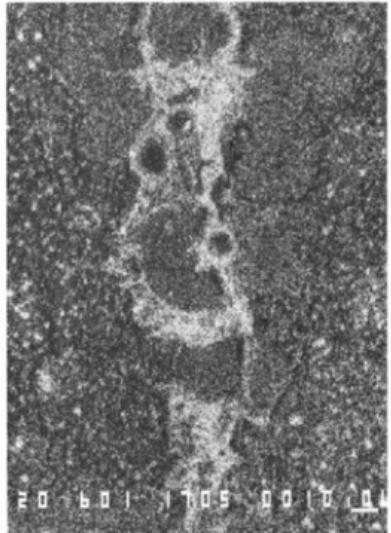


写真13 試料A、(6)部 Cl : X線像 ( $\times 600$ )



写真14 試料A、(6)部 Pb : X線像 ( $\times 600$ )

写真 15-18

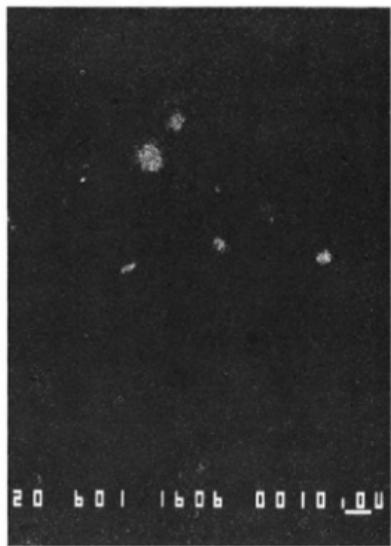


写真15 試料A, (d)部, S : X線像 ( $\times 600$ )



写真16 試料A, (d)部, Sb : X線像 ( $\times 600$ )

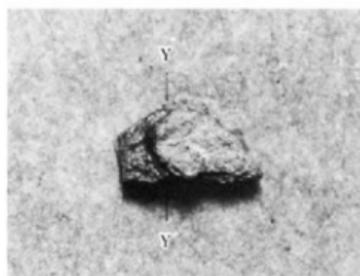


写真17 試料B, 表面 ( $\times 15$ )

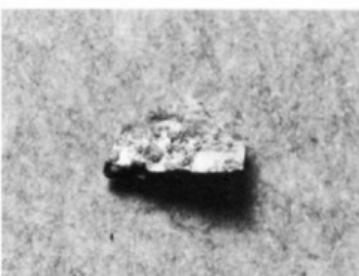


写真18 試料B, 裏面 ( $\times 15$ )

写真 19-22



写真19 試料B、断面組織 ( $\times 200$ )

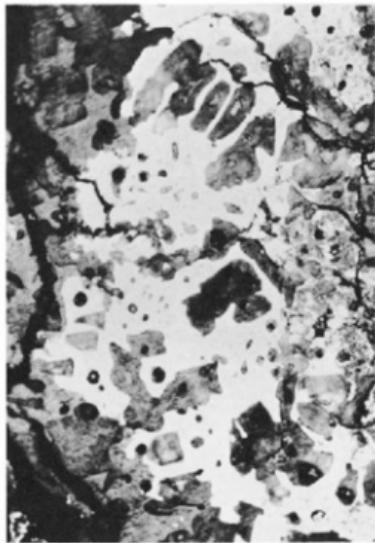


写真20 試料B、写真19の拡大 ( $\times 400$ )

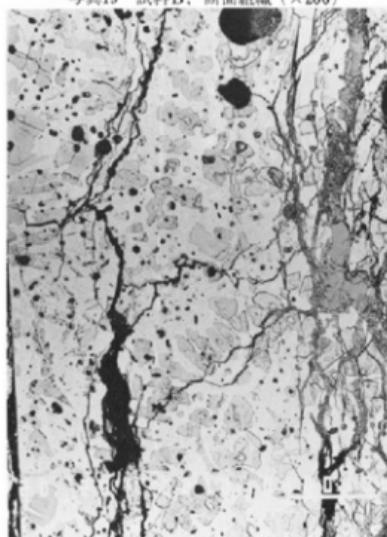


写真21 試料B、組成像 ( $\times 200$ )

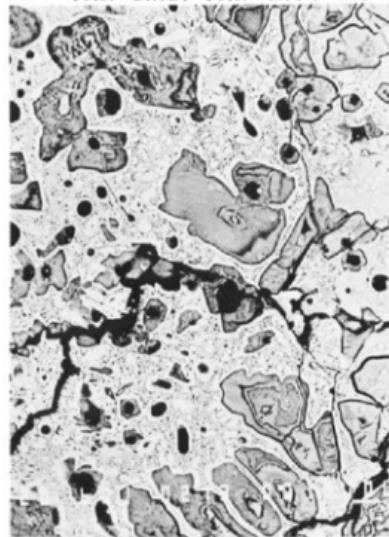


写真22 写真21の拡大 ( $\times 400$ )

写真 23-26

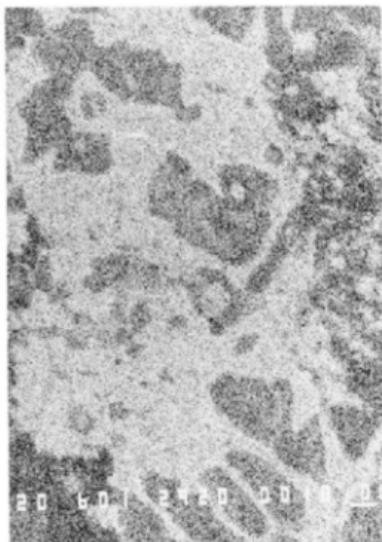


写真23 試料B, Cu : X線像 ( $\times 600$ )

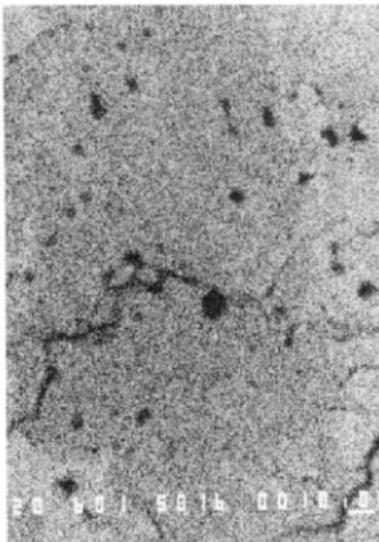


写真24 試料B, Sn : X線像 ( $\times 600$ )



写真25 試料B, Si : X線像 ( $\times 600$ )

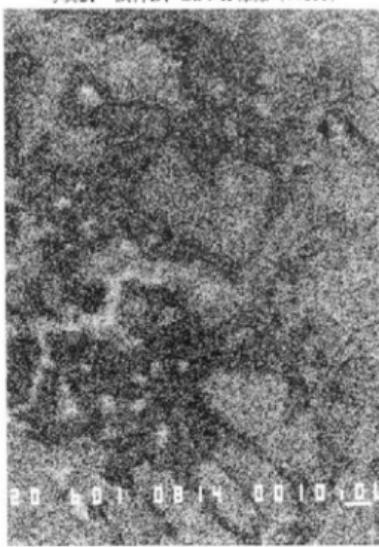


写真26 試料B, O : X線像 ( $\times 600$ )

写真 27-30



写真27 試料B, Pb : X線像 ( $\times 600$ )



写真28 試料B, Sb : X線像 ( $\times 600$ )

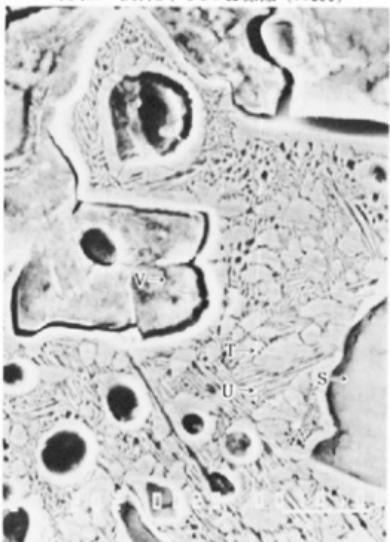


写真29 試料B, 2次電子像 ( $\times 2,000$ )



写真30 「朱」外観 ( $\times 11$ )



## 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の保存科学的立場からの観察

内田 俊秀

(財)元興寺文化財研究所、保存科学研究室)

## 1. はじめに

福岡市教育委員会より保存処理依頼のあった折、同時に分析も行いたいとの要望が出された。幸い、第三宝伸銅、久野雄一郎氏が引受け下さり、成分元素や、金相学的な面の観察がなされた。結果は本報告書記載のとおりである。青銅製品についての自然科学的分析は、今まで多くの例でなされてきたが、これらの結果を保存科学的観察に利用しようとした場合、不充分な面が出たことも否めない。そこで今回は、福岡市教育委員会に許可をいただき、この観点からの分析も、同時に実行することにした。その旨を久野氏に御願いし、成分分析等と併せて行っていただいた。従来であったなら、表面のみで終わりがちな観察を、今回の例については、内部にまで渡って行なうことができた。なお試料は、金相学的観察に使用されたものと同一のものである。試料採取箇所は、図1に示しておく。

## 2. 観察と結果

## A) 肉眼による表面の観察

鏡面、鏡背ともに、全体的に錆で覆われている。本体と離れて発見された破片一片も、ほぼ同様の状態である。文様は、錆の下ではあるが明瞭に残り、遺物の程度としては、健全な印象をうけた。しかし破片の鏡面側は、表面から薄く層状に剥離してしまっており、状態は悪い。この原因は、本体が立てかけられていたのに比べ、破片が横に寝て発見されているという埋没状態や、埋没環境の違いによるものと思われる。本体の鏡背側は、ほぼ全体に、マラカイト主体の厚さの薄い錆で覆われており、部分的に砂粒をかみ込んでいる。内区をかこむ鋸歯文帯の一



図1 試料採取箇所  
(破片②の先端部)



図2 鏡背側から見た亀裂(実線で示す。A.B.C.D)及び  
破片(破線で示す。①.②)

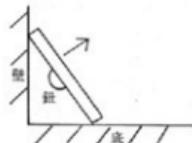


図3 鏡の埋没状態と  
ねじれの方向

部に、銀色系統の色で、光沢をもったオリジナルな表面と思われる部分が露出している。鏡面側は、鏡背と若干様子が異なり、全体の約5%は、アズライト主体で、点状にマラカイトが発生した状態であり、残る約95%の部分は平滑な表面で、薄く付着した赤色顔料でその多くを覆われている。このため付着している鉛の種類は不明であるが、いずれにしても非常に薄いものと思われる。縁部に近い所では、しかしこの赤色顔料は付着しておらず、金属質に近いオリジナルな表面が見られる。次に、本体に見られる4本の亀裂に関して観察してみると、4本のうち、一番割れ幅の広い縁部から内側へと入ったものが目につく、(図2のA)。あたかも両側へ引っぱられたような割れ方である。また亀裂により分断された面で、段違いになった所もある、(図2のBの両側)。鏡の埋没状況は、鏡背を下側にして棺壁に斜めにたてかけられていた、(図3)。棺の掘り込みの壁はしっかりとおり崩れた形跡は無い。從って鏡に加えられる外部からの力は、埋葬後、棺の天井板が壊れ、上から落ち込んだ土砂の重みが考えられよう。しかし、亀裂BとCの間の金属部は、図3に示すように下から上への方向へねじれている。これらから、ねじれの原因を、外部から加えられた力に求めるより、鏡自体に内在していた力に求めた方が適当と考えられる。

#### B) 金属顕微鏡、走査型電顕、EPMAによる内部の観察

金属組織の写真是、鉛上がりが良いことを示しているが、これを破壊する亀裂の発生が写真4~7で観察される。方向は外側から内側へである。特に写真7には、太い亀裂のみならず、そこから角度をかけて枝状に延びる細かな亀裂が、何本も観察される。これらは肉眼では、観察され得なかったものである。亀裂の多くは、初晶よりも二次凝固相中を走り延びている。写真10から亀裂をはさむようにして銅の流出がみられる。この銅欠落部分と重なるように塩素の濃く存在する部分が、写真13で確認される。写真12から、酸素の入り方も塩素とはほぼ同じように思われる。これらから、亀裂に沿って塩素や酸素が侵入し、組織からは主として銅が流出していったことがわかる。この反応が生じた場所は、組織のうちでも、二次凝固相部分であることも、よく示されている。三元素のうち、他の錫や鉛は、ほとんど動いてないようだ。そして、この部分には、新しく塩化銅の鏽が生成されたであろう。他方、線分析の結果から、塩素はまず、塩化ナトリウムの形で入ってき、表面付近には、塩素の高い濃度が認められるところから、この化合物が付着していることを示している。遺跡が海に近いことを考えると、起こり得ることである。硅藻は、表面のみで、ここに鉛が発達する時に、付近にあった土や砂粒などをかみ込んだことを示している。

### 3.まとめ

鏡の現状について、二・三考えてみたい。肉眼による表面観察では、まず太い亀裂が確認された。次に、鏡の色や状態については、まず全体としての状態は良いような印象を受け、注意

すべき点は無しとされた。青銅製品の表面的観察に際しては、発生した鏽の色と状態の判別が重要な作業となる。塩基性炭酸銅（いわゆる緑青）等は金属の上に安定な被膜を作るが、塩化銅(II)の塩素は、金属組織を破壊する性質をもつ。この塩化銅系統の鏽と他の安定なものとを区別するのは比較的容易なことである。つまり、問診の役目である表面観察に際しては、第一にこの塩化銅系統の鏽の有無をチェックすることが必要となる。本鏡については、この鏽は肉眼では発見されなかった。他方内部の観察から、まず第一に、亀裂の状態が詳細にされた。太い亀裂とそこから枝状に発生した細い亀裂が、主として初晶のへり、つまり粒界を伝うようにして延びている。少数ではあるが粒内にも見られる。写真からは平面的な抜がりしかつかめないが、デンドライトが三次元的な構造をもつものであるから、亀裂も立体的に走っているであろう。この亀裂の原因を考えてみよう。まず残留応力が考えられる。銅合金に応力腐食割れを起こさせる物質は、アンモニアと水銀が主なものとして挙げられているが、発見場所が、人を埋葬した棺内で、人体の腐敗から発生するアンモニアと棺内にまかれた水銀朱の存在することは、この割れ原因を裏づけている。残留応力と化学的反応による腐食は相互補助的に亀裂を発達させるが、塩素は腐食をひきおこす元素となる。鏡が、鑄造で、しかも部分により肉厚の差がかなりある点も、応力割れを引きおこす原因となる。写真13の塩素の分布で、亀裂部分以外にも、多数の斑点状の高濃度部分が見られ、また、線分析の濃度分布からも、必ずしも亀裂の付近でなくても分布が見られる。亀裂が粒界を伝い立体的に発達し、それに沿い塩素が侵入したと考えると、上述の現象は理解できる。このように考えを推し進めてゆくと、少なくともこの試料片は、かなりいたんでいると言えよう。鏡全体の状態を一片の試料片から推測するのは少々乱暴かもしれないが、もし試料片と同様にしたたら、将来の状態は、適当な水分と酸素が供給さえせれたら、組織の破壊が更に進み、やがて破片の数はもっと増加するであろう。従って現在採られ得る有効な保存科学的処理は、①塩素の除去、②亀裂個所への接着剤等の注入（真空含浸による）、③水分と酸素の供給を低くおさえる、④外部からの物理的力が加えられることを防ぐ、などであろう。なお本遺物の保存処理は、当研究所、保存科学研究室、金属部門で行われた。処理工程の概略を順に示すと、脱塩、アクリル系樹脂の減圧含浸（3回）、同樹脂塗布である。表面のクリーニングは、福岡市の担当の方との協議により、付着した上等の除去にとどめた。

最後にこの観察を行う機会を与えて下さった福岡市教育委員会、柳田純孝氏及び浜石哲也氏の御厚意に御礼を述べたい。また分析依頼を快く受けて下さった、三宝仲銅工業株式会社・社長、久野雄一郎氏には、多くの御教示を賜った。深く感謝するしだいです。



## 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の鉛同位体比

馬 潤 久 大  
(東京国立文化財研究所)

鉛は質量の異なる四種の同位体 $^{204}\text{Pb}$ ,  $^{206}\text{Pb}$ ,  $^{207}\text{Pb}$ ,  $^{208}\text{Pb}$ の混合物であり、その混合比（同位体比）は鉛鉱床ごとに異なるので、その精密な測定によって原料の産地推定を行なうことができる（註1）。筆者は青銅遺物の原料をこの方法で研究しているが（註2）、今回、藤崎遺跡出土の三角縁二神二車馬鏡を測定した。

## 実験法

本法はほとんど非破壊法と云って差支えない。遺跡出土の青銅鏡に必ずしも生じている銹を微量（約1mg）採取すればよく、外観を損なうことは全くない。古墳時代以前の青銅鏡は少くとも数パーセントの鉛を含んでおり、銹もそれに近い鉛を含んでいるので、1mg中には数十マイクログラムの鉛がある。今回の試料は修復処置の際に落ちた緑色の銹で、化学分離によって得られた鉛のうち約1μgを取って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で測定した。

## 結果

測定値はつぎのようになった。

$^{204}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
18.090	15.603	38.570	0.8625	2.1321
± 0.006			± 0.0002	± 0.0007

## 考察

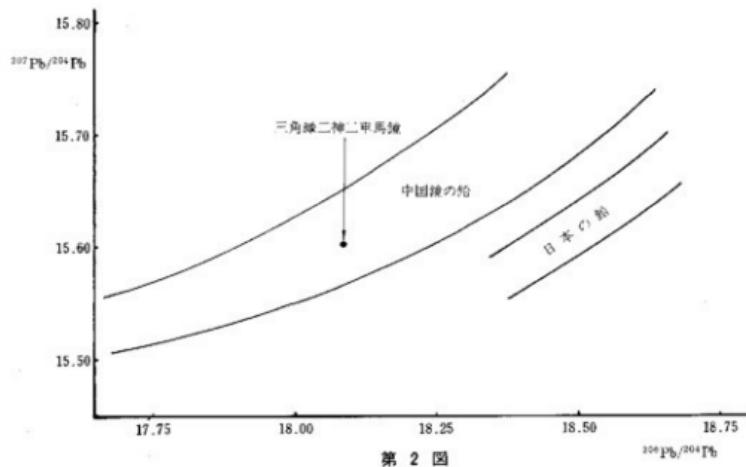
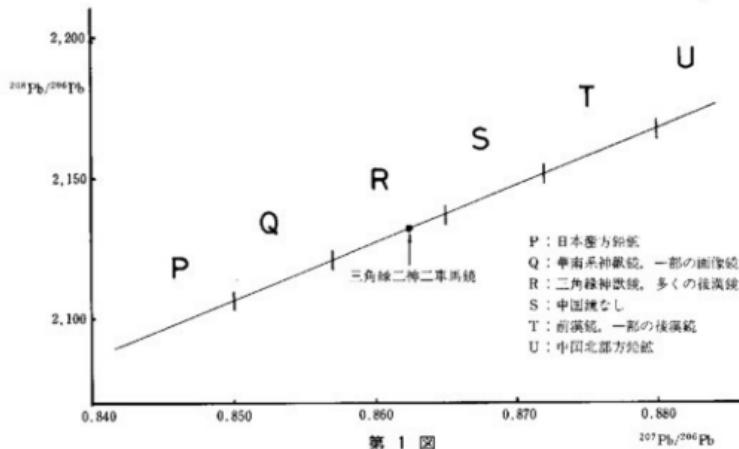
同位体比のうち、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ と $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ をプロットしたのが第1図である。筆者が現在までに測定した多数の中国鏡のデータは、図中に示したような直線に沿って分布する。分布状況を見分けるための便宜上、図中に示したようなP, Q, R……Uの区間に分ける。各区間にに入る主なる鏡の型式は第1図の説明に示したようになる。測定した鏡は大部分の三角縁神獸鏡が集中する区間Rに入り、例外的な値ではない。

原料の鉛が中国産か日本産かの判断には第2図に示したような $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ と $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ が最も有効である。図から明らかなように、この鏡に含まれる鉛は中国産である。

試料採取について御協力いただいた元興寺文化財研究所の内田俊秀氏に厚く御礼申し上げたい。

註1：本法の詳細については 馬淵久夫・富永健編「考古学のための化学10章」東京大学出版会、1981年を参照されたい。

註2：馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」MUSEUM 第370号、  
1982年1月



## 福岡市藤崎遺跡出土棺材の樹種

鳴倉 巳三郎

福岡市藤崎遺跡から出土した棺材の樹種を調査した。その結果は次の通りである。

試料	6方a	ヒノキ様材（極柔軟裂片材）
註	6方b	ヒノキ様材（極柔軟裂片材）
	6方c	ヒノキ様材（鉄錆）
	10方	ヒノキ様材（極柔軟片状材）

6方a, b及び10方の3試料は極めて柔軟な繊維状に裂ける小片で、そのまま切片をつくることは不可能であった。それで個々の木質細胞群を切りとり観察して総合判定した。材は仮道管、放射組織、樹脂細胞から成り、放射組織の分野には数個の小さな有縁膜孔が認められた。これらの特徴はヒノキ材に似ているが、切片による木口、柾目、板目面をみることができなかつたので決定を保留する。

6方cは15mm×8mm×1mmくらいの大きさの鉄錆に置換された材であるから、反射顕微鏡で観察した。それによると表面に布目模様があり、10本内外の細い纖維（？）から成る糸を用いた平織のように見える。反対の面には仮道管が認められ、縦断面の柾目に於ける放射組織の分野には小さな有縁膜孔がある。樹脂細胞の存在は確認できなかったが、その他では6a, 6bと同様で、ヒノキに近いものと思われる。材片の広い面は板目面になっている。

## 註

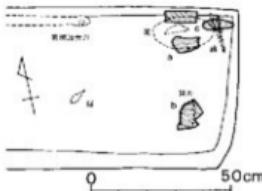
試料に用いられた略号は以下のものを表わす。6方に関しては図参照。

6方a……第6号方形周溝墓埋葬主体部の三角縫二  
神二車馬鏡の下端に接して残存していたも  
の。床材と考えられる。

6方b……同上の棺中央に位置する鏡片の下に残存  
していたもの。やはり床材と考えられる。

6方c……同上の刀子・鉢の下に残存していたもの。  
床材か？

10方……第10号方形周溝墓埋葬主体部の変形文鏡  
下に残っていたもの。棺蓋材と考えられる。





木 口 ( $\times 60$ )



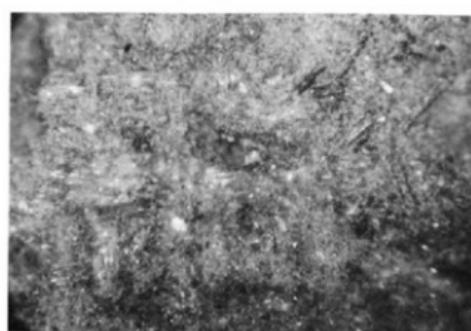
表面仮道管 ( $\times 60$ )



表面仮道管 ( $\times 60$ )



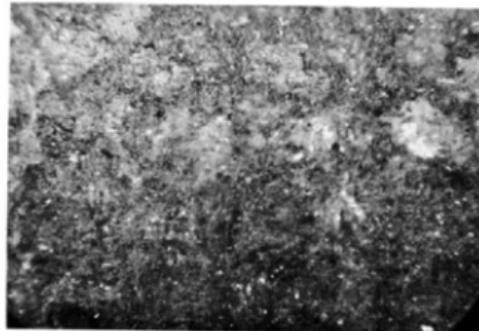
柾 目 ( $\times 60$ )



表面布目 (平織) 模様 ( $\times 60$ )



柾 目 ( $\times 120$ )



表面布目 (平織) 模様 ( $\times 60$ )

藤崎遺跡 棺材 6 方C (鉄状材)

## 福岡市藤崎遺跡出土の絹帛

角 山 幸 洋 (関西大学)

## 1. 三角縁二神二馬車鏡付着絹帛 (写真1-1)

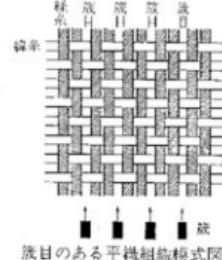
鏡面に部分的に付着する絹帛は、木片の付着する鏡破片に比較的原形を止めているほか、それ以外の鏡片にも、わずか0.2~0.5cmくらいの範囲に止まる付着片が、各處に点々と残っている。また分離した木片には、浸潤状態にあったことから、絹自体が損傷を受けることなく遺存していた。この箇所から、ごく一部を採集し検鏡した結果、蚕糸であった。

この絹帛の鏡面への接着関係は、二層つまり二枚の絹帛を重ね合わせていたようで、そのうち比較的痕跡を止めているのは、簇目のある絹帛で、これは鏡面に対し直接に、つまり二枚の絹帛では下層におかれている。この両者の絹帛の関係は、布目方向が多く箇所で、経緯直角になっている。のことから鏡を絹帛で包裝するに際して、表裏合わせた「祇紗包み」のようなものを推測させる。

簇目のある絹帛は、光沢がなく、おそらく未練の糸を使用し、製織したのちも、後練などの方法がとられなかったものと考えられる。もし後練などの処理がとられたとすると、成目は不規則となり、間隔は一定とならず、布目曲りを生じたであろう。構成糸は、経糸は比較的細く、見かけ上の直径0.05~0.1mmくらいで、織密度がそろっている。それに対し緯糸は、打込みに圧入されるだけで張力がかからため、経糸よりやや太く見かけ上の直径0.1mmくらいある。簇目の幅は平均0.2mmくらいで、部分的に人為的な方法によってか、布目を抜けた箇所では0.4mmくらいある。ただこれが1枚の簇の幅を表わしているのではなく、製織時、あるいは製織後に、全体の幅がせまくなる傾向があるので、0.5mmくらいの幅をもっていたのであろう。密度は、簇目をも含めての平均的数値として経44本、緯34本(1センチ間の糸本数)となっている。もちろん成目には経糸2本が入っており、1本あるいは3本入っている箇所はなかった。

もう一つの層をなしていた断片は、金属溶液が流れて鐵物表面をおおっているよう、絹帛をどのように練りなどの処理していたか明らかでない。またそれぞれの付着片は、ごくわずかであり、断片の周囲は糸がほぐれて経糸だけが残存する状態となっている。このことは経糸の密度が比較的込んでおり、緯糸の込数が少なかったことによるのであろう。構成糸は、経糸で見かけ上の直径0.2mmくらい、横度はやや不同がみられ、また緯糸では、見かけ上の直径0.15mmくらいで、経糸に比べてやや細い。密度は、ごく僅かの断片であるため正確な数字ではないが、経42本、緯25本(1センチ間の糸本数)であり、経地合の傾向が強い。組織の状態からみて、品質的には古墳時代の平絹として、一般にみられるものであった。

## 2. 簿付着絹帛 (写真2-2)



中央より柄の方向にかけて細片化した綿帛が付着している。その布目方向は、一定している箇所もあるが、大部分は不同であり、おそらく綿帛を包義のため布目方向を考慮せず無意織に巻いたものであろう。現状は鉄鎗による金属溶液が織物組織の間隙にまで入りこみ、さらに保存処理の樹脂液により、織物組織を分らなくしている。しかし全体的にみて、点在する断片は一枚の綿帛とみてよいであろう。構成糸は、経糸とも見かけ上の直径0.15mmくらいで、経糸の方が織度に不同がみられる。それは経糸とも同じ糸を使用したが、経糸は製織時に張力がかけられ、開口するときに経糸が相互にすれ合うために、織度に不同を生じたのであろう。密度は、小断片のため正確ではないが、経50本、緯35本（1センチ間の糸本数）の、経地合の傾向が強い組織であり、幾分、布目曲りがみられる。

#### 3. 素環頭大刀付着綿帛（写真1-2, 2-1）

とくに綿帛の付着しているのは、中央の環頭寄りの部分と、環頭の付け根の部分である。付着綿帛は、いずれの箇所にあっても、布目方向はまちまちであり、3層以上（正確な層数は明らかでない）になって乱雑した形で接着している。そのため意図的な包装方法をとらずに、単に充填物としての役割に使用したのであろう。

付着の綿帛は、品質的に厚地のもので緻密に平織組織に織られている。各層の綿帛ともほぼ同一の品質であるところから、一枚の綿帛をつかったことが、各層が部分的に表面にあらわれている部分からわかる。構成糸は、経糸ともほぼ同一の糸をつかい、砧打などの仕上処理を施していないためか、断面は円形を保っている。また経糸の織度もそろい、見かけ上の直径0.2mmくらいの糸としては比較的太い糸であった。密度は、経45本、緯36本（1センチ間の糸本数）くらいで、経糸比の小さいものであるが、構成糸が太いため、地厚の組織となっている。

#### 4. 第3号方形周溝墓出土刀子付着綿帛

柄に近い部分に、大きさ0.6cmくらいの綿帛が接着している。保存処理のため光沢がついており、組織の観察を不正確にしている。布目方向は、刀子の長軸に対して70°くらいになっているが、綿帛の巻き方に意味があったかは、これだけの付着片では分らない。構成糸は、見かけ上の直径0.2mmくらいで、経糸とも同じ糸を使用している。密度は、小断片で換算値によるため正確ではないが、経30本、緯28本（1センチ間の糸本数）くらいの平織組織で、比較的、経糸比の小さい地厚の組織であった。素環頭大刀に付着する綿帛に類似する品質をもつが、古墳時代としては平均的な平綿であった。

藤崎遺跡からの出土綿帛に、簇目をもつ平綿が存在することは、この時期に新しい機法が参入し、薄地の透き通る綿植物をつくっていたか、あるいはそれを使用していたことで、九州地方では宇土市向野田古墳出土の刀子付着綿帛に、同じような簇目をもつ平綿がみられるほか、知見をもたないが、出現時期とともに、今後注目される綿帛となりえよう。



1. 三角縁二神二車馬鏡付着組帛 ( $\times 4$ )



2. 素環頭大刀付着組帛 ( $\times 4$ )

写真 2



1. 素環頭大刀付着細帛 ( $\times 4$ )



2. 鈍付着細帛 ( $\times 4$ )

福岡市西区  
**藤崎遺跡**

福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集

1982年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区大手1丁目8番1号

印刷 赤坂印刷株式会社  
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

藤崎遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集

1982

福岡市教育委員会